山形県埋蔵文化財センター調査報告書第152集

上野遺跡発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

上野遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 152 集

2006

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

上野（わの）遺跡

発掘調査報告書

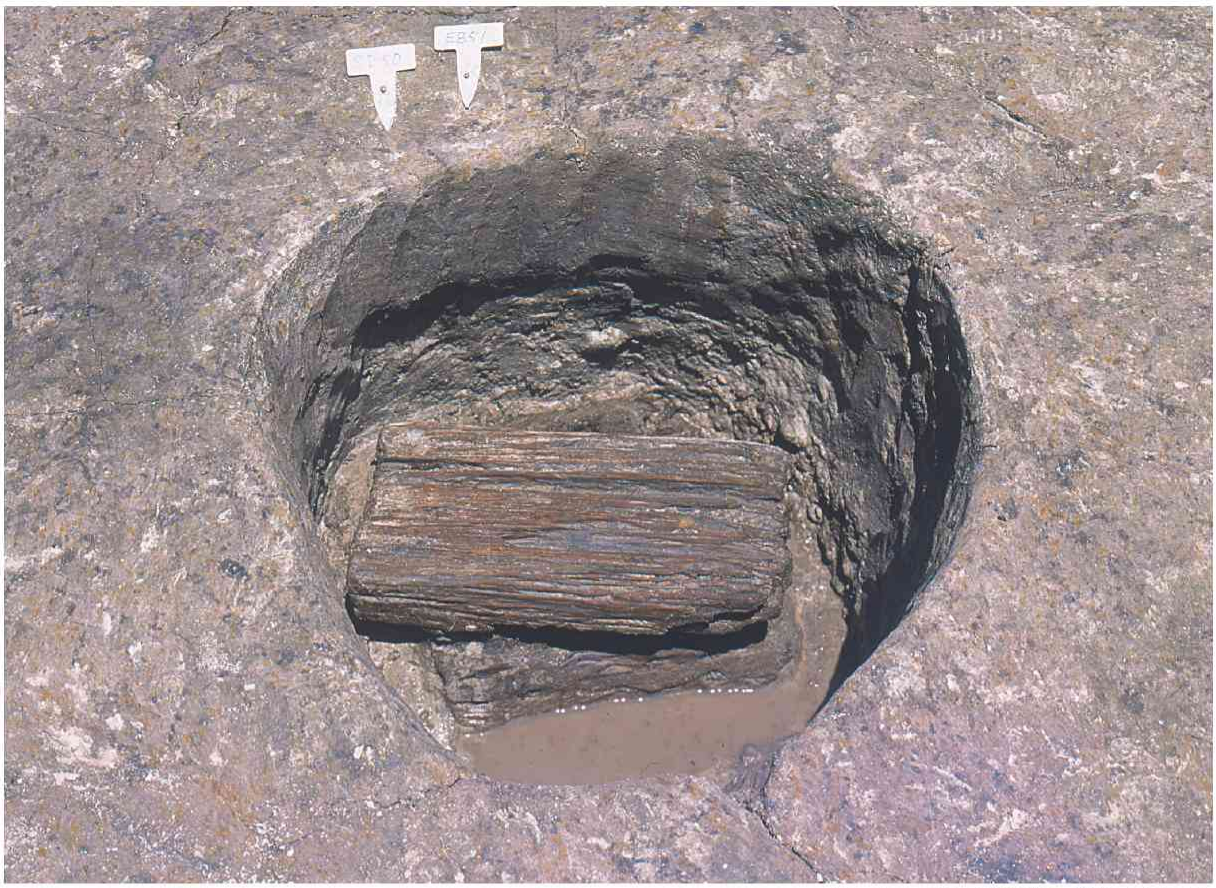
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第152集

平成18年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

調査区全景（西から）

1区SB20完掘状況（北東から）



1区SB50EB51礎板出土状況（南から）

4区SM218土師器甕出土状況（東から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、上野（わの）遺跡の調査成果をまとめたものです。

上野遺跡は、置賜盆地の北東部にあたる南陽市の南東部、吉野川左岸に広がる内原段丘に立地し、周囲は、水田や、さくらんぼ・ぶどう・ラフランスなどの果樹栽培地として利用されています。市内には、５世紀代の国史跡稲荷森古墳など、著名な古墳が数多く分布しており、遺跡の南東には、伊達氏以前から軍事的要所であった二色根館が築かれ、中世城館の分布も認められます。

このたび、県営農地環境整備事業（上野地区）に伴い、工事に先だって上野遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代中期の土坑や、平安時代では、置賜地方では初めてとなる合口甕棺と考えられる土器埋設遺構が検出されました。また、中世・近世では、柱穴に礎板を据えた、掘立柱建物跡を中心とした集落が確認されました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な文化的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの貴重な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成18年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　　佐　藤　敏　彦

本書は、農地環境整備事業（上野地区）に係る「上野遺跡」の発掘調査報告書である。既刊の調査説明資料などの内容に優先し、本書を持って本報告とする。

調査は、山形県置賜総合支庁産業経済部農村整備課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物、調査記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

調 査 要 項

遺 跡 名	上野（わの）遺跡
遺跡番号	平成16年度登録
所 在 地	山形県南陽市大字上野字上野４他
調査委託者	山形県置賜総合支庁産業経済部農村整備課
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成17年４月１日～平成18年３月31日
現地調査	平成17年５月23日～平成17年８月５日
	平成17年８月29日～平成17年９月１日
	平成17年10月11日～平成17年10月28日
調査担当者	調査第一課長　野尻　侃
	主任調査研究員　須賀井新人
	調査研究員　菅原　哲文（調査主任）
	主任調査研究員　須藤　孝宏
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室
調査協力	山形県土地改良事業団体連合会置賜事務所
	南陽市教育委員会
	南陽市農林課
	南陽市体育館
	山形県教育庁置賜教育事務所
	上野フルーツランド整備推進協議会

凡　例

1　本書の作成・執筆の分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章～第Ⅱ章	須藤孝宏
第Ⅲ章～第Ⅵ章	菅原哲文
第Ⅶ章	株式会社古環境研究所
第Ⅷ章１・３節	菅原哲文
第Ⅷ章２節	須藤孝宏

2　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）により、高さは標高で表す。また、方位は座標北を表す。

3　本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

ＳＢ…掘立柱建物　ＳＤ…溝　ＳＧ…河川　ＳＫ…土坑　ＳＰ…柱穴
ＳＭ…土器埋設遺構　ＳＸ…性格不明遺構
ＲＰ…登録土器・土製品　ＲＷ…登録木製品　Ｐ…土器・陶磁器　Ｓ…礫　Ｗ…木・木製品

4　遺構・遺物実測図の縮尺、網点などの用法は各図に示した。

5　土層図の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版土色帖」によった。

6　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（敬称略）
大橋康二・藤澤良祐・佐藤鎮雄・吉野一郎

7　委託業務は、下記のとおりである。

基準点測量業務	明光技研株式会社
地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務	株式会社シン技術コンサル
理化学的分析業務	株式会社古環境研究所
遺物保存処理業務	株式会社吉田生物研究所

目　次

Ⅰ　調査の経緯……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の方法と経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……4
　1　地理的環境……4
　2　歴史的環境……6
Ⅲ　遺跡の概要……7
　1　遺跡の層序……7
　2　遺構と遺物の分布……11
Ⅳ　縄文時代の遺構と遺物……11
　1　縄文時代の遺構……12
　2　縄文時代の遺物……13
Ⅴ　平安時代の遺構と遺物……17
Ⅵ　中世・近世の遺構と遺物……19
　1　概要……19
　2　掘立柱建物跡……19
　3　土坑……58
　4　性格不明遺構……59
　5　溝跡……60
　6　中世・近世の遺物……65
Ⅶ　自然科学的分析……91
Ⅷ　まとめと考察 ……100
　1　縄文時代 ……100
　2　平安時代 ……100
　3　中世・近世 ……104

報告書抄録……巻末

表

表1　縄文土器観察表 ……16
表2　石器・石製品観察表 ……16
表3　須恵器・土師器観察表 ……19
表4　掘立柱建物跡計測表 ……65
表5　陶磁器観察表 ……89
表6　木製品観察表 ……89
表7　石製品観察表 ……90
表8　試料と方法（放射性炭素年代測定） ……91
表9　測定結果 ……92
表10　木材樹種同定 ……93

表11　上野遺跡における蛍光Ｘ線分析結果……98
表12　山形県における土器埋設遺構（合口甕棺）……101
表13　出土遺物数量表……106

図　版

第 1 図　調査区概要図 …… 2
第 2 図　地形分類図 …… 3
第 3 図　遺跡位置図 …… 5
第 4 図　基本層序 …… 8
第 5 図　遺構配置図 …… 9
第 6 図　縄文時代の遺構 ……14
第 7 図　縄文時代の遺物（縄文土器・石器） ……15
第 8 図　縄文時代の遺物（石器・石製品） ……16
第 9 図　４区ＳＭ218・ＳＫ244・
土師器・須恵器 ……18
第 10 図　１・６区南遺構配置図 ……21
第 11 図　２・３・６区北遺構配置図 ……23
第 12 図　４・５区遺構配置図 ……25
第 13 図　１区ＳＢ20ａ・20ｂ ……28
第 14 図　１区ＳＢ20ａ・20ｂ ……29
第 15 図　１区ＳＢ42・80 ……31
第 16 図　１・６区南ＳＢ50 ……32
第 17 図　１・６区南ＳＢ50 ……33
第 18 図　１・６区南ＳＢ272 ……35
第 19 図　１・６区ＳＢ327・328 ……36
第 20 図　２区ＳＢ61・62 ……37
第 21 図　２区ＳＢ66・119 ……38
第 22 図　２区ＳＢ78・79・99 ……39
第 23 図　２区ＳＢ100、４・６区北ＳＢ207 ……40
第 24 図　４・６区北ＳＢ247 ……41
第 25 図　４区ＳＢ241・246 ……42
第 26 図　５区ＳＢ226・245 ……43
第 27 図　１・２・６区南ＳＰ59・81～88・
95・111・112・282 ……44
第 28 図　ＳＫ２・16・57・206・225、ＳＸ64 ……45
第 29 図　ＳＫ239・240・266、ＳＸ41・65 ……46
第 30 図　１区ＳＤ17 ……47
第 31 図　２区ＳＤ４～10・113・115、
ＳＸ15・114 ……48
第 32 図　２区ＳＤ４～６・115、ＳＸ114 ……49
第 33 図　１区ＳＤ49、２区ＳＤ11～13、
３区ＳＤ101・102 ……50
第 34 図　ＳＤ203・204 ……51
第 35 図　４区ＳＤ201・202・242・243 ……52
第 36 図　４区ＳＤ233～ＳＤ235 ……53
第 37 図　５区ＳＤ221～224、４区ＳＤ236・237 ……54
第 38 図　４・６区北ＳＤ261～265 ……55
第 39 図　中近世陶磁器 ……73
第 40 図　中近世陶磁器・木製品
（柱材：ＳＰ67・59） ……74
第 41 図　木製品
（柱材：ＳＢ66ＥＢ60・ＳＰ68・71・95・86） ……75
第 42 図　木製品（柱材：ＳＢ20ＥＢ212・ＳＢ328ＥＢ298・
ＳＰ282・305） ……76
第 43 図　木製品（柱材：ＳＢ50ＥＢ286・ＥＢ292） ……77
第 44 図　木製品（礎板：ＳＢ20ＥＢ23） ……78
第 45 図　木製品（礎板：ＳＢ20ＥＢ25・ＥＢ26） ……79
第 46 図　木製品（礎板：ＳＢ20ＥＢ39・ＥＢ40） ……80
第 47 図　木製品（礎板：ＳＢ50ＥＢ51） ……81
第 48 図　木製品（礎板：ＳＢ20ＥＢ28・ＳＢ50ＥＢ53・
ＳＰ76・87） ……82
第 49 図　木製品（礎板：ＳＰ82・84・85・板材：ＳＤ17）
……83
第 50 図　木製品（礎板：ＳＢ50ＥＢ284） ……84
第 51 図　木製品（礎板：ＳＢ50ＥＢ284・286・
ＳＢ328ＥＢ276） ……85
第 52 図　木製品（礎板：ＳＢ50ＥＢ289・291・ＳＰ326・
板材：ＳＫ303） ……86
第 53 図　木製品（杭：ＳＤ17） ……87
第 54 図　石製品 ……88
第 55 図　上野遺跡４区ＳＭ218における
リン・カルシウム含量 ……98
第 56 図　中世・近世遺構の新旧関係模式図 ……110

写真図版

巻頭写真１	調査区全景・１区ＳＢ20完掘状況
巻頭写真２	１区ＳＢ50ＥＢ51礎板・４区ＳＭ218
写真図版１	遺跡近景・調査区全景
写真図版２	調査区全景・作業状況
写真図版３	１区全景・１区ＳＢ20完掘状況
写真図版４	１区ＳＢ20ＥＢ23断面・完掘状況
写真図版５	１区ＳＢ20ＥＢ33断面・完掘状況
写真図版６	１区ＳＢ20ＥＢ25・ＥＢ39・ＥＢ40
写真図版７	１区ＳＢ20ＥＢ24・ＥＢ26・ＥＢ27・ＥＢ28・ＥＢ31・ＥＢ32・ＥＢ35
写真図版８	１区ＳＢ50完掘状況・ＳＢ50ＥＢ51・ＥＢ52・ＥＢ53
写真図版９	１区ＳＢ50ＥＢ54・ＳＰ48・81・82・84・85・87・88
写真図版10	１区ＳＢ80ＥＢ96・ＳＤ17・ＳＫ１・２・56・ＳＰ95・ＳＸ41・64
写真図版11	２区全景
写真図版12	２区遺構完掘状況・ＳＢ62・119完掘状況
写真図版13	２区ＳＢ61・66完掘状況・ＳＢ66ＥＢ60・ＳＫ16・57・ＳＰ58・59
写真図版14	２区ＳＤ７・８・ＳＸ65・114・２区拡張区陶器（ＲＰ23）出土状況
写真図版15	２区ＳＤ４～７・９・10・３区遺構完掘状況・ＳＫ104・105完掘状況
写真図版16	３区拡張区ＳＸ109・117完掘状況・３区ＳＤ101・102・４区・５区全景
写真図版17	４区ＳＢ207・ＥＢ208・209・215～217
写真図版18	４区ＳＢ207ＥＢ211～213・215・216
写真図版19	４区ＳＭ218・ＳＢ241・246
写真図版20	４区ＳＤ201～204・233～235完掘状況・ＳＧ220・ＳＫ205・206
写真図版21	５区・５区拡張区遺構完掘状況・東壁断面・ＳＢ226完掘状況
写真図版22	５区ＳＢ226ＥＢ227～230完掘状況・ＳＤ221～223断面
写真図版23	６区北遺構完掘状況・ＳＤ263・ＳＤ264完掘・石臼出土・ＳＫ266完掘状況・６区南ＳＫ299・ＳＫ303断面
写真図版24	６区南遺構完掘状況・ＳＢ50完掘状況
写真図版25	６区南柱穴完掘状況・ＳＢ50・ＥＢ284～286・288
写真図版26	６区南ＳＢ50ＥＢ289～292・ＳＰ305・ＳＤ306
写真図版27	縄文土器・石器
写真図版28	石器・石製品・土師器・須恵器
写真図版29	中近世陶磁器
写真図版30	中世陶器
写真図版31	中世陶器
写真図版32	柱材（ＳＰ59・ＳＢ66ＥＢ60・ＳＰ66・68・71・75・119）
写真図版33	柱材（ＳＰ86・305・ＳＢ207ＥＢ212・ＳＢ328ＥＢ298）
写真図版34	柱材（ＳＰ282・ＳＢ50ＥＢ286・292）・礎板（ＳＢ20ＥＢ23）
写真図版35	礎板（ＳＢ20ＥＢ23・25）
写真図版36	礎板（ＳＢ20ＥＢ26・39）
写真図版37	礎板（ＳＢ20ＥＢ40・ＳＢ50ＥＢ51）
写真図版38	礎板（ＳＢ20ＥＢ28・40・ＳＢ50ＥＢ51・53）
写真図版39	礎板（ＳＰ76・82・84・85・87）
写真図版40	板材（ＳＤ17）・礎板（ＳＢ50ＥＢ284）
写真図版41	礎板（ＳＢ50ＥＢ284・286・ＳＢ328ＥＢ276）
写真図版42	礎板（ＳＢ50ＥＢ289･291）･柱材（ＳＫ303）
写真図版43	杭（ＳＤ17）
写真図版44	柱材（ＳＢ20ＥＢ26・ＳＢ50ＥＢ291）・石製品

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

農地環境整備事業（上野地区）

上野遺跡の発掘調査は、山形県の農地環境整備事業（上野地区）に伴い実施された。当事業は、平成14年１月に地元関係者等による上野フルーツランド推進協議会が設立され、各関係機関との協議や事業着手に向けての作業が進められてきたが、これを受けて平成16年度に県営土地改良事業として採択された。上野地区は、南陽市中心部に位置する丘陵傾斜地帯であることから、恵まれた地理条件等を最大限に活かした観光果樹園の構築を目指し、約５億円の事業費を投じて27.3haの区画整理等を行うものである。

平成16年度新規登録

事業が開始されるのに伴い、山形県置賜総合支庁産業経済部農村整備課（以下、農村整備課と略す）は、山形県教育委員会に事業区内の遺跡の存在確認を依頼した。これを受けて山形県教育委員会は、平成16年12月27日から28日にかけて上野遺跡の事業計画地内の遺跡詳細分布調査を実施し、中世および縄文時代に属する遺構と遺物を確認した。こうして、「上野遺跡」は山形県の遺跡に新規登録されることとなった。山形県教育委員会ではこの結果をもとに、農村整備課と協議を行い、財団法人山形県埋蔵文化財センターが、県農林部及び県教育委員会の委託を受けて、平成17年から発掘調査を行うこととなった。

平成17年度は発掘調査に続き、８月４日から12月22日までの工期で、８haの整理工事および用排水路・道路工事が実施された。18年度以降は、残り約19haの区画整理や水路及び農道の整備をはじめ、換地業務などを実施し、平成20年度に事業完了の予定である。

2　調査の方法と経過

平成17年度現地調査

現地調査は、平成17年５月23日から10月28日まで２度の中断期間をおいて、実働71日間で実施した。調査面積は、3,050㎡である。調査区は、段丘斜面になっているため、中央を南北に通る農道と水田の畦畔部分とを境界にして、農道東側の南から北に向かって１区～３区、同西側の南から北に向かって４～５区と定めるとともに、農道部分を６区と設定した。調査区のグリッドは、国土座標の平面直角座標Ｘ系：Ｘ＝－215115.000・Ｙ＝－59625.000を原点（Ａ０）とし、東西軸、南北軸を基準に10m方眼で設定した。グリッド番号は、原点から北と東に向かってそれぞれ10m毎に、アルファベットでA、B、C…、アラビア数字で０、１、２…と順に番号を振り、「Ａ１」のように表記した。グリッドの帰属は、北西隅の杭を基準にした。なお、５m毎の小グリッドが必要な際には、例えば「Ａ１」グリッドから南に５m、東に５m離れている小グリッドを現すのに「Ａ１―Ｓ５Ｅ５」という表記を用いた。

次に、調査の経過について述べる。５月23日に事務所を開設し、機材の搬入を行い、翌日24日に鍬入式を開催した。５月24日から６月８日にかけて重機を用いて表土を除去した後、鋤簾等の道具による面整理を行い、遺構の検出を行った。６月９日から遺構の精査を開始し、並行して写真撮影及び記録作業を行った。その後、７月23日に現地調査説明会を開催し、７月29日

鍬入式

現地調査説明会

に空中写真撮影を行った。１区と２区の間および２区と３区の間については、近隣住民の生活用水としても利用されている水路が通っているために水路の切り回しが必要となること、５区東端の果樹地帯の一部については、果樹の補償が解決していないこと、そして農道部分については、埋設されている水道管の付け替え工事が必要であることなど、条件が整うまでしばらく

調査中断

調査を中断せざるを得ないこととなった。従って、これらの調査区については、条件が整い次第、調査を再開することとし、８月５日に調査を一旦終了した。

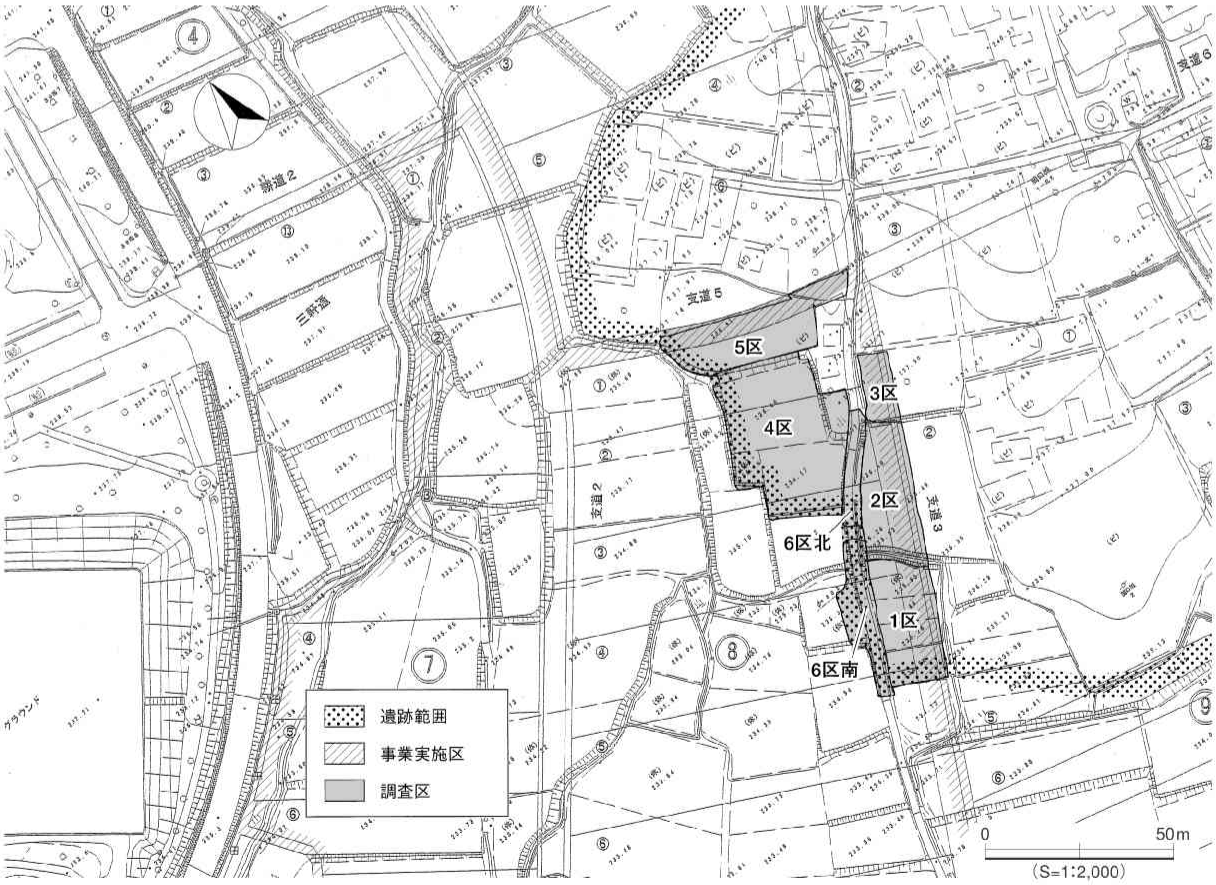
調査再開

８月29日より調査を再開した。水路部分の立会い調査を経て、翌日８月30日より本格的に調査に着手した。１区と２区の間、２区と３区の間を新たにそれぞれ２区拡張区、３区拡張区と定める。この調査は、８月29・30日にかけて重機による表土除去を行った後、遺構の検出および精査を行い、９月１日にこの地区の調査を終了した。

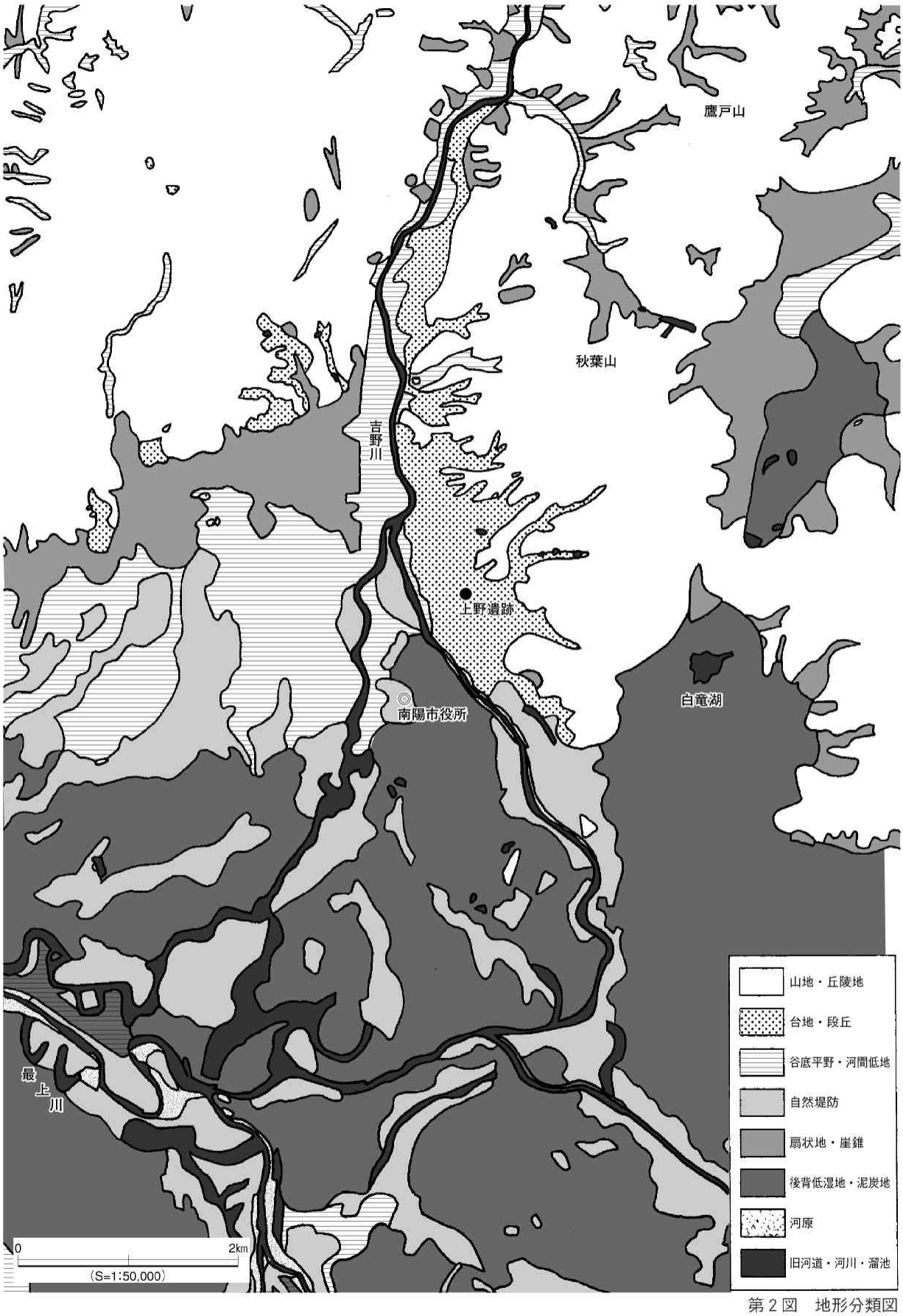
10月11日から最後に残った地区の調査を開始した。５区東端の果樹地帯の一部を５区拡張区、農道部分を南北に分け、６区北・南を設定した。10月11日で重機による表土の除去を完了し、10月12日から10月28日までの間で面整理･遺構精査･写真撮影･記録作業を実施した。10月28日に機材の撤収を済ませ、調査の全行程を終える。当初の調査区に含まれていた、３区より北側の農道及びブドウ畑の一部は、次年度の調査に引き継がれる予定になった。

平成17年度整理作業

次に、整理作業の経過について述べる。９月１日より開始し、発掘調査と並行しながら作業を進めた。９月１日から９日にかけて、遺物の洗浄と注記を実施した。９月12日から、14日に



第１図　調査区概要図


鷹戸山
秋葉山
吉野川
上野遺跡
◎南陽市役所
白竜湖
最上川
0
2km
(S=1:50,000)
山地・丘陵地
台地・段丘
谷底平野・河間低地
自然堤防
扇状地・崖錐
後背低湿地・泥炭地
河原
旧河道・河川・溜池

第２図　地形分類図

かけて、遺物の接合と、合口甕棺を中心とした復元作業を行なった。９月15日から、実測作業を開始した。現場作業中に出土した遺物については、随時センターに運び、整理を進めた。実測作業は、中近世の柱材や礎板などの木製品が多く、これらを重点的に進めた。12月12日にほぼ実測作業を終了し、12月13日より２月７日にかけて、遺構・遺物のトレース作業を進める。随時、遺物の写真撮影を行った。その他、柱材、礎板などの木製品４点について、保存と活用を図るため、吉田生物研究所へ遺物保存処理業務を委託した。１月25日より報告書の版組を開始、２月28日でほぼ終了した。その後、遺物の収納や記録類等の整理を行い、３月17日に作業を終了した。

遺物保存処理

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

遺跡の所在する南陽市は山形県の南東部に位置し、北端の白鷹山（標高994m）から南端は吉野川・屋代川合流地点の大橋まで、東端は小岩沢、南西部は最上川に限られた範囲で、東南15km・南北24kmの三角状の市域をなす。置賜盆地の北東部を占め、北は山形市および山辺町、北東は上山市、南東は高畠町、南西は川西町、西は長井市、北西は白鷹町に接する。面積は約160平方kmで、このうち北部の山地が70%を占める。南部に広がる段丘部・平野部の割合はそれぞれ６％・24%である。三角形の頂点（北端）が白鷹山で、ここから発する吉野川が市域中央を

置賜盆地北東部

吉　野　川

番号	遺跡名	種　別	時　代	番号	遺跡名	種　別	時　代
1	上野	集落跡	縄文・平安・中近世	36	問々の上	散布地	奈良
2	蒲生田古墳群	古墳群	古墳（終末期）	37	古屋敷	散布地	平安
3	山居沢山Ｂ	散布地	平安	38	六角壇	散布地	平安
4	山居沢山Ａ	散布地	平安	39	梅ノ木	散布地	奈良・平安
5	狸沢山古墳群	古墳群	古墳（終末期）	40	檜原	散布地	縄文
6	上野山古墳群	散布地・古墳群	弥生・古墳（終末期）	41	大清水	散布地	縄文・平安
7	二色根館	城	中世	42	宮内小学校敷地内	集落跡	縄文（中期）・平安
8	中野山館	館	中世	43	別所Ａ	散布地	平安
9	二色根古墳群	古墳群	古墳（終末期）	44	別所Ｂ	散布地	縄文
10	横沢	散布地	縄文・奈良	45	宮内南館	館	戦国期
11	夷平	散布地	縄文（晩期）・中世	46	宮内熊野大社敷地内	散布地	縄文（中・後期）・平安
12	北町	散布地	縄文（前期）	47	久保	集落跡	縄文（中期）
13	稲荷前	散布地	縄文（前期）	48	慶海山館	館	中世
14	上ノ山	散布地	縄文	49	双松公園内	散布地	縄文
15	烏帽子山経塚	経塚	平安	50	宮沢城	館・館城	戦国期
16	烏帽子山古墳	古墳	古墳（終末期）	51	北館	館	室町
17	上野山館	城砦・砦	中世	52	丸山館	館	中世
18	諏訪前	散布地・集落跡	縄文・古墳・平安	53	椚塚館	館	平安
19	観音堂	散布地	縄文・平安	54	李の木	包蔵地	縄文・平安
20	蒲生田館	館	中世	55	太子堂	散布地	平安
21	富貴田	集落跡	縄文・奈良	56	長岡館	館	中世
22	当時作	散布地	縄文・奈良・平安	57	長岡山東	散布地	縄文・平安
23	若狭郷屋敷	館	中世	58	長岡山	集落跡	旧～中石器・縄文（中期）・古墳
24	唐越	散布地・集落跡	縄文（中期）・奈良・平安	59	稲荷森古墳	散布地・古墳	旧石器・縄文（中期）・古墳（前期）
25	西田	散布地	平安	60	早稲田	散布地	奈良
26	荻生田	集落跡・散布地	弥生・奈良	61	長岡西田	散布地	縄文（中期）
27	中落合館	館	中世	62	長岡南森	散布地	縄文（中期）・古墳（前・中期）
28	中落合	集落跡	奈良・平安	63	内城館	館	中世
29	中屋敷	散布地	奈良・平安	64	中ノ目下	散布地	奈良・平安
30	東六角	集落跡	縄文（中期）・平安	65	百刈田	集落跡	縄文（中期）・古墳
31	矢野目館953他	館跡	平安・中世	66	前小屋	散布地	縄文
32	沢田	集落跡	弥生・古墳（中期）・奈良・平安	67	西中上	散布地	平安
33	島貫	集落跡	古墳～奈良・奈良・平安	68	将監屋敷	散布地	奈良・平安
34	郡山中堀	散布地	奈良・平安	69	蒲生田字南館館ノ内	散布地	縄文・奈良・平安
35	沢口	集落跡	奈良・平安	70	平館	館	中世

第３図　遺跡位置図（国土地理院発行２万５千分の１地形図「赤湯」を使用）

南北に貫流し、南端部を北西に流れる最上川（松川）に合流している。西部の織機川も同じく南流して最上川に注ぐ。北部丘陵地帯では、吉野川に沿って集落が点在し、標高は最北の小滝集落で430m、最低は最上川に沿った南端の関根地区で209mとなっている。北部が山地で南に沃野が開けるこの地は、日照条件等に恵まれ気候も温暖なため、米・野菜・果樹などの栽培に適している。耕地面積が3,790ha、耕地率は24%である。気候は内陸性を呈し、年平均気温は10～11℃ 前後であるが、夏冬の温度差は大きい。

北部の白鷹山地地域の表層地質については、安山岩質火山凝灰岩・火山礫凝灰岩および凝灰質泥岩から構成されている。山地と低湿地の間に位置する吉野川沿岸段丘・内原段丘部については、礫・砂・泥、南部の低湿地帯である宮内扇状地には、広く砂・泥の層が広がっている。

吉野川左岸に広がる内原段丘

上野遺跡は、南陽市南部のやや東寄りに位置し、鷹戸屋山地･大平山地間の谷間を南に向かって流れる吉野川左岸に広がる内原段丘に立地する。標高は、235～237mを測り、地形は北東から南西にかけて傾斜する。本遺跡周辺の吉野川沿岸段丘・内原段丘・宮内扇状地等は、山地と河川の接点が多いため、太古より狩猟採集等に適していた地域であると考えられる。現在、遺跡周辺は恵まれた自然環境を利用して水稲栽培のほか、ぶどう・ラフランス・柿等の果樹栽培地として利用されている。

果樹栽培地

2　歴史的環境

南陽市では、旧石器時代の遺物については、１個の細石刀が長岡山遺跡から採取されているに過ぎないが、縄文時代の遺跡と古墳時代の遺跡は米沢盆地北東縁に集中的に発見されている。吉野川の下流東部一帯は、泥炭層が広がる低湿地で大谷地と呼ばれ、これを囲むように遺跡が分布している。南陽市域ではすでに消滅したものも含めて10箇所の古墳・古墳群が発見されている。５世紀のものとされる全長96mに及ぶ前方後円墳の稲荷森古墳（国史跡）をはじめ、５世紀末のものと推定され置賜地方では唯一の竪穴式石室を持つ赤石山古墳などがある。他の８箇所は古墳群で、うち７箇所が上野遺跡近辺（赤湯市街地の北方丘陵）に集中している。いずれも山腹・山麓の自然斜面を利用した同一形式の古墳で、形状および二色根２号墳から出土した和銅新銭から、８世紀のものと推定されている。蒲生田古墳群と狸沢古墳群･上野山古墳群からは蕨手刀３振が出土した。こうした古墳文化の盛行は、古代における当市域が置賜郡の政治・文化の中心地であったことを物語っており、特に終末期古墳群の集中的分布は奈良時代集落遺跡との関連性をうかがわせる。

上野遺跡近辺に古墳群が集中

置賜郷

律令制下の南陽市域は、「和名抄」に見える置賜郡７郷のうち置賜郷に属していたとする説が有力である。置賜郷は置賜郡の中心をなした地域と考えられ、南陽市域に郡山の地名が残ることから、この地を置賜郡衙跡に比定するのが通例となっている。また、先に述べた北部の山麓における８世紀頃のものとみられる墳墓の集中的分布も、古代郡衙の存在の証明と考えられる。一方、古社寺の創建伝承を見ると、二色根薬師寺・宮内熊野神社・別所皇太神社・三堀寺など、赤湯・宮内方面の古社寺がいずれも９世紀の創建と伝えられている。社寺に付加するかのごとく経塚や須恵器窯跡なども発見されている。

北条荘

中世の置賜郡には、屋代荘･成島荘･北条荘などの荘園があったことが知られる。南陽市域の大半は北条荘に属したが、屋代荘など近隣の荘園・公領に含まれる地域もあった。北条荘は、

北条時政の庶子、北条相模坊臨空がこの地の霞を支配したことに始まると伝えられるが、詳細は不明である。大江広元の次男時広に始まる長井氏が、北条荘の地頭であったと推測される。長井氏は、代々将軍の要職に連なり、荘の経営はその被官の手に委ねられたらしい。鎌倉御家人の当地支配は鎌倉文化の地方流入を促し、室町期にかけて板碑を中心とする石造文化が開花した。南陽市域にも、県内最古の板碑である正元元年（1259）銘の大日板碑をはじめとする数多くの板碑・磨崖碑・六面幢などが残されている。

長　井　氏

伊達氏が長井氏を攻めて置賜郡内を領有するのは、康暦２年（1380）であるが、北条荘にはそれ以前から伊達氏の息がかかっていたことが宮内熊野神社伝承記録等から読み取れる。伊達氏の置賜経営は、稙宗のとき（16世紀）になってほぼ形を整えた。北条荘内には、荘内に28郷を領していたといわれる懸田氏をはじめ、宮内郷を知行した大津氏、中山郷を知行した小国氏などの有力豪族がいたことが知られる。地頭と呼ばれる家臣は、村落の居屋敷に館を構え、在家・浮免の様態で所領を支配した。在家とは、家と田畑と百姓権の三つを揃えた百姓で、浮免は請作者不定の土地である。「采地下賜録」には北条荘におけるこうした在家の存在が証明されている。また、上野遺跡近辺（赤湯市街地の北方丘陵）に構えられた二色根館は、阿波野（粟野）氏の居城で、同氏は文明３年（1471）に伊達氏と確執の末に没落したと伝えられている。

伊　達　氏

地　頭

在　家

二色根館

置賜地域には、天正19年（1591）伊達氏にかわって蒲生氏が入部し、文禄３年（1594）に検地を実施したが、慶長３年（1598）には上杉氏の支配するところとなり、南陽市域は以降米沢藩領として幕末期を迎えることとなる。

蒲　生　氏

上　杉　氏

Ⅲ　遺跡の概要

1　遺跡の層序

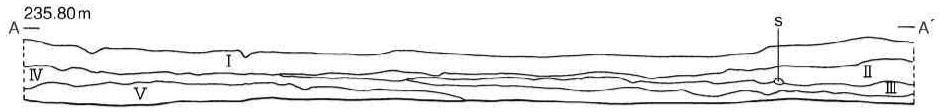
遺跡の層序は、第４図に１区・４区・５区の土層断面図を示した。これを基に内容を述べる。

１区の層序では、Ⅰ～Ⅴ層を設定した。遺跡内で最も標高が低い地区である。Ⅰ・Ⅱ層は、黒褐色、灰黄褐色シルトを主体とし、水田の耕作土上層にあたる。Ⅲ層は、耕作土の深土であり、地山層との漸移層的な様相を示す。円礫をまばらに含む。Ⅳ層は、褐灰色シルトを主体とし、基盤由来と考えられる浅黄橙色礫を含む。開田の整地の際の影響を受けていると思われる。Ⅴ層は、黄褐色シルト層を主体とする地山である。下は礫層となる。なお、地点によってⅤ層はバリエーションがあり、砂層や礫層となる所もある。中近世の遺構は、Ⅳ層上面で検出される。遺構検出面までの深さは、20～45㎝である。

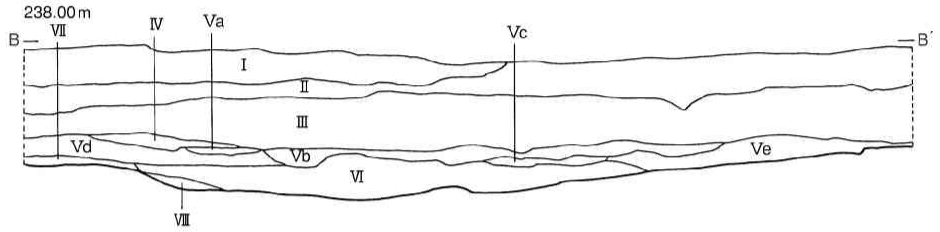
１区の層序

４区は、西側にＳＧ220河川跡が入り、他の区と堆積状況を異にする。４区西壁・ＳＧ220の層序であるが、Ⅰ～Ⅷ層を設定した。Ⅰ・Ⅱ層は、水田耕作土の上層になる。Ⅲ層は、黒褐色シルトを主体とし、耕作土の下層にあたる。Ⅳ・Ⅴは、黒色シルトを主体とし、旧表土と考えられる。地山由来の白色礫を含む。Ⅵ層は、黒褐色シルトでＳＧ220の覆土に相当する。Ⅶは、黒褐色砂質シルト、Ⅷは灰黄褐色砂質シルトで、中近世の遺構が検出される地山に相当する。ＳＧ220は、この層を切っている。

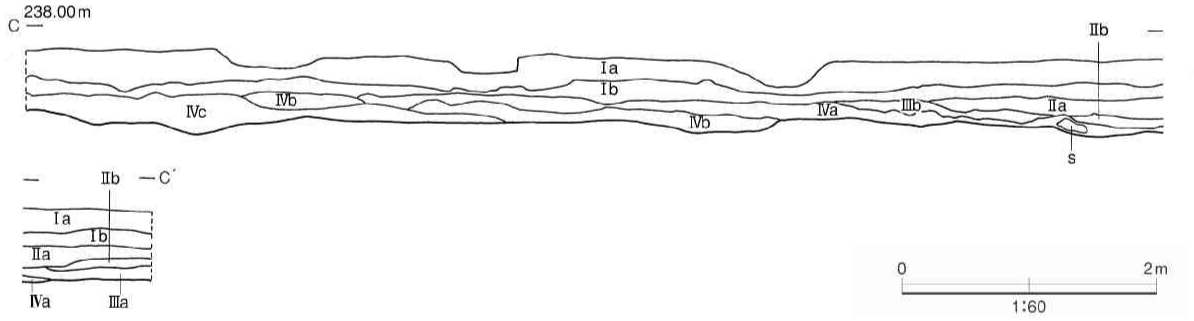
４区の層序



1区東壁(A-A')
Ⅰ　10ＹＲ３／２　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、表土。
Ⅱ　10ＹＲ４／２　灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、風化礫ブロックを微量含む。
Ⅲ　10ＹＲ３／１　黒褐色シルト　しまり強い、径10～50㎜程の円礫をまばらに含む。
Ⅳ　10ＹＲ５／１　褐灰色シルト　しまり強い、径50～100㎜程の浅黄橙色風化礫をまばらに含む。
Ⅴ　10ＹＲ５／６　黄褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、岩盤。



4区西壁・SG220(B-B')
Ⅰ　10ＹＲ５／２　灰黄褐色シルト　しまり強い、表土。
Ⅱ　10ＹＲ６／２　灰黄褐色シルト　しまり強い、炭化物を微量、径５～10㎜程の白色風化礫を含む。
Ⅲ　10ＹＲ３／２　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、径５～10㎜程の白色風化礫をやや多く含む。
Ⅳ　10ＹＲ２／１　黒色シルト　しまり強い、酸化鉄を少量、白色岩粒を含む。
Ⅴａ　10ＹＲ２／１　黒色シルト　しまり強い、白色岩粒を微量含む。
Ⅴｂ　10ＹＲ２／１　黒色シルト　しまり強い、炭化物を少量、白色風化礫・酸化鉄を含む。
Ⅴｃ　10ＹＲ２／１　黒色シルト　しまり強い、径５～10㎜程の白色風化礫を含む。
Ⅴｄ　10ＹＲ２／２　黒褐色シルト　しまり強い、径５～10㎜程の白色風化礫・黄褐色風化礫を含む。
Ⅴｅ　10ＹＲ２／１　黒色シルト　しまり強い、白色岩粒を微量、酸化鉄を含む。
Ⅵ　10ＹＲ３／１　黒褐色シルト　しまり強い、白色風化礫を少量、黄褐色風化礫を含む。
Ⅶ　10ＹＲ３／２　黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、灰黄褐砂質シルトブロック・酸化鉄・白色風化礫・黄褐色風化礫を含む。
Ⅷ　10ＹＲ４／２　灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、白色風化礫・酸化鉄を含む。

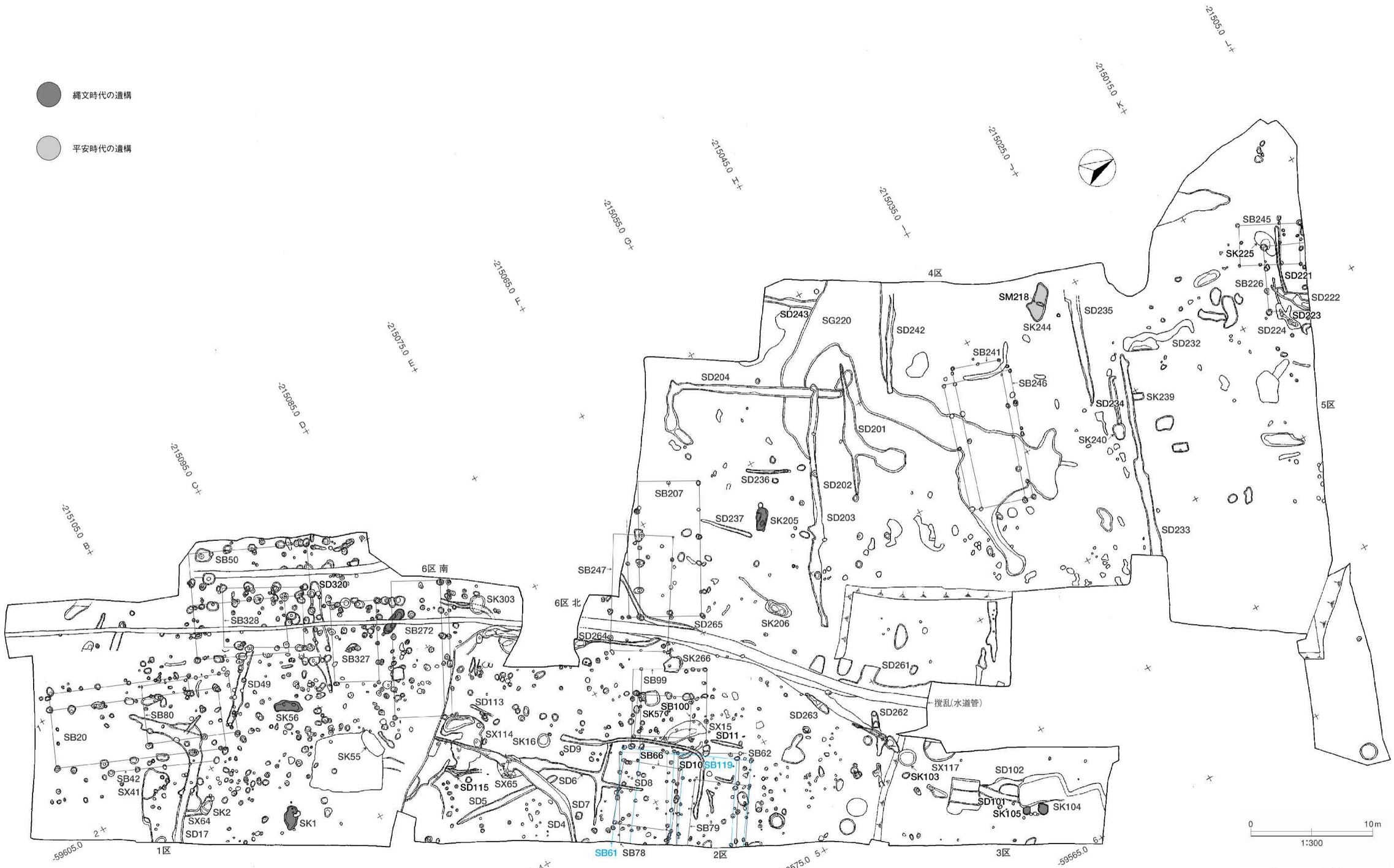


5区東壁(C-C')
Ⅰａ　10ＹＲ４／２　灰黄褐色シルト　しまり・粘性ともやや弱い、酸化鉄を含む、表土。
Ⅰｂ　10ＹＲ４／２　灰黄褐色シルト　しまりやや強い、径５～100㎜程の風化礫・酸化鉄を含む。
Ⅱａ　10ＹＲ３／２　黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、径５～50㎜程の風化礫・酸化鉄をともに多く含む。
Ⅱｂ　10ＹＲ５／１　褐灰色シルト　しまり強い、径５㎜程の風化礫・酸化鉄・炭化物を少量ずつ含む。
Ⅲａ　10ＹＲ２／１　黒色シルト　しまり強い、径10㎜程の風化礫・酸化鉄を含む。
Ⅲｂ　10ＹＲ３／１　黒褐色砂まじりシルト　しまりやや強い、径５～50㎜程の風化礫を多く、酸化鉄を少量含む。
Ⅳａ　10ＹＲ５／８　黄褐色砂質シルト　しまりやや強い、粘性弱い、風化礫を多く含む。
Ⅳｂ　10ＹＲ１．７／１　黒色礫　しまり強い。
Ⅳｃ　10ＹＲ７／４　にぶい黄橙色円礫　しまり強い、にぶい黄橙色砂質シルト・炭化物で覆われた円礫を含む。

第４図　基本層序

縄文時代の遺構

平安時代の遺構



第 5 図　遺構配置図

5区の層序

5区は、調査区内で最も標高が高い地点である。層序は、1区と類似した状態を呈する。Ⅰａ・Ⅰｂ層は、灰黄褐色シルトの表土で、田地の耕作土上層になる。Ⅱａは、黒褐色砂質シルト、Ⅱｂ層は褐灰色シルトで、耕作土の深土にあたる。Ⅲａは、黒色シルト、Ⅲｂは黒褐色砂混じりシルトで、層内に基盤由来と思われる破砕礫を少量含む。この層も、開田の際に人為的に盛られた層である可能性が高い。Ⅳａ、ｂ、ｃ層は、もともとの地山と考えられる。上層のⅣａは、黄褐色砂質シルト、下層のⅣｂ・ｃ層は、礫層である。5区の中近世の遺構は、Ⅳ層上面で検出される。

2　遺構と遺物の分布

当遺跡には、縄文時代中期と推測される遺構、平安時代の遺構、中近世の遺構が検出された。第5図及び付図に調査区の全体図を示した。各時期の遺構は、同一の検出面で確認されている。調査区内は、開田の際に上面を削平されている。縄文時代の遺構は、土坑が6基検出された（第5図の濃いアミの部分）。1区・6区南にやや分布がまとまっているように見受けられるが、散在した分布状況を示す。

平安時代の遺構は、4区北西部に、ＳＭ218・ＳＫ244の2基の遺構が検出された。遺物はきわめて少なく、断定はできないが、3区や5区など、遺跡内でも標高が高い地点に分布が認められると考えられる。

中世・近世の遺構は、当遺跡で主体となるものである。他の時期と比較すると、標高が低い地点を主体としている。掘立柱建物跡が22棟、溝跡、土坑などが検出された。掘立柱建物跡の分布状況には、4ヶ所のまとまりが認められる。1区と6区南は、ＳＢ20、ＳＢ50を中心とした、他の地点と比較して規模の大きい掘立柱建物跡が検出され、柱穴内には礎板が検出される。礎板が検出される地点はこの地区だけである。遺跡内で最も主体となる地点であると思われる。次いで、2区中央から4区南側は、2番目の規模である。2区では、建物跡は、ＳＤ9などの溝跡に沿って繰り返し建て替えが行なわれている。4区北側では、ＳＢ241，ＳＢ246などの2棟の建物跡が検出された。4ヶ所目は、5区北西の地点である。2棟の建物跡が検出された。北側の調査区外にさらに分布が拡大すると思われる。

Ⅳ　縄文時代の遺構と遺物

1　縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は、土坑が６基検出された。住居跡、遺物包含層は確認されていない。遺構の分布であるが（第５図参照）、１区では、北半のＤＧ～２・３グリッドに、ＳＫ１・56・299が分布する。４区では、南側にＳＫ205が分布する。３区では、ＳＫ104･105が分布する。当期の遺構は、中近世の柱穴等の遺構と比較して、遺構の輪郭が明瞭ではなく、覆土は黒褐色シルトが主体で固くしまっている。遺物が伴わない遺構でも、覆土が類似するものは当期に含めた。検出された６基の土坑について述べる。

土　　坑

ＳＫ１（第６図）　Ｃ２グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、大きさは195×110cm、深さは23cmである。底面に起伏がある。覆土は、黒褐色シルトが主体で、自然堆積と推定される。重複関係であるが、東側の３ヶ所を、中近世の柱穴が切っている。主な遺物では、第７図７の削器、10の掻器、12の縦長の剥片が出土している。他の土坑と比較して石器の出土が多い。廃棄土坑的な性格がうかがわれる。

ＳＫ56（第６図）　Ｃ１グリッドに位置する。平面形は長方形状で、大きさは長軸224cm×短軸86cm、深さは32cmである。覆土は黒褐色シルトが主体で、上層に礫が多い。自然堆積と考えられる。２ヶ所を中近世の柱穴に切られる。出土遺物は、第７図13の剥片が出土した。

ＳＫ104（第６図）　Ｈ５グリッドに位置する。平面形は楕円形で、大きさは96×82cm、深さは14cmである。底面は平坦である。覆土は、黒褐色シルトが主体で、Ｆ１は、強く熱を受けた痕跡が認められ、炉跡の可能性がある。出土遺物は、第７図３の土器片が出土したが、表面が剥落しており、時期は特定できない。他の縄文土器は熱を受けたと思われ、器面の剥落が見られる。炉跡の可能性も考えられる。

ＳＫ105（第６図）　Ｈ５グリッドに位置する。上部を削平されている。平面形は楕円形で、大きさは72×60cm、深さは４cmである。底面は平坦である。覆土は、黒褐色シルトが主体で、自然堆積と考えられる。出土遺物は、第７図４の土器片及び同一個体の破片が出土しているが、器面の剥落が著しく、時期は不明である。

ＳＫ205（第６図）　Ｇ２グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、大きさは193×100cm、深さは10cmである。開田時に、かなり削平されたと考えられる。底面は、凹凸が目立つ。覆土は黒褐色シルトが主で、円礫が入り、自然堆積と考えられる。遺物は、図化していないが、摩滅した縄文土器片が出土している。

ＳＫ299（第６図）　Ｄ１グリッドに位置する。平面形は楕円形で、大きさは235×76cm、深さは39cmである。覆土は、黒色～黒褐色シルトが主体で、自然堆積と考えられる。中央を現代の撹乱に切られる。遺物は出土していない。

2　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、縄文土器が99片、石器・石製品が17点出土している。縄文土器５点（第７図１～５）、石器10点、石製品１点（第７図６～13、第８図14～16）を図示した。時期が判別できる遺物から考えると、中期中葉から後半にかけての時期が中心と考えられる。

（１）縄文土器

１は、深鉢の口縁部破片で、内弯する器形である。全体に器面が摩滅しており、文様がはっきりしない部分があるが、口縁上端に連続して角押文を施し、Ｓ字状を呈すると思われる隆帯を貼り付ける。口縁下には、無調整の粘土紐貼り付けが認められる。上記の特徴から、大木８ａ式土器に位置づけられる。２は、ＲＬ縄文が施される深鉢で、口縁部が大きく外反する器形である。器形から中期後半に位置づけられると考えられる。３・４は、深鉢体部破片と思われ、元は縄文が施文されていたと思われるが、摩滅しており、時期は不明である。５は、小形の深鉢の体部下半部の破片である。外面に荒いケズリ状の調整が施されるが、縄文は認められない。中期の可能性も否定できないが、時期は不明である。なお、出土地点、法量、胎土・焼成等の詳細については、表１に記載した。

大木８ａ式土器

（２）石器・石製品

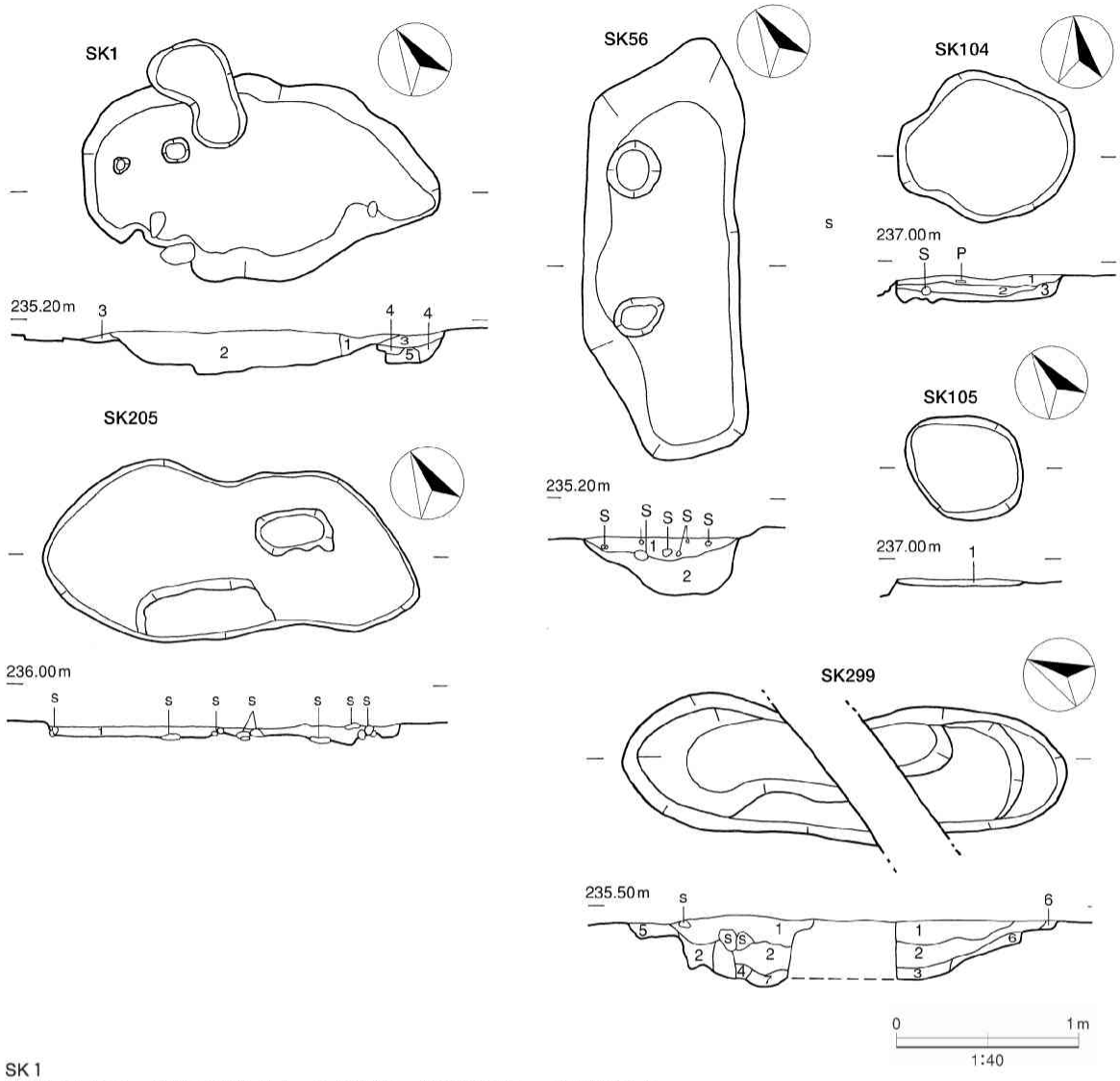
６は、石錐である。基部を一部破損するが、ほぼ完形で、両面を丁寧に調整している。７は削器と考えられるが、先端部のみ残存しており大部分を欠く。右側縁に片面加工が認められる。８は掻器と思われ、基部は残存するが、大部分を欠く。両側縁に片面加工が認められる。９は、掻器と考えられる。完形である。厚手の剥片を用い、先端部と右側縁に加工が入る。10は、掻器である。厚手の剥片を用い、先端部と右側縁に加工が入る。完形である。11は削器と考えられる。基部側の半分を欠損する。左側縁に片面加工が入る。

12は、二次加工が施される剥片である。縦長の石刃状をなす。左側縁の背面側と、右側縁の腹面側に細かな二次加工が認められる。13は剥片である。背面に自然面を残す。節理が入り、石材は良質ではない。14は剥片である。

15は石棒で、先端部分が残存し、大部分は欠損する。頂部は研磨され、環状に沈線がめぐる。側面は、大まかな成形後に縦方向に研磨し、形を整えている。形態から、縄文時代中期に属するものと思われる。

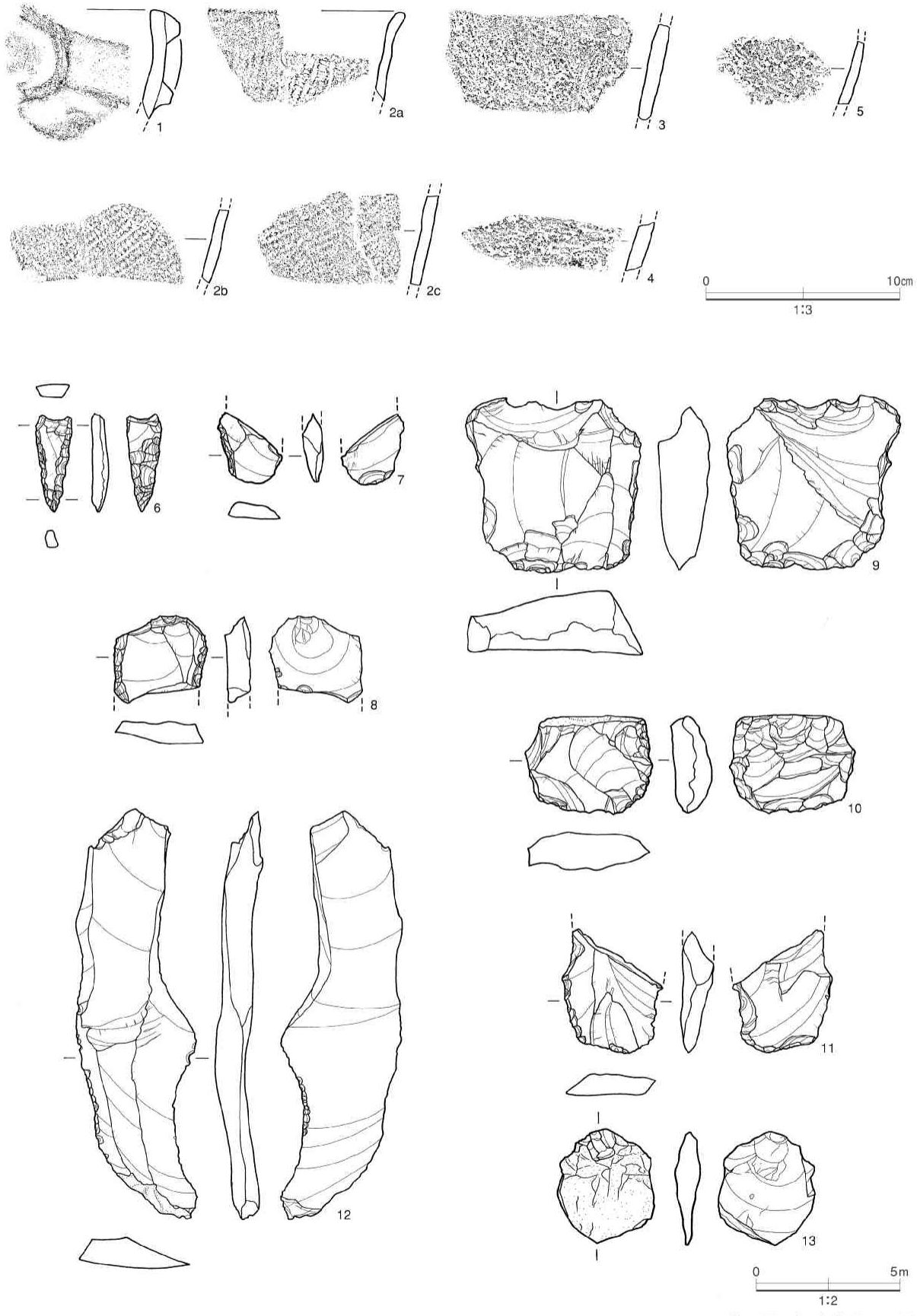
16は敲石である。球状の自然礫に、あまり明瞭ではないが加撃による窪みが認められる。

石材であるが、６・７・９～12・14は頁岩、８は石英安山岩、13は玉髄、15・16は凝灰岩製である。なお、出土地点、法量等の詳細については、表２に記載した。

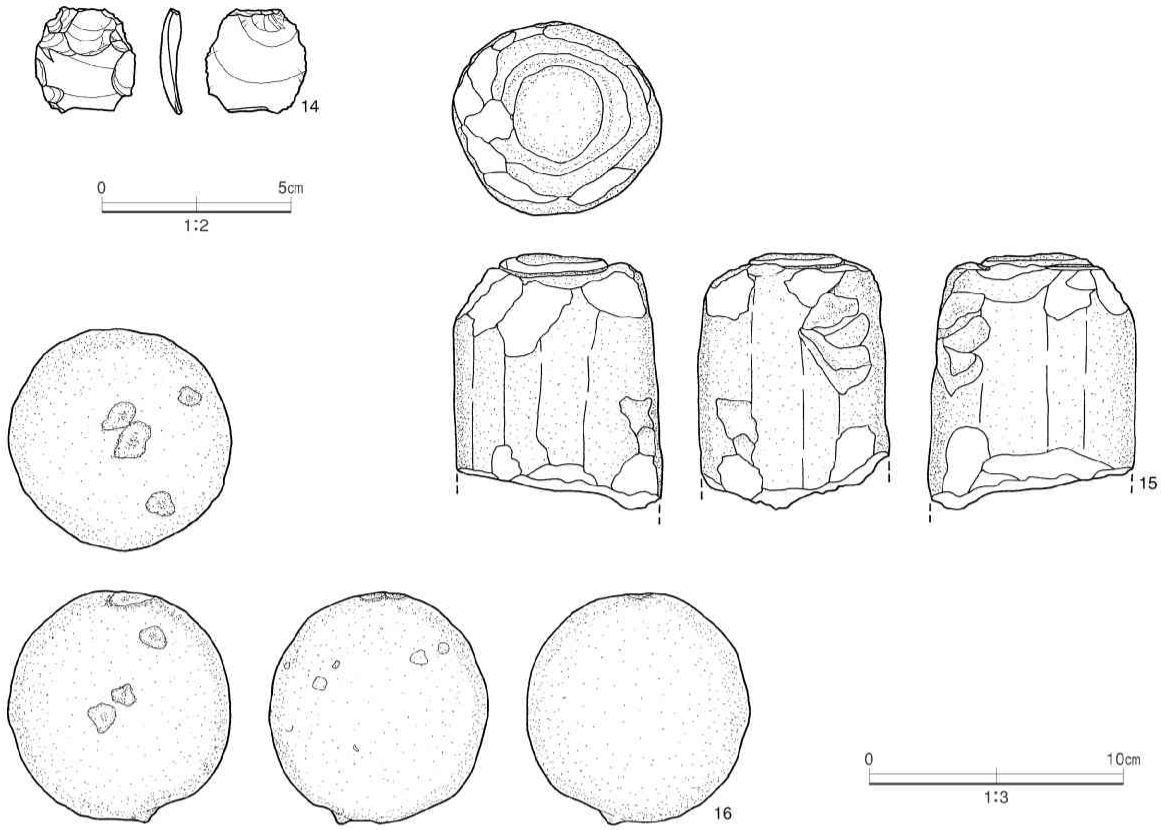


SK 1
1　10Ｙ Ｒ ３／３　暗褐色粘質シルト　しまり強い、粘性やや強い、酸化鉄を含む。
2　10Ｙ Ｒ ２／３　黒褐色粘質シルト　しまり強い、粘性やや強い、径５～20㎜程の礫を少量、酸化鉄を含む。
3　10Ｙ Ｒ ２／３　黒褐色シルト　しまりやや強い、径５～20㎜程の礫を含む。
4　10Ｙ Ｒ ２／２　黒褐色シルト　しまりやや強い、径５～20㎜程の礫を多く含む。
5　10Ｙ Ｒ ５／３　にぶい黄褐色砂　しまり弱い。
SK56
1　10Ｙ Ｒ ２／２　黒褐色シルト　しまり強い、径30～50㎜程の円礫・風化礫・酸化鉄を含む。
2　10Ｙ Ｒ ２／２　黒褐色シルト　しまり強い、径５㎜程の風化礫を微量、酸化鉄を含む。
SK104
1　10Ｙ Ｒ ３／２　黒褐色シルト　しまり強い、部分的に強く熱を受ける、黄褐色風化礫を多く、炭化物・焼土ブロックを含む。
2　10Ｙ Ｒ ３／３　暗褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、黄褐色風化礫を多く含む。
3　10Ｙ Ｒ ３／２　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、黄褐色風化礫を多く含む。
SK105
1　10Ｙ Ｒ ２／３　黒褐色シルト　しまり強い、黄褐色風化礫・炭化物を微量ずつ含む。
ＳＫ205
1　10Ｙ Ｒ ２／３　黒褐色シルト　しまり強い、径50～150㎜程の円礫を微量、酸化鉄・炭化物を含む。
SK299
1　10Ｙ Ｒ ２／１　黒色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、酸化鉄・にぶい黄橙色岩粒を少量ずつ含む。
2　10Ｙ Ｒ ３／１　黒褐色シルト　しまり強い、黄褐色風化礫を少量含む。
3　10Ｙ Ｒ ３／１　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、礫を含む。
4　10Ｙ Ｒ ４／３　にぶい黄褐色砂　しまりやや弱い、黒色シルトブロックを含む。
5　10Ｙ Ｒ ３／３　暗褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、黄褐色風化礫を含む。
6　10Ｙ Ｒ ６／３　にぶい黄橙色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、灰白色風化礫を少量含む。
7　10Ｙ Ｒ ２／１　黒色シルト　しまり強い、灰白色風化礫を少量含む。

第６図　縄文時代の遺構



第７図　縄文土器・石器



第８図　縄文時代の遺物（石器・石製品）

表１　縄文土器観察表

番号	図版	写真	器種	部位	時期・型式	地区	遺構・層位 グリッド	器厚 (㎜)	文様	縄文 原体	調整 外面	調整 内面	胎土質 焼成	備考
1	7	28	深鉢	口縁部	大木８ａ	４区		8	Ｓ字状文（隆帯）	不明	不明	不明	粗砂混、良好	
2	7	28	深鉢	口縁～体部	中期後葉	４区	ＴＴ２	6	縄文	ＲＬ		ナデ	砂粒混、良好	破片３片
3	7	28	深鉢	体部	不明	３区	SK104	8		不明		ナデ	砂粒混、良好	
4	7	28	深鉢	体部	不明	３区	SK105	7		不明	不明	不明	砂粒混・雲母・石英、良好	
5	7	28	深鉢	体部	不明	５区	ＴＴ９	5		不明		ナデ	砂粒混、やや不良	

表２　石器・石製品観察表

番号	図版	写真	器種	地区	遺構・層位 グリッド	石材	計測値（㎜） 長さ	幅	厚さ	最大径	重量	破損状況	加工状況
6	7	27	石錐		XO	頁岩	〔29〕	12	5		2.7	基部を破損	両面を二次加工
7	7	27	削器	１区	SK１	頁岩	〔25〕	〔18〕	5		2.7	先端部のみ残存	片面を二次加工
8	7	27	掻器	４区	表土	石英安山岩	〔31〕	32	8		7.6	基部のみ残存	片面を二次加工
9	7	27	削器	６区南	撹乱	頁岩	62	60	20		78.0	完形	両側縁の片面、先端の両面を二次加工
10	7	27	掻器	１区	SK１	頁岩	34.5	44	13		23.2	完形	両面を二次加工
11	7	27	削器	６区南	SP308	頁岩	〔42〕	32	7		11.6	先端部残存	左側縁を二次加工
12	7	27	剥片	４区	SK１	頁岩	142	42	11		55.7	完形	左側縁の片面を二次加工
13	7	27	剥片	１区	SK56	玉髄	36.5	36.5	9		11.9	完形	
14	8	27	剥片	１区	表土	頁岩	28	26	4.4		3.6	完形	
15	8	28	石棒	３区	SX117	凝灰岩	101	82	74	75	667.4	先端部残存	頂部を円環状に整形
16	8	28	敲石	２区	SP72	凝灰岩	91	87	88		552.4	完形	敲打痕

※〔　〕内の数値は、残存長を表わす。出土地点不明のものについては、ＸＯと表記した。

Ⅴ　平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は、４区ＳＭ218、ＳＫ244の２基が検出された。住居跡等の遺構は確認されていない。ＳＭ218は、２個体の土師器甕を横位に埋設しており、合口甕棺の可能性が考えられる。

土器埋設遺構（合口甕棺）

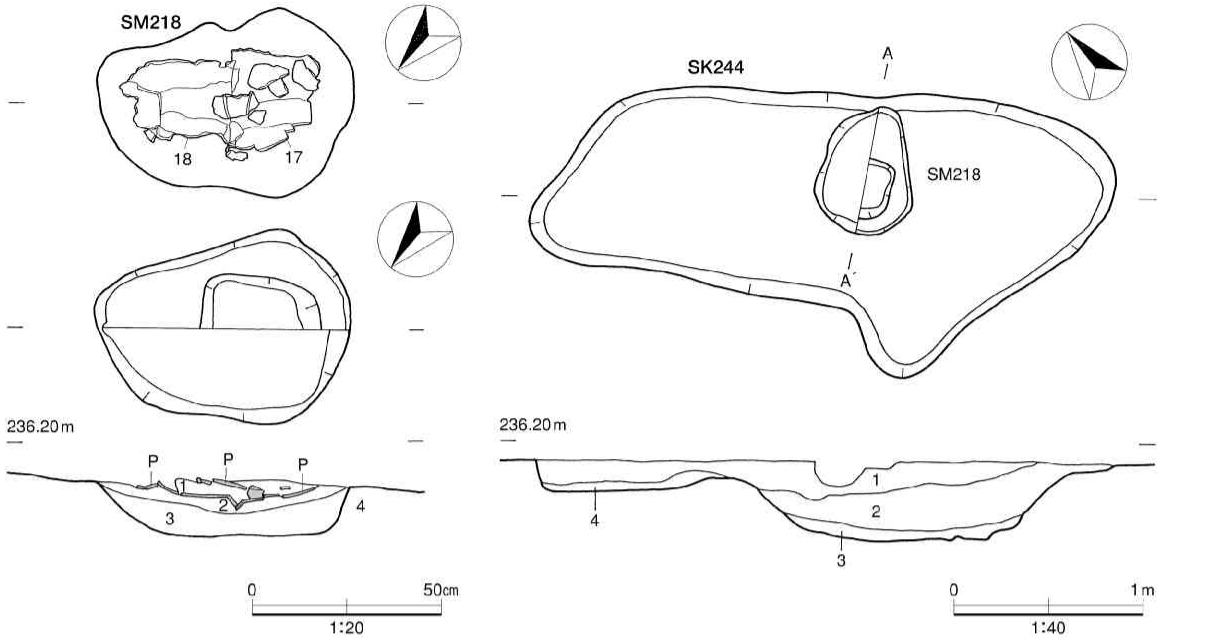
ＳＭ218（第９図）　Ｊ２グリットに位置する。平面形は不整楕円で、大きさは67×50㎝、深さは９㎝である。２個体の土師器甕が口縁を向かい合わせにして横位に埋設されていた。上部を削平されており、土師器の遺存状況は１／３程度である。土器内には、上部の破片が落ち込んでいた。重複関係であるが、ＳＫ244を切る。遺構検出時、ＳＫ244との境界が非常に判別しにくい状況であった。土器内の土壌は、灰黄褐色砂質シルトが主体で、小さい白色礫をやや多く含むのが特徴的である。土器内に、他の遺物は認められなかった。掘り方覆土は、土器内の土壌と類似する。土器直下に膜状に炭化物が認められた。覆土３以下は、ＳＫ244の覆土に相当すると思われる。出土遺物は、第９図17・18の土師器甕である。共に底部を欠くが、遺構上部を削平された際に破壊されて失われたと思われる。外面の体部下半には炭化物の付着があり、煮沸等に使用された痕跡が認められる。17は長胴の甕で、口縁部がくの字状に大きく外反する。口縁部にはロクロナデが施される。体部外面には、全面にハケメが施される。大部上半には、目の粗いハケメが、大部下半には、細かいハケメが施される。内面は、横方向にハケメとヘラナデが施される。18も長胴の甕で、口縁部は受口状となる。ロクロ調整が主体であるが、大部下半にケズリが施される。17に類似する形態の土師器甕は、高畠町南原遺跡ＳＴ24（伊藤1994）、中山町達磨寺遺跡（佐藤・渋谷1986）から出土している。達磨寺遺跡ＳＴ86出土土器は、８世紀第４四半期から９世紀第１四半期に位置づけられており（阿部・水戸1999）、この時期に相当すると推定される。

ＳＫ244（第９図）　Ｊ１・Ｊ２グリットに位置する。平面形は不整楕円形で、大きさは312×150㎝、深さは41㎝である。底面は、西側は平坦であるが、東側が落ち込む。覆土は、黒褐色シルトが主体で、地山由来と思われる白色礫を含み、自然堆積と思われる。重複関係は、ＳＭ218に切られる。遺物の出土はない。

遺構外の出土遺物について述べる。土師器１点、須恵器１点を図示した。第９図19は、土師器鍋の口縁部破片である。３区Ｈ５グリッド、ＳＤ101と102間から出土した。器面は剥落している部分があるが、内外面にロクロナデ調整が施され、内面には輪積痕が残る。年代は、９世紀代と考えられる。20は、須恵器坏の底部付近の体部破片と思われる。５区北端の表土出土である。焼成は良好であるが、胎土に粗砂や小礫を含み、粗雑な印象を受ける。

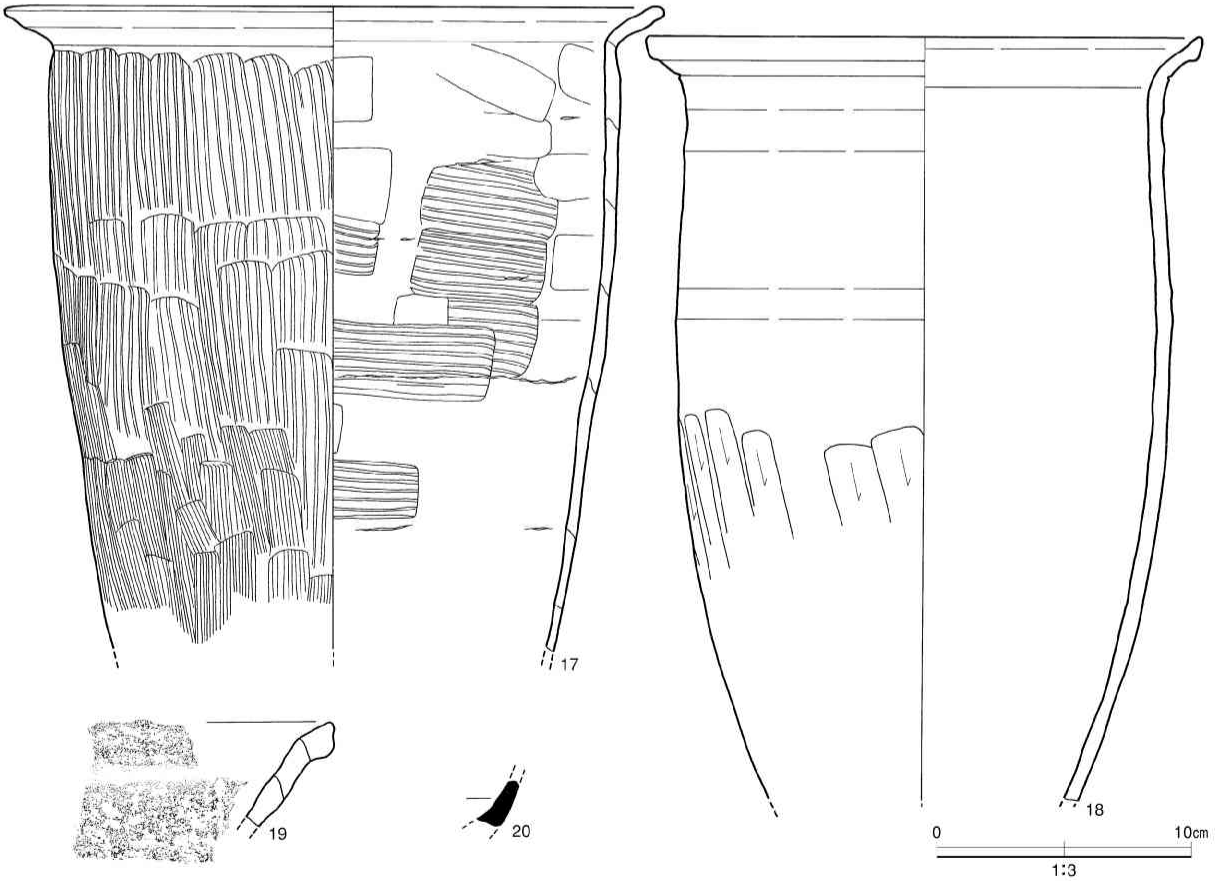
引用文献

伊藤邦弘　1994　『南原遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第２集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
佐藤正俊・渋谷孝雄　1986　『達磨寺遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第104集）山形県教育委員会
阿部明彦・水戸弘美　1999　「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会



SM218
1　10ＹＲ４／２灰黄褐色砂質シルト　粘性やや弱い、白色礫やや多く、炭化物を微量、酸化鉄を含む。
2　10ＹＲ３／２黒褐色シルト　径３～５㎜の白色礫を少量、土器下に炭化物を少量含む、掘り方覆土。
3　10ＹＲ３／２黒褐色シルト　粘性やや強い、径５㎜の白色礫を含む。
4　10ＹＲ３／２黒褐色シルト　しまり強い、径５～10㎜の白色礫をやや多く、黄褐色風化礫を少量含む。

SK244
1　10ＹＲ３／２黒褐色シルト　しまり強い、白色礫を多く、炭化物を微量含む。
2　10ＹＲ３／２黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄を多く、白色礫を含む。
3　10ＹＲ４／１褐灰色シルト　しまり強い、酸化鉄を多く、炭化物を微量含む。
4　10ＹＲ５／３にぶい黄褐色シルト　しまり強い、白色礫含む。



第９図　４区　SM218・SK244・土師器・須恵器

表３　須恵器・土師器観察表

番号	図版	写真	種類・器種	地区	遺構・層位 グリッド	計測値（㎜） 口径	器高	器厚	調整・その他	胎土・焼成
17	9	28	土師器・甕	4区	SM218	(260)	〔285〕	5	(内外) ロクロ（口縁部)、ハケメ（体部）	粗砂混・良好
18	9	28	土師器・甕	4区	SM218	(220)	〔300〕	6.5	(外) ロクロ→ケズリ・(内) ロクロ　体部下半に炭化物付着	粗砂混・やや不良
19	9	28	土師器・鍋	3区	H５			8	(内外) ロクロ　SD101とSD102間から出土	砂粒混・良好
20	9	28	須恵器・坏	5区	表土			7	(内外) ロクロ	礫・砂粒混・良好

※（　）内の数値は推定復元値、〔　〕内の数値は、残存長を表わす

Ⅵ　中世・近世の遺構と遺物

1　概　　要

中世・近世の遺構は、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、性格不明遺構が検出された。掘立柱建物跡は、合計22棟検出された。遺跡の概要で前述したように、掘立柱建物跡の分布地点には、４ヶ所のまとまりがあることが確認された（遺構配置図については、第５図参照)。内訳であるが、１区と６区南の建物群には８棟（ＳＢ20ａ・20ｂ・42・50・80・272・327・328）が検出された（第10図)。この建物のまとまりを、仮称Ａ建物群としておく。この中で、ＳＢ20ａ・20ｂ・50・328の４棟は、柱穴底面に礎板を据えて柱を立てた礎板建物跡である。礎板建物跡は、この建物群だけに確認される。２区・４区南側・６区北の建物群では10棟（ＳＢ61・62・66・119・78・79・99・100・207・247）が検出された（第11図)。これらをＢ建物群とする。この建物群は、２区のＳＤ９の内側や近辺などの同じ地点に、繰り返し建て替えられている。１区の建物群と比較して、建物や柱穴の規模が小形である。４区北側には２棟（ＳＢ241・246）が検出された（第12図)。Ｃ建物群とする。一時的な建物跡と考えられる。５区北西に２棟（ＳＢ226・245)が検出された(第12図)。Ｄ建物群とする。調査区外に建物群が広がると考えられる。これらの建物群の年代であるが、建物を構成する柱穴内から時期決定が可能な遺物の出土がほとんどなく、他の溝跡などの遺構内からは、産地不明の中世と考えられる瓷器系陶器が出土している。逆に、遺構内からは近世陶磁器の出土は認められない。この建物群や付随する溝跡は、中世に属するものが大半である可能性がある。なお、建物群の年代及び変遷についての考察は、Ⅷ章で述べる。

建　物　群

2　掘立柱建物跡

Ａ建物群

ＳＢ20ａ（第13・14図青）　１区Ａ１・Ｂ０・Ｂ１・Ｃ１グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行６間、梁行２間で、北側から２間目に間仕切りの柱がある。また、北西隅１間分を欠く庇が西側１面に付く。規模は、桁行13.62ｍ（45尺)、梁行6.21ｍ（20.5尺）を測る（１尺＝0.303ｍとして換算)。柱心心間の距離は、桁で4.2・５・８・8.5尺が確認されるが、８尺が主である。梁は北側で西から8.5尺－7.5尺、身舎と庇の距離は4.5尺である。主軸方向はＮ－

23.0°－Ｅである。身舎の柱穴は直径約50～100cm、庇および間仕切りの柱穴は直径約20～70cmで、円形・楕円形である。柱穴ｇ・ｉ・ｊ・ｌ・ｕ・ｖの底面には礎板が認められた（但し柱穴ｉの礎盤は、腐食が激しく取り上げができなかった）。柱穴ｑの底面には扁平な自然礫を据えた、礎盤が認められた。また、柱穴ｍには、腐食して芯のみが残った柱材が出土した。検出された柱痕は円形で、直径は、身舎で約20～25cm、庇で直径約15cmである。柱穴掘り方覆土は黒色シルトが主で、底部には白色風化礫を含む灰黄褐色砂が堆積する。重複は、ＳＤ17・ＳＫ90→ＳＢ20ａ→ＳＢ20ｂの関係がある（旧→新）。また、新旧は不明であるが、ＳＢ80とも重複する。出土遺物は木製品として、ＥＢ23から第44図66・67・68の礎板が、ＥＢ25から第45図69の礎板、ＥＢ26から写真図版44－103柱材、ＥＢ28から第48図78の礎板、ＥＢ39から第46図71・72の礎板、ＥＢ40から第46図73・74の礎板が出土した。

礎板

柱材

ＳＢ20ｂ（第13・14図赤）　１区Ｂ１・Ｃ１グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行４間、梁行１間である。規模は桁行9.69m（32尺）、梁行4.85m（16尺）を測る。柱心心間の距離は、柱痕が確認できない箇所が多いが、桁では7.5・7.7尺、梁行は、16尺である。主軸方向はＮ－22.0°－Ｅである。柱穴は直径約34～100cmの円形・楕円形である。柱穴ｂ・ｉの底面から礎板が検出された。検出された柱痕は円形で、直径は約16～25cmである。掘り方覆土は、黒色・黒褐色シルトで、白色風化礫を含む。重複は、ＳＤ17→ＳＢ20ａ→ＳＢ20ｂの関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ80と重複する。出土遺物は、ＥＢ26から第45図70礎板、ＥＢ33から礎板が１個体出土した。

ＳＢ42（第15図）　１区Ｂ１・Ｃ１グリッドに位置する。構造は、建物の柱穴が５基検出されただけであり、桁行４間と推測されるが、梁行は不明である。規模は桁行8.48m（28尺）である。桁の柱心心間の距離は７尺で、主軸方向はＮ－23.0°－Ｅである。柱穴は直径25～50cmの円形が主である。断面で検出された柱痕の直径は、柱穴ｅで約20cmである。掘り方覆土は黒色・黒褐色シルトで、白色風化礫を含む。重複は、ＳＤ17→ＳＢ42の関係がある。遺物は出土していない。

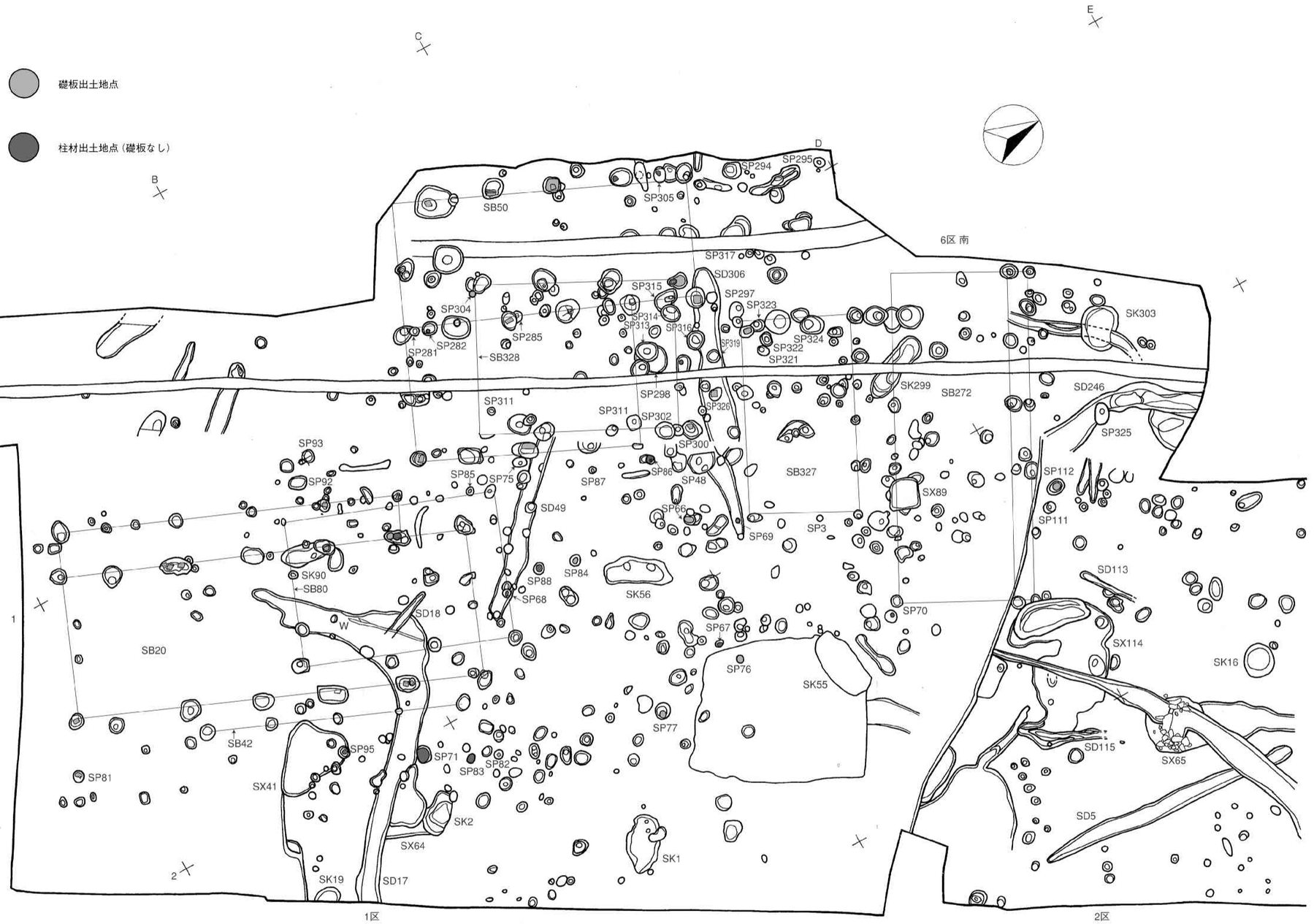
ＳＢ80（第15図）　１区Ｂ１・Ｃ１グリッドに位置する。西側の柱列は、削平のため本来の形状が失なわれている。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は桁行7.21m（23.8尺）、梁行4.85m（16尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で6.5・7.5・８・8.5・8.8尺が確認される。梁は、両側とも16尺である。主軸方向はＮ－22.0°－Ｅである。柱穴は直径約40～55cmの円形・楕円形である。柱穴覆土は黒褐色砂質シルトで、白色岩粒・風化礫等を含む。このうち、柱穴ｄ（ＥＢ96）は、約５～20cmの礫を入れて根固めとしている。柱穴ｃ（ＥＢ97）では、礎盤の用途をなすと思われる、大きさが25×12cm、15×12cmの扁平な角礫、根固石と考えられる５～８cm大の礫を入れている。平面で確認された柱痕跡は、円形で直径約15～20cmである。重複は、ＳＤ17→ＳＢ80の関係がある。また、新旧は不明だが、ＳＢ20ａ・ＳＢ20ｂとも重複する。遺物の出土はない。

根固め

ＳＢ50（第16・17図）　１区・６区南Ｃ０・Ｃ１・Ｄ０・Ｄ１グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行５間、梁行が４間である。北東角の柱穴を確認できなかったため、北東角の桁行１間分が欠けた構造となる。規模は桁行9.85m（32.5尺）、梁行8.33m（27.5尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で5.5・６・７・7.8尺が確認されるが、７尺が主である。梁は、７・7.5・

礎板出土地点

柱材出土地点（礎板なし）

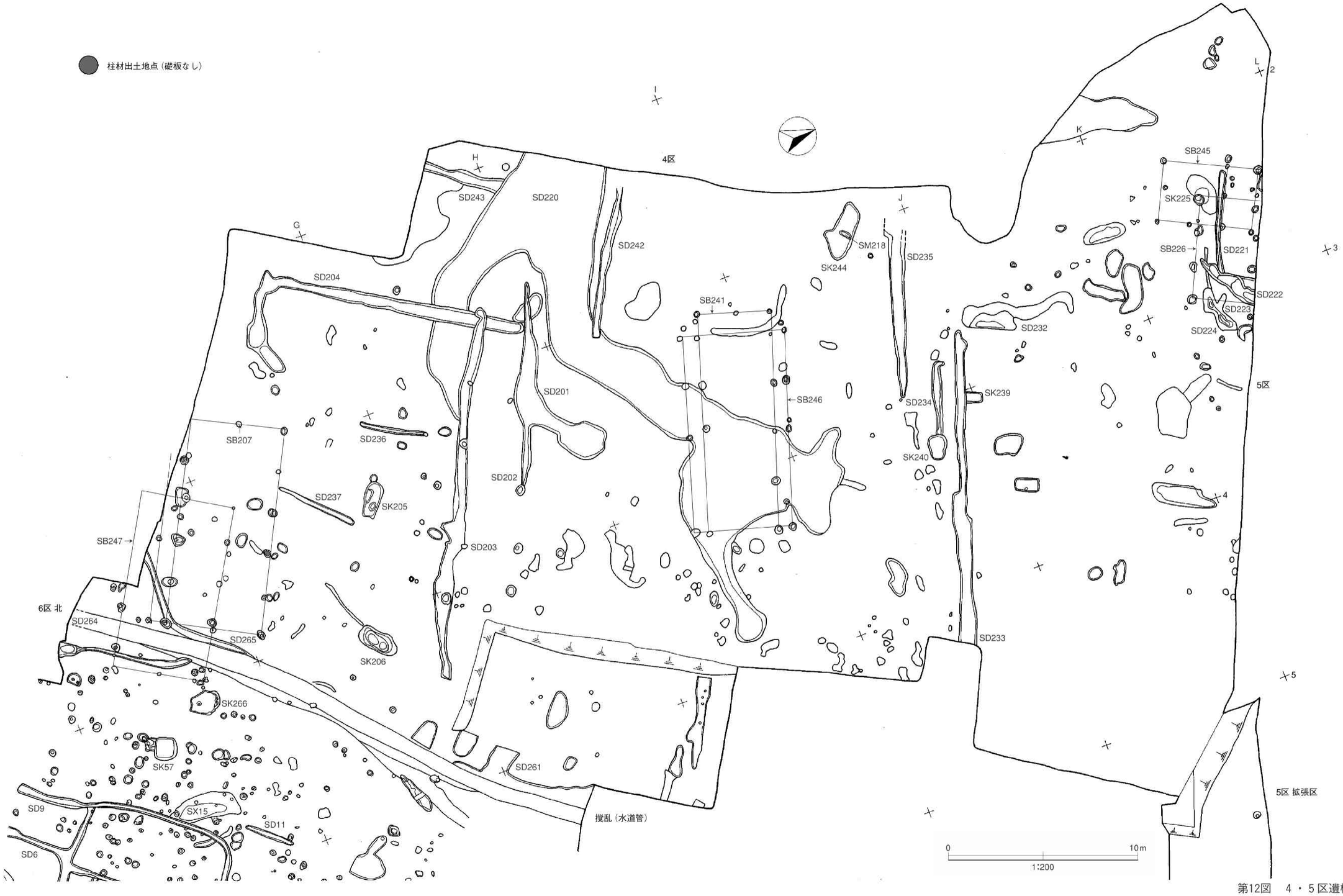


第10図　１区・６区南　遺構配置図

柱材出土地点（礎板なし）

SB207
SB247
SD265
SK206
SD264
SK266
SB99
SD113
SK57
SB100
SX114
SK16
SX15
SD11
SD9
SB62
SB66
SD10
SB119
SD115
SX65
SD6
SP59
SD12
SD8
SD5
SD7
SP72
SP60
SD13
SB79
SD4
SB61
SB78
SD14
6区 北
2区
SD261
搅乱
（水道管）
SD263
SD262
SX109
SK103
SX107
SK103
SX117
SD102
SD101
SK104
SK105
SK106
3区
H
5
G
6
D
4
E
F
5
0
10m
1:150

第11図　2・3・6区北　遺構配置図



第12図　4・5区遺構配置図

13.5尺が確認されるが、７尺が主である。主軸方向はＮ－23.0°－Ｅである。柱穴は直径約40～140cmの円形・楕円形・隅丸方形を呈する。柱穴ｄ・ｆ・Ｊ・ｋ・ｌ・ｏ・ｑ・ｒの底面から礎板が、また柱穴ｑ・ｌ・ｍからは柱材が出土した。柱材は、柱穴ｑ・ｌは角材で、一辺が17～17.9cm、柱穴ｍは丸太材で直径23cmである。掘り方覆土は黒色シルトで、灰黄褐色・にぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む。重複は、ＳＤ49・ＳＤ306・ＳＰ285・ＳＰ298→ＳＢ50→ＳＰ281の関係が認められる。また、新旧は不明であるがＳＢ328とも重複する。出土遺物は、ＥＢ51から第47図75・76の礎板、ＥＢ52から種別不明の木製品、ＥＢ53から第48図77の礎板、ＥＢ284から第50図85・86、第51図89の礎板、ＥＢ286から第43図65の角材の柱材・第51図88の礎板、ＥＢ287から種別不明の木製品、ＥＢ289から第52図90の礎板、ＥＢ290から礎板、ＥＢ291から第52図93の礎板・写真図版44－102の角材の柱材、ＥＢ292から第43図64の丸太材による柱材、ＥＢ307から器種不明の瓷器系陶器破片、産地不明の近世陶器破片が出土した。ただし、ＥＢ307は、いくつかの柱穴が重複し、現代の撹乱で切られるため、出土した遺物がこの柱穴に伴うのか不明である。

角材の柱材

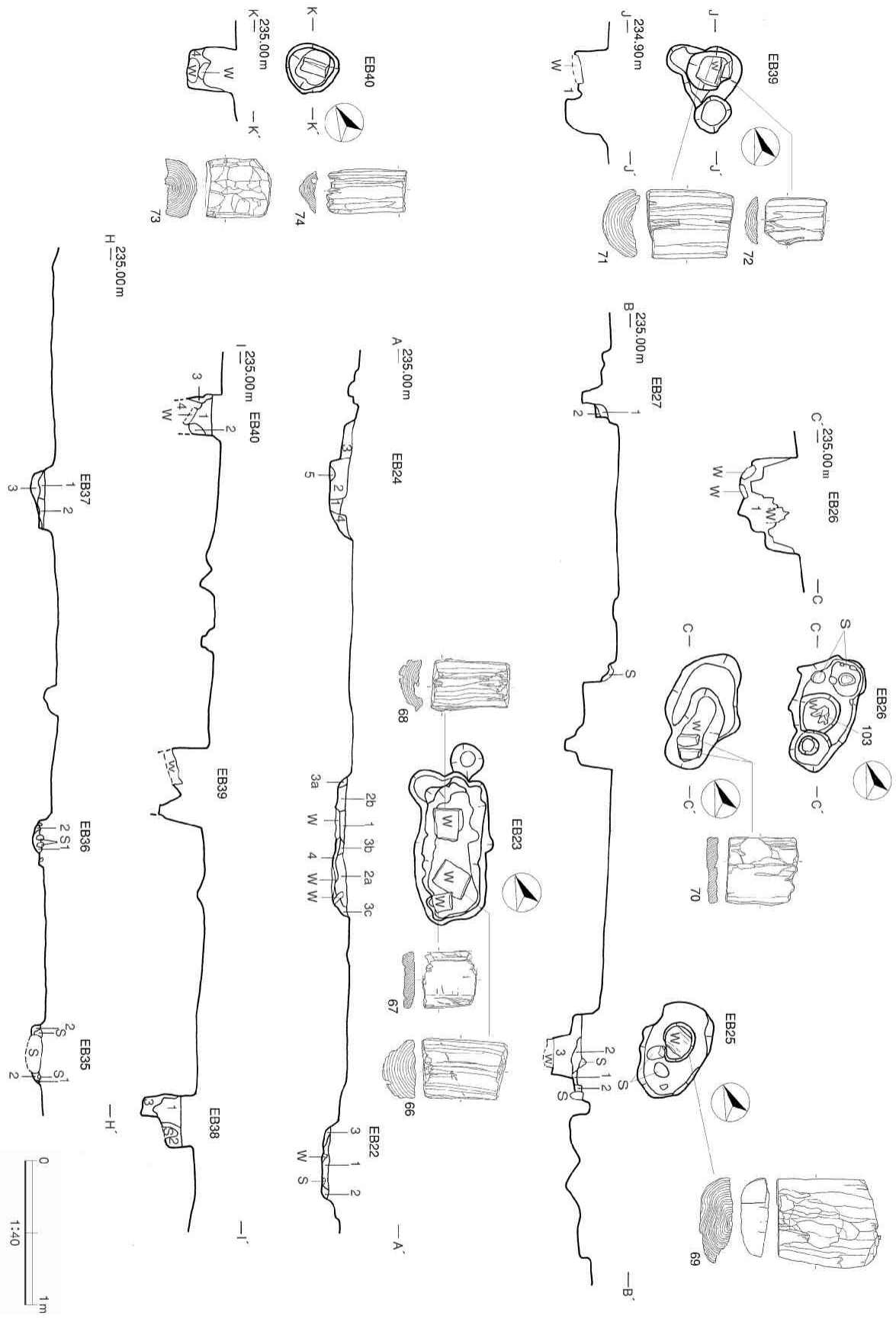
ＳＢ272（第18図）　１区・６区南Ｄ１・Ｄ２・Ｅ１・Ｅ２グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行５間、梁行１間で、庇が北側１面に付く。規模は、桁行10.69m（35.3尺）、梁行4.61m（15.2尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で6.5・７・7.5・7.8尺が確認されるが、6.5・７・7.5尺が主と思われる。梁行は東側で13尺、身舎と庇との距離は2.2尺である。主軸方向はＮ－63.0°－Ｗである。柱穴は直径約26～60cmの円形である。柱痕の直径は16～25cmである。掘り方覆土は黒褐色シルトで、灰黄褐色粗砂･風化礫等を含む。柱穴ｎ（ＥＢ110）底面には、根固用と考えられる、大きさ７～17cmの礫が入る。重複は、ＳＢ272→ＳＸ114の関係がある。遺物の出土はない。

ＳＢ327（第19図）　１区・６区南Ｄ１・Ｄ２グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は、桁行6.52m（21.5尺）、梁行は東側で3.54m（11.7尺）、西側で3.85m（12.7尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で５・7.5・８・8.5・９尺が確認される。主軸方向はＮ－64.0°－Ｗである。柱穴は直径約30～50cmの円形・楕円形である。柱痕は円形で、直径14～18cmである。重複は、ＳＰ297→ＳＢ327の関係が認められる。遺物の出土はない。

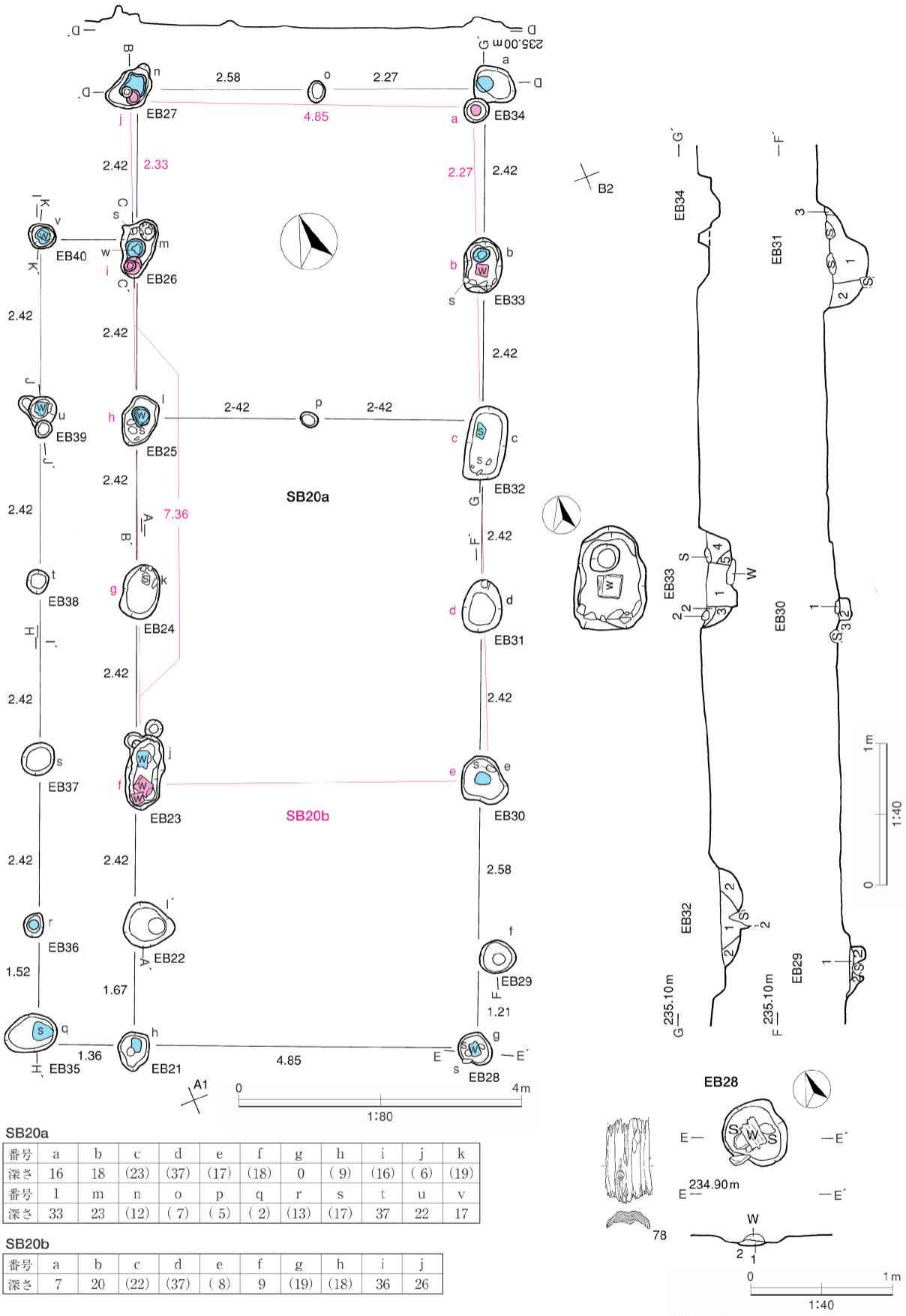
ＳＢ328（第19図）　６区南Ｃ０・Ｃ１・Ｄ０・Ｄ１グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間、梁行２間である。規模は桁行6.36m（21尺）、梁行4.85m（16尺）を測る。柱心心間の距離は、桁では６・７・８尺が確認されるが、７尺が主である。梁は北側で７・９尺、南側で16尺である。主軸方向はＮ－27.0°－Ｅである。柱穴は直径36～80cm程の円形・不正楕円形である。柱痕の直径は、柱穴ｉで丸太材の柱材が残存し、直径20cmである。柱穴ｈの底面からは礎板が検出された。掘り方覆土は黒色・黒褐色シルトが主で、炭化物・褐灰色シルト等を含む。重複は、ＳＰ300→ＳＢ328→ＳＰ302・ＳＰ304の関係がある。また、新旧不明であるが、ＳＢ50と重複する。出土遺物は、ＥＢ276から第51図87の礎板、ＥＢ298から第42図62の丸太材の柱材、ＥＢ309から種別不明の木製品が出土した。

Ｂ建物群

ＳＢ61（第20図）　２区Ｅ３・Ｅ４・Ｆ３・Ｆ４グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間以上、梁行１間で、庇が南側に１面付く。規模は桁行6.66m（22尺）以上、梁行が5.00m（16.5



第13図　1区　SB20 a ・20 b



SB20a

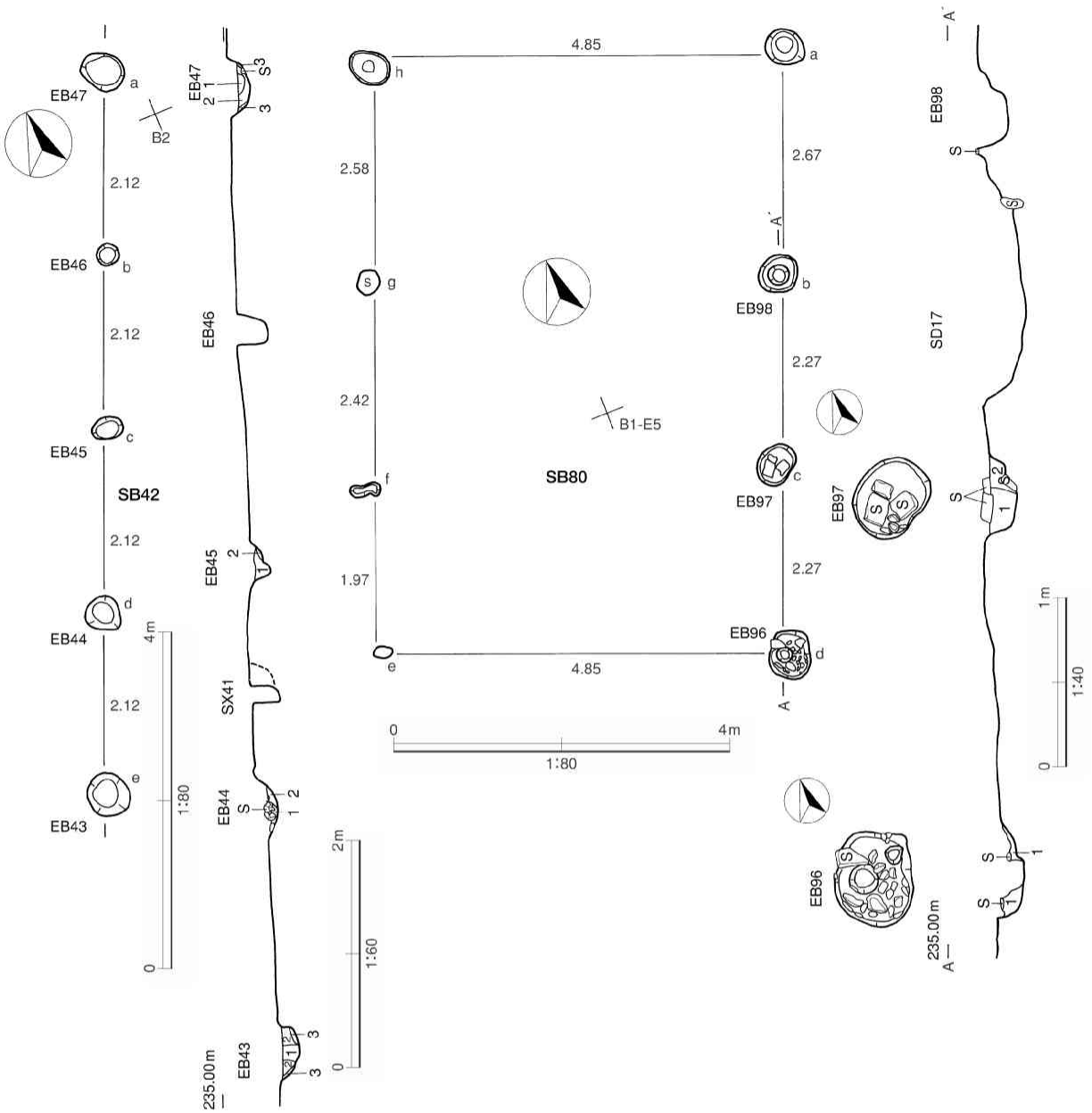
番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
深さ	16	18	(23)	(37)	(17)	(18)	0	(9)	(16)	(6)	(19)
番号	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v
深さ	33	23	(12)	(7)	(5)	(2)	(13)	(17)	37	22	17

SB20b

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	7	20	(22)	(37)	(8)	9	(19)	(18)	36	26

第14図　1区　SB20a・20b

SB20EB22(A-A')
1　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、粗砂を含む。
2　10YR3/1　黒褐色砂質シルト　粘性やや弱い、円礫・粗砂を含む。
3　10YR5/2　灰黄褐色砂　黒色シルトブロックを少量含む。
SB20EB23(A-A')
1　10YR3/1　黒褐色砂質シルト　粘性やや弱い、黒色シルトブロック・白色風化礫を少量ずつ含む。
2a 10YR3/1　黒褐色シルト　粘性やや弱い、白色風化礫を少量、黒色シルトブロックを含む。
2b 10YR2/2　黒褐色砂質シルト　白色風化礫を少量含む。
3a 10YR5/2　灰黄褐色砂　しまりやや弱い。
3b 10YR5/2　灰黄褐色砂　しまりやや弱い。
3c 10YR4/2　灰黄褐色砂　しまりやや強い、粘性弱い、黒色シルトブロックを含む。
4　10YR5/3　にぶい黄褐色砂　黒色シルトブロックを少量含む。
SB20EB24(A-A')
1　10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物・酸化鉄を少量ずつ含む。
2　10YR3/2　黒褐色砂質シルト　しまりやや強い、粘性弱い、酸化鉄・黒褐色シルトブロック少量、径10～50㎜程の礫を含む。
3　10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、径10㎜程の風化礫を多く、酸化鉄を少量含む。
4　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、径30～100㎜程の円礫を多く、炭化物・酸化鉄を少量ずつ含む。
5　10YR3/1　黒褐色シルト　しまり・粘性ともやや強い。
SB20EB25(B-B')
1　10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、径５㎜程の風化礫・炭化物を含む。
2　10YR4/1　褐灰色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、径30～150㎜程の円礫・径５㎜程の風化礫・黒色シルトブロック・酸化鉄を含む。
3　10YR8/1　灰白色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、黒褐色シルトブロック・酸化鉄を少量含む。
SB20EB27(B-B')
1　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、酸化鉄・炭化物を含む。
2　10YR7/2　にぶい黄橙色砂質シルト　しまりやや強い、粘性弱い、酸化鉄を含む。
SB20EB28(E-E')
1　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、径５～30㎜の礫を含む。
2　10YR5/2　灰黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い、径50～100㎜の円礫を含む。
SB20EB29(F-F')
1　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、炭化物を含む。
2　10YR4/2　灰黄褐色砂　しまり強い、礫が混じる、黒褐色シルトを含む。
SB20EB30(F-F')
1　10YR2/1　黒色シルト　しまりやや強い、炭化物を含む、柱痕。
2　10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、砂を少量含む、柱痕。
3　10YR4/1　褐灰色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、礫・粗砂をともに多く含む。
SB20EB31(F-F')
1　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、白色風化礫を少量、炭化物を微量含む。
2　10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、白色風化礫を多く含む。
3　10YR3/1　黒褐色砂質シルト　しまり強い、白色風化礫を少量含む。
SB20EB32(G-G')
1　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、白色風化礫・灰褐色シルトブロック・炭化物・酸化鉄を少量ずつ含む。
2　10YR3/1　黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、円礫・風化礫を多く、酸化鉄を含む。
SB20EB33(G-G')
1　10YR1.7/1　黒色シルト　しまり強い、炭化物を少量、白色風化礫を微量含む。
2　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、円礫・白色風化礫を少量ずつ含む。
3　10YR5/2　灰黄褐色砂　しまり強い、黒色シルトブロックを少量含む。
4　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、円礫・白色風化礫を含む。
5　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、黒色シルトブロックを少量含む（３に似る）。
SB20EB34(G-G')
1　10YR3/1　黒褐色シルト　柱痕覆土。
2　10YR3/1　黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、円礫・白色風化礫をともに多く含む、掘り方覆土。
SB20EB35(H-H')
1　10YR5/3　にぶい黄褐色砂　しまりやや強い、粘性弱い、径２㎜程の粗砂を含む。
2　10YR3/2　黒褐色シルト　しまりやや強い、粘性やや強い、径５～10㎜の礫を含む。
SB20EB36(H-H')
1　10YR2/1　黒色シルト　しまりやや強い、粘性やや強い、径30～50㎜程の礫・炭化物を含む。
2　10YR4/2　灰黄褐色砂　しまり弱い、粘性弱い。
SB20EB37(H-H')
1　10YR1.7/1　黒色シルト　しまり強い、径10㎜程の礫・炭化物を少量ずつ、褐灰色シルトブロックを含む。
2　10YR2/2　黒褐色粘質シルト　しまりやや弱い、粘性やや強い、炭化物を少量、酸化鉄を含む。
3　10YR5/3　にぶい黄褐色砂　しまり弱い、黒色シルトブロックを少量含む。
SB20EB38(I-I')
1　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、炭化物を少量、径５～10㎜の礫を含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト　しまり、粘性やや強い、径５～10㎜の礫を含む。
3　10YR5/2　灰黄褐色砂　しまり弱い、径10～15㎜の礫を含む。
SB20EB39(J-J')
1　10YR6/2　灰黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い。
SB20EB40(I-I'・K-K')
1　10YR5/1　褐灰色シルト　しまり強い、炭化物・酸化鉄を少量ずつ、径５～20㎜の礫を含む。
2　10YR3/2　黒褐色砂質シルト　しまりやや弱い、径５～20㎜の礫を含む。
3　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　しまりやや強い、黒褐色シルトブロックを含む。
4　10YR5/1　褐灰色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い。



SB42

番号	深さ
a	(20)
b	(27)
c	(17)
d	(19)
e	(19)

SB80

番号	深さ
a	13
b	(18)
c	(0)
d	(15)
e	(4)
f	−
g	0
h	11

SB42EB43
1　10ＹＲ３／１　黒褐色シルト　しまりやや強い、粘性やや弱い、砂・小礫、炭化物を微量ずつ含む。
2　10ＹＲ３／１　黒褐色シルト　しまり強い、白色風化礫を少量含む。
3　10ＹＲ６／３　にぶい黄橙色砂　地山。

SB42EB44
1　10ＹＲ３／２　黒褐色シルト　しまり強い、白色風化礫・炭化物を少量含む。
2　10ＹＲ４／１　褐灰色シルト　しまり強い、白色風化礫・礫を含む。

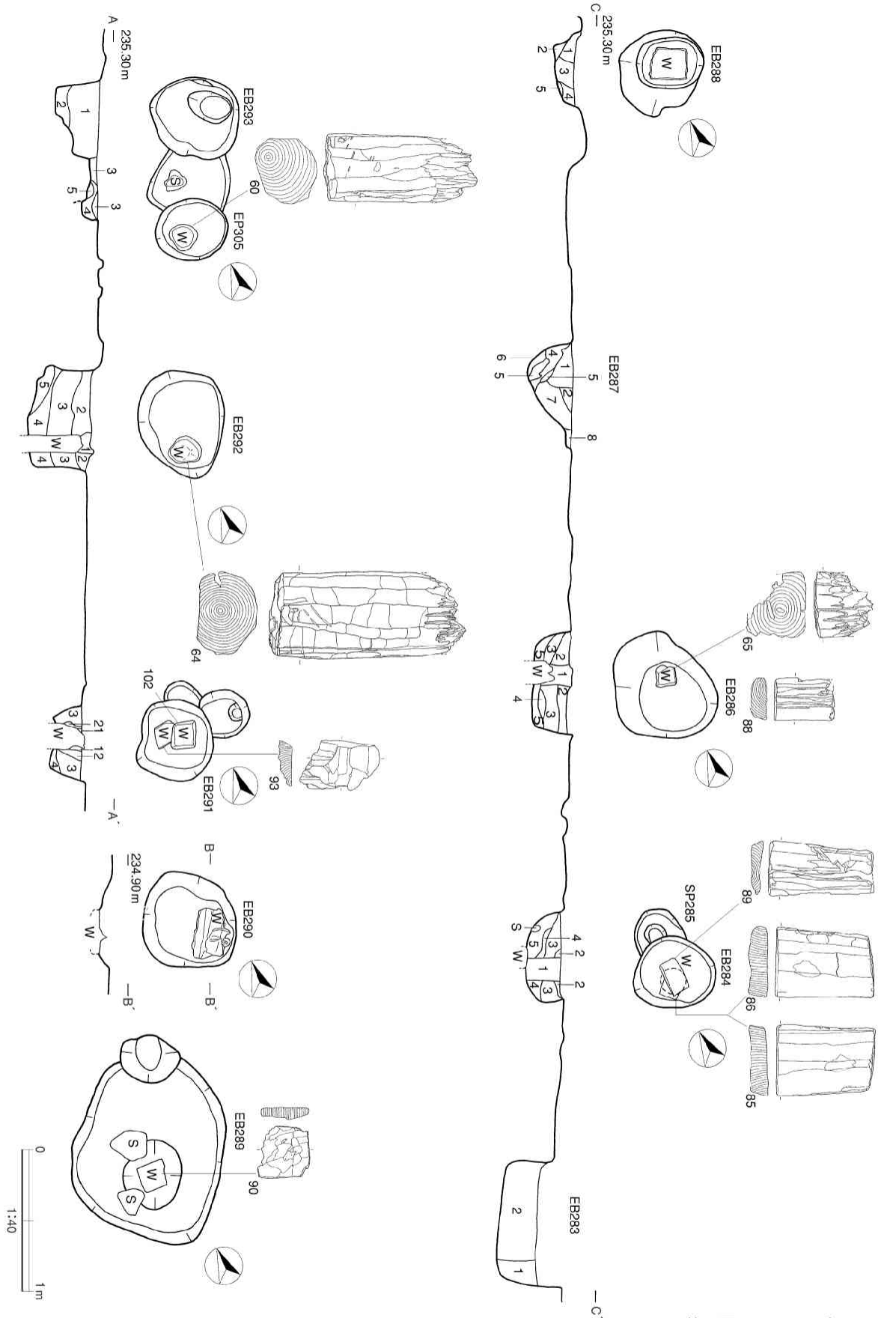
SB42EB45
1　10ＹＲ２／１　黒色シルト　しまり強い、白色風化礫・炭化物を少量ずつ含む。
2　10ＹＲ３／２　黒褐色砂　しまりやや弱い、黒色シルトを少量含む。

SB42EB47
1　10ＹＲ３／１　黒褐色シルト　礫・炭化物を少量ずつ含む。
2　10ＹＲ３／２　黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、粗砂・礫を多く含む。
3　10ＹＲ５／３　にぶい黄褐色砂　しまりやや弱い。

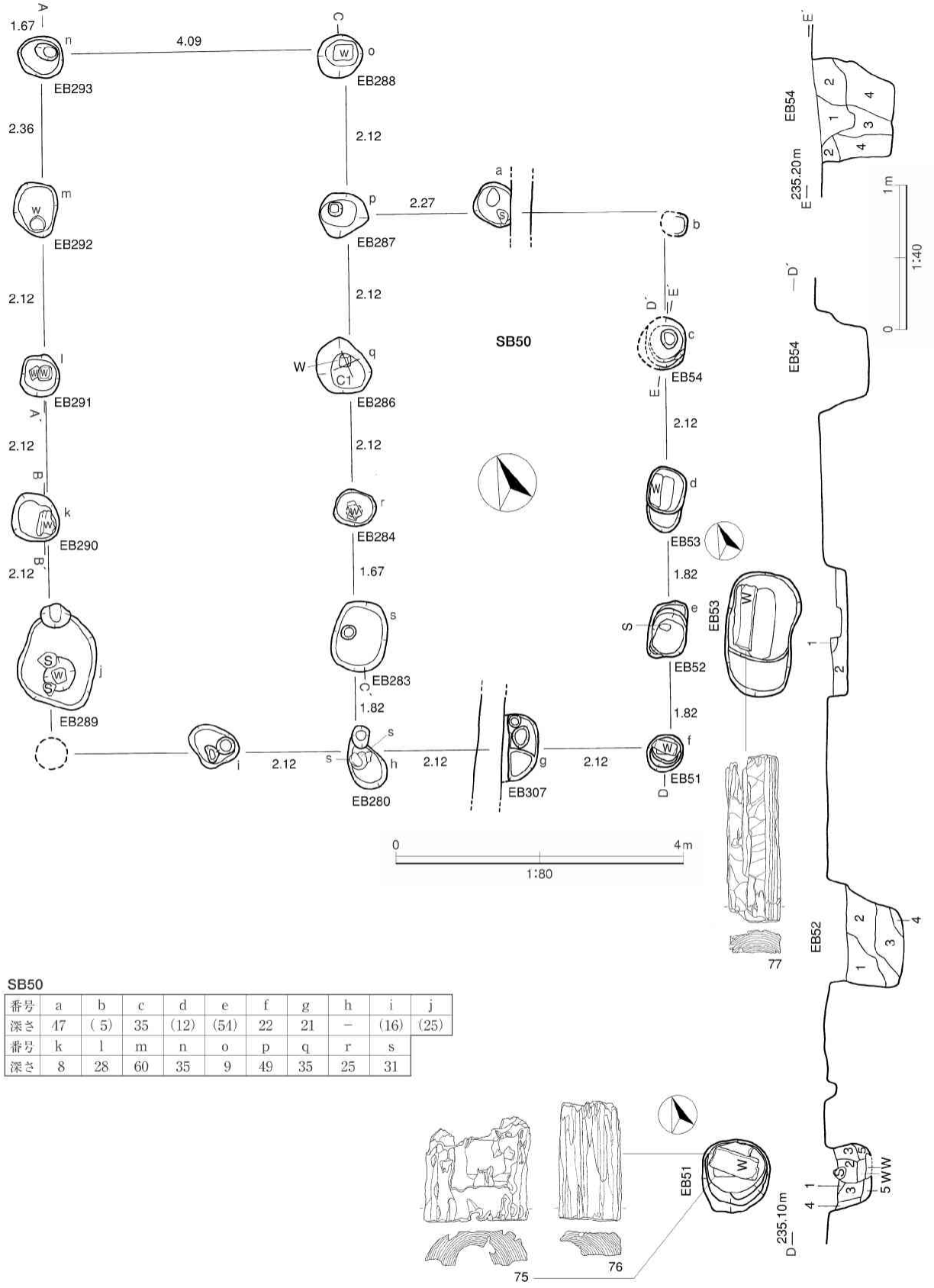
SB80EB96
1　10ＹＲ４／２　灰黄褐砂　しまり強い、径５㎜の小礫を多く含む。

SB80EB97
1　10ＹＲ３／１　黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、白色風化礫を含む。
2　10ＹＲ２／２　黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、白色岩粒・酸化鉄を少量含む。

第15図　１区　SB42・80



第16図　1・6区南　SB50

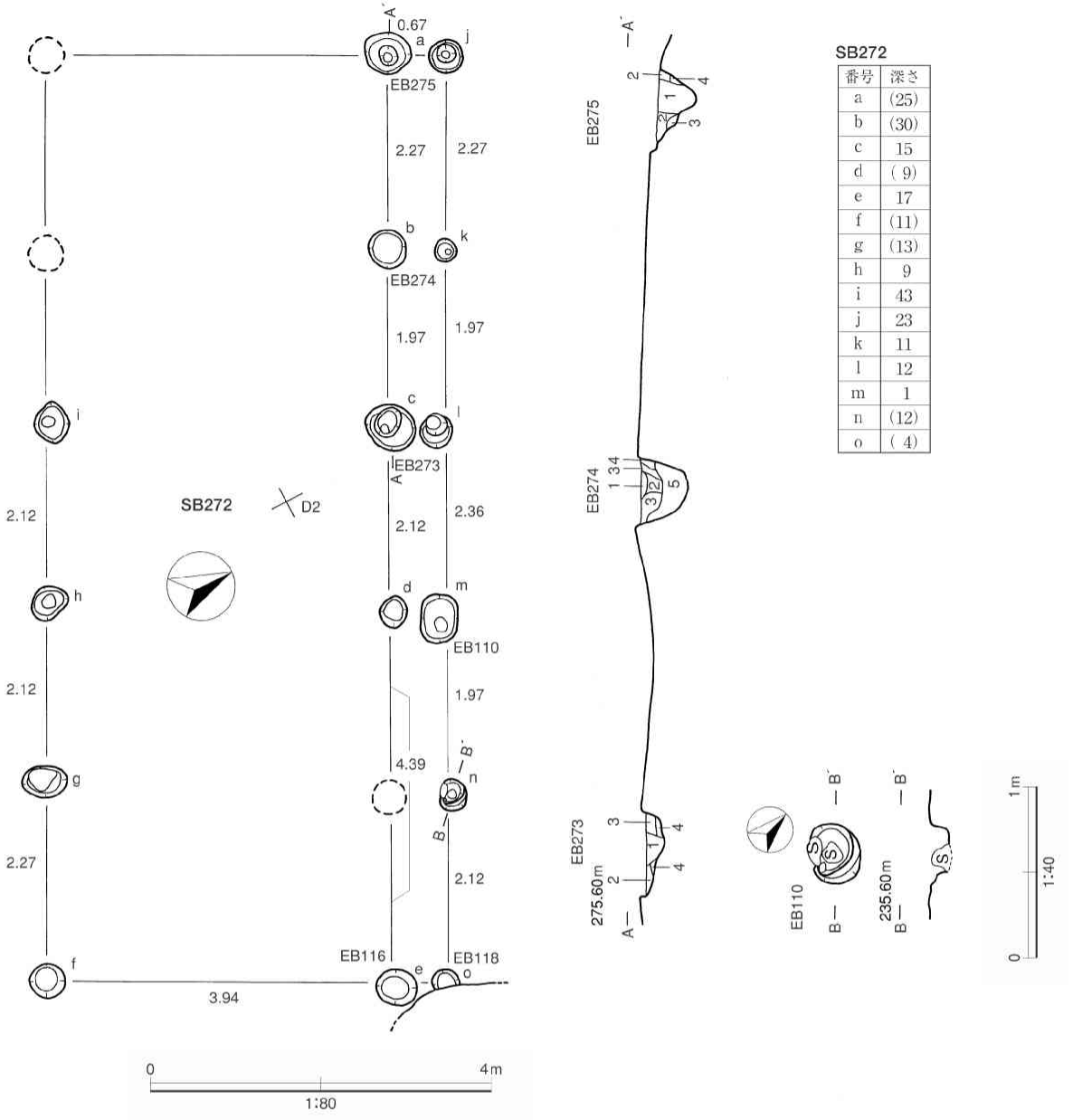


SB50

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
深さ	47	(5)	35	(12)	(54)	22	21	−	(16)	(25)
番号	k	l	m	n	o	p	q	r	s	
深さ	8	28	60	35	9	49	35	25	31	

第17図　1・6区南　SB50

SB50EB51(D-D')
1 10YR3/2　黒褐色砂質シルト　しまり強い、灰黄褐色砂質シルトブロックを含む。
2 10YR2/2　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物を少量、酸化鉄を含む、柱痕。
3 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、灰黄褐色砂質シルトブロックを微量、酸化鉄を含む。
4 10YR3/2　黒褐色シルト　しまり強い、灰黄褐色砂質シルトブロックを微量、酸化鉄を含む。
5 10YR7/2　にぶい黄橙色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、黒色シルトブロックを含む。
SB50EB52(D-D')
1 10YR2/1　黒色シルト　径５㎜程の風化礫・酸化鉄・炭化物・にぶい黄橙色シルトブロックを含む。
2 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、径10㎜程の風化礫・酸化鉄を少量ずつ含む。
3 10YR1.7/1　黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、炭化物・にぶい黄橙色シルトブロックを含む。
4 10YR4/1　褐灰色シルト　しまり強い、粘性やや強い、にぶい黄橙色砂質シルトブロックを含む。
SB50EB53(D-D')
1 10YR1.7/1　黒色シルト　しまり強い、にぶい黄橙色シルトブロックを少量、酸化鉄・炭化物を含む。
2 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、炭化物を多く、酸化鉄・径３㎜程の風化礫を含む。
SB50EB54(E-E')
1 10YR2/1　黒色シルト　炭化物をやや多く、酸化鉄・にぶい黄橙色シルトブロックを少量含む。
2 10YR2/2　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物・酸化鉄・径３㎜程の風化礫を少量ずつ含む。
3 10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物を少量含む。
4 10YR2/2　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物・酸化鉄を少量ずつ含む。
SB50EB283(C-C')
1 10YR3/1　黒褐色シルト　しまりやや弱い、灰黄褐色砂質シルトブロック・酸化鉄を少量ずつ含む。
2 10YR2/1　黒色シルト　灰黄褐色砂質シルトブロックを多く、炭化物を微量含む、掘り方覆土。
SB50EB284(C-C')
1 10YR3/1　黒褐色シルト　炭化物・にぶい黄橙色シルトブロックを少量ずつ含む。
2 10YR4/2　灰黄褐色シルト　しまり強い、黄色風化礫を少量含む。
3 10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物を少量含む。
4 10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、酸化鉄を少量含む。
5 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、酸化鉄・褐灰色砂質シルトブロックを少量ずつ含む。
SB50EB286(C-C')
1 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、炭化物を少量・灰白色風化礫を微量含む。
2 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、灰白色風化礫を少量、褐灰色砂質シルトブロックを含む。
3 10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、灰白色風化礫を微量、灰黄褐色砂質シルトを含む。
4 10YR4/1　褐灰色シルト　粘性やや弱い、黒色シルトブロックを少量含む。
5 10YR7/3　にぶい黄橙色砂　黒色シルトブロック・明黄褐色風化礫を微量ずつ含む。
SB50EB287(C-C')
1 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、炭化物を多く含む。
2 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、褐灰色風化礫を少量含む。
3 10YR5/2　灰黄褐色砂　しまり強い、黒色シルトを層状に含む。
4 10YR5/2　灰黄褐色砂　しまり強い、黒色シルトブロックを含む。
5 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、灰黄褐色砂ブロックを含む。
6 10YR5/2　灰黄褐色砂　しまり強い、灰黄褐色シルトブロックを含む。
7 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、灰白色風化礫を含む。
8 10YR6/2　灰黄褐色砂　小礫を多く含む。
SB50EB288(C-C')
1 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、炭化物・灰黄褐色砂質シルトブロックを含む。
2 10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、灰黄褐色砂質シルトブロックを少量含む。
3 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、灰黄褐色砂質シルトブロックを含む。
4 10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、白色風化礫を含む。
5 10YR6/2　灰黄褐色砂　しまり強い。
SB50EB291(A-A')
1 10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄を微量含む、柱痕、直下から柱材出土。
2 10YR3/1　黒褐色シルト　褐灰色砂ブロックをやや多く、径３㎜の風化礫・酸化鉄を少量ずつ含む。
3 10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、径３～５㎜の風化礫を含む。
4 10YR5/1　褐灰色シルト　しまりやや強い、径10～100㎜程の礫・円礫を多く含む。
SB50EB292(A-A')
1 10YR2/1　黒色砂混じりシルト　しまり強い、粗砂・酸化鉄を少量ずつ含む。
2 10YR5/1　褐灰色シルト　黒褐色シルトブロック・明黄褐色砂ブロック・径30㎜程の風化礫を含む。
3 10YR5/1　褐灰色砂混じりシルト　黒褐色シルトブロック・径５㎜程の風化礫を少量ずつ含む。
4 10YR5/1　褐灰色シルト　しまり強い、黒褐色シルトブロックをやや多く含む。
5 10YR5/1　褐灰色砂混じりシルト　黒褐色シルトブロック・径５㎜程の風化礫を少量ずつ含む。
SB50EB293(A-A')
1 10YR3/1　黒褐色シルト　褐灰色シルトブロックを上部にやや多く、径30～40㎜程の円礫を少量含む。
2 10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、白色風化礫を少量、褐灰色砂ブロックを含む。
3 10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物を少量含む、他の柱穴覆土。
4 10YR3/2　黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐灰色砂質シルトブロックを少量含む、他の柱穴覆土。
5 10YR5/1　褐灰色砂質シルト　しまり非常に強い、粘性やや弱い、黒色シルトブロックを微量含む、他の柱穴覆土。



SB272

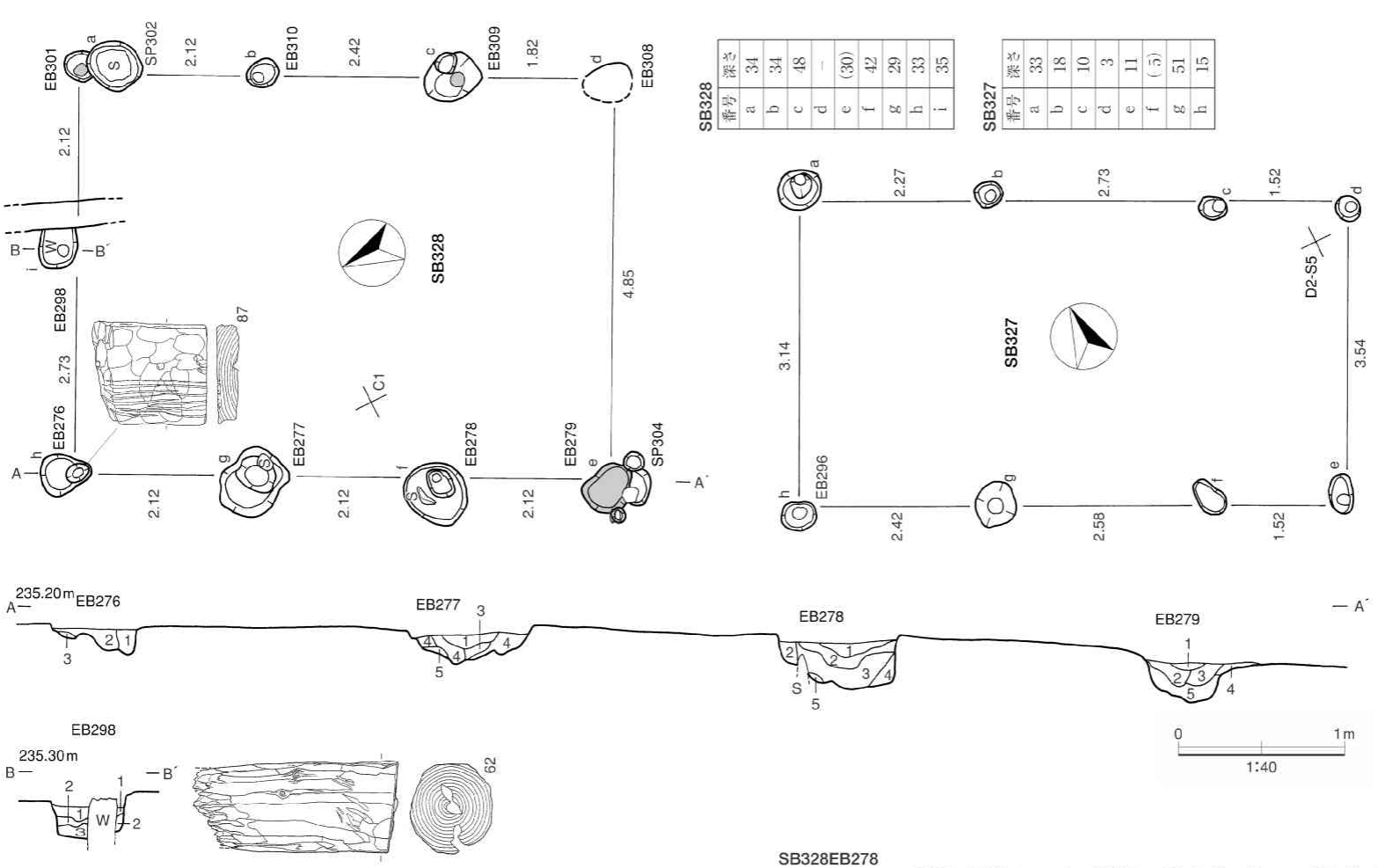
番号	深さ
a	(25)
b	(30)
c	15
d	(9)
e	17
f	(11)
g	(13)
h	9
i	43
j	23
k	11
l	12
m	1
n	(12)
o	(4)

SB272EB273
1　10ＹＲ３／１　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物・酸化鉄を少量ずつ、灰黄褐色シルトブロックを含む、柱痕。
2　10ＹＲ３／１　黒褐色シルト　しまり強い、灰黄褐色シルトブロック・炭化物を少量ずつ、酸化鉄をやや多く含む。
3　10ＹＲ３／１　黒褐色シルト　しまり強い、にぶい黄褐色砂をブロック状に多く含む、酸化鉄を少量含む。
4　10ＹＲ５／２　灰黄褐色砂　粘性弱い、径５㎜の風化礫を微量含む。

SB272EB274
1　10ＹＲ３／２　黒褐色シルト　しまり強い、径３～５㎜の風化礫をやや多く、炭化物を少量含む、柱痕。
2　10ＹＲ３／２　黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、径10㎜の風化礫・灰黄褐色粗砂をブロック状に含む、柱痕。
3　10ＹＲ３／２　黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、灰黄褐色粗砂をブロック状に多く、風化礫を微量含む。
4　10ＹＲ５／２　灰黄褐色粗砂　しまり強い、粘性弱い、径５㎜の風化礫を少量含む。
5　10ＹＲ５／２　灰黄褐色粗砂　しまり強い、粘性弱い、径５～20㎜の風化礫を多く含む。

SB272EB275
1　10ＹＲ２／１　黒色シルト　しまり強い、径３～10㎜の風化礫を全体に、酸化鉄・炭化物を少量ずつ含む、柱痕。
2　10ＹＲ２／１　黒色シルト　しまり強い、径３～10㎜の風化礫を全体に、酸化鉄・炭化物を少量ずつ含む、柱痕。
3　10ＹＲ４／１　褐灰色シルト　しまり強い、黒色シルトブロックを少量含む。
4　10ＹＲ５／２　灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性弱い、黄褐色シルトブロックを少量含む、地山。

第18図　６区　SB272



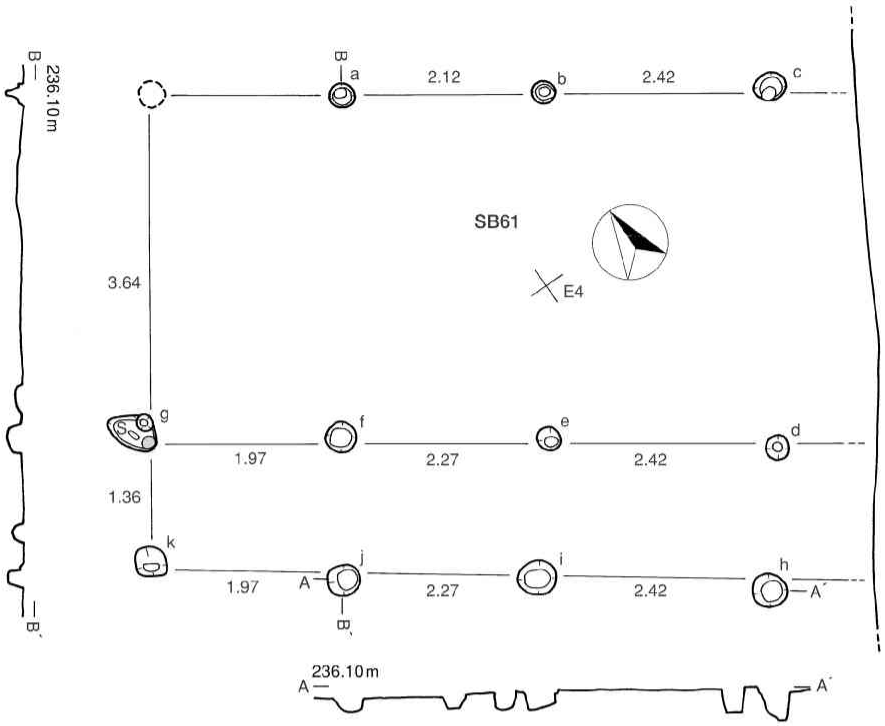
第19図　6区　SB327・328

SB328EB276
1　10YR3/1　黒褐色砂混じりシルト　径20㎜の風化礫・炭化物・褐灰色シルトを少量含む。
2　10YR3/1　黒褐色砂混じりシルト　径30㎜の風化礫・炭化物・褐灰色シルトをやや多く含む。
3　10YR5/2　灰黄褐色砂　しまり中程度、粘性弱い。

SB328EB277
1　10YR2/1　黒色シルト　炭化柱材出土、径15㎜の風化礫・灰黄褐色シルト・酸化鉄を少量含む。
2　10YR6/2　灰黄褐色砂混じりシルト　径10㎜の風化礫・黒色シルトを少量含む。
3　10YR3/1　黒褐色砂混じりシルト　炭化物・灰黄褐色砂質シルトを少量ずつ含む。
4　10YR6/2　灰黄褐色シルト　炭化物をやや多く、黒色シルト・酸化鉄を少量ずつ含む。
5　10YR6/2　灰黄褐色シルト　しまり強い、酸化鉄を少量含む。

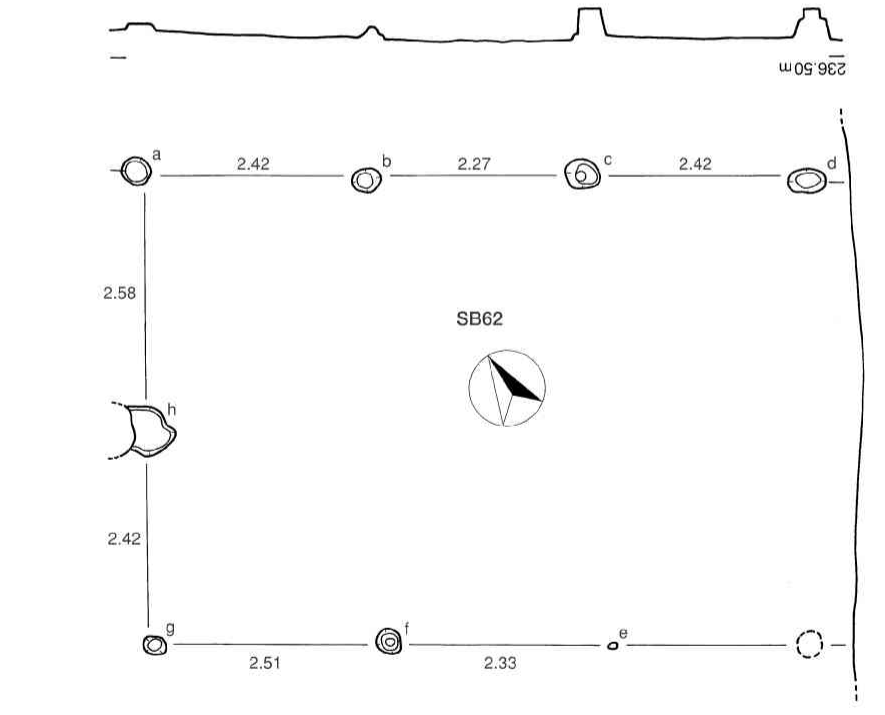
SB328EB278
1　10YR3/1　黒褐色砂混じりシルト　炭化物・褐灰色砂・径7㎜の風化礫・酸化鉄を少量含む。
2　10YR6/1　褐灰色砂　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を少量含む。
3　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、炭化物・酸化鉄を少量ずつ含む。
4　10YR2/1　黒色シルト　炭化物・径10㎜の風化礫を微量ずつ含む。
5　10YR6/1　褐灰色砂　しまり中程度、粘性弱い。

SB328EB279
1　10YR3/1　黒褐色シルト　灰黄褐色砂質シルトを多く、酸化鉄・炭化物を微量含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト　灰黄褐色砂質シルトを少量、酸化鉄・炭化物を微量含む。
3　10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、酸化鉄・炭化物を微量ずつ含む。
4　10YR4/2　灰黄褐色砂まじりシルト　黒褐色シルトブロック・酸化鉄を微量ずつ含む。
5　10YR5/1　褐灰色砂　しまり強い、粘性弱い。



SB61

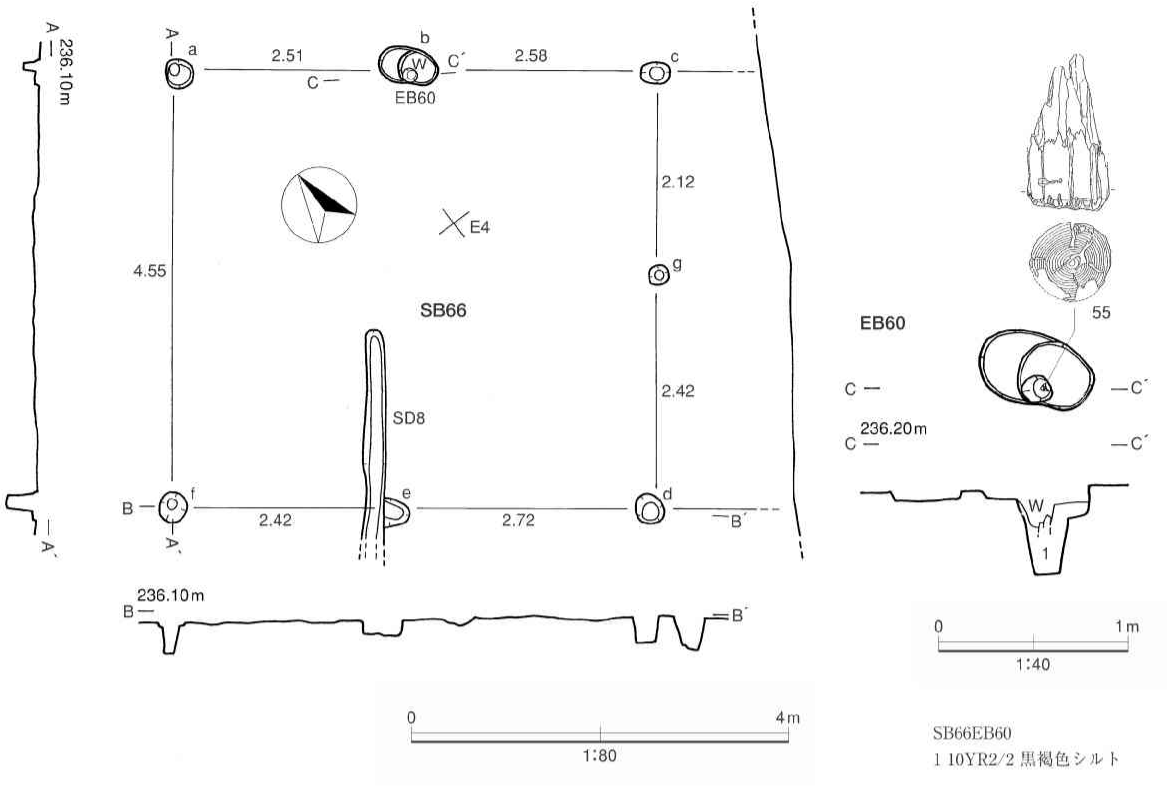
番号	深さ
a	20
b	–
c	17
d	(15)
e	(21)
f	(17)
g	31
h	(36)
i	(21)
j	(18)
k	(18)



SB62

番号	深さ
a	(8)
b	(13)
c	34
d	(34)
e	–
f	12
g	(16)
h	–

第20図　2区　SB61・62



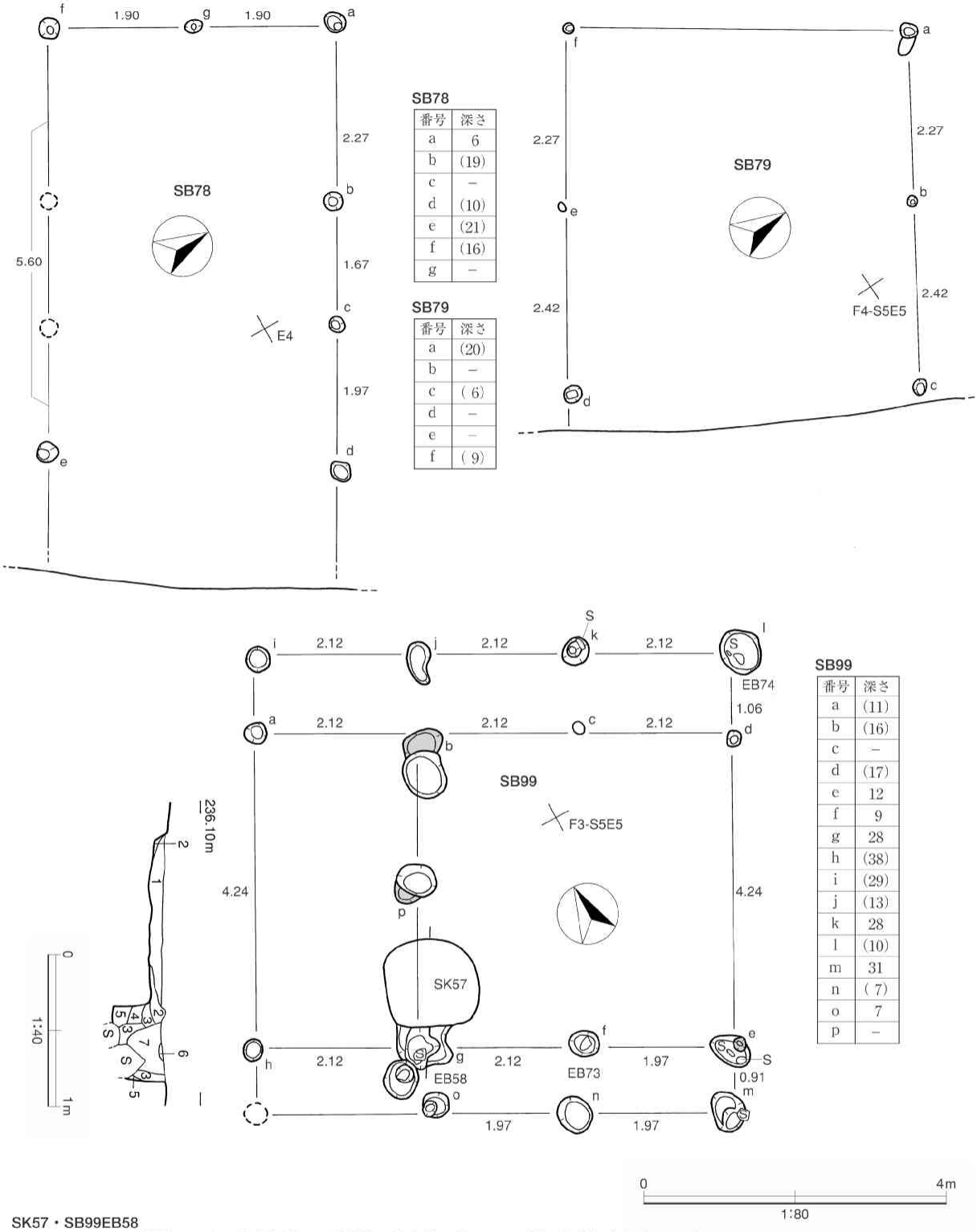
SB66

番号	深さ
a	17
b	(48)
c	(17)
d	(30)
e	(16)
f	(34)
g	(15)

SB67

番号	深さ
a	(13)
b	(16)
c	6
d	(17)
e	−
f	(13)
g	(7)
h	(11)
i	−
j	(13)
k	−
l	(24)
m	(10)

第21図　2区　SB66・119



SB78

番号	深さ
a	6
b	(19)
c	–
d	(10)
e	(21)
f	(16)
g	–

SB79

番号	深さ
a	(20)
b	–
c	(6)
d	–
e	–
f	(9)

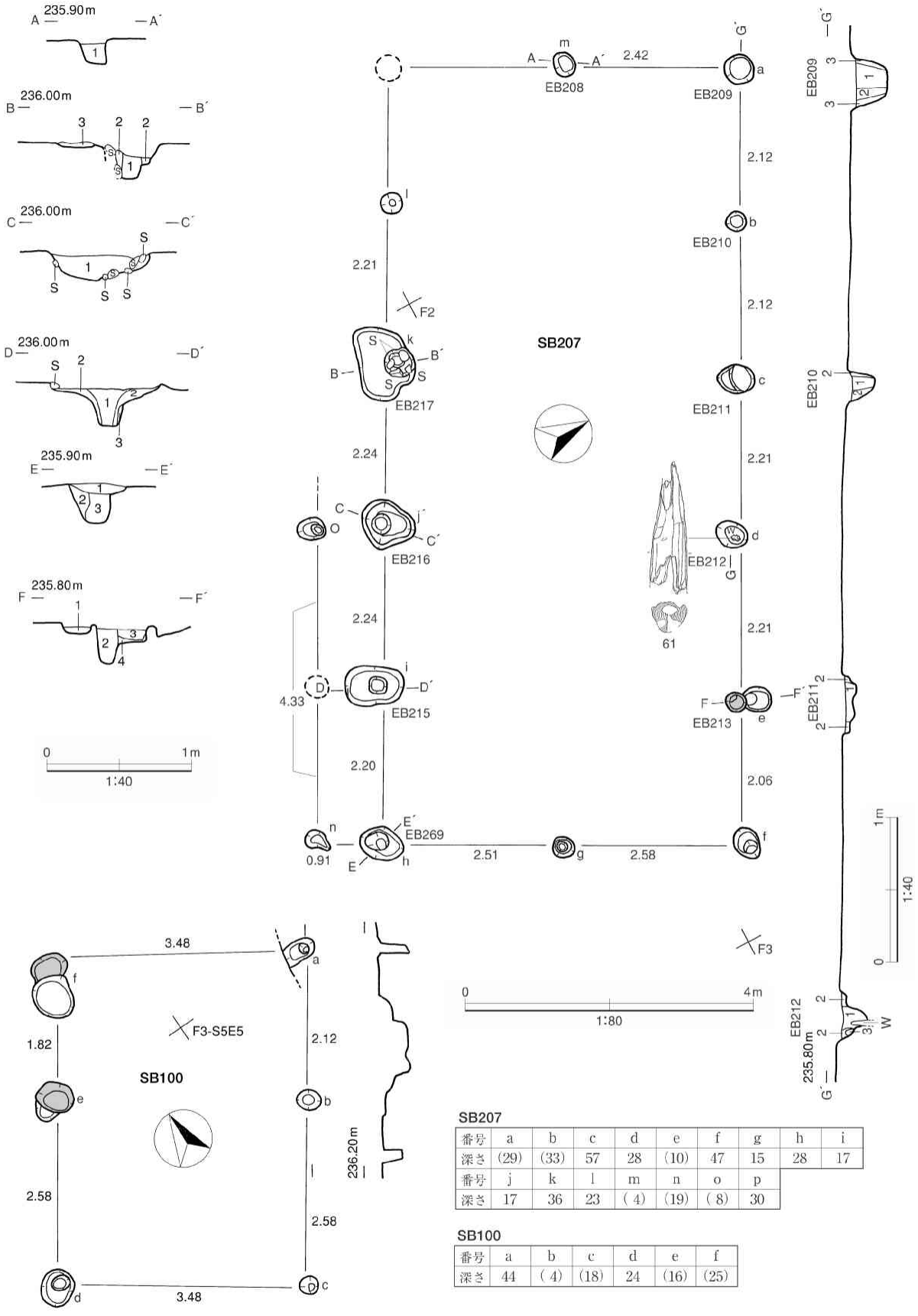
SB99

番号	深さ
a	(11)
b	(16)
c	–
d	(17)
e	12
f	9
g	28
h	(38)
i	(29)
j	(13)
k	28
l	(10)
m	31
n	(7)
o	7
p	–

SK57・SB99EB58

1　10Ｙ Ｒ 2／2　黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・炭化物・径１～10㎜程の砂礫を含む（ＳＫ57）。
2　10Ｙ Ｒ 5／3　にぶい黄褐色砂質シルト　しまりやや弱い、粘性やや弱い、酸化鉄を含む。
3　10Ｙ Ｒ 4／1　褐灰色シルト　しまり強い、酸化鉄を含む。
4　10Ｙ Ｒ 6／2　灰黄褐色シルト　しまりやや強い、酸化鉄を含む、地山。
5　10Ｙ Ｒ 5／3　にぶい黄褐色砂質シルト　しまりやや弱い、粘性弱い。
6　10Ｙ Ｒ 3／2　黒褐色シルト　しまり強い、白色岩粒をやや多く、酸化鉄を含む。
7　10Ｙ Ｒ 3／1　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物を微量、白色岩粒を含む。

第22図　２区　SB78・79・99



SB207

番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
深さ	(29)	(33)	57	28	(10)	47	15	28	17
番号	j	k	l	m	n	o	p		
深さ	17	36	23	(4)	(19)	(8)	30		

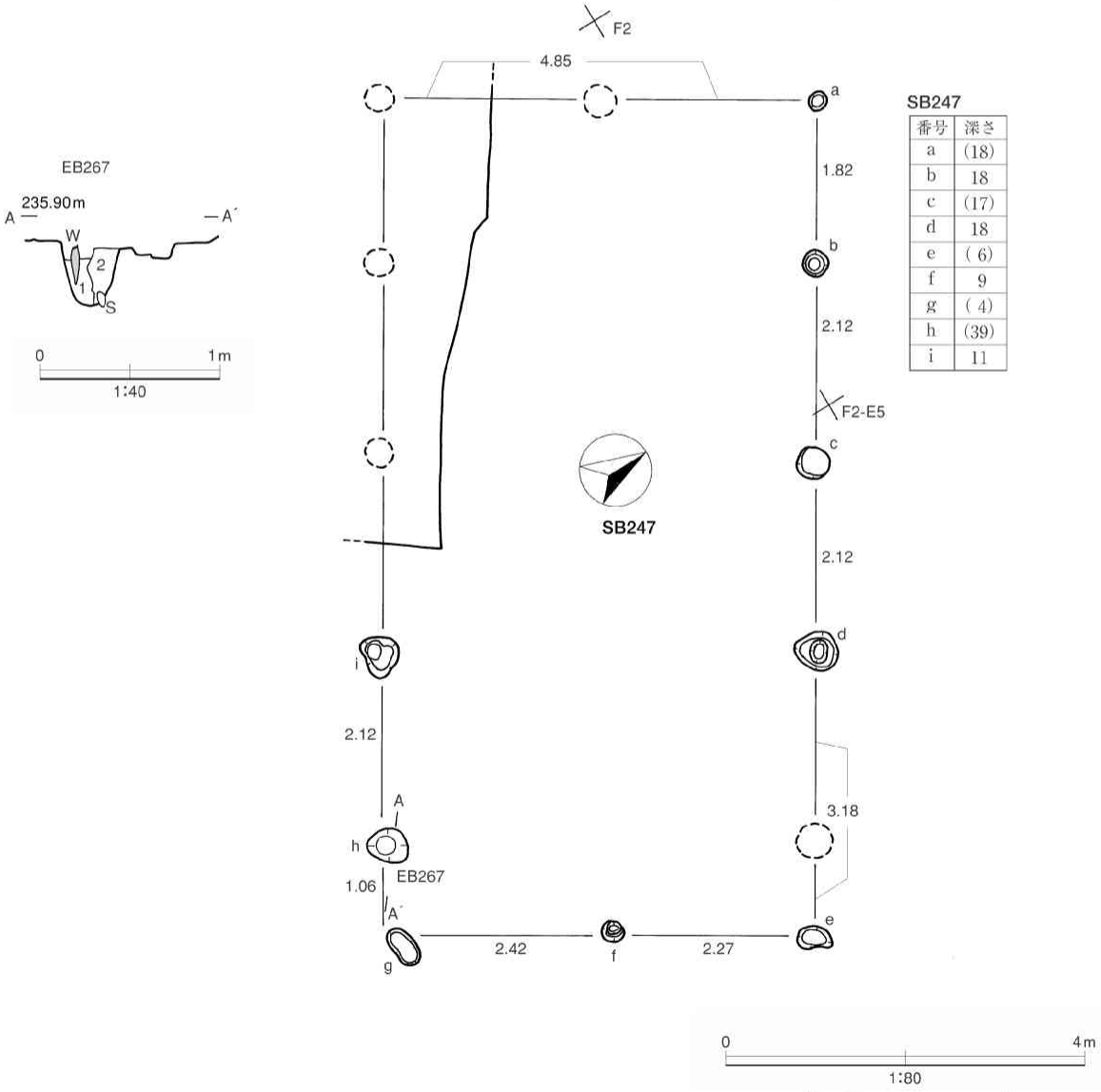
SB100

番号	a	b	c	d	e	f
深さ	44	(4)	(18)	24	(16)	(25)

第23図　2区　SB100・4・6区北　SB207

SB207EB208
1　10ＹＲ３/３　暗褐色シルト　酸化鉄・炭化物・径３～20㎜程の礫を含む。
SB207EB209
1　10ＹＲ３/２　黒褐色シルト　径１～５㎜程の砂礫・酸化鉄・炭化物を含む。
2　10ＹＲ３/２　黒褐色シルト　径１～５㎜程の礫・酸化鉄を含む。
3　10ＹＲ４/３　にぶい黄褐色シルト　しまり強い、酸化鉄を含む。
SB207EB210
1　10ＹＲ２/２　黒褐色シルト　径５㎜程の礫・酸化鉄を含む。
2　10ＹＲ４/３　にぶい黄褐色砂混じりシルト　酸化鉄・礫を多く含む。
SB207EB211
1　10ＹＲ３/１　黒褐色シルト　径１～10㎜程の砂礫・酸化鉄を含む。
2　10ＹＲ４/３　にぶい黄褐色シルト　径１～10㎜程の砂礫・酸化鉄を含む。
SB207EB212
1　10ＹＲ３/１　黒褐色シルト　しまり・粘性とも強い、酸化鉄を含む。
2　10ＹＲ２/２　黒褐色シルト　しまり・粘性とも強い、礫・酸化鉄を含む。
3　10ＹＲ５/１　褐灰色シルト　黒褐色シルトを少量、円礫を含む。
SB207EB213
1　10ＹＲ３/２　黒褐色シルト　礫を少量、酸化鉄・灰黄褐色ｼﾙﾄを含む。
2　10ＹＲ２/３　黒褐色シルト　径３～10㎜程の礫・酸化鉄を含む、他の柱穴。
3　10ＹＲ５/２　灰黄褐色シルト　しまり・粘性とも強い、酸化鉄を含む。
4　10ＹＲ３/２　黒褐色シルト　礫を少量、酸化鉄・灰黄褐色ｼﾙﾄを含む、他の柱穴。

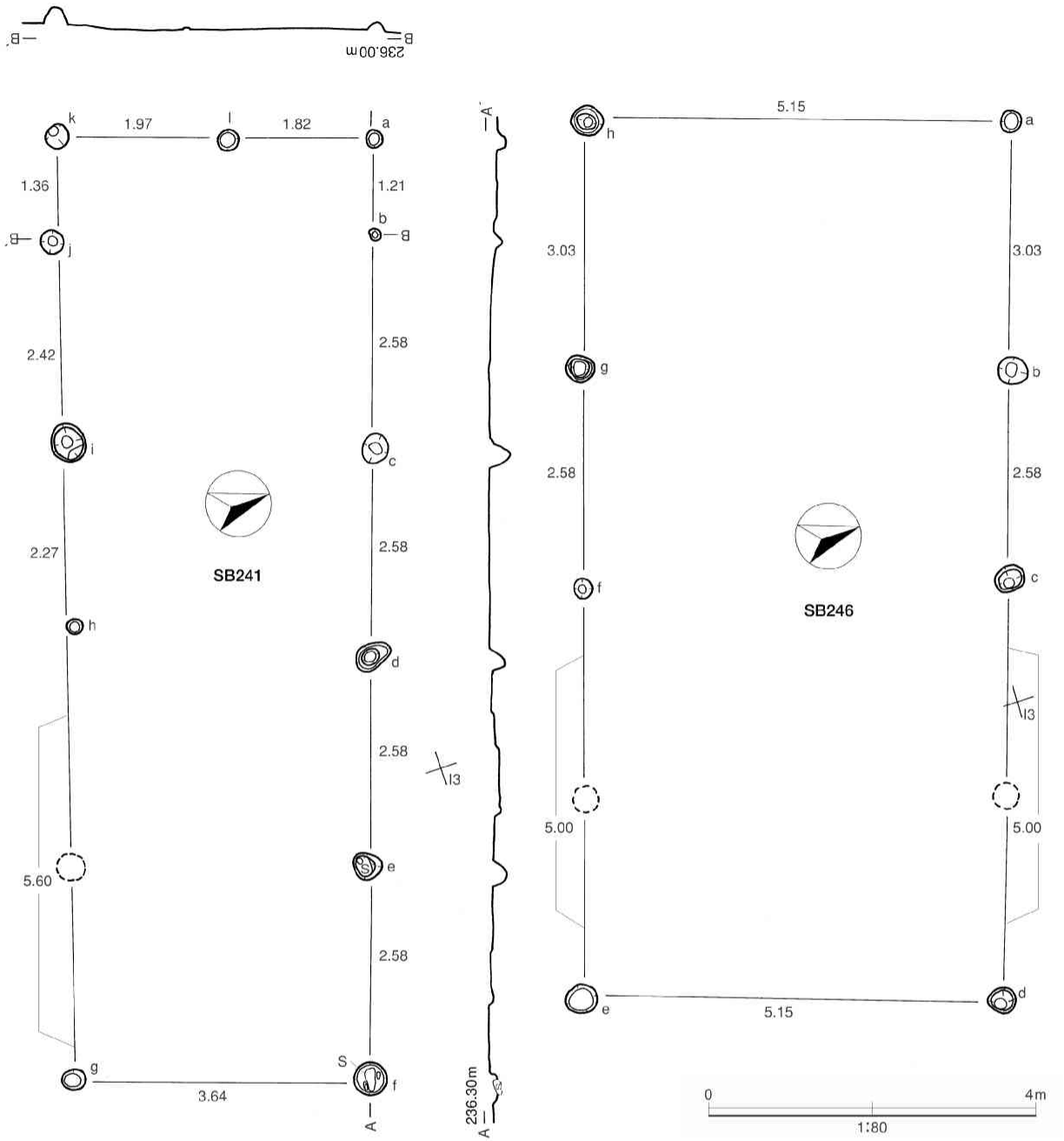
SB207EB215
1　10ＹＲ４/２　灰黄褐色シルト　径１～５㎜程の砂礫・酸化鉄・炭化物を含む。
2　10ＹＲ５/２　灰黄褐色シルト　径５～30㎜程の礫・酸化鉄・炭化物を含む。
3　10ＹＲ５/１　褐灰色シルト　径10～100㎜程の礫・円礫をともに多く含む。
SB207EB216
1　10ＹＲ４/２　灰黄褐色シルト　径100㎜程の礫を多く、炭化物・酸化鉄を含む。
SB207EB217
1　10ＹＲ４/１　褐灰色砂質シルト　酸化鉄を含む、柱痕。
2　10ＹＲ３/１　黒褐色シルト　径５～10㎜程の風化礫を少量含む。
3　10ＹＲ３/３　暗褐色砂質シルト　径５㎜程の風化礫を少量、酸化鉄を含む。
SB207EB269
1　10ＹＲ３/１　黒褐色シルト　径10㎜の風化礫・炭化物・酸化鉄を少量含む。
2　10ＹＲ３/１　黒褐色シルト　風化礫を多く、炭化物・酸化鉄を少量含む。
3　10ＹＲ３/１　黒褐色シルト　風化礫を多く、炭化物・酸化鉄を少量含む。
SB247EB267
1　10ＹＲ２/１　黒色シルト　しまり強い、褐灰色砂質シルトを少量含む。
2　10ＹＲ２/１　黒色シルト　褐灰色砂質ｼﾙﾄを多く、酸化鉄・礫を少量含む。



SB247

番号	深さ
a	(18)
b	18
c	(17)
d	18
e	(6)
f	9
g	(4)
h	(39)
i	11

第24図　４区・６区北　SB247



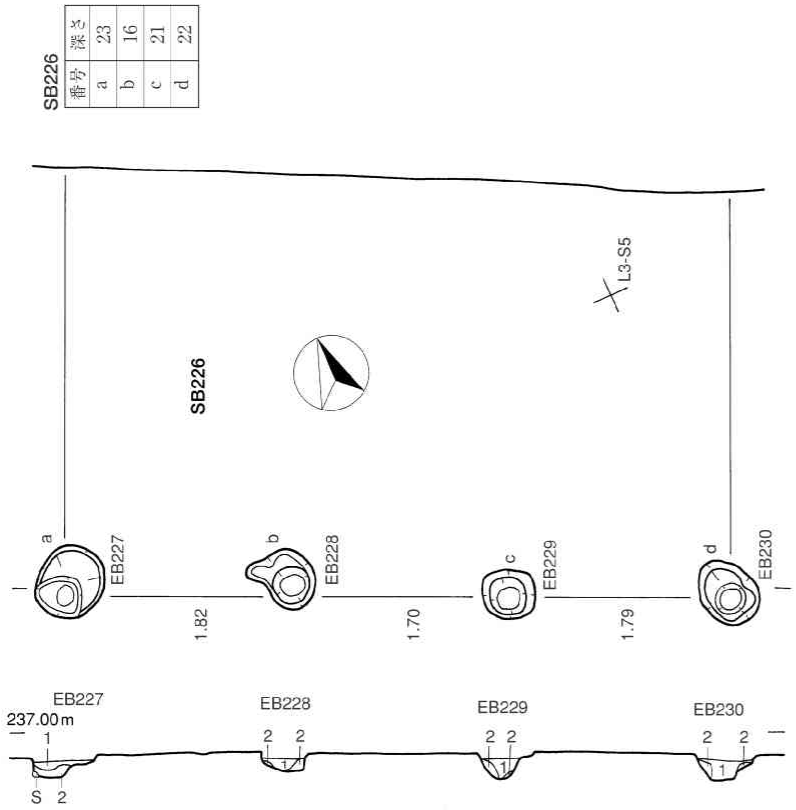
SB241

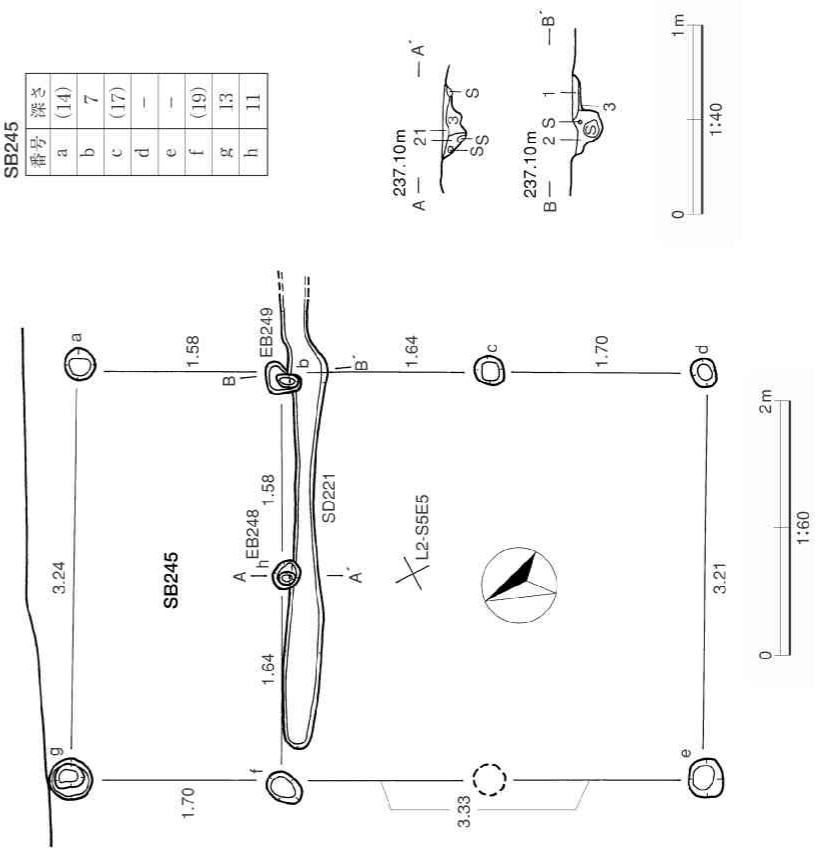
番号	a	b	c	d	e	f
深さ	(12)	(12)	(23)	17	(16)	(11)
番号	g	h	i	j	k	l
深さ	(15)	(4)	(24)	(21)	(21)	−

SB246

番号	a	b	c	d
深さ	(15)	(9)	30	17
番号	e	f	g	h
深さ	(11)	(16)	23	16

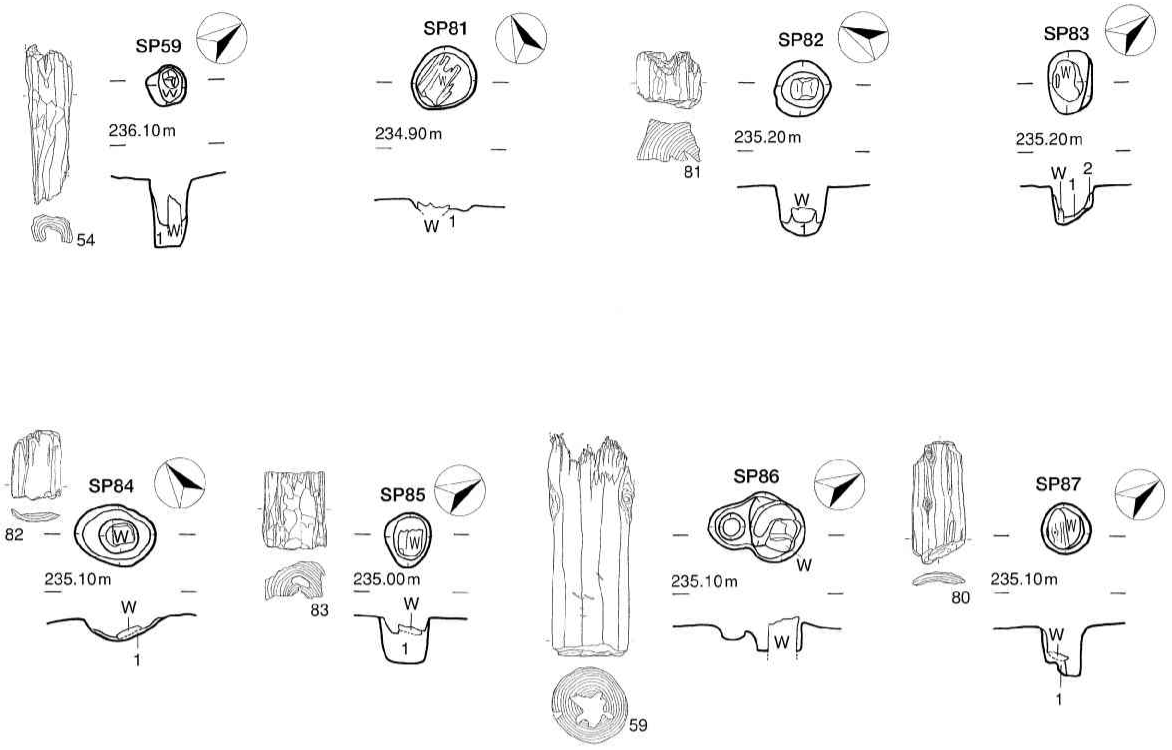
第25図　4区　SB241・246

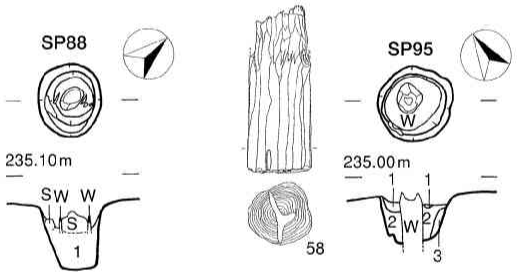




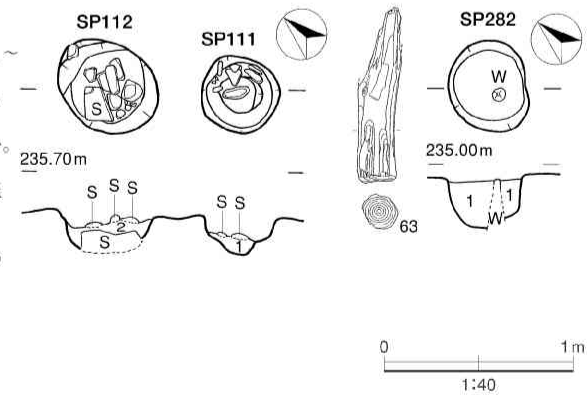
第26図　5区　SB226・245

SB226EB227
1　10ＹＲ３/３　暗褐色シルト　しまりやや強い、径10～70㎜程の礫・円礫をともに多く含む。
2　10ＹＲ５/２　灰黄褐色シルト　しまりやや弱い、径10～70㎜程の礫・円礫をともに多く含む。
SB226EB228
1　10ＹＲ２/２　黒褐色シルト　しまり強い、径２～３㎜程の砂礫を少量、酸化鉄・炭化物を含む。
2　10ＹＲ４/３　にぶい黄褐色シルト　しまり強い、径20～70㎜程の礫を多く含む。
SB226EB229
1　10ＹＲ３/３　暗褐色シルト　しまりやや強い、径10～70㎜程の礫・円礫を含む。
2　10ＹＲ５/６　黄褐色シルト　しまりやや強い、径10～70㎜程の礫・円礫をともに多く含む。
SB226EB230
1　10ＹＲ３/３　暗褐色シルト　しまりやや強い、径10～70㎜程の礫・円礫を含む。
2　10ＹＲ５/６　黄褐色シルト　しまりやや強い、径10～70㎜程の礫・円礫をともに多く含む。

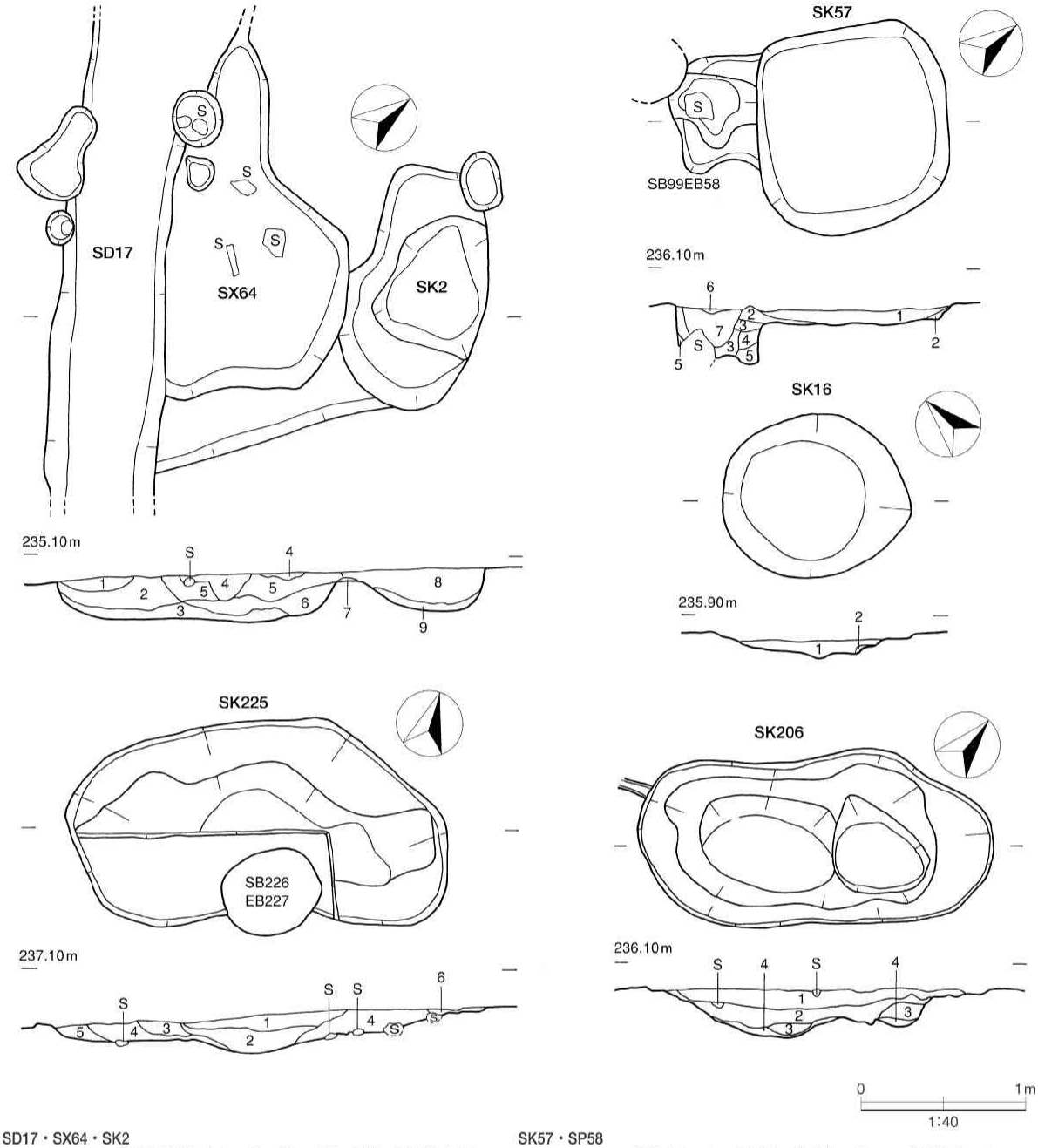




SP59
1　10YR 2/2　黒褐色シルト　しまり強い、粘性弱い。
SP81
1　10YR 6/3　にぶい黄橙色砂　しまり強い、粘性弱い。
SP82
1　10YR 5/2　灰黄褐色砂　しまり強い。
SP83
1　10YR 4/1　褐灰色砂　しまり強い。
2　10YR 5/2　灰黄褐色砂　しまり強い。
SP84
1　10YR 5/2　灰黄褐色砂　しまり強い。
SP85
1　10YR 3/1　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い。
SP87
1　10YR 7/2　にぶい黄橙色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い。
SP88
1　10YR 3/2　黒褐色砂質シルト　しまり強い。
SP95
1　10YR 2/2　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物・黒色シルトブロック・径1～3㎜の風化礫を少量ずつ含む。
2　10YR 3/1　黒褐色砂まじりシルト　しまり強い、径5～10㎜の風化礫を多く含む。
3　10YR 5/2　灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、酸化物を少量含む。
SP111
1　10YR 2/1　黒色砂まじりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、径5～10㎜程の黄褐色風化礫を含む、掘り方覆土。
SP112
1　10YR 4/1　褐灰色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、径5～10㎜程の黄褐色風化礫を含む、掘り方覆土。
SP282
1　10YR 2/1　黒色シルト　しまり強い、灰黄褐色砂質シルトブロックを少量、黄褐色風化礫を微量含む、掘り方覆土。



第27図　1・6区南　SP59・81～88・95・111・112・282



SD17・SX64・SK2
1　10YR3/2　黒褐色砂混じりシルト　径30㎜程の円礫・酸化鉄を含む。
2　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　風化礫・酸化鉄・灰黄褐色ｼﾙﾄを含む。
3　10YR3/2　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い。
4　10YR2/1　黒色シルト　炭化物を多く、酸化鉄・風化礫を含む。
5　10YR2/2　黒褐色シルト　炭化物・酸化鉄・径15㎜程の風化礫を含む。
6　10YR3/2　黒褐色砂混じりシルト　灰黄褐色ｼﾙﾄ・風化礫を少量含む。
7　10YR5/3　にぶい黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い。
8　10YR2/2　黒褐色シルト　炭化物・酸化鉄を少量、風化礫を含む。
9　10YR3/2　黒褐色シルト　しまり強い、径３㎜程の風化礫を少量含む。

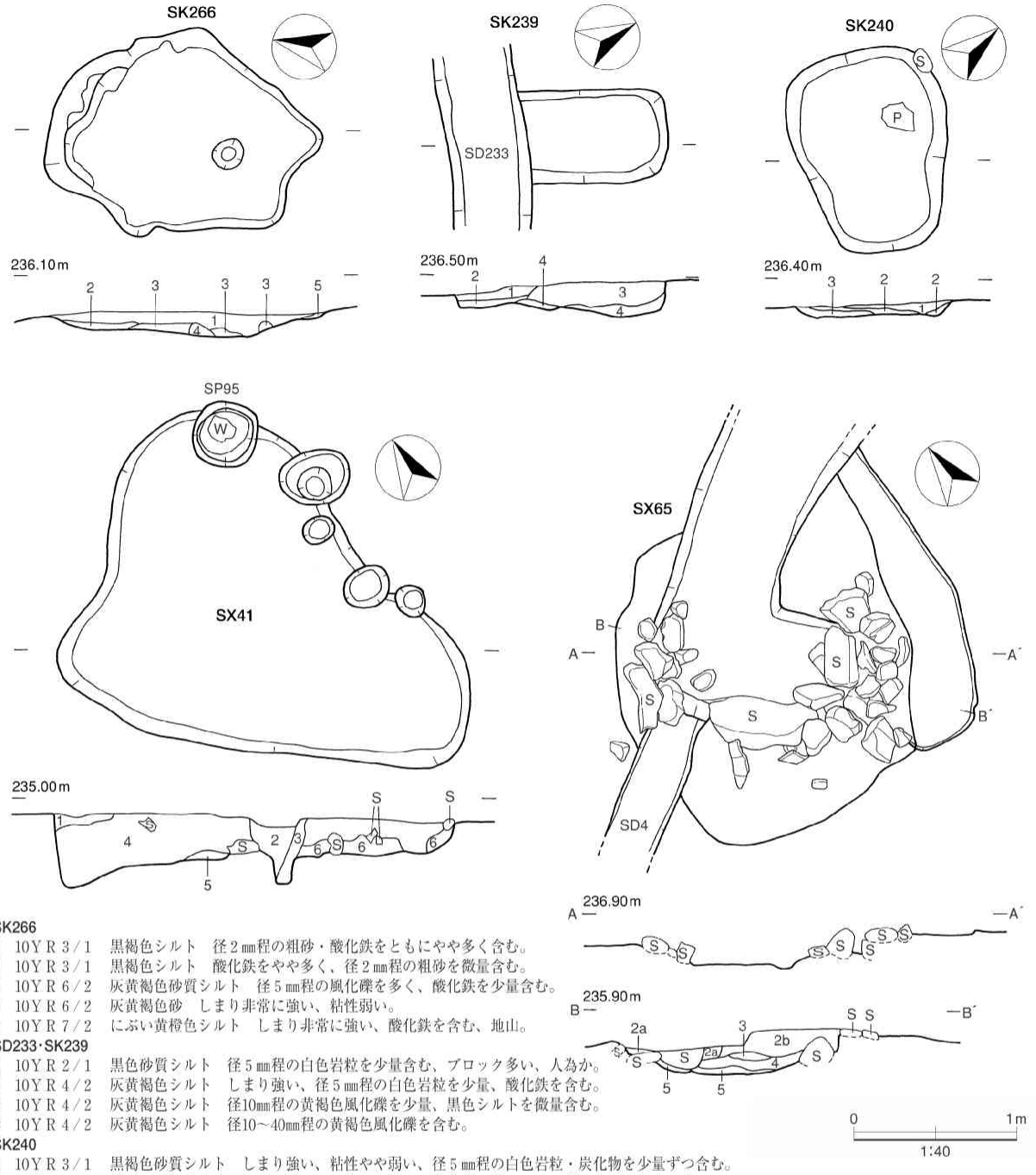
SK225
1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性やや強い、黄褐色風化礫を少量含む。
2　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色及び白色風化礫・酸化鉄を少量含む。
3　10YR3/3　暗褐色シルト　しまり強い、黄色風化礫を少量含む。
4　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　黄色風化礫を少量、円礫を含む。
5　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　黄色風化礫を多く、円礫を少量含む。
6　10YR3/2　黒褐色シルト　しまり強い、黄色風化礫を少量含む。

SK57・SP58
1　10YR2/2　黒褐色シルト　酸化鉄・炭化物・径10㎜の礫を含む、ＳＫ57。
2　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルト　しまり・粘性弱い、酸化鉄を含む。
3　10YR4/1　褐灰色シルト　しまり強い、酸化鉄を含む。
4　10YR6/2　灰黄褐色シルト　しまりやや強い、酸化鉄を含む、地山。
5　10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルト　しまりやや弱い・粘性弱い。
6　10YR3/2　黒褐色シルト　白色岩粒をやや多く、酸化鉄を含む。
7　10YR3/1　黒褐色シルト　炭化物を微量、白色岩粒を含む。

SK16
1　10YR3/2　黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・径５～10㎜の礫を含む。
2　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　しまり・粘性弱い、径10㎜程の礫含む。

SK206
1　10YR2/2　黒褐色シルト　径10㎜程の礫を微量、酸化鉄を含む。
2　10YR3/1　黒褐色シルト　径１～100㎜程の砂礫を多く、酸化鉄を含む。
3　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト　径５～100㎜程の礫を多く含む。
4　10YR5/3　にぶい黄褐色砂　しまり弱い、粘性強い。

第28図　SK２・16・57・206・SX64



SK266
1　10YR 3/1　黒褐色シルト　径2㎜程の粗砂・酸化鉄をともにやや多く含む。
2　10YR 3/1　黒褐色シルト　酸化鉄をやや多く、径2㎜程の粗砂を微量含む。
3　10YR 6/2　灰黄褐色砂質シルト　径5㎜程の風化礫を多く、酸化鉄を少量含む。
4　10YR 6/2　灰黄褐色砂　しまり非常に強い、粘性弱い。
5　10YR 7/2　にぶい黄橙色シルト　しまり非常に強い、酸化鉄を含む、地山。

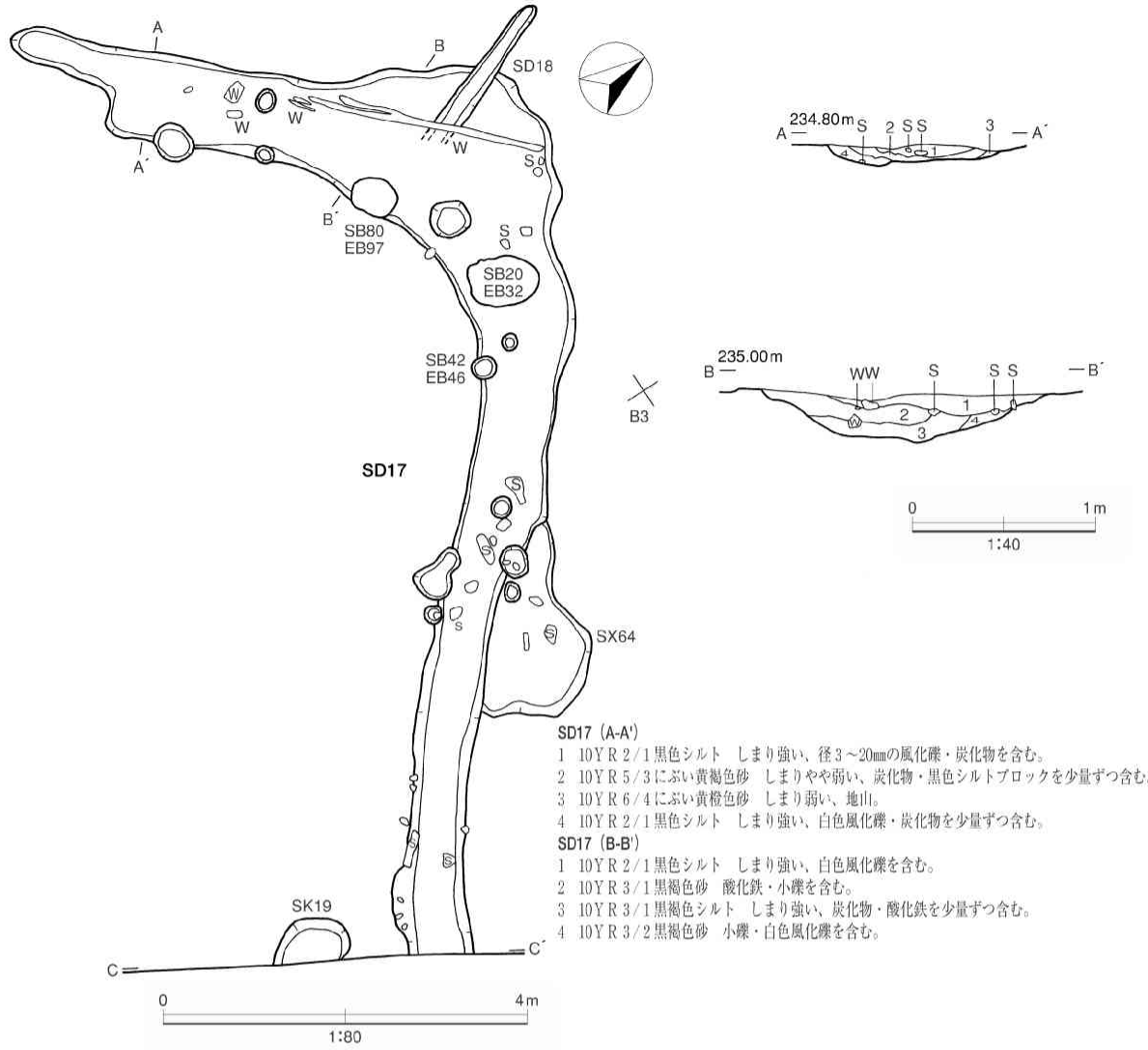
SD233・SK239
1　10YR 2/1　黒色砂質シルト　径5㎜程の白色岩粒を少量含む、ブロック多い、人為か。
2　10YR 4/2　灰黄褐色シルト　しまり強い、径5㎜程の白色岩粒を少量、酸化鉄を含む。
3　10YR 4/2　灰黄褐色シルト　径10㎜程の黄褐色風化礫を少量、黒色シルトを微量含む。
4　10YR 4/2　灰黄褐色シルト　径10～40㎜程の黄褐色風化礫を含む。

SK240
1　10YR 3/1　黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、径5㎜程の白色岩粒・炭化物を少量ずつ含む。
2　10YR 5/1　褐灰色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、酸化鉄・径5～10㎜程の白色岩粒を含む。
3　10YR 4/1　褐灰色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、酸化鉄・径5～10㎜程の白色岩粒を含む。

SX41
1　10YR 3/3　暗褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、径10㎜程の礫を含む。
2　10YR 2/1　黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、炭化物・酸化鉄・径5㎜程の風化礫を含む。
3　10YR 3/1　黒褐色砂　しまり弱い、粘性弱い、黒褐色シルトブロックを少量含む。
4　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまり強い、径5㎜程の風化礫・炭化物・酸化鉄を含む。
5　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまりやや弱い、粘性やや強い、径30～100㎜程の円礫を多く含む。
6　10YR 5/2　灰黄褐色砂質シルト　しまりやや弱い、径50～150㎜程の円礫を多く含む。

SX65（B-B'）
1　10YR 6/3　にぶい黄橙色砂　しまり弱い、円礫を含む。
2a 10YR 4/2　灰黄褐色シルト　しまり強い、白色岩粒を少量、酸化鉄を含む。
2b 10YR 3/3　暗褐色シルト　しまり強い、径5㎜程の風化礫を含む。
3　10YR 3/3　暗褐色砂　しまり強い、暗褐色シルトを含む。
4　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまり強い、下層に砂が多い、炭化物を少量、白色岩粒を含む。
5　10YR 5/3　にぶい黄褐色砂　酸化物・黒褐色シルトを含む。

第29図　SK239・240・266・SX41・65

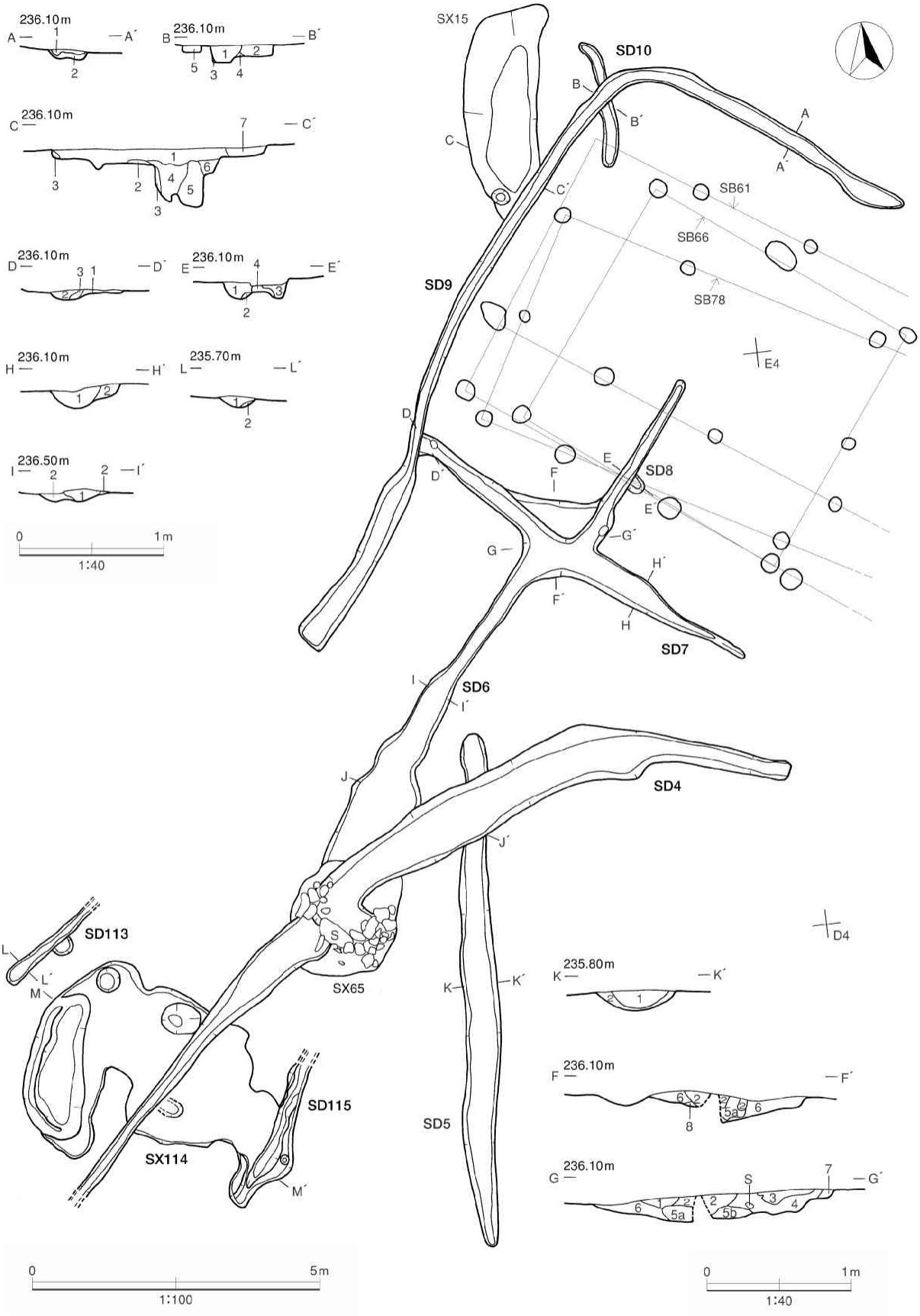


SD17（A-A'）
1　10YR2/1黒色シルト　しまり強い、径3～20㎜の風化礫・炭化物を含む。
2　10YR5/3にぶい黄褐色砂　しまりやや弱い、炭化物・黒色シルトブロックを少量ずつ含む。
3　10YR6/4にぶい黄橙色砂　しまり弱い、地山。
4　10YR2/1黒色シルト　しまり強い、白色風化礫・炭化物を少量ずつ含む。

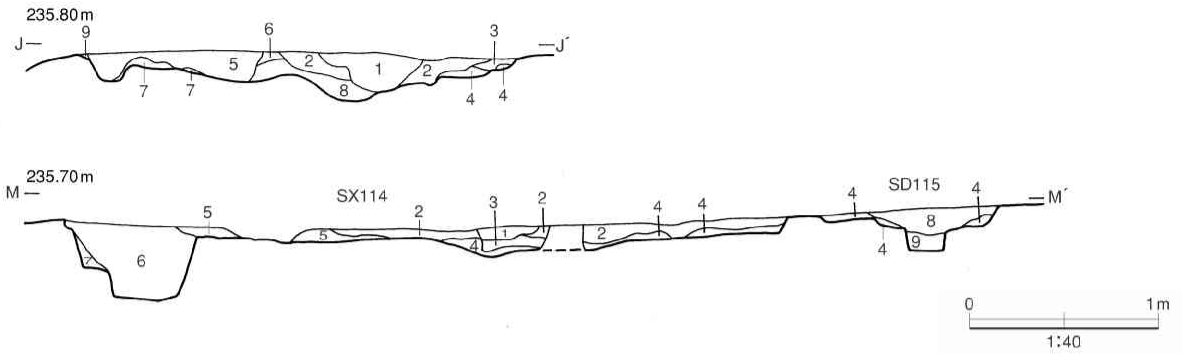
SD17（B-B'）
1　10YR2/1黒色シルト　しまり強い、白色風化礫を含む。
2　10YR3/1黒褐色砂　酸化鉄・小礫を含む。
3　10YR3/1黒褐色シルト　しまり強い、炭化物・酸化鉄を少量ずつ含む。
4　10YR3/2黒褐色砂　小礫・白色風化礫を含む。

SD17（C-C'）
Ⅰ　10YR3/2黒褐色砂質シルト　しまり強い、径10～20㎜の風化礫を含む、表土。
Ⅱa　10YR5/2灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性弱い、径30㎜程の風化礫・炭化物を含む。
Ⅱb　10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、岩盤由来の径10～50㎜程の礫を多く含む。
Ⅱc　10YR6/6明黄褐色シルト　しまり強い、径100㎜程の風化礫を含む。
1　10YR2/1黒色シルト　しまり強い、径5～30㎜の風化礫をやや多く、炭化物・酸化鉄を少量含む、SD17覆土。
2　10YR3/1黒褐色砂質シルト　しまりやや弱い、径5㎜程の風化礫・酸化鉄を少量ずつ含む、SD17覆土。
3　10YR3/2黒褐色砂　しまり強い、径5㎜程の風化礫・酸化鉄を含む、SD17覆土。
4　10YR3/2黒褐色砂質シルト　しまり・粘性ともやや弱い、径3～70㎜の風化礫を多く含む、SD17覆土。
5　10YR7/3にぶい黄褐色砂質シルト　しまり強い、岩盤由来の径10～50㎜程の礫を含む、SD17覆土。
6　10YR2/1黒色シルト　しまり強い、径5～10㎜程の風化礫・炭化物を含む。
7　10YR2/2黒褐色シルト　しまり・粘性とも強い、径5～70㎜程の風化礫・酸化物を含む。

第30図　1区　SD17



第31図　2区　SD 4 ～10・113・115・SX15・114



SD 9 (A-A')
1　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・風化礫を含む。
2　10YR 6/3　にぶい黄橙色シルト　しまり強い、酸化鉄・風化礫を少量ずつ含む。

SD 9 ・SD10(B-B')
1　10YR 3/2　黒褐色砂質シルト　しまり強い、炭化物を微量、白色風化礫を含む。
2　10YR 3/2　黒褐色砂質シルト　しまり強い、白色風化礫を少量、酸化鉄を含む。
3　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄を少量含む。
4　10YR 3/3　暗褐色砂　しまり強い。
5　10YR 3/2　黒褐色シルト　ピット覆土。

SD 9 ・ S X15(C-C')
1　10YR 3/1　黒褐色シルト　酸化鉄・径5～10㎜程の白色風化礫を含む。
2　10YR 4/2　灰黄褐色シルト混砂　酸化鉄を多く、径5㎜の白色岩粒を少量含む。
3　10YR 6/3　にぶい黄橙色シルト混砂　酸化鉄・黒褐色シルトブロックを含む。
4　10YR 3/1　黒褐色シルト　径10㎜の白色風化礫をやや多く、酸化鉄を少量含む。
5　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄を多く含む、他の柱穴覆土。
6　10YR 3/1　黒褐色シルト　径5㎜程の白色風化礫を微量、酸化鉄を含む。
7　10YR 3/1　黒褐色シルト　径5㎜程の白色風化礫を少量、酸化鉄を含む。

SD 7 ・SD 9 (D-D')
1　10YR 4/1　褐灰色砂質シルト　酸化鉄・白色岩粒を含む。
2　10YR 2/2　黒褐色シルト　しまり強い、白色風化礫を多く、酸化鉄を含む。
3　10YR 3/2　黒褐色砂質シルト　白色岩粒を少量、酸化鉄を含む。

SD 8 (E-E')
1　10YR 3/1　黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・白色岩粒を含む。
2　10YR 5/2　灰黄褐色砂　酸化鉄を含む。
3　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・白色岩粒を含む。
4　10YR 5/2　灰黄褐色砂質シルト　しまり強い・粘性弱い、酸化鉄を含む。

SD 7 ・SD 8 (F-F'・G-G')
1　10YR 4/1　褐灰色砂質シルト　酸化鉄を少量、白色風化礫を含む。
2　10YR 3/1　黒褐色シルト　白色風化礫をやや多く、酸化鉄を少量含む。
3　10YR 3/1　黒褐色シルト　白色風化礫を微量、酸化鉄を含む。
4　10YR 4/1　褐灰色砂質シルト　白色風化礫をやや多く、酸化鉄を含む。
5a 10YR 5/2　灰黄褐色シルト　しまり非常に強い、酸化鉄・下層に風化礫を含む。
5b 10YR 5/2　灰黄褐色砂　酸化鉄を少量含む、地山。
6　10YR 4/1　褐灰色砂質シルト　酸化鉄を少量、白色風化礫を含む。
7　10YR 5/3　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性やや弱い、酸化鉄を含む、地山か。
8　10YR 5/2　灰黄褐色砂　酸化鉄を少量含む、地山。

SD 7 (H-H')
1　10YR 4/1　褐灰色砂質シルト　粘性やや弱い、酸化鉄・白色岩粒を含む。
2　10YR 5/2　灰黄褐色砂質シルト　粘性やや弱い、酸化鉄を含む。

SD 6 (I-I')
1　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまり強い、白色風化礫をやや多く、酸化鉄を含む。
2　10YR 4/2　灰黄褐色砂　しまりやや強い、径5～10㎜程の礫を含む。

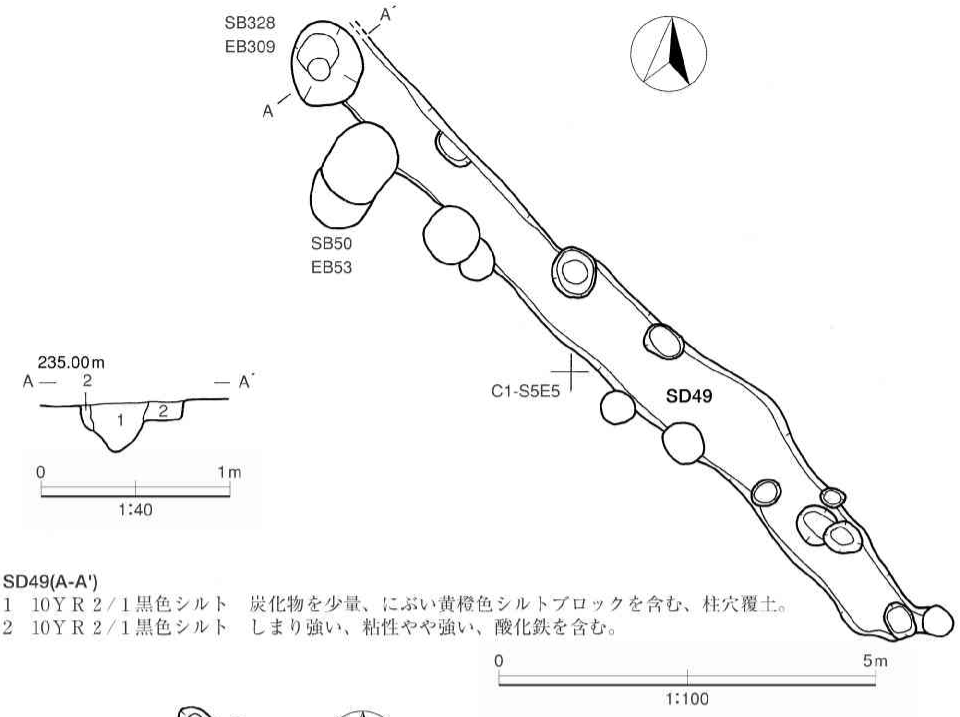
SD 4 ・SD 5 ・SD 6 (J-J')
1　10YR 5/3　にぶい黄褐色砂　灰黄褐色シルトブロックを含む、粗砂。
2　10YR 4/2　灰黄褐色砂質シルト　白色風化礫を少量、酸化鉄を含む。
3　10YR 5/1　褐灰色砂質シルト　粘性弱い、酸化鉄を含む。
4　10YR 5/3　にぶい黄褐色砂　白色風化礫・褐灰シルトを少量含む、地山。
5　10YR 2/2　黒褐色シルト　炭化物を少量、白色風化礫・酸化鉄を含む。
6　10YR 4/1　褐灰色砂質シルト　しまり強い。
7　10YR 6/3　にぶい黄橙色砂　しまり弱い、酸化鉄を少量含む、地山。
8　10YR 6/2　灰黄褐色砂　しまり弱い、酸化鉄を少量含む、地山。
9　10YR 6/3　にぶい黄橙色砂　しまり弱い、酸化鉄を少量含む、地山。

SD 5 (K-K')
1　10YR 3/2黒褐色砂質シルト　しまり強い、炭化物を微量、酸化鉄を含む。
2　10YR 6/2灰黄褐色砂　しまり弱い、酸化鉄を少量含む。

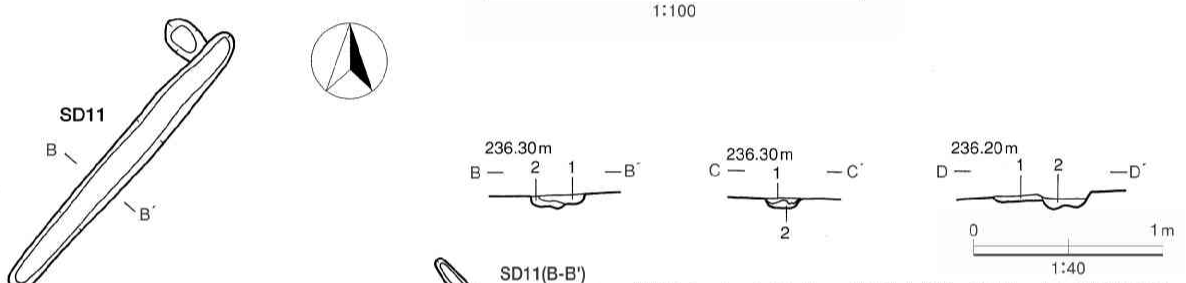
SD113(L-L')
1　10YR 2/1　黒色砂質シルト　酸化鉄を少量含む。
2　10YR 5/2　灰黄褐色砂　しまり弱い。

SX114・SD115(M-M')
1　10YR 4/2　灰黄褐色砂　径5～10㎜程の黄褐色風化礫を少量含む。
2　10YR 1，7/1　黒色シルト　炭化物を微量、径5㎜程の白色風化礫を含む。
3　10YR 4/2　灰黄褐色砂　黒色シルトブロックを少量、黄褐色風化礫を含む。
4　10YR 4/2　灰黄褐色砂　径5㎜程の黄褐色風化礫を少量含む。
5　10YR 8/1　灰白色シルト　しまり非常に強い、粘性強い、酸化鉄を含む。
6　10YR 2/1　黒色粘質シルト　径10㎜の白色風化礫を少量、酸化鉄を含む。
7　10YR 4/2　灰黄褐色シルト混じり砂　白色風化礫を多く含む。
8　10YR 5/2　灰黄褐色砂　しまり弱い、地山。
9　10YR 3/2　黒褐色砂質シルト　白色風化礫を少量、酸化鉄を含む。

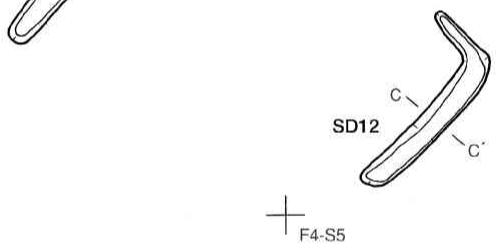
第32図　2区　SD 4 ～ 6 ・115・SX114



SD49(A-A')
1　10ＹＲ２/１黒色シルト　炭化物を少量、にぶい黄橙色シルトブロックを含む、柱穴覆土。
2　10ＹＲ２/１黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、酸化鉄を含む。

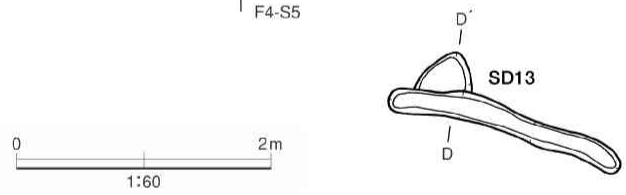


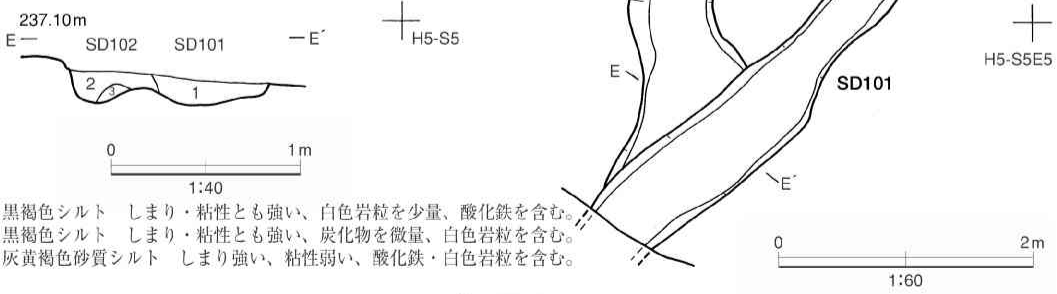
SD11(B-B')
1　10ＹＲ２/２　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物を微量、酸化鉄・白色風化礫を含む。
2　10ＹＲ４/２　灰黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄・白色風化礫を含む。



SD12(C-C')
1　10ＹＲ４/２　灰黄褐色シルト　しまり強い、径３㎜程の礫・炭化物・酸化鉄を含む。
2　10ＹＲ６/３　にぶい黄橙色シルト　しまり強い、酸化鉄を含む。

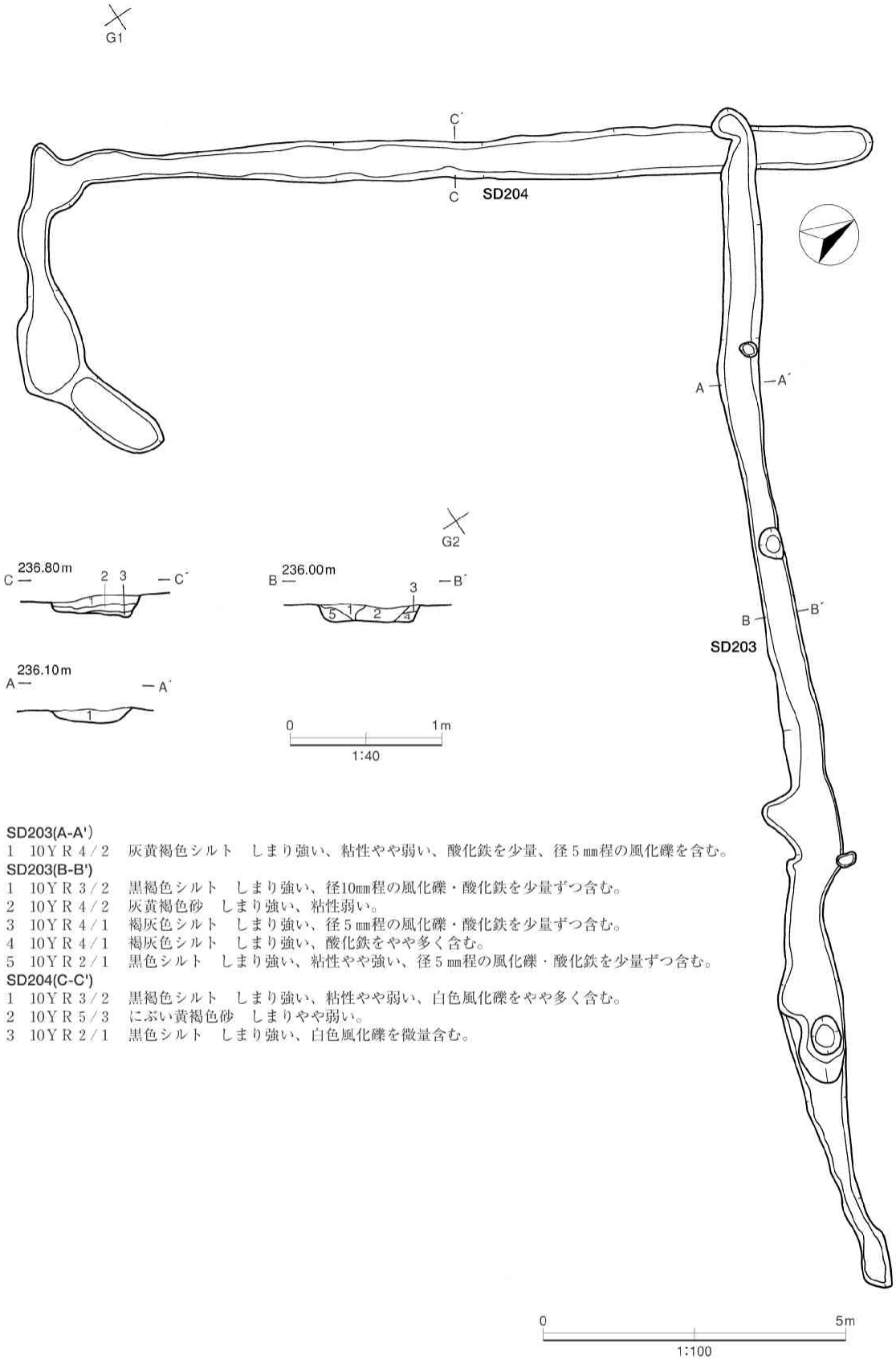
SD13(D-D')
1　10ＹＲ３/２　黒褐色砂質シルト　酸化鉄・径３㎜程の風化礫を含む。
2　10ＹＲ３/３　暗褐色シルト　しまり強い、酸化鉄・炭化物・径３㎜程の風化礫を含む。





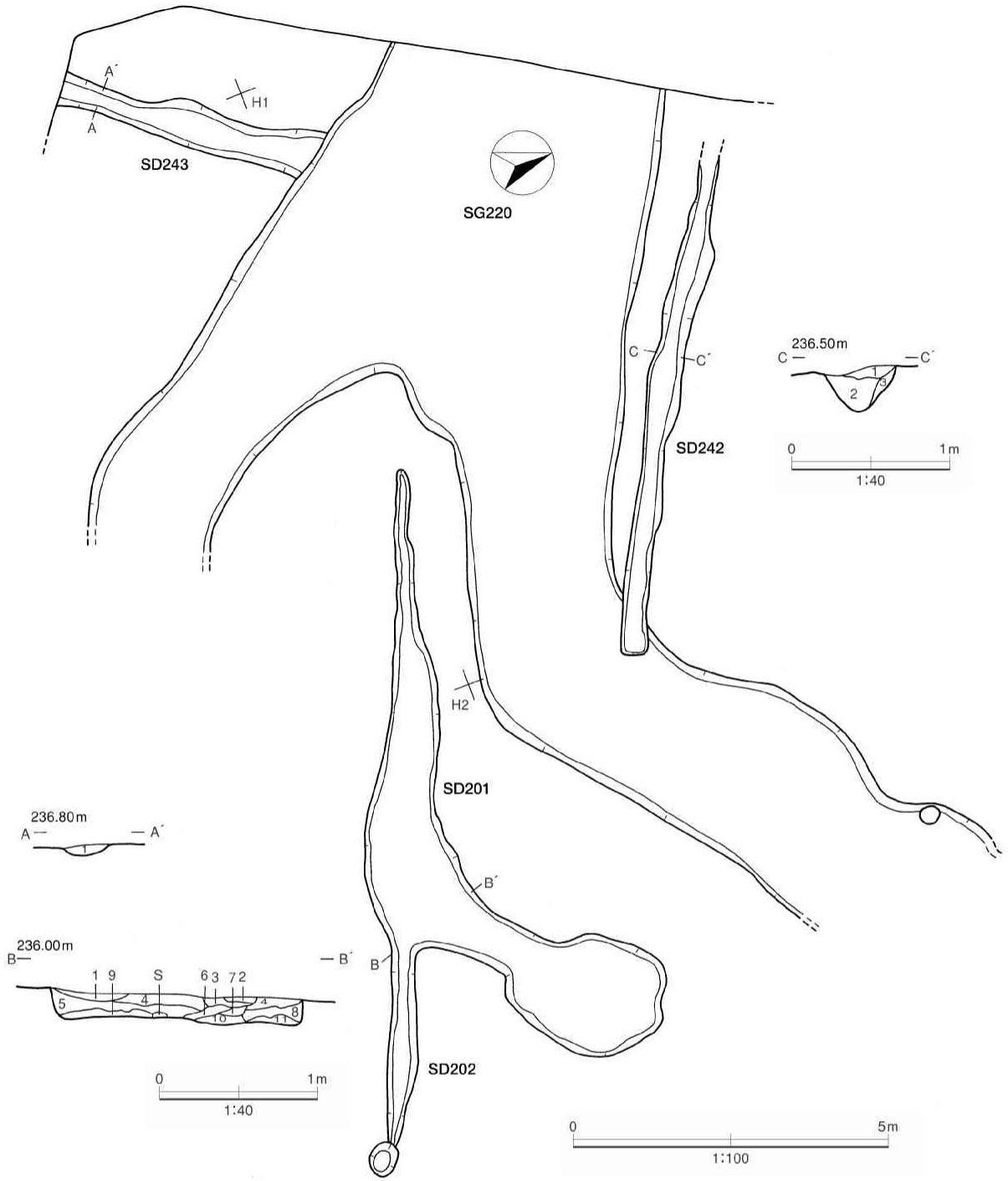
SD101・102(E-E')
1　10ＹＲ３/２　黒褐色シルト　しまり・粘性とも強い、白色岩粒を少量、酸化鉄を含む。
2　10ＹＲ３/２　黒褐色シルト　しまり・粘性とも強い、炭化物を微量、白色岩粒を含む。
3　10ＹＲ５/２　灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄・白色岩粒を含む。

第33図　１区　SD49・２区　SD11～13・３区　SD101・102



SD203(A-A')
1　10YR 4/2　灰黄褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、酸化鉄を少量、径５㎜程の風化礫を含む。
SD203(B-B')
1　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまり強い、径10㎜程の風化礫・酸化鉄を少量ずつ含む。
2　10YR 4/2　灰黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い。
3　10YR 4/1　褐灰色シルト　しまり強い、径５㎜程の風化礫・酸化鉄を少量ずつ含む。
4　10YR 4/1　褐灰色シルト　しまり強い、酸化鉄をやや多く含む。
5　10YR 2/1　黒色シルト　しまり強い、粘性やや強い、径５㎜程の風化礫・酸化鉄を少量ずつ含む。
SD204(C-C')
1　10YR 3/2　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、白色風化礫をやや多く含む。
2　10YR 5/3　にぶい黄褐色砂　しまりやや弱い。
3　10YR 2/1　黒色シルト　しまり強い、白色風化礫を微量含む。

第34図　４区　SD203・204

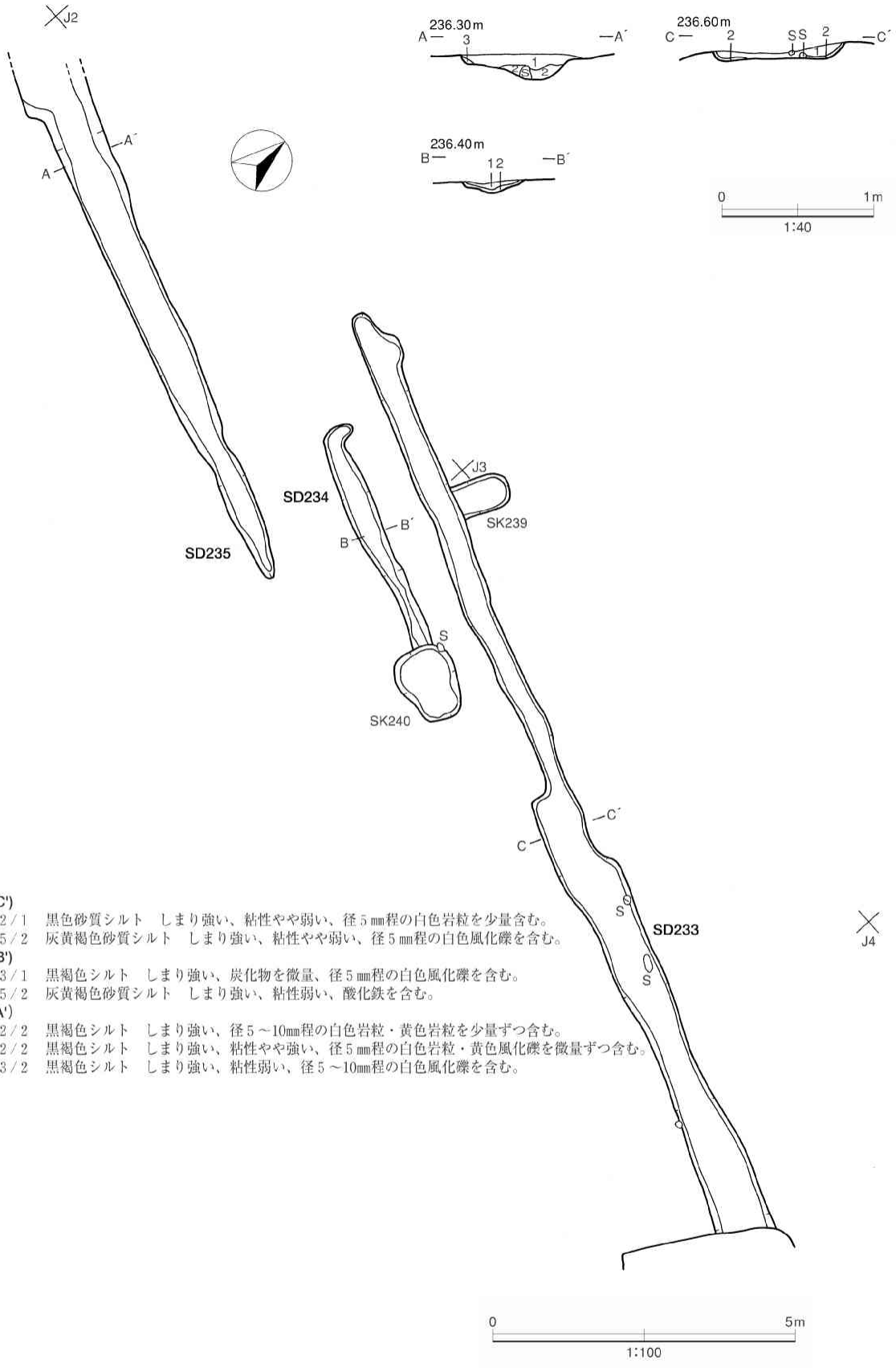


SD201・SD202(B-B')
1　10YR3/2　黒褐色シルト　しまり強い、白色風化礫・黄褐色風化礫を含む。
2　10YR4/2　灰黄褐色砂　しまり弱い、褐色シルトを含む。
3　10YR4/2　灰黄褐色砂　しまり弱い。
4　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、白色風化礫・酸化鉄を含む。
5　10YR3/2　黒褐色砂　白色風化礫を含む。
6　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性やや弱い、白色風化礫を少量、炭化物を微量、酸化鉄を含む。
7　10YR4/2　灰黄褐色砂　しまり弱い、白色風化礫を少量含む。
8　10YR4/2　灰黄褐色シルト　しまり強い、白色風化礫・酸化鉄を含む。
9　10YR4/2　灰黄褐色粗砂　地山。
10　10YR4/2　灰黄褐色シルト混じり砂　白色風化礫を少量、炭化物を微量含む。
11　10YR4/4　褐色砂　地山。

SD242(C-C')
1　10YR2/1　黒色シルト　白色風化礫を少量、灰黄褐色砂ブロックを含む。
2　10YR1．7/1　黒色シルト　灰黄褐色砂ブロックを微量含む。
3　10YR5/2　灰黄褐色シルト　酸化鉄を含む。

SD243(A-A')
1　10YR2/1　黒色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、白色風化礫を多く含む

第35図　4区　SD201・202・242・243

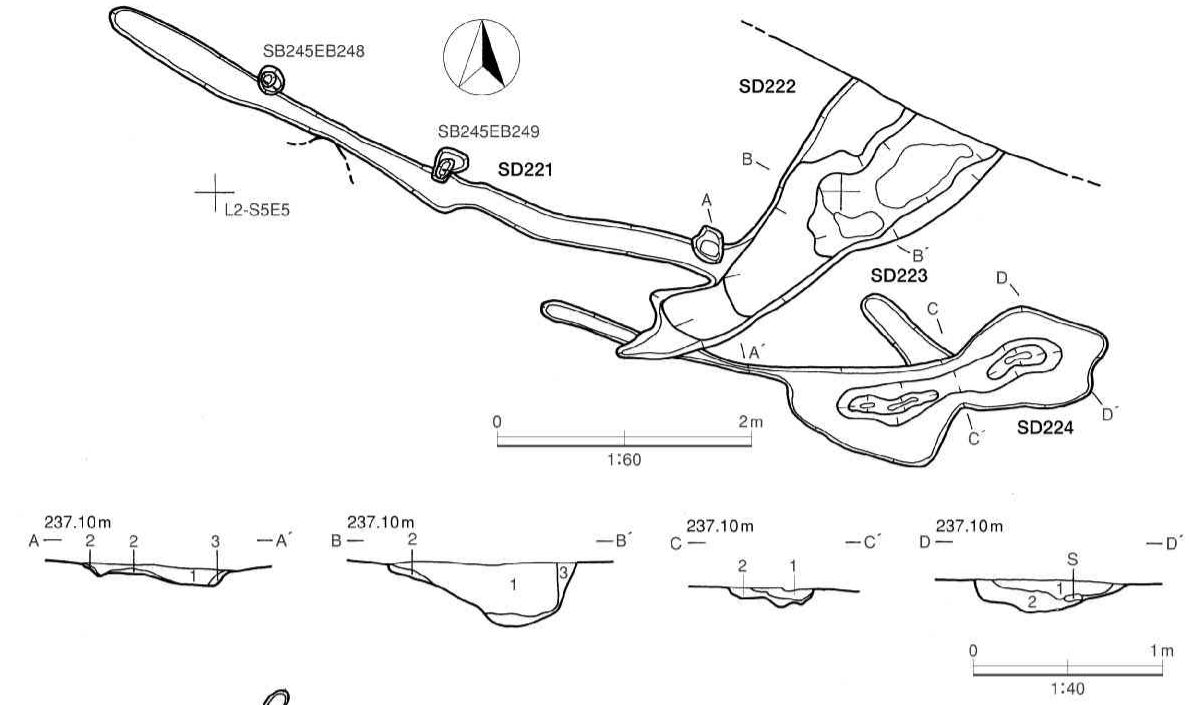


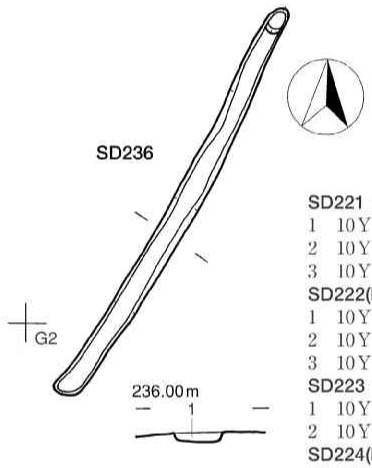
SD233(C-C')
1　10YR2/1　黒色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、径5㎜程の白色岩粒を少量含む。
2　10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、径5㎜程の白色風化礫を含む。

SD234(B-B')
1　10YR3/1　黒褐色シルト　しまり強い、炭化物を微量、径5㎜程の白色風化礫を含む。
2　10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を含む。

SD235(A-A')
1　10YR2/2　黒褐色シルト　しまり強い、径5～10㎜程の白色岩粒・黄色岩粒を少量ずつ含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、径5㎜程の白色岩粒・黄色風化礫を微量ずつ含む。
3　10YR3/2　黒褐色シルト　しまり強い、粘性弱い、径5～10㎜程の白色風化礫を含む。

第36図　4区　SD233～235





SD221・SD222(A-A')
1　10YR2/3　黒褐色シルト　炭化物を少量、50㎜程の円礫・径3㎜程の風化礫を含む。
2　10YR4/4　褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや強い。
3　10YR4/2　灰黄褐色シルト　しまり・粘性とも強い、黄褐色シルトブロックを含む。

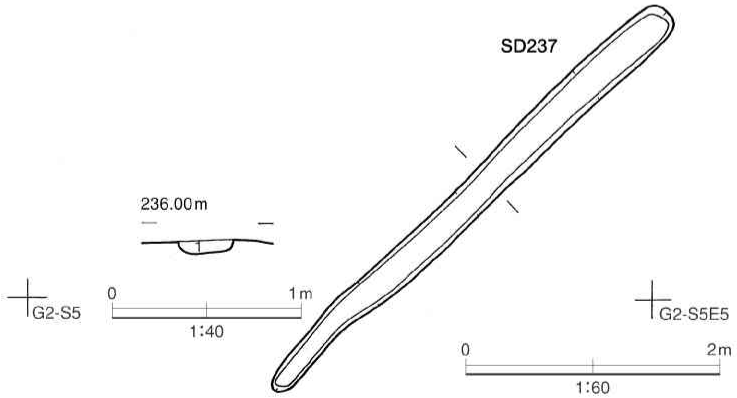
SD222(B-B')
1　10YR2/3　黒褐色シルト　炭化物を少量、径50㎜程の円礫・径3㎜程の風化礫を含む。
2　10YR5/6　黄褐色シルト　しまり強い。
3　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　しまり強い。

SD223・SD224(C-C')
1　10YR3/2　黒褐色シルト　しまり強い、径50㎜程の礫を含む。
2　10YR3/2　黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、径5～100㎜程の礫を多く含む。

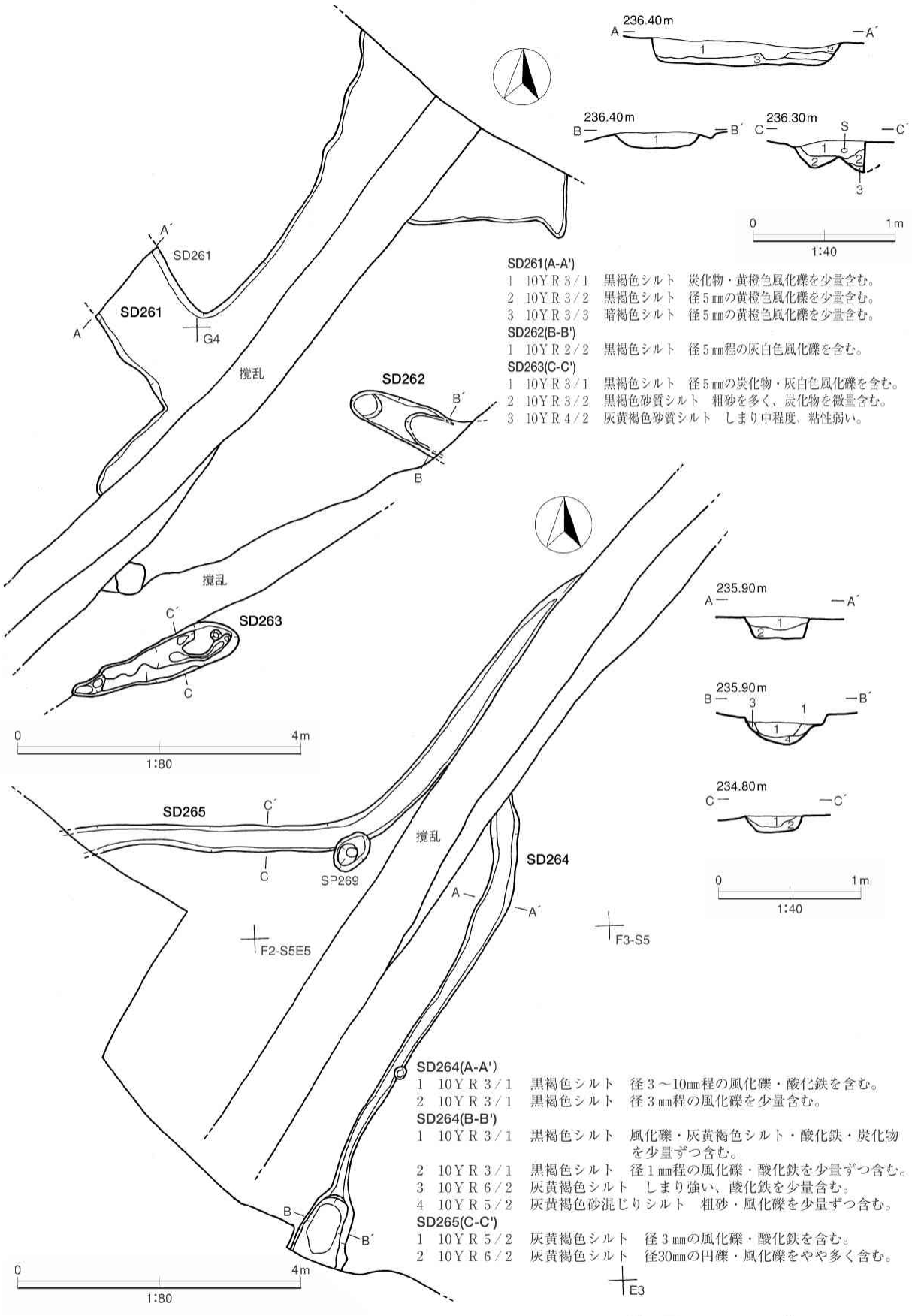
SD224(D-D')
1　10YR3/3　暗褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、径50㎜程の風化礫を多く、酸化鉄を含む。
2　10YR4/4　褐色シルト　しまり強い、径30～100㎜程の円礫を多く含む。

SD236
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト　径3～10㎜程の風化礫・酸化鉄をともに多く含む。

SD237
1　10YR3/2　黒褐色シルト　酸化鉄を少量、径5㎜程の風化礫・径70㎜程の円礫と角礫を含む。



第37図　5区　SD221～224・4区　SD236・237



第38図　4区・6区北　SD261～265

尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で6.5・７・7.5・８尺が確認される。梁は西側で12尺、身舎と庇との距離は4.5尺である。主軸方向はＮ－55.0°－Ｗである。柱穴は直径約22～40cm程の円形・不正楕円形である。柱痕の直径は12～16cmである。重複は、ＳＢ61→ＳＢ99の新旧関係がある。また、新旧関係は不明であるが、ＳＢ62・66・78・119とも重複する。遺物の出土はない。

ＳＢ62（第20図）　２区Ｅ４・Ｆ３・Ｆ４グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間以上、梁行２間である。規模は桁行7.11m（23.5尺）以上、梁行が5.00m（16.5尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で7.5・7.7・８・8.3尺が確認されるが、概ね８尺である。梁は西側で８・8.5尺である。主軸方向はＮ－59.0°－Ｗである。柱穴は約20～38cmの円形・楕円形が主である。柱痕は円形で、直径は約10cmである。新旧関係は不明であるが、ＳＢ61・66・79・99・119と重複する。遺物の出土はない。

ＳＢ66（第21図）　２区Ｅ３・Ｅ４・Ｆ３・Ｆ４グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行２間以上、梁行２間で、さらに身舎が東にのびる可能性がある。規模は桁行5.15m（17尺）以上、梁行4.55m（15尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で８・8.3・8.5・９尺が確認される。梁は西側で15尺である。主軸方向はＮ－52.0°－Ｗである。柱穴は直径22～40cmの円形・楕円形である。柱穴ｂ（ＥＢ60）からは第41図55の丸太材の柱材が出土しており、直径は16.9cmである。重複は、ＳＤ14→ＳＢ66→ＳＤ８の関係がある。また、新旧関係は不明であるが、ＳＢ61・62・78・119と重複する。出土遺物は、上記の通りである。

丸太材の柱材

ＳＢ119（第21図）　２区Ｅ４・Ｆ３・Ｆ４グリッドに位置する。構造は、身舎の桁行３間以上、梁行２間で、庇が北側に１面付く。規模は桁行6.96m（23尺）以上、梁行6.12m（20.2尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で７・7.5・８尺が確認され、7.5尺が主である。梁は西側で８・8.5尺である。身舎と庇との距離は、3.7尺を測る。主軸方向はＮ－57.0°－Ｗである。柱穴は14～50cmの円形・楕円形である。柱痕は柱穴ｃで確認され、円形で直径約15cmである。重複は、ＳＤ14→ＳＢ119→ＳＢ79の関係がある。また、新旧関係は不明であるが、ＳＢ61・62・66と重複する。遺物の出土はない。

ＳＢ78（第22図）　２区Ｅ３・Ｅ４・Ｆ３・Ｆ４グリッドに位置する。構造は身舎の桁行３間以上、梁行２間である。規模は北側の桁行5.91m（19.5尺）、梁行3.8m（12.5尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で北側が5.5・6.5・7.5尺、南側は18.5尺で、検出できなかった柱穴があったと考えられる。梁は西側で6.2・6.3尺である。主軸方向はＮ－61.0°－Ｗである。柱穴は約20～30cmの円形である。柱痕は円形で、直径は柱穴ａで約10cmである。新旧関係は不明であるが、ＳＢ61・66と重複する。遺物の出土はない。

ＳＢ79（第22図）　２区Ｆ４グリッドに位置する。構造は身舎の桁行２間以上、梁行１間である。規模は桁行4.69m（15.5尺）以上、梁行4.39m（14.5尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で7.5・８尺、梁は14.5尺である。主軸方向はＮ－57.0°－Ｗである。柱穴は直径10～22cmの円形である。重複は、ＳＢ119→ＳＢ79の関係がある。また、新旧関係は不明であるが、ＳＢ62と重複する。遺物の出土はない。

ＳＢ99（第22図）　２区・６区北Ｆ２・Ｆ３グリッドに位置する。構造は身舎の桁行３間、梁行１間で、西から１間目に間仕切りの柱が付く。また、南北２面に庇が付く。規模は桁行6.36

m（21尺）、梁行6.21m（20.5尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で6.5・7尺が確認されるが、7尺が主である。梁は14尺、身舎と庇の距離は、南側が3尺、北側が3.5尺である。主軸方向はN－61.0°－Wである。柱穴は直径約15～60cm程の円形が主である。柱痕の直径は円形で、柱穴e・k・m・oで18～24cmである。掘り方は黒褐色シルトが主で、褐灰色シルト等を含む。重複は、SB61→SB99→SB100・SK57の関係がある。また、新旧は不明であるが、SB62・SB119と重複する。遺物の出土はない。

SB100（第23図）　2区F3グリッドに位置する。構造は身舎の桁行2間、梁行1間である。規模は東側桁行4.7m（15.5尺）、西側桁行4.4m（14.5尺）、梁行南北とも3.48m（11.5尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で6・7・8.5尺、梁は11.5尺である。主軸方向はN－34.5°－Eである。柱穴は直径28～54cmの円形・楕円形である。柱痕は円形で、直径は柱穴a・dで16～26cmである。重複は、SB99→SB100の関係がある。遺物の出土はない。

SB207（第23図）　4区・6区北F1・F2・G1・G2グリッドに位置する。構造は身舎の桁行5間、梁行2間で、南側に庇が1面付く。但し、身舎の西隅の柱穴と、庇を構成する西よりの柱穴については検出することができなかった。規模は桁行10.72m（35.4尺）、梁行東側6.00m（19.8尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で6.8・7・7.25・7.3・7.4尺、梁で8・8.3・8.5尺が確認される。主軸方向はN－62.0°－Wである。柱穴は長さ約25～100cmの円形・楕円形・不整楕円形である。柱痕はほとんどが円形と考えられるが、柱穴i（EB215）では、明確に方形の柱痕が確認された。直径は約10～26cmである。また、柱穴d（EB212）からは，第42図61の柱材が出土している。掘り方覆土は黒褐色・灰黄褐色シルトが主で、礫・酸化鉄・炭化物を含む。重複は、SD265・SB247→SB207の関係がある。SB207の柱穴kは、SB247の柱穴と重複している可能性が考えられるが、SB247の柱穴を切ってSB207の柱穴kが構築されたと考えた。出土遺物は上記の通りである。

方形の柱痕

SB247（第24図）　4区・6区北F1・F2・G2グリッドに位置する。構造は身舎の桁行5間と推定され、梁行は2間である。但し、北西側の柱穴は、調査区外のため検出できなかった。規模は桁行9.24m（30.5尺）、梁行4.69m（15.5尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で3.5・6・7尺が確認されるが、7尺が主である。梁は7.5・8尺が確認される。主軸方向はN－58.0°－Wである。柱穴は直径20～48cmの円形・楕円形・不整楕円形である。柱痕は円形で、直径は約14～25cmである。また、柱穴hからは腐食した柱材と考えられる木材片が出土した。柱穴覆土は黒色シルトが主で、褐灰色砂質シルト・酸化鉄等を含む。重複は、SB247→SB207の関係がある。出土遺物は上記の通りである。

C 建物群

SB241（第25図）　4区I2・I3・J2グリッドに位置する。構造は身舎の桁行5間、梁行2間である。規模は桁行11.53m（38尺）、梁行3.79m（12.5尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で4・4.5・7.5・8・8.5尺が確認されるが、8.5尺が主である。梁は東側が6・6.5尺である。主軸方向はN－72.0°－Wである。柱穴は直径約11～48cmの円形・楕円形である。柱痕は円形で、直径は約16～22cmである。重複は、SG220→SB241の関係がある。また、新旧は不明であるが、SB246と重複する。遺物の出土はない。

SB246（第25図）　4区I2・I3・J2グリッドに位置する。構造は身舎の桁行4間と推

定され、梁行１間である。但し、ＳＧ220と重複地点では、黒色土層中での重複のため、遺構の検出が難しく、東から１間目の柱穴は南北両側とも検出できなかった。規模は桁行10.61ｍ（35尺）、梁行5.15ｍ（17尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で8.5・10尺が確認される。梁は17尺である。主軸方向はＮ－73.0°－Ｗである。柱穴は直径25～38㎝の円形が主である。柱痕は円形と方形確認され、直径は約20～24㎝である。重複は、ＳＧ220→ＳＢ246の関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ241と重複する。遺物の出土はない。

Ｄ建物群

ＳＢ226（第26図）　５区Ｌ２・Ｌ３グリッドに位置する。構造は身舎の桁行３間のみが確認された。対になる柱穴の並びは、調査区外に存在すると思われる。規模は桁行5.31ｍ（17.5尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で5.6・5.9・６尺と不揃いである。主軸方向はＮ－65.0°－Ｗである。柱穴は直径約42～58㎝の円形・楕円形である。柱痕は、円形または隅丸方形を呈し、直径は約20㎝である。掘り方覆土は黄褐色シルトを含む暗褐色シルトが主である。重複は、ＳＫ225→ＳＢ226の関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ245と重複する。遺物の出土はない。

ＳＢ245（第26図）　５区Ｌ２グリッドに位置する。構造は身舎の桁行３間、梁行１間である。規模は桁行5.03ｍ（16.6尺）、梁行3.24ｍ（10.7尺）を測る。柱心心間の距離は、桁で5.2・5.4・5.6尺が確認される。主軸方向はＮ－27.0°－Ｅである。柱穴は直径約22～32㎝程の円形・隅丸方形である。柱痕は円形で、柱穴ｇで約22㎝である。掘り方覆土は、にぶい黄褐色シルトを含む黒褐色シルトが主である。重複は、ＳＢ245→ＳＤ221の関係がある。また、新旧は不明であるが、ＳＢ226と重複する。遺物の出土はない。

３　土　　坑

土坑は８基をとりあげる。遺構の輪郭が明瞭で、覆土が中近世の柱穴と考えた遺構の覆土に類似することより、この時代に位置づけた。しかし、ＳＫ240以外は、時期決定が可能な遺物がほとんど出土せず、平安時代の土坑も混在している可能性は否めない。

ＳＫ２（第28図）　１区中央東側、Ｂ２グリッド北西角で検出された。平面形は長軸148㎝、短軸80㎝の楕円形である。深さは26㎝を測り、底面は東側がやや落ち込む。西側壁面は緩やかに立ち上がり、ＳＫ64に接する。覆土は黒褐色シルトの自然堆積である。ＳＸ64と重複し、平面では新旧関係は不明瞭であったが、断面の観察で、ＳＸ64→ＳＫ２の新旧関係と判断した。遺物の出土はない。

ＳＫ16（第28図）　２区中央南側、Ｅ３グリッドで検出された。平面形は直径114㎝の円形を呈する。深さは16㎝で、壁面は浅い皿状に立ち上がる。覆土は黒褐色シルトの自然堆積である。遺物の出土はない。

ＳＫ57（第28図）　２区中央西側、Ｆ３グリッドで検出された。平面形は一辺120㎝の隅丸方形を呈する。深さは12㎝と浅く、底面はなだらかである。覆土は黒褐色シルトの自然堆積である。ＳＢ99ＥＢ58と重複し、ＳＢ99ＥＢ58→ＳＫ57の新旧関係が認められる。遺物の出土はない。

ＳＫ206（第28図）　４区南東、Ｇ３グリッド西側で検出された。平面形は長軸216㎝、短軸80

cmの楕円形を呈する。深さは26cmを測る。底面には、二ヶ所の落ち込みが認められる。覆土は、にぶい黄褐色砂の上に黒褐色シルトが自然堆積する。重複は、土坑南西部分で、番号登録していない浅い溝を切る。遺物の出土はない。

ＳＫ225（第28図）　５区北西部、Ｌ２グリッド中央で検出された。平面形は長軸234cm、短軸116cmの不整楕円形を呈する。深さは28cmで、壁面はなだらかな傾斜で立ち上がる。覆土は黒褐色シルトを主とする自然堆積層で、黄色風化礫を少量含む。ＳＢ226ＥＢ227と重複し、ＳＫ225→ＳＢ226ＥＢ227の関係がある。遺物の出土はない。

ＳＫ239（第29図）　４区北端、Ｊ３グリッド北西角で検出された。ＳＤ233に南側を切られている。残存部は長軸86cm、短軸57cmの隅丸長方形である。深さは23cmを測る。北壁の立ち上がりは垂直に近い。底面は概ね平坦である。覆土は灰黄褐色シルトの自然堆積層である。重複は上記の通り、ＳＫ239→ＳＤ233の関係がある。遺物の出土はない。

ＳＫ240（第29図）　４区北端、Ｊ３グリッド北西隅で検出された。平面形は長軸124cm、短軸99cmの隅丸方形である。深さは11cmと浅く、底面はほぼ平坦である。覆土は褐灰色シルトの上に黒褐色砂質シルトが自然堆積する。覆土中から、第39図33瓷器系陶器甕が出土した。重複は、ＳＤ234→ＳＫ240の関係がある。

瓷器系陶器甕

ＳＫ266（第29図）　６区北、Ｆ３グリッド西側で検出された。平面形は不整円形を呈し、長軸166cm、短軸132cm、深さは16cmで、底面は概ね平坦である。覆土は灰黄褐色砂の上に黒褐色シルトが自然堆積する。遺構の中央よりやや南側に柱穴が一基検出されたが、新旧関係は不明である。遺物の出土はない。

４　性格不明遺構

４基をとりあげる。その他、ＳＸ15は、風倒木痕と考えられ遺物の出土もないため、記述を省略する。

ＳＸ41（第29図）　１区南東部、Ｂ１グリッドの西側で検出された。残存する平面形は南北方向（長軸）255cm、東西方向（短軸）200cmの隅丸三角形である。深さは18～43cmを測る。東壁はゆるやかな傾斜を見せるが、西側の壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は、東側から西側にかけてやや傾斜している。断面では、遺構中央にこの遺構を切る柱穴が確認されたが、湧水が多く、平面に図化できなかった。覆土は黒褐色シルトの自然堆積が主である。ＳＰ95をはじめとする柱穴群と重複し、ＳＰ95・その他の柱穴群→ＳＸ41の新旧関係がある。遺物の出土はない。

ＳＸ64（第28図）　１区東部、Ｂ２グリッドで検出された。平面形は東西方向を直径とする半円形に、北西部へ突き出した部分を加えた形状をしている。長軸222cm、短軸110cm、深さは30cmである。壁面はゆるやかにカーブして立ち上がる。覆土は黒褐色シルトの上に黒色シルトが自然堆積する。ＳＤ17・ＳＫ２と重複し、断面の観察から、ＳＸ64→ＳＫ２の関係を確認した。しかし、ＳＤ17との新旧は、平面の観察ではＳＤ17→ＳＸ64と判断したが、断面では、この前後関係を明確に確認することができなかった。その他、西側を２基の柱穴が切る。遺物の出土はない。

ＳＸ65（第29図）　２区南部、Ｅ３グリッドの南西隅で検出された。掘り方の平面形は不整楕

円形で、長軸235cm、短軸185cmである。当初、ＳＤ４に切られる別の遺構と考えた。しかし、ＳＤ４に破壊されたとすれば、溝内にこの遺構に伴う礫の抜き取り痕が確認されるはずであるが、そのような痕跡は検出されなかった。ゆえに、ＳＸ65は、ＳＤ４に付属する水溜めや洗場的な役割をもつ遺構と捉え直した。この内側施設の平面形状は、長軸130cm、短軸78cmの、北東方向に開いたコの字形で、周囲に10～35cm大の礫を30個余り組んで構築している。ＳＤ４内に直交して、水を堰き止める役割と考えられる長さ65cmの扁平な礫が設置されており、この部分が最も深くなる。深さは28cmを測る。覆土は黒褐色・暗褐色シルトが主の自然堆積である。出土遺物は、第39図36の瓷器系陶器甕が出土し、２区ＳＸ114出土の破片と接合した。

ＳＸ114（第31図）　２区の南端、主にＤ２グリッドで検出された。平面形は、不整円形を中央にして、東西にそれぞれ不整楕円形状の張り出し部分をもつ不規則な形状である。東西の最大長は506cm、南北の最大幅は354cmである。深さは概ね５cm程度で、西端部の不整楕円形の部分のみ25～40cmの深さに掘り込まれる。掘り込みの底面は不整楕円形で概ね平坦である。掘り込み部分の壁面については、東西ともに傾斜はほぼ垂直に近く、西側の壁は中間で段がつく。覆土は掘り込み部分に黒色シルト、その他の部分には灰黄褐色砂と黒色シルトが自然堆積する。重複は、ＳＸ114→ＳＤ４・ＳＤ115の関係がある。主な出土遺物は、第39図23青磁碗、第39図31・35瓷器系陶器甕、第40図42瓷器系陶器鉢などがある。形状から、風倒木痕の可能性がある。

青　磁　碗

5　溝　　跡

溝跡は、遺構登録したもので、41条検出されている。溝跡の性格としては、建物に付属し雨落ち溝や排水用の溝と考えられるもので、浅く幅も狭いもの、屋敷地の区画や境界用の溝と考えられるもので、建物の軸に沿った向きをとるもの、排水や用水用の溝と考えられるもの、などがある。遺構番号順に内容を述べる。

ＳＤ４（第31図）　２区の南側、主にＤ２からＥ３グリッドにかけて検出された。調査区内の検出長は約15ｍである。北東は２区東壁から始まり、南西は１区と２区の境界まで延びる。北方向に張出すように緩やかなカーブを描く。幅は0.2ｍ～１ｍである。中央には人為的に枡状に石を組んで水を溜めたと考えられる遺構、ＳＸ65が付属し、この幅は1.5ｍを測る。深さは、中央部で約20cm、両端に近づくほど徐々に浅くなる。開田の際に上部を削平され、本来より浅いと考えられる。覆土は、にぶい黄褐色または灰黄褐色砂が主体で、概ねレンズ状の堆積を呈する。他の遺構との重複は、ＳＤ５・ＳＤ６→ＳＤ４の関係がある。用水用の溝跡の可能性が考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ５（第31図）　２区の南側、Ｄ３からＥ３グリッドにかけて検出された。検出長は約９ｍである。北はＥ３グリッドほぼ中央から始まり、Ｄ３グリッドほぼ中央まで南北に直線的に延びる。幅は約１ｍを測る。深さは、約12cmである。覆土は、灰黄褐色砂の上に黒褐色砂質シルトがレンズ状に堆積している。重複は、ＳＤ５→ＳＤ４の関係がある。遺物の出土はない。

ＳＤ６（第31図）　２区の南側、Ｅ３グリッドの北東から南西角に向かって直線的にのびる。検出長は約７ｍである。幅は0.3～１ｍで、北が狭く南に延びるに従って幅が広くなる。深さは９～24cmで、北が浅く南側にかけて深くなる。覆土は、灰黄褐色砂の上に黒褐色シルトが堆

積する。重複は、南端でＳＤ６→ＳＤ４の関係が認められる。北端ではＳＤ７・８と重複するが、新旧関係は不明である。遺物の出土はない。

ＳＤ７（第31図）　２区の中央東側、Ｅ３グリッドの北東部寄りで検出された。北西から南東に向かって直線的にのびる。検出長は約6.7ｍである。幅は約0.2ｍ～0.5ｍで、ＳＤ６およびＳＤ８と切り合う中央部で広くなり、南東端で最も狭くなる。深さは、中央の最深部で約20㎝を測る。覆土は、灰黄褐色砂質シルトの上に褐灰色砂質シルトが自然堆積する。北西端でＳＤ９と、中央でＳＤ６およびＳＤ８と重複関係があり、北西端ではＳＤ７→ＳＤ９の新旧関係が認められるが、中央の新旧関係は判然としない。建物に伴う溝跡と考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ８（第31図）　２区の中央東側、Ｅ３グリッドの北東隅で検出された。北東から南西に向かって直線的にのびる。検出長は約3.5ｍである。幅は0.2ｍ～0.3ｍで、ＳＤ７と切り合う南西端で最も広くなる。深さは中央で約15㎝を測る。覆土は黒褐色シルトが主である。ＳＤ７と重複するが、新旧関係は不明である。建物に伴う溝跡と考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ９（第31図）　２区のほぼ中央、Ｅ３およびＦ３～Ｆ４グリッドにかけて検出された。東端から北西に向かって直線的に約５ｍ延び、北端で緩やかなカーブを描きながら南西方向に90°向きを変える。南西方向にはほぼ直線的に約11ｍ延び、検出長は約16ｍとなる。幅は約0.2ｍ～0.3ｍである。深さは、最深部で約12㎝を測る。覆土は黒褐色シルトまたは黒褐色砂質シルトが主となる自然堆積層である。重複は、ＳＤ７・ＳＤ10・ＳＸ15→ＳＤ９の関係がある。この溝跡は、ＳＢ61・66・78などの掘立柱建物跡を囲むように掘られていることから、これらの建物に伴う溝跡と考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ10（第31図）　２区のほぼ中央、Ｆ３グリッドの中央東寄りで検出された。検出長は約２ｍで、南北方向にほぼ直線的に延びる。幅は約0.2m、深さは約８㎝を測る。覆土は黒褐色砂質シルトが主である。重複は、ＳＤ10→ＳＤ９の関係が認められる。遺物の出土はない。

ＳＤ11（第32図）　２区のほぼ中央、Ｆ３グリッドの北東寄りで検出された。検出長は約2.5ｍで、北東から南西にほぼ直線的に延びる。幅は約0.3m、深さは約７㎝を測る。覆土は灰黄褐色砂の上に黒褐色シルトが自然堆積する。遺物の出土はない。

ＳＤ12（第32図）　２区の中央やや北東寄り、Ｆ４グリッドの西側で検出された。北西から南東方向に約0.5ｍ直線的にのび、90°曲がり南西方向へ約1.2ｍのびる。全長は約1.7ｍとなる。幅は約0.18m、深さは約４㎝を測る。覆土は、灰黄褐色シルトを主とした自然堆積層である。遺物の出土はない。

ＳＤ13（第32図）　２区の中央やや北東寄り、Ｆ４グリッドの西側で検出された。東西方向にほぼ直線的にのびる。検出長は約1.9ｍである。幅は約0.24m、深さは約３㎝を測る。覆土は黒褐色砂質シルトの自然堆積である。遺物の出土はない。

ＳＤ17（第30図）　１区の中央からやや南東寄り、Ｂ１・Ｂ２およびＣ１グリッドにかけて検出された。調査区の東壁より北西方向に約9.0ｍほぼ直線的にのび、90°曲がり南西方向に約6.0ｍのびる。総長は約15.0ｍとなる。幅は0.6～2.0m、深さは約10～25㎝を測る。覆土は、にぶい黄褐色あるいは黒褐色の砂の上に黒色シルトが自然堆積する。他の遺構との重複は、ＳＸ64？→ＳＤ17→ＳＢ20ＥＢ33・ＳＢ42ＥＢ46・ＳＢ80ＥＢ97・ＳＤ18の関係がある。屋敷地を

屋敷地を囲う溝跡

囲う溝跡としての性格が考えられる。主な出土遺物では木製品があり、第49図84の加工材、第53図94～98の杭がある。

ＳＤ49（第33図）　Ｃ１グリッド中央から検出された。１区西壁より、南東方向にほぼ直線的に延びる。検出長は約6.5ｍである。幅は約0.5～0.7ｍ、深さは10㎝を測る。覆土は黒色シルトが主である。ＳＢ50・ＳＢ328の柱穴の他、多くの柱穴と重複し、ＳＤ49→ＳＢ50ＥＢ53・ＳＢ328ＥＢ309・ＳＰ68の新旧関係がある。遺物の出土はない。

ＳＤ101・102（第33図）　３区中央のＨ５グリッド西寄りから検出された。ＳＤ101は、３区北よりの撹乱部南辺から南西にほぼ直線的に延びる。検出長は、約3.4ｍ、幅は約0.3～0.65ｍ、深さは12㎝を測る。覆土は黒褐色シルトが主である。

ＳＤ102は、撹乱から南西へ約1.5ｍほぼ直線的に延びた後、やや南に曲がり、ＳＤ101に切られる。検出長は約2.5ｍである。幅は約0.4～1.2ｍ、深さは16㎝を測る。覆土は黒褐色シルトが主の自然堆積である。前述した通り、ＳＤ102→ＳＤ101の新旧関係がある。ともに出土遺物はない。

ＳＤ113（第31図）　２区拡張区、Ｅ２グリッドの南端で検出された。東北東から西南西方向にほぼ直線的に延びる。検出長は約2.0ｍである。幅は0.14～0.28ｍ、深さは７㎝を測る。覆土は黒色砂質シルトを主とした、自然堆積である。重複関係は、柱穴１基を切っている。遺物の出土はない。

ＳＤ115（第31図）　２区拡張区、Ｄ２とＤ３グリッドの境界で検出された。北北東から南南西方向にほぼ直線的に延びる。検出長は約2.5ｍである。幅は0.2～0.3ｍ、深さは22㎝を測る。覆土は黒褐色砂質シルトの上に灰黄褐色砂が堆積する。重複は、ＳＸ114→ＳＤ115の関係がある。遺物の出土はない。

ＳＤ201（第35図）　４区中央やや南寄り、主にＨ１～Ｈ２グリッドから検出された。北東から南西方向に緩く曲がりながら方向を90°弱変え、南西方向に延びる。検出長は約11.0ｍである。幅は0.2～1.9ｍ、深さは最大17㎝を測る。覆土は、下層に灰黄褐色砂の層が、上層に白色風化礫等を含む黒色シルトの層が、所々黒褐色砂の層と混じりながら堆積する。ＳＤ202と重複し、断面の観察ではＳＤ201→ＳＤ202の新旧関係と考えたが、平面で区別できないことや、堆積状態が複雑であり、同時期や逆の可能性もある。遺物の出土はない。

ＳＤ202（第35図）　４区中央やや南寄り、Ｈ２グリッドから検出された。東南東から西北西方向にほぼ直線的にのび、ＳＤ201とつながる。検出長は約3.2ｍである。幅は最大で0.5ｍ、深さは５㎝を測る。覆土は、黒褐色シルトで風化礫を含む。重複関係については、ＳＤ201の項目で記述した通りである。

ＳＤ203（第34図）　４区南側、主にＨ１～Ｈ２グリッドで検出された。東南東から西北西方向にほぼ直線的に延びる。検出長は約19.5ｍである。幅は最大で1.0ｍで、両端ほど狭くなる。深さは、10㎝を測る。覆土は灰黄褐色砂やシルトが主である。重複は、ＳＤ204→ＳＤ203の関係がある。屋敷地の区画溝としての性格が考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ204（第34図）　４区南側、Ｇ１～Ｈ１グリッドで検出された。北北東から南南西方向にほぼ直線的に13.5ｍ延び、南端でほぼ直角に方向を変え、東北東方向に約4.0ｍ延びる。総長は約19.0ｍである。幅は0.4～1.0ｍで、深さは14㎝を測る。覆土はにぶい黄褐色砂の上に黒褐色

シルトが自然堆積する。重複は、ＳＤ204→ＳＤ203の関係がある。屋敷地の区画溝としての性格が考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ221（第37図）　５区北西寄り、Ｌ２グリッドから検出された。西南西から東北東方向にほぼ直線的に延び、ＳＤ222に合流する。検出された全長は、約5.4ｍである。幅は0.15～0.25ｍ、深さは約10㎝を測る。覆土は黒褐色シルトが主である。重複関係であるが、ＳＤ222とは、断面及び平面で切りあいが認められないことより、同時存在の可能性がある。また重複は、ＳＢ245ＥＢ248･249→ＳＤ221の関係がある。建物に伴うものと考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ222（第37図）　５区北西寄り、Ｌ２とＬ３グリッドの境界付近で検出された。南西から北東方向に落ち込みながら延び、調査区外へと続く。検出された全長は、約3.5ｍである。幅は0.2～1.35ｍ、深さは最大で約50㎝を測る。覆土は黒褐色シルトが主の自然堆積である。ＳＤ221と同時存在の可能性がある。重複は、ＳＤ224→ＳＤ222の関係がある。遺物の出土はない。

ＳＤ223（第37図）　５区北西寄り、Ｌ３グリッド西端で検出された。北西から南東方向に延び、ＳＤ224に吸収される。検出された全長は、約0.8ｍである。幅は約0.25ｍ、深さは約５㎝を測る。覆土は黒褐色シルトが主である。ＳＤ224と重複関係があると考えられるが、平面･断面で新旧を判断できなかった。遺物の出土はない。

ＳＤ224（第37図）　５区北西寄り、主にＬ３グリッド西端で検出された。東北東から西南西方向に約2.6ｍのびる。溝跡西側は狭く、幅は６～15㎝、深さ３～４㎝程度、東側は幅30～80㎝、深さ15～25㎝を測る。覆土は褐色シルトの上に暗褐色シルトが自然堆積する。重複は、ＳＤ224→ＳＤ222の関係がある。また、ＳＤ223と重複するが、新旧は不明である。建物に伴うものと考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ233（第36図）　４区と５区の境界、主にＪ３グリッドを中心に検出された。西北西から東南東方向にほぼ直線的に延び、東側で調査区外へと続く。検出された全長は約16.0ｍである。幅は0.25～1.0ｍ、深さは10㎝を測る。覆土は黒色砂質シルトが主である。重複は、ＳＫ239→ＳＤ233の関係がある。また、ＳＤ234・ＳＤ235と平行に並ぶ配置をとる。屋敷地の区画溝などの性格が考えられる。遺物の出土はない。

屋敷地の区画溝

ＳＤ234（第36図）　４区と５区の境界、Ｊ２～Ｊ３グリッドにかけて検出された。西北西から東南東方向にほぼ直線的に延びる。検出された全長は約3.8ｍである。幅は0.3～0.5ｍ、深さは６㎝を測る。覆土は灰黄褐色砂質シルトの上に黒褐色シルトが自然堆積する。重複は、ＳＤ234→ＳＫ240の関係がある。縄文時代の遺物として剥片が出土しているが、混入である。

ＳＤ235（第36図）　４区北西部、Ｊ２グリッドで検出された。東南東から西北西方向にほぼ直線的に延び、西側で調査区外へ続く。検出された全長は約9.3ｍである。幅は0.2～1.1ｍ、深さは16㎝を測る。覆土は黒褐色シルトが自然堆積する。また、ＳＤ233・ＳＤ234と平行に並ぶ配置をとる。屋敷地の区画溝などの性格が考えられる。遺物の出土はない。

ＳＤ236（第37図）　４区中央南側、Ｈ２とＧ２グリッドの境界付近で検出された。北北東から南南西方向にほぼ直線的に延びる。検出された全長は約3.5ｍである。幅は約0.2ｍ、深さは５㎝を測る。覆土は灰黄褐色シルトの自然堆積である。遺物の出土はない。

ＳＤ237（第37図）　４区中央南側、Ｇ２グリッドで検出された。北東から南西方向にほぼ直線的に延びる。検出された全長は約4.3ｍである。幅は約0.5ｍ、深さは６㎝を測る。覆土は黒

褐色シルトの自然堆積である。遺物の出土はない。

ＳＤ242（第35図）　４区中央西側、Ｉ１～Ｉ２グリッドにかけて検出された。西北西から東南東方向にほぼ直線的に延びる。検出された全長は約8.0ｍである。幅は0.3～0.55ｍ、深さは30㎝を測る。覆土は灰黄褐色シルトの上に黒色シルトが自然堆積する。重複は、ＳＧ220→ＳＤ242の関係がある。遺物の出土はない。

ＳＤ243（第35図）　４区南西角、主にＨ０とＨ１グリッドの境界で検出された。北北東から南南西方向にほぼ直線的にのび、北端はＳＧ220に切られる。検出された全長は約4.2ｍである。幅は0.4～0.7ｍ、深さは５㎝を測る。覆土は黒色シルトが主である。遺物の出土はない。

ＳＤ261（第38図）　６区北、Ｇ３・Ｇ４・Ｈ３・Ｈ４グリッドの境界で検出された。全体の形状は、現代の水道管よる撹乱を受けたり、調査区に延びる部分があるなど、不明な部分が多いが、北東から南西方向に延びる部分と、途中から北西方向に分岐する部分で構成される。北東から南西に至る部分の長さは、7.3ｍ、深さは４区との境界付近で16㎝を測る。覆土は黒褐色シルトを主とした自然堆積である。第54図101石臼と同一個体と思われる破片が出土した。

ＳＤ262（第38図）　６区北、Ｇ４グリッドの北西部で検出された。西北西から東南東方向にほぼ直線的にのび、３区にかかる部分は不明であるが、対応する可能性がある溝状の遺構が認められる。検出部分の全長は約1.6ｍ、幅は約0.4～0.6ｍ、深さは11㎝を測る。溝の両端部が若干くぼむ。覆土は黒褐色シルトを主とした自然堆積である。遺物の出土はない。

ＳＤ263（第38図）　６区北、Ｇ３・Ｇ４グリッドの境界で検出された。東北東から南南西方向に延びるが、南西側を現代の撹乱によって切られる。検出部分の全長は2.5ｍ、残存する最大幅は0.6ｍ、深さは21㎝である。溝の底面は、起伏が多い。覆土は黒褐色砂質シルト、黒褐色シルトの自然堆積層である。遺物の出土はない。

ＳＤ264（第38図）　６区北の南端、Ｆ２グリッドで検出された。両端を水道管の撹乱により切られる。北北東から南南西方向に向けてゆるやかに逆Ｓ字状に延びる。南端部で幅が広くなり、深くなる。６区北で検出された長さは7.0ｍ、６区南でも同一と思われる溝が確認され、この部分を含めた総長は16.5ｍである。幅は0.12～0.76ｍ、深さは15㎝を測る。覆土は灰黄褐色シルトの上に黒褐色シルトが自然堆積する。重複は、ＳＤ264→ＳＰ325の関係がある。出土遺物は、第54図101の石臼、瓷器系陶器甕の破片が出土した。

石　臼

ＳＤ265（第38図）　Ｆ２グリッドの北東側、６区北と４区の南端にまたがって検出された。北端を水道管の撹乱によって切られる。北東から南西方向にかけてカーブして延びる。検出された長さは9.0ｍ、幅は0.36ｍ、深さは約10㎝を測る。覆土は灰黄褐色シルトを主とする自然堆積である。重複は、ＳＤ265→ＳＢ207ＥＢ269の関係がある。遺物の出土はない。

表４　掘立柱建物跡計測表

図版	遺構番号	区	グリッド	構造 桁行×梁行	構造 庇	規模（m） 桁行×梁行	主軸	新旧関係・（　）内は重複するが新旧不明のもの。
13･14	ＳＢ20ａ	1	A1･B0･B1･C1	6×2間	1面	13.62×6.21	N－23.0°－E	SD17・SK90→20a→20b（80）
13･14	ＳＢ20ｂ	1	B1･C1	4×1間	なし	9.69×4.85	N－22.0°－E	SD17→20a→20b（80）
15	ＳＢ42	1	B1･C1	4間	不明	8.48	N－23.0°－E	SD17→42
15	ＳＢ80	1	B1･C1	3×1間	なし	7.21×4.85	N－22.0°－E	SD17→80（20a・20b）
16･17	ＳＢ50	1･6南	C0･C1･D0･D1	5×4間	なし	9.85×8.33	N－23.0°－E	SD49・SD306・SP285・SP298→50→SP281
18	ＳＢ272	1･6南	D1･D2･E1･E2	5×1間	1面	10.69×4.61	N－63.0°－W	272→SX114
19	ＳＢ327	1･6南	D1･D2	3×1間	なし	6.52×3.85	N－64.0°－W	SP297→327
19	ＳＢ328	6南	C0･C1･D0･D1	3×2間	なし	6.36×4.85	N－27.0°－E	SP300→328→SP302・SP304（50）
20	ＳＢ61	2	E3･E4･F3･F4	3？×1間	1面？	6.66？×5.00	N－55.0°－W	61→99(62･66･78･119)
20	ＳＢ62	2	E4･F3･F4	3？×2間	なし？	7.11？×5.00	N－59.0°－W	（61・66・79・99・119）
21	ＳＢ66	2	E3･E4･F3･F4	2？×2間	なし？	5.15？×4.55	N－52.0°－W	SD14→66→SD8（61・62・78・119）
21	ＳＢ119	2	E4･F3･F4	3？×2間	1面？	6.96？×6.12	N－57.0°－W	SD14→119→79（61・62・66）
22	ＳＢ78	2	E3･E4･F3･F4	3？×2間	なし？	5.91？×3.80	N－61.0°－W	（61・66）
22	ＳＢ79	2	F4	2？×1間	なし？	4.69？×4.39	N－57.0°－W	119→79(62)
22	ＳＢ99	2	F2･F3	3×1間	2面	6.36×6.21	N－61.0°－W	61→99→100･SK57(62･119)
23	ＳＢ100	2	F3	2×1間	なし	4.7×3.48	N－34.5°－E	99→100
23	ＳＢ207	4･6北	F1･F2･G1･G2	5×2間	1面	10.72×6.00	N－62.0°－W	247･SD265→207
24	ＳＢ247	4･6北	F1･F2･G2	5？×2間	なし	9.24×4.69	N－58.0°－W	247→207
25	ＳＢ241	4	I2･I3･J2	5×2間	なし	11.53×3.79	N－72.0°－W	SG220→241（246）
25	ＳＢ246	4	I2･I3･J2	4×1間	なし	10.61×5.15	N－73.0°－W	SG220→246（241）
26	ＳＢ226	5	L2･L3	3間	不明	5.31	N－65.0°－W	SK225→226（245）
26	ＳＢ245	5	L2	3×1間	なし	5.03×3.24	N－27.0°－E	245→SD221(226)

※記号ＳＢは省略

6　中世・近世の遺物

（1）　中世陶磁器

中世陶磁器には、中国からの輸入陶器である、青磁・白磁と、国産陶器である、瀬戸・美濃産陶器、信楽焼、須恵器系陶器、産地不明の瓷器系陶器がある。内容について以下に記述するが、法量等の細かい属性については、観察表に示したので、参照されたい。

青磁・白磁（第39図21～24）

青磁２点、白磁２点が出土した。23がＳＸ114の出土であるが、他は遺構外からの出土である。21は、口禿の白磁碗である。胎土は緻密で、微細な黒色粒が認められる。横田・森田分類による白磁Ⅸ類（横田・森田1978）に該当し、13世紀中頃から14世紀初頭に位置づけられる。　**白磁Ⅸ類**

６区南の遺構検出面からの出土である。22は、青磁碗の口縁部破片である。焼成は非常に良好で、胎土は緻密である。内面に、劃花文による、草花と思われる文様が施される。前述の分類では、龍泉窯系青磁碗Ⅰ２ａ類に該当し、12世紀中頃から後半に位置づけられる。23は、青磁碗の体部破片である。内面の底部に近い部分に１条の横方向の沈線が入る。胎土はあまり良好ではなく、貫入が入る。24は白磁皿で、胎土は白色、焼成はあまり良くなく、陶器に近い。外面は、部分的にピンク色を帯びる。貫入が入る。白磁皿Ｂ群（小野1982）に該当し、15世紀に位置づけられる。　**龍泉窯系青磁碗**　**白磁皿Ｂ群**

瀬戸・美濃産陶器（第39図26・27）

２点が出土した。ともに４区からの出土である。近世に含まれるものがあるが、一括して内容を述べる。26は、灰釉折縁皿で、大窯第４段階前半（藤澤1993）にあたる（16世紀末）。内面　**灰釉折縁皿**

志野の皿　は、内削ぎによる文様が入る。27は、志野の皿である。登窯第１小期になる（17世紀初頭）。内面に鉄絵の文様が施される。

信　楽（第39図28）

28の１点のみの出土である。口縁部の破片で、上端はやや間延びした玉縁状となる。ロクロ整形で、無釉である。器面には、長石のふき出しが認められる。胎土は灰白色で、砂粒や小礫が多い。口縁部の形態を考慮すると、16世紀後半以降と考えられる。

瓷器系陶器　**瓷器系陶器**（第39図29～36・第40図37・38・40～43）

当遺跡では、破片数にして21点が出土した。中世陶器の中で最も出土量が多く、遺構中から出土が確認される。甕９点、鉢・擂鉢５点を図示した。産地は不明であり、県内もしくは近隣県で生産されたと推測される。13～14世紀代と捉えておく。

29～36は、甕である。29は、体部上半から頚部にかかる部分で、無釉である。内外面に横方向のナデが入る。赤灰色～灰赤色を呈する。30は、体部上半の、頚部に近い部分である。外面に、頚部との接合がはがれた痕跡がある。灰赤色を呈する。32は、体部上半の部分で、胎土は30とよく似る。31は、体部上半の、頚部にかかる部分である。外面は、オリーブ褐色を呈する。内面はナデ調整を行なっているようであるが、指頭圧痕が残る。胎土は灰白～灰色で、粗砂・小礫を多く含む。35・36は、胎土や内面の状態、同一の出土地点から判断して、31と同一個体と考えられる。35は、体部下半、36は体部中央付近と思われる。内面に、ヘラ状工具による平行なナデが認められる。33は、体部上半の部分である。無釉で、内面には輪積痕が残る。胎土は灰色で粗砂を含む。断面に空隙が認められる。34は、体部下半の破片である。外面は、平滑に丁寧に調整され、内面には指押さえの痕跡と、ナデが認められる。外面の色調や胎土は灰色で、0.5～２㎜程度の白色粒子が目立つ。

37～40は、鉢･擂鉢である。37は、推定口径が314㎜の鉢である。ロクロ整形である。胎土の色調はにぶい赤褐色である。38も鉢の口縁部破片である。口縁端部は、溝状になる。外面の色調は、にぶい褐色で、胎土は灰黄色を呈する。胎土には粗砂・小礫の混入が目立ち、空隙がある。40は、擂鉢の体部破片で、内面に卸目が認められる。胎土に白色粒の混入が目立ち、34と類似する。外面の色調は、灰褐色、胎土及び内面は、黄灰色を呈する。

41は、甕あるいは壷の底部から体部下半にかかる破片である。焼成は良好で、外面に部分的に自然釉が認められる。胎土には、黒色の粒子が含まれ、灰白色を呈する。底面には、平行な線状の痕跡が認められるが、切り離しの痕跡かどうかは不明である。42・43は、鉢の底部である。42は、外面に部分的にナデ調整が認められるが丁寧ではない。内面は使用よると思われる摩滅が認められる。胎土は30に似る。外面は、灰赤色、内面は灰色を呈する。43は、外面にヘラ状工具によるナデが認められる。内面は摩滅している。胎土には、白色の粒子が少量混じる。外面の色調は、にぶい橙色、胎土および内面は黄灰色である。

須恵器系陶器　**須恵器系陶器**（第40図39）

39の１点のみが確認され、１区表土中から出土した。鉢の口縁部である。ロクロ整形で、口縁部の端面はやや丸みを帯びる。残存部に卸目は認められない。胎土は灰色を呈し、緻密で焼成は良好である。12世紀後半から13世紀代に位置づけられると考えられる。

（２）　近世陶磁器

近世陶磁器には、中国産の青花、国産陶磁器として、肥前磁器と、瀬戸・美濃産陶器、産地不明のものがある。瀬戸・美濃産陶器については、中世の項目でまとめて説明したので、それ以外のものについて述べる。出土状況であるが、表土中からの出土がほとんどで、遺構に明確に伴うものはない。

青　花（第39図25）

25は、青花碗である。外面には唐草文と思われる文様が、内面は文様の一部しか分からないが、植物文と思われる文様が描かれる。高台畳付には、籾殻状の付着物が認められる。胎土は白く焼成は良いが、空隙が目立つ。漳州窯産で、16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。

青　花
漳　州　窯

肥前磁器（第40図44・45・47～50）

44・48・49は、肥前産の染付磁器である。44は、一重網目文が施された壷と思われる。外面に釉がかかるが、丸く虫食い状になっている。48は碗で、外面にコンニャク印判の文様が施される。49は、筒型の湯飲碗の底部と思われる。内外面に染付の圏線が施される。これらの年代は、17世紀後半から19世紀である。

肥前染付磁器

45・47・50は、波佐見の染付磁器と考えられる。45は、筒型の湯飲碗と思われる。外面に竹と思われる植物文が施される。47は、碗の口縁部破片である。内面に網目文と思われる文様が施される。50は、碗の底部である。外面の体部下に、２本の圏線が入る。年代は18世紀代である。

波　佐　見

産地不明近世陶器・土器（第40図46・51・52）

産地不明の近世陶器について述べる。46は、小形の陶器碗である。口縁は玉縁状になり、透明釉がかかる。51は擂鉢の体部破片で、卸目が認められる。内外面に、薄く鉄釉が施される。52は、素焼きの土器で鉢と思われる。ロクロ成形である。焼成は良好で、胎土は橙色、口縁端部は黄灰色を呈する。

（３）木　製　品

木製品は、当遺跡出土の遺物で最も出土量が多く、整理箱で21箱が出土した。その大半は、中近世の掘立柱建物跡の柱穴内から出土した、柱材と柱を据えるための礎板である。その他、加工材（板材･角材）、ＳＤ17溝跡からは、杭が出土した。なお、柱材と礎板の内、10点について樹種の同定を行なっている。内容については第Ⅶ章を参照されたい。

柱　材（第40図53～第43図65・写真図版44－102・103）

中近世の掘立柱建物跡の柱材として使用されたものである。16点が出土し、内15点を提示する。丸太材と角材が出土しており、大部分は丸太材である。丸太材は、外皮を除去した後は側面にほとんど加工が認められないものと、側面に面取り加工を施すものがある。角材は２点（第43図65・写真図版44－102）のみの出土である。以下、個体毎に内容を述べる。

丸太材と角材

53は丸太材で、外皮は除去されているが、側面に加工は確認されなかった。遺存状態は、柱の根元部分のみが残り、腐食が進み、内側が空洞化している。底面は、工具により平坦に切断されたと推定されるが、腐食により加工状況は不明である。

54は、角材であると考えられる。腐食が進んでおり、柱の根元に近い部分が残存し、加工痕も不明瞭である。

55は、丸太材である。腐食が進んでいる。外皮は除去されているが、側面には特に加工は認

められない。底面は平坦であり（鋸により切断か）、側面にかかる部分には面取り加工が施されている。

56は、丸太材である。外皮は除去されている。側面の加工の有無は不明である。遺存状態は、柱の根元部分のみが残り、腐食が進み、内は空洞化している。底面の加工状況は不明であるが、平坦に仕上げられたと推定される。

57は、丸太材である。外皮は除去されているが、側面に加工は認められない。遺存状態は、柱の根元部分のみが残り、腐食が進み、中が空洞化している。底面の加工状況は不明であるが、平坦に仕上げられたと推定される。

58は、丸太材である。外皮は除去されており、側面に加工は施されていない。遺存状態は、柱の根元部分が残る。遺存部分は、比較的残りが良好である。底面は平坦であり、鋸により切断したと考えられる。

59は、丸太材である。側面には、外皮を除去した際の、２～３㎝幅の平坦な削りが認められる。遺存状態は、柱の根元部分が残る。腐食により、内が空洞化している。底面は、腐食により加工状況は不明瞭であるが、鋸による切断の後に、部分的に鑿状の工具で底面から側面にかけての部分に面取りを施したと推定される。

60は、丸太材である。遺存状態は、柱の根元部分が残るが、残存部は良好に残り、加工痕は明瞭に観察された。側面は、外皮を除去した後に、縦方向に幅３～５㎝で整形を施している。底面は平坦気味であるが、鑿状工具により４～５㎝の幅で整形している。加重のためか底面には硬化した土が付着していた。

61は丸太材と思われるが、かなり腐食が進んでいる。遺存状態は、柱の根元部分が残る。外皮は除去されている。側面の加工の有無は不明である。材の底面は残っていないため、底面の加工状況は不明である。

62は丸太材である。柱の根元部分が残る。残存部は良好に残り、加工痕は明瞭に観察された。側面は、外皮は除去した後に、縦方向に３～６㎝幅で、荒く整形を施している。底面は、平坦で、擦痕が認められ、鋸により切断したと思われる。硬化した土が付着する。

63は丸太材である。残存部は、柱の根元部分が残る。柱の外皮は除去されているが、側面には加工は施されない。底面は、段差がある切断痕と、より小さい加工痕が認められる。斧等による伐採を行なった後に、鑿等の工具で整形を施したと推定される。材の直径が小さく、曲がりや凹凸が認められることより、建物の柱よりも、支柱等としての役割が推定される。

64は丸太材である。残存部は、柱の根元部分が残る。残存部の残りは良好で、加工痕が明瞭に観察された。材は、１側面を平坦に加工し、断面形は蒲鉾状をなす。側面には、幅３～９㎝幅で、手斧と思われる工具による、縦方向に連続した加工が入る。底面も、鑿状工具による加工が入る。また、硬化した土が付着する。

65は、角材である。柱の根元部分が残る。形状はとどめるものの、腐食が進んでおり、加工痕は観察できなかった。底面は平坦に仕上げられており、硬化した土壌の付着が認められる。

102（写真図版44－102）は、角材である。柱の根元部分が残る。腐食が進んでおり、側面の加工痕は不明瞭である。断面形は、一隅を隅丸状に仕上げている。底面は平坦であるが、腐食により切断された状況は不明瞭である。硬化した土が付着する。

103は、柱材と推定されが、腐食が進み、材の芯の部分のみが残存し原形をとどめていない。

礎　板（第44図66～第49図83・第50図85～第52図91・93）

掘立柱建物跡の柱穴内から出土し、柱を据えるためと考えられる加工材・板材等を一括して「礎板」として提示する。礎板の類型は以下のようなものがある。

礎板の類型

１、丸太材を適当な長さに切断し、それを縦に半裁したもので、２分割や、さらに細かく裁断したものが認められる。縦に断ち割った面は、２次的加工はほとんど施されていない。外面に樹皮が残るものと、ないものがある。前者は加工する前の自然木を使用し、後者は木口に硬化した土の付着が認められることから、柱材等に使用した柱材を転用したものと思われる。

２、角材を適当な長さに切断し、縦に断ち割ったもの。柱材や建築部材の転用と思われる。

３、板材または角材を適当な長さに切断したもの。転用材と思われる。

なお、柱穴内に据えられる際には、柱を据える面が水平になるように、丸い面を下にして据えられる。２段重ねの場合は、丸い面をもつ材を下にし、その上に板状もしくは角材状の材を据えている。以下、個体毎に内容を述べる。

66は、丸太材を半裁したものである。側面外側に外皮が残されていた。裁断された面も、荒割した状況をとどめ、２次的加工は施されていないと思われる。実測図下の木口には、摩滅した状態が観察され、転用材と考えられる。丸太材を鋸で切断し、さらに縦方向に斧などの工具で、断ち割ったと推測される。

67は、板材になる。礎板用に短く裁断されたものである。木口は腐食し、加工状況は観察できない。

68は、丸太材を半裁したものである。側面外側の外皮は除去されるが、２次的な加工は認められない。裁断された面は腐食が進み、２次加工の有無は不明である。木口は、平坦な面を形成しているが、腐食により加工状況は不明である。丸太材を鋸で切断した後、さらに縦方向に斧などの工具で、断ち割ったと推測される。転用材かどうかは不明である。

丸太材を半裁

69は、丸太材を分割して作られたと考えられる。側面外面には、外皮が残されていた。側面内側は、幅2.5～５㎝幅の縦方向に調整された加工痕が確認される。また、硬化した土の付着と、柱が据えられていた痕跡が黒く変色して残っていた。実測図上面の木口は、工具による荒い削り面が入る。下面の木口は平坦であり、鋸による切断と思われる。斧等による伐採された切断面が木口上面にあたると思われる。遺存状況は良好である。

70は、板材になる。表･裏面は平坦であるが、２次的な加工による微小な凹凸が認められる。出土状況では、２片に分離していたが、接合して１個体となった。実測図下面の木口は平滑で、鋸で切断されたと思われる。逆に、上面の木口には凹凸が認められ、伐採時の面が残されている可能性がある。

71は、丸太材を縦に裁断した板材である。実測図裏面は、丸太材の外側になり、局部的に削りの加工が入る。図の表面は平坦であるが、２次加工は施されず、裁断された面がそのまま残されたと推測される。木口は、明瞭に平滑な面を形成しており、鋸による切断が想定される。

72は、丸太材を半裁したものである。側面外側には外皮が残される。裁断された面は、荒割した状況をとどめ、２次加工は施されていないと思われる。両端の木口は平滑な面であり、鋸による切断と思われる。

73は、丸太材を縦に半裁したものである。外皮は除去され、側面外側には、2.5～6㎝幅で縦方向に加工が入る。側面内側は、縦方向に荒割りされた面をそのままとどめ、2次加工は認められない。実測図下の木口は平坦であり、鋸による切断と思われる。図上の木口は、硬化した土の付着が認められるため、建物の柱材として使用したものを切断し、縦に半裁したものを礎板に転用したと考えられる。

74は、丸太材を縦に裁断したものである。外側は部分的に外皮を残すが、実測図裏面の右側は、縦方向に荒く割られたと推測される。内側は、縦に裁断された面をそのままとどめていると思われる。実測図上の木口は平坦で、鋸による切断が想定される。図下の木口は、不規則な割口を示すが、硬化した土の付着が認められ、柱材などの転用と思われる。

75は、丸太材を縦に裁断したものである。外側は部分的に外皮を残すが、加工し平坦な面を作り出している。内側は、断ち割った面に荒く整形を施している。材の心材にあたる部分は、腐食したためか、中空となっている。実測図下の木口は平坦であり、鋸で切断したと推定される。実測図上の木口は、加工により荒く整形される。

76は、板材である。腐食により加工状況等は明瞭に観察されなかった。実測図下の木口は、平坦で鋸により切断されたと考えられる。

77は、板材である。実測図の表面は、平坦に仕上げられ、手斧と思われる工具による加工痕が観察された。右側面にも同様な加工痕がある。右側面と、上下両端の木口は、破損と腐食により、加工状況は不明である。裏面は、荒割りされた面を残し、2次加工は特に見受けられない。外面を丁寧に調整した元は角材状の材を裁断し、断ち割って、礎板に転用したと考えられる。

78は、半裁した丸太材である。外皮は除去されているが、外側に2次的な加工は認められない。内側や木口は、腐食が進み、加工状況は不明である。

79は、裁断された丸太材である。丸太材の外側を1／3以下に縦に断ち割ったと考えられる。外面の外皮は除去されており、外側に2次的な加工は認められない。内側、実測図上の木口は腐食が進んでおり、断ち割った後の加工状況は不明である。実測図下の木口は、硬化した土が付着しており、柱材として使用した後に礎板に転用したと考えられる。

礎板に転用

80は、裁断された丸太材である。丸太材の外側を薄く縦に断ち割ったものと考えられる。外側の外皮は除去されており、外側に2次的な加工は認められない。内側は、平坦な面に仕上げられており、2次的な加工が施されたと思われるが、腐食により加工痕は不明瞭である。実測図下の木口には、硬化した土の付着が認められるため、柱材として使用した後に礎板に転用したと考えられる。

81は、角材を短く裁断し、縦方向にも裁断したと思われる。やや腐食しており、表面の加工痕は不明瞭であるものの、右側面は平坦に加工された面を残す。正面・右側面・裏面は、縦に荒割された面を残し、この部分は二次的な加工は施されなかったと考えられる。上下の木口は、荒く切断された面を残し、斧状の工具による切断が推定される。

82は、丸太材を縦に薄く裁断し、板状にしたものである。外面の外皮は除去されており、外側に2次的な加工は認められない。やや腐食しており、内面や上下の加工状況は不明である。

83は、半裁した丸太材である。外皮の除去後に、3～5㎝幅の縦方向に連続した加工が入る。

実測図左側面と右側面の一部は、外皮を除去した状況をとどめる。裏面は半裁した状態をとどめ、２次的な加工は施されていない。木口は腐食が進んでおり、加工状況は不明である。

85・86は、板材である。共にＳＢ50ＥＢ284からの出土で、接合する。遺存状況は良好で、共に、表面・裏面と側面は、平滑に仕上げられ、加工痕が認められる。上下の木口も平坦に仕上げられており、鋸による切断が考えられる。

87は、板材である。遺存状態は良い。表面には手斧と思われる工具の加工が明瞭に観察された。工具の幅は４～５㎝である。裏面は、平滑に仕上げられているが、やや腐食しており加工痕は不明瞭である。表面中央に、直径1.3㎝程の円形の盲孔があり、下方にも同程度の大きさの穿孔が３ヶ所認められる。下の木口は、鋸により切断したと考えられる。上の木口は、幅４～６㎝で荒い加工痕が入る。

88は、裁断した角材である。遺存状態は良い。外面に、縦方向に２～６㎝の連続した加工痕が入る。角材を縦方向に裁断したと考えられ、裏面は、断ち割った状態をそのまま残したと思われる。下の木口は平坦で、鋸で切断したと考えられる。上の木口は腐食しており、加工状況は不明である。

89は、板材と推定される。腐食が進んでおり、加工痕は不明瞭である。表面は、腐食による凹凸が目立つが、裏面と側面は平坦に仕上げられる。上下の木口は平坦で、鋸により切断されたと考えられる。

90は、裁断した角材である。元は角材の柱材であったものを、薄く裁断したと思われる。遺存状態は良好である。実測図表面には、２～４㎝で荒い加工跡が入る。裏面は平坦であり、鋸で切断されたと考えられる。右･左側面は、平滑に仕上げられる。上側面はやや荒い面を残し、下側面は粗く割りとられたような面を残す。

91は、半裁した丸太材である。外皮を残す。内面は、縦に半裁した後、２次的な加工を施し、平坦に仕上げる。実測図上の木口は、荒い加工痕が認められ、斧等の工具により伐採された際のものと思われる。下の木口は、斜方向にＶ字状に切断され、平坦な面を形成する。鋸等で切り離し、部分的に加工を施したと考えられる。

93は、裁断した丸太材と考えられる。遺存状態は良好である。実測図表面には、３～７㎝幅の荒い加工痕が入る。裏面は、元の材から割りとったと思われる荒い裁断面を残し、２次的な加工は認められない。右側面は、丸太材の外形をとどめる。

加工材・板材（第49図84・第52図92）

柱材・礎板以外のものを一括する。84は、半裁した丸太材である。外皮は除去されており、２次的な加工は認められない。内側の裁断した面の右側の部分には、平坦面が認められ、２次的な加工を施したと考えられる。上下の木口は、腐食が進んでおり、裁断した状況や後の加工状況は不明である。元々礎板として作られたものが廃棄された可能性がある。92は、板材で薄く加工されている。遺存状態は、ほぼ良好である。上下は破損しており、元の長さは不明である。薄い形状から、曲物等の部材の可能性が考えられる。

杭（第53図94～98）

94～98は、丸太材の先端を加工した杭である。すべてＳＤ17からの出土である。3.3～５㎝程の直径で、自然木の先端のみに簡易的に加工を施している。94は、曲がった丸太材を用い、

丸太材の杭

外皮が残る。先端を鉈状の工具によりそぎ落とし、尖らせている。95は、真っすぐな丸太材を用い、先端に同様な加工を施す。外皮は無いが、側面には二次的加工は施されない。96は、まっすぐな丸太材を用い、先端の加工は全周ではなく、荒い加工を片面のみに施す。側面には部分的に外皮が残る。97は、腐食が進んでおり、原形を保っているのは、杭の先端部のみである。先端の加工は全周ではなく、片面のみに施す。残存部については外皮は残っていない。98も、腐食が進んでおり、杭の先端部が原形をとどめる。先端の加工は全周ではなく、2／3程度に先端を尖らせる加工を施す。残存部については、外皮は残っていない。

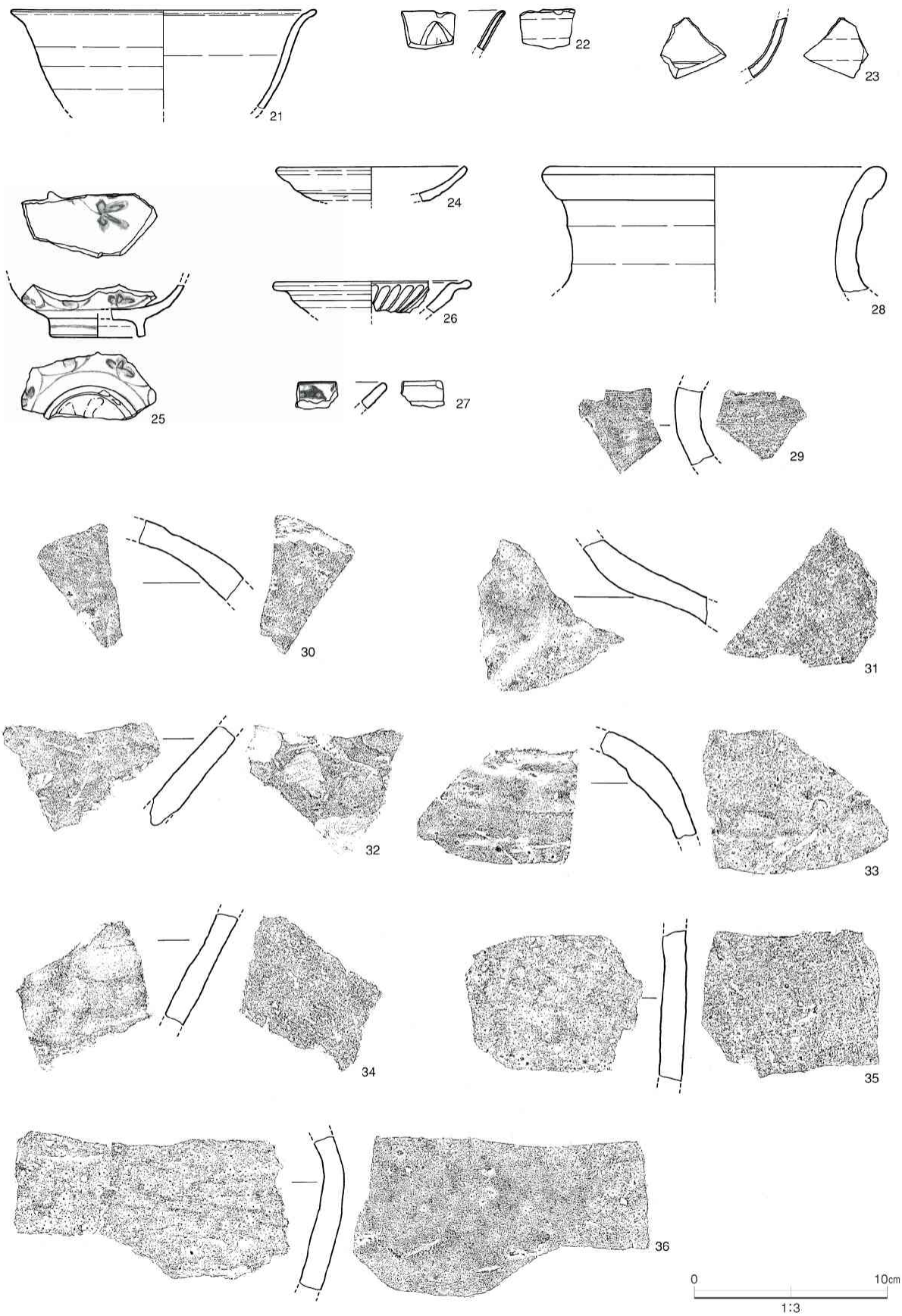
（4）石　製　品

砥　　石　砥石と石臼が出土している。第54図99・100は砥石である。99は、断面は頂部が丸い台形状を呈する。主要な砥ぎ面は3面と思われるが、部分的に研磨された面も認められる。また、敲打使用による窪みが認められる面がある。100は、長方形立方体状を呈し、実測図の正面･裏面の2面に部分的な研磨が認められるが、使用頻度は低いと思われる。

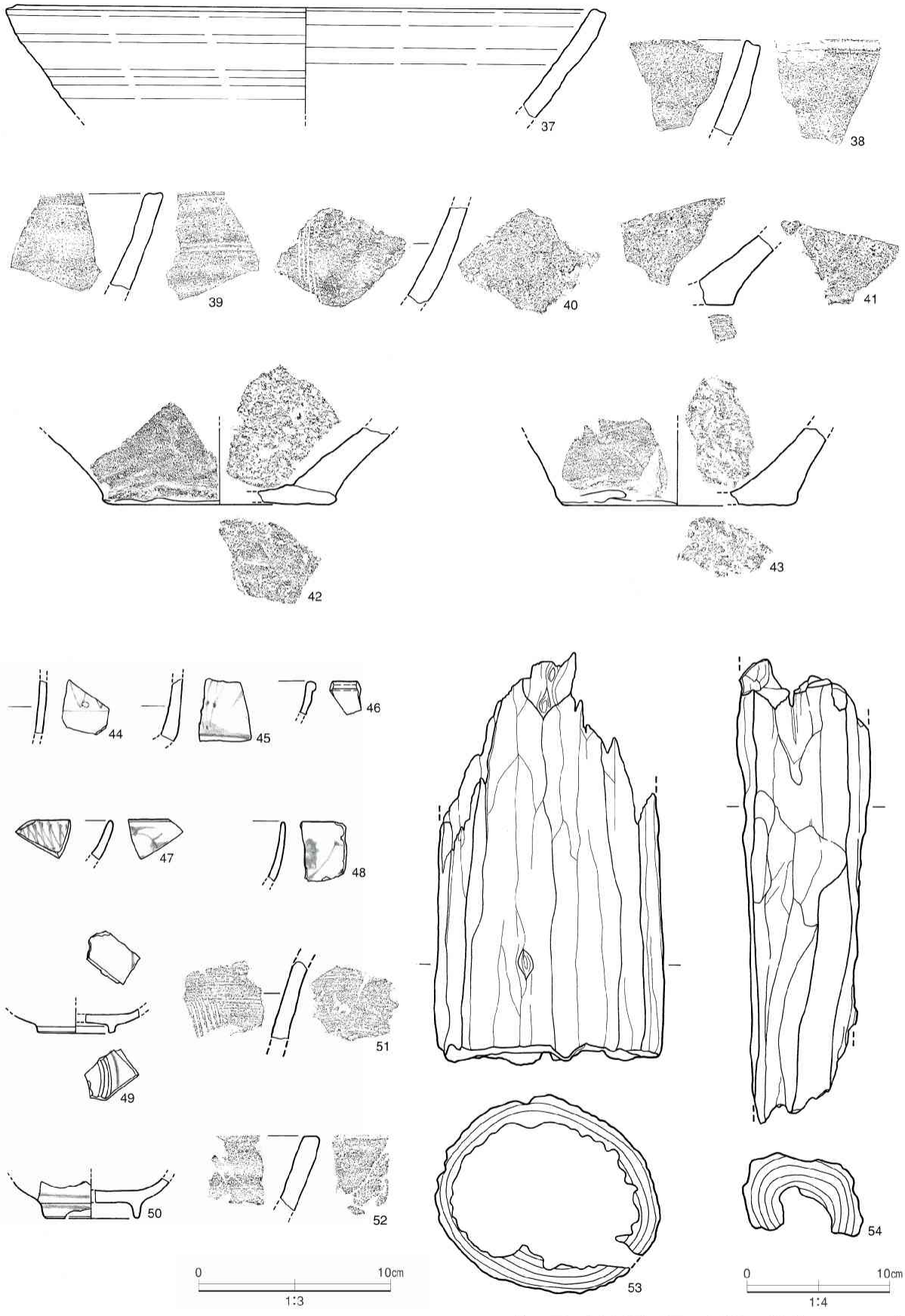
茶　　臼　第54図101は、石臼である。下臼の推定径は324㎜を測る。形態から茶臼と考えられる。上面・側面は、丁寧に研磨されているが、底面には荒い加工痕が残る。破損した断面には、明瞭に漆による接合した痕跡が認められる。

引用文献

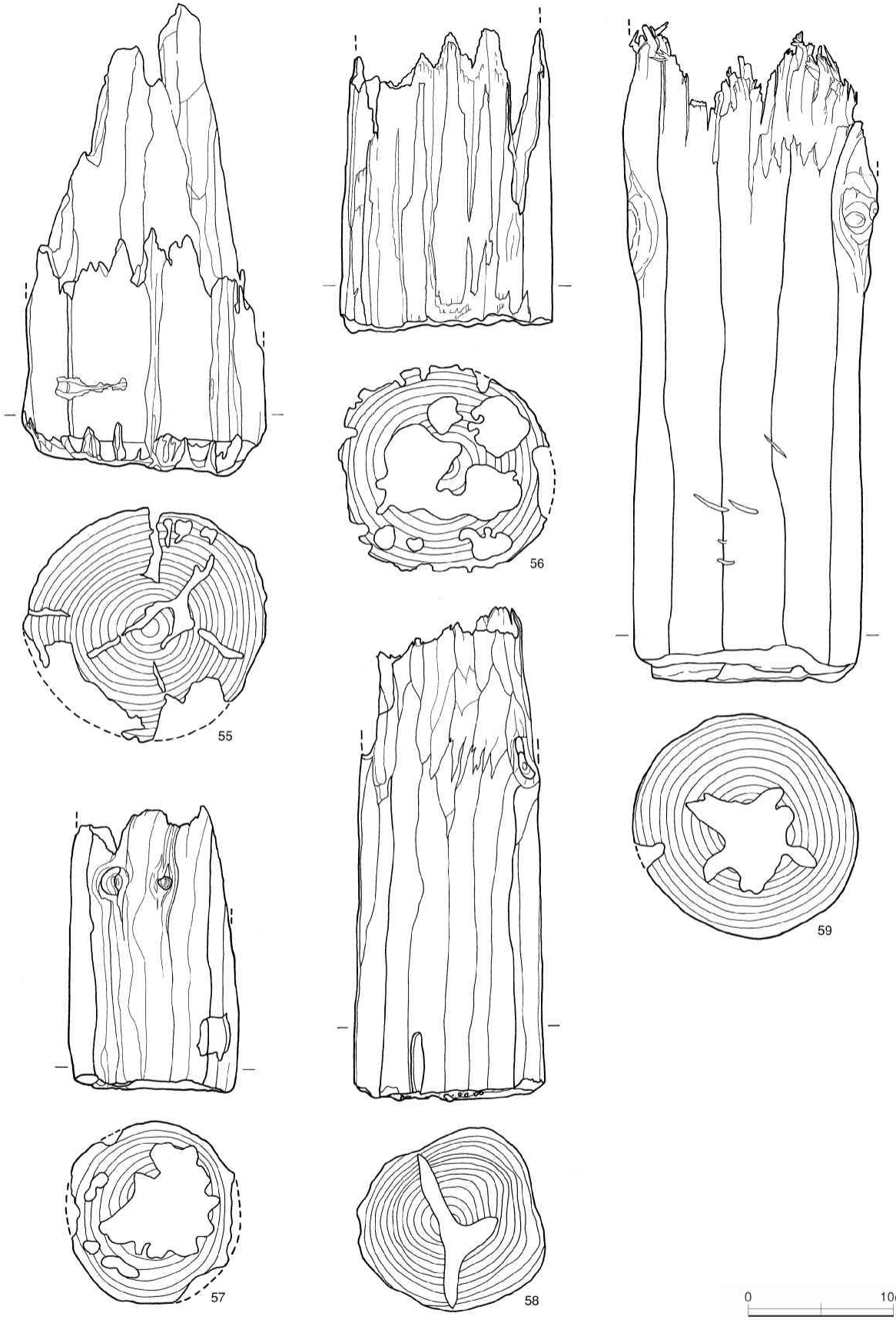
小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2　日本貿易陶磁研究会
藤澤良祐　1993『瀬戸市史　陶磁史篇四』瀬戸市編纂室
横田賢次郎・森田勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4



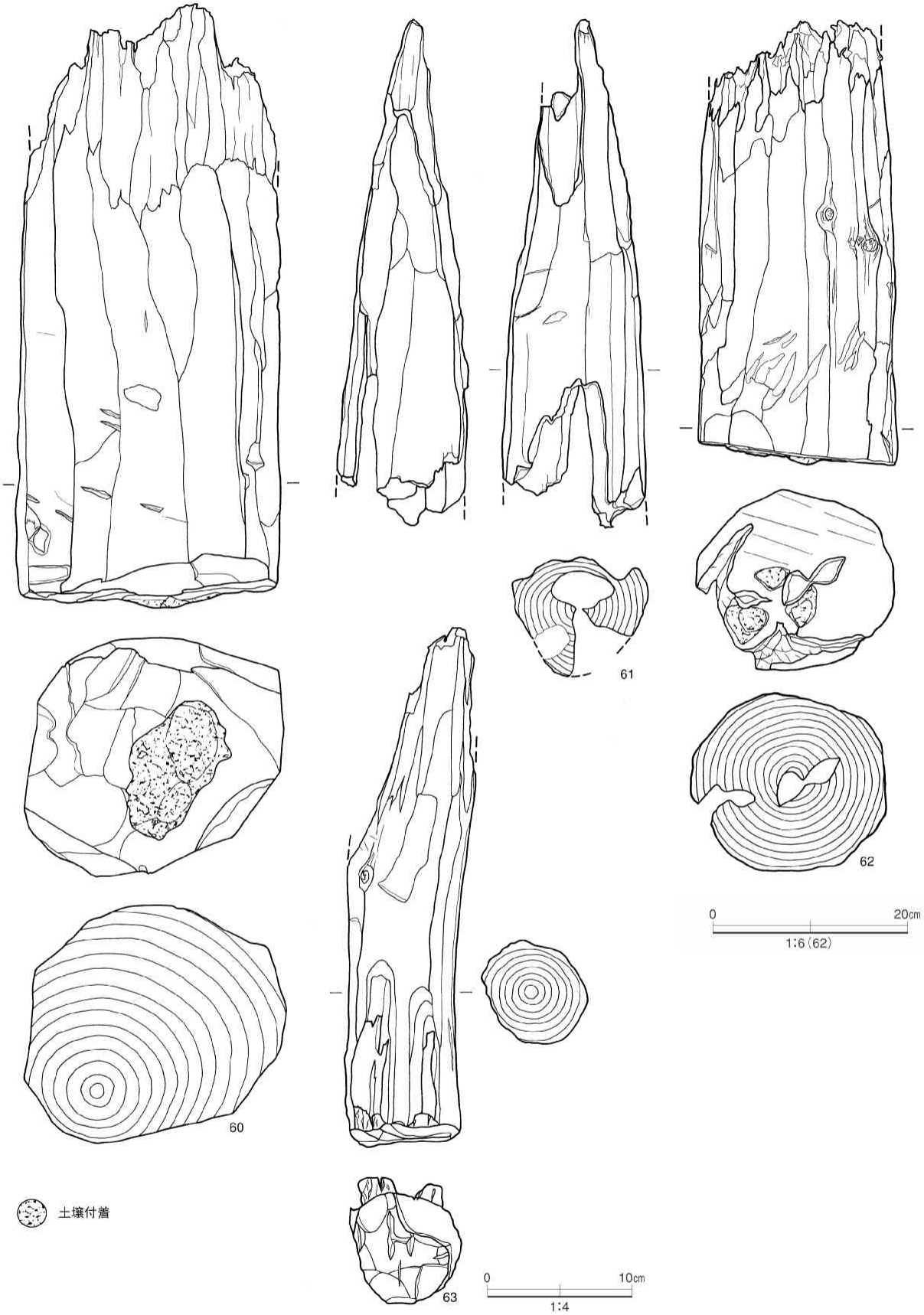
第39図　中近世陶磁器



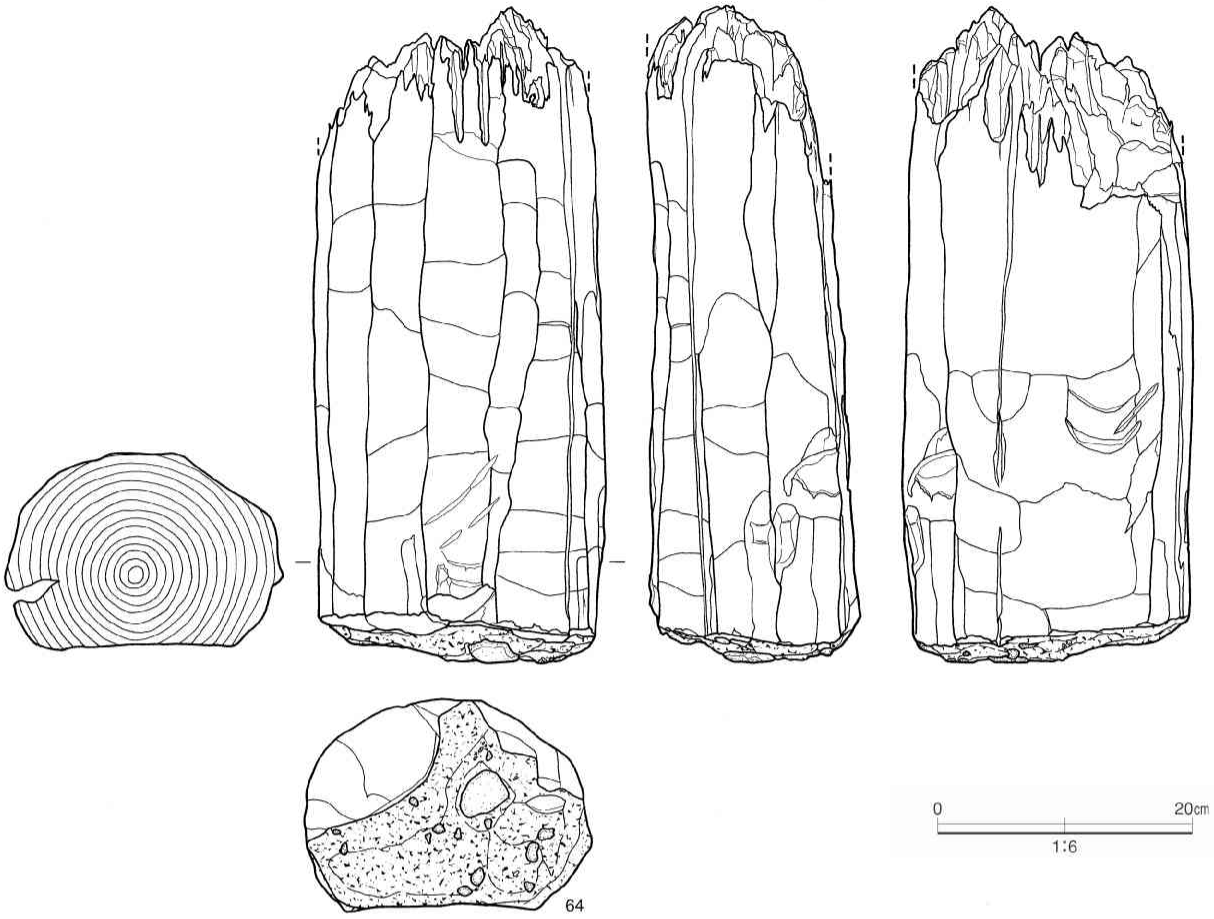
第40図　中近世陶磁器・木製品（柱材：SP67・59）



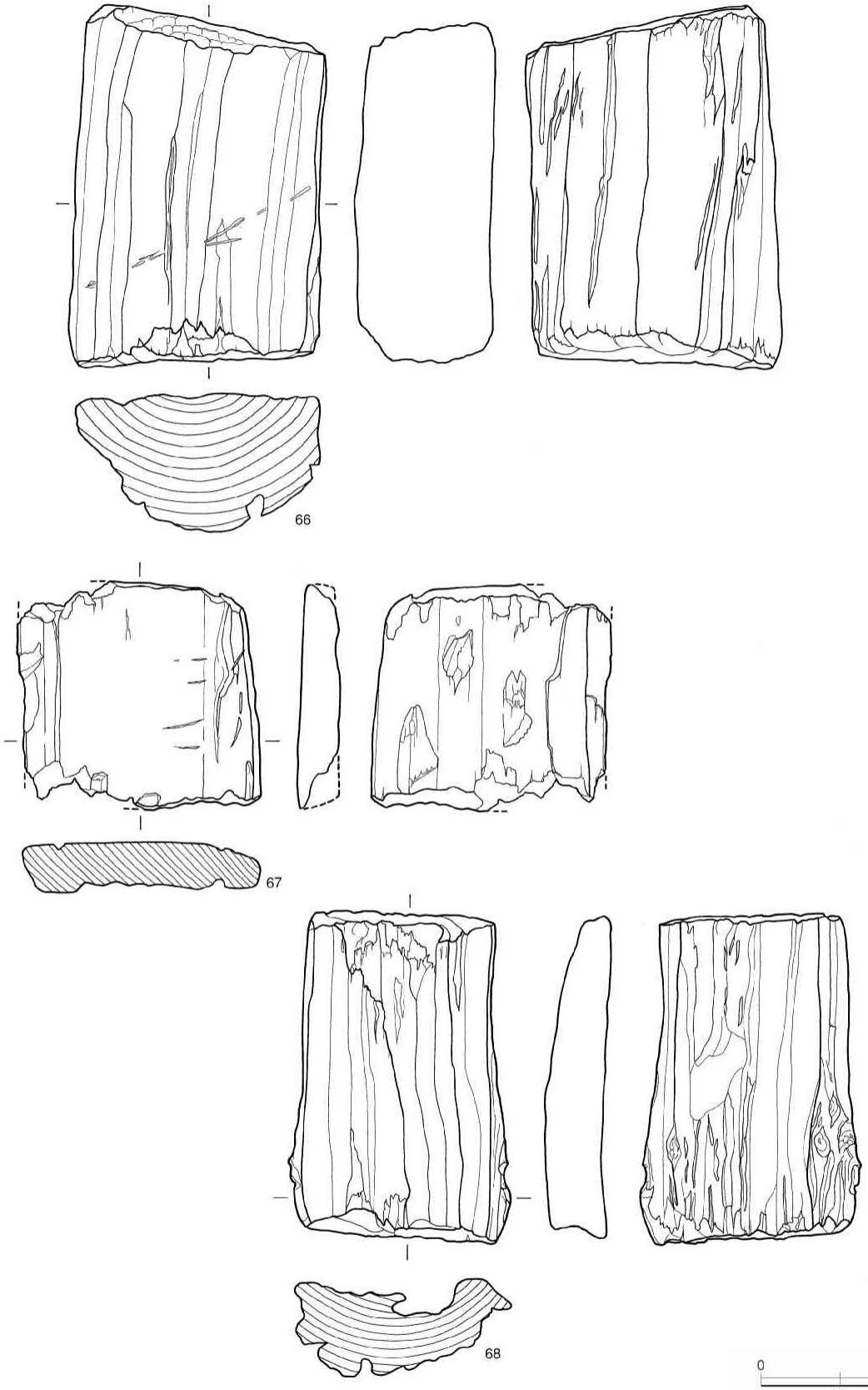
第41図　木製品（柱材：SB66EB60・SP68・71・95・86）



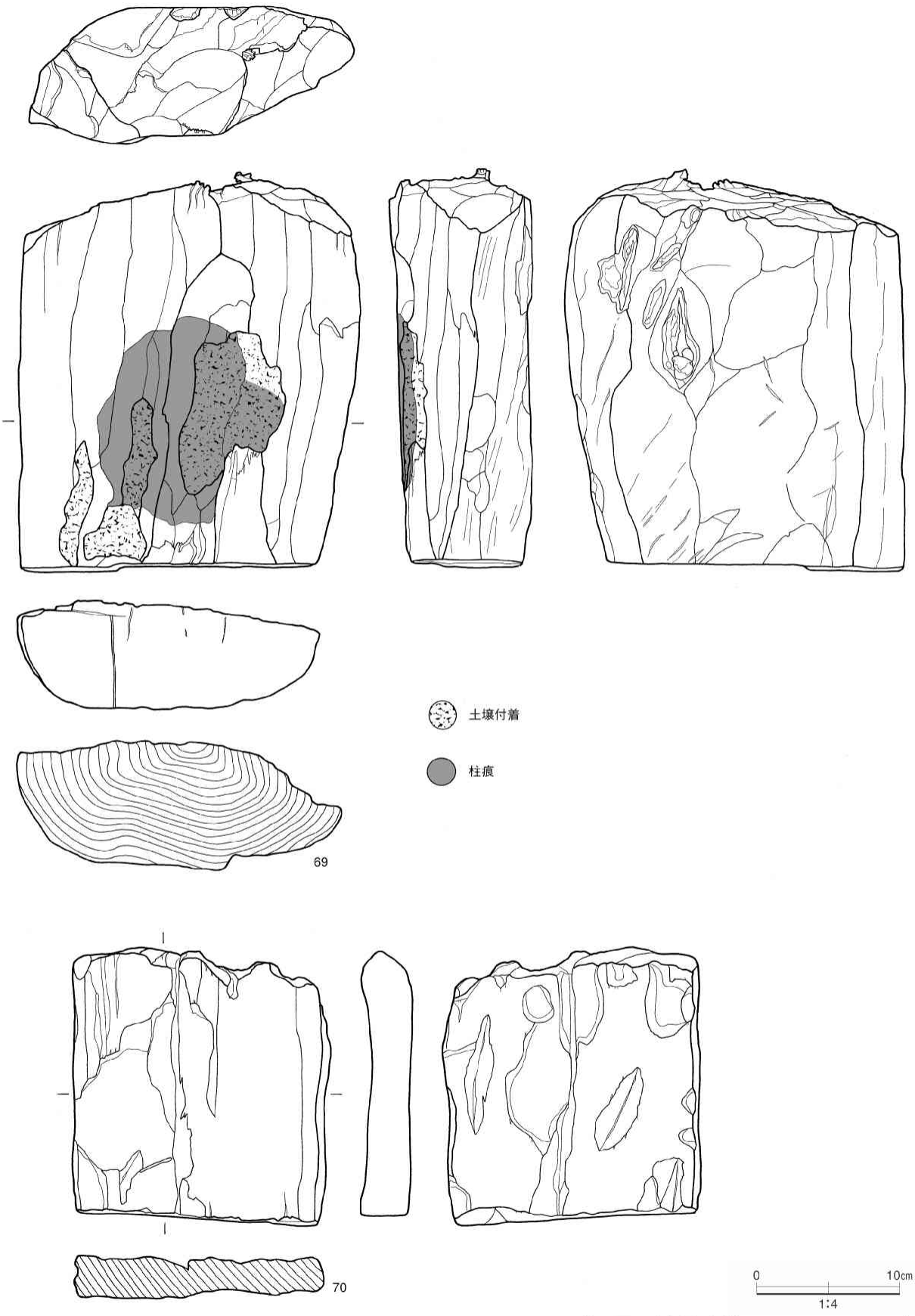
第42図　木製品（柱材：SB207EB212・SB328EB298・SP282・305）



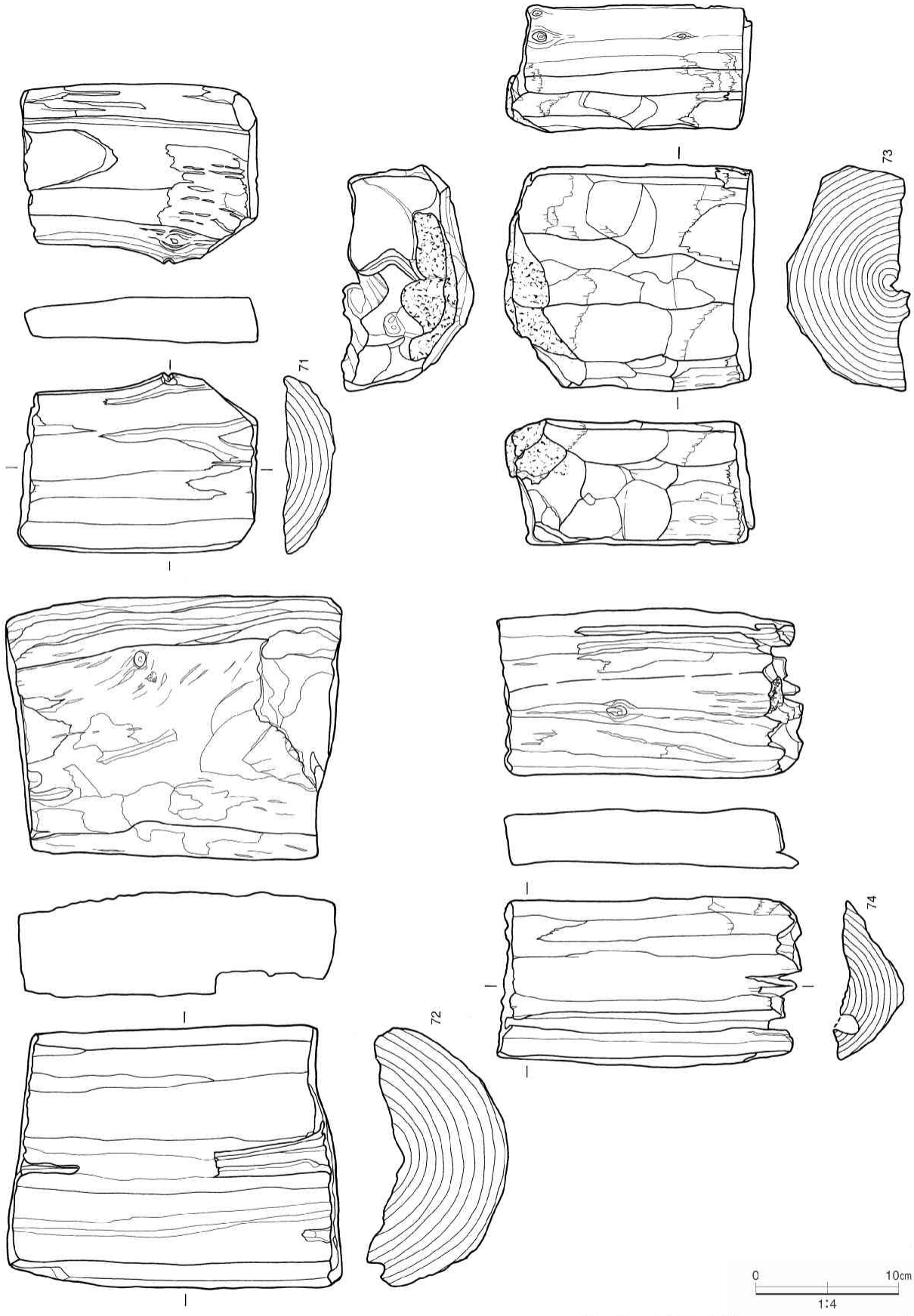
第43図　木製品（柱材：SB50EB286・EB292）



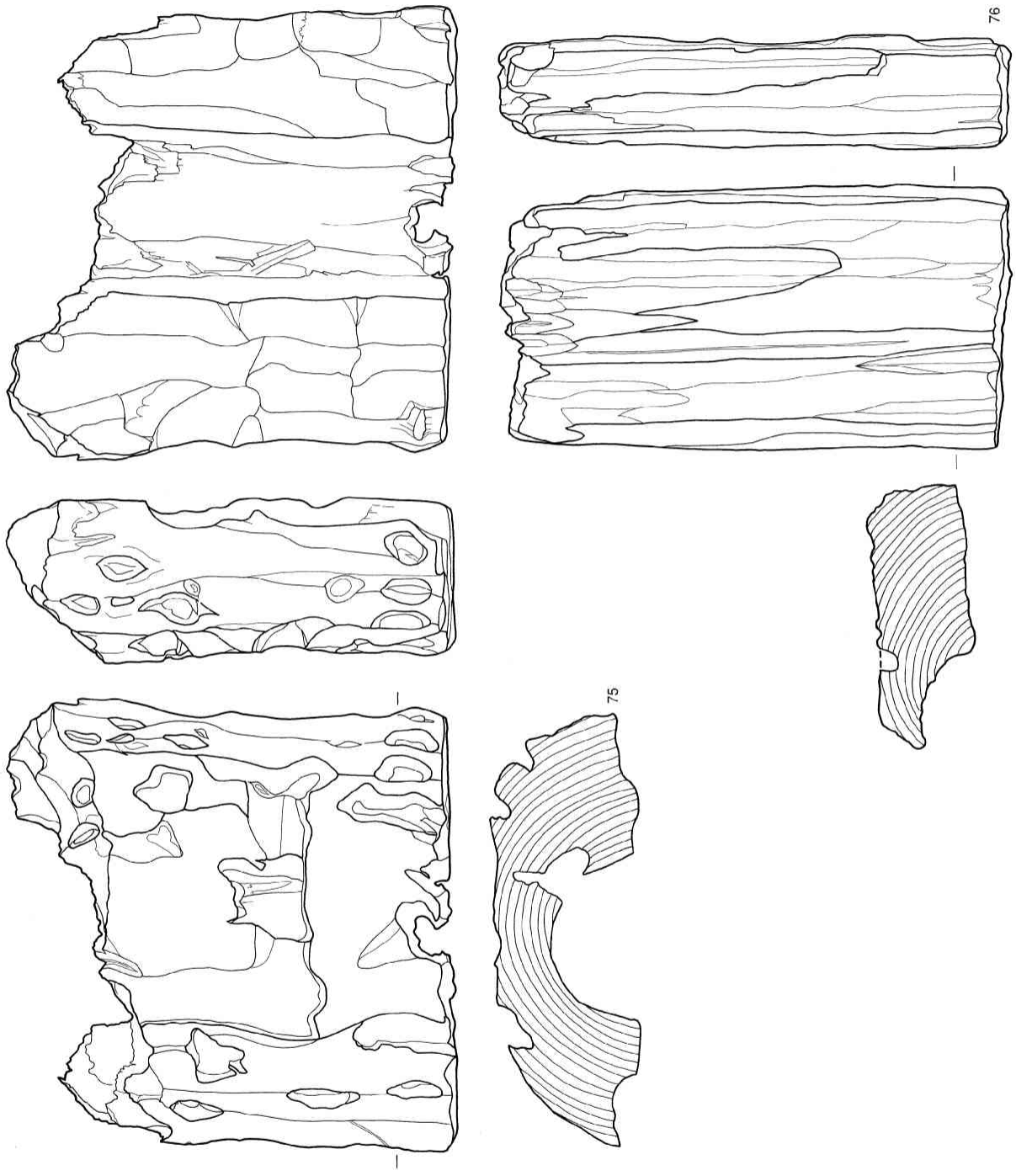
第44図　木製品（礎板：SB20EB23）



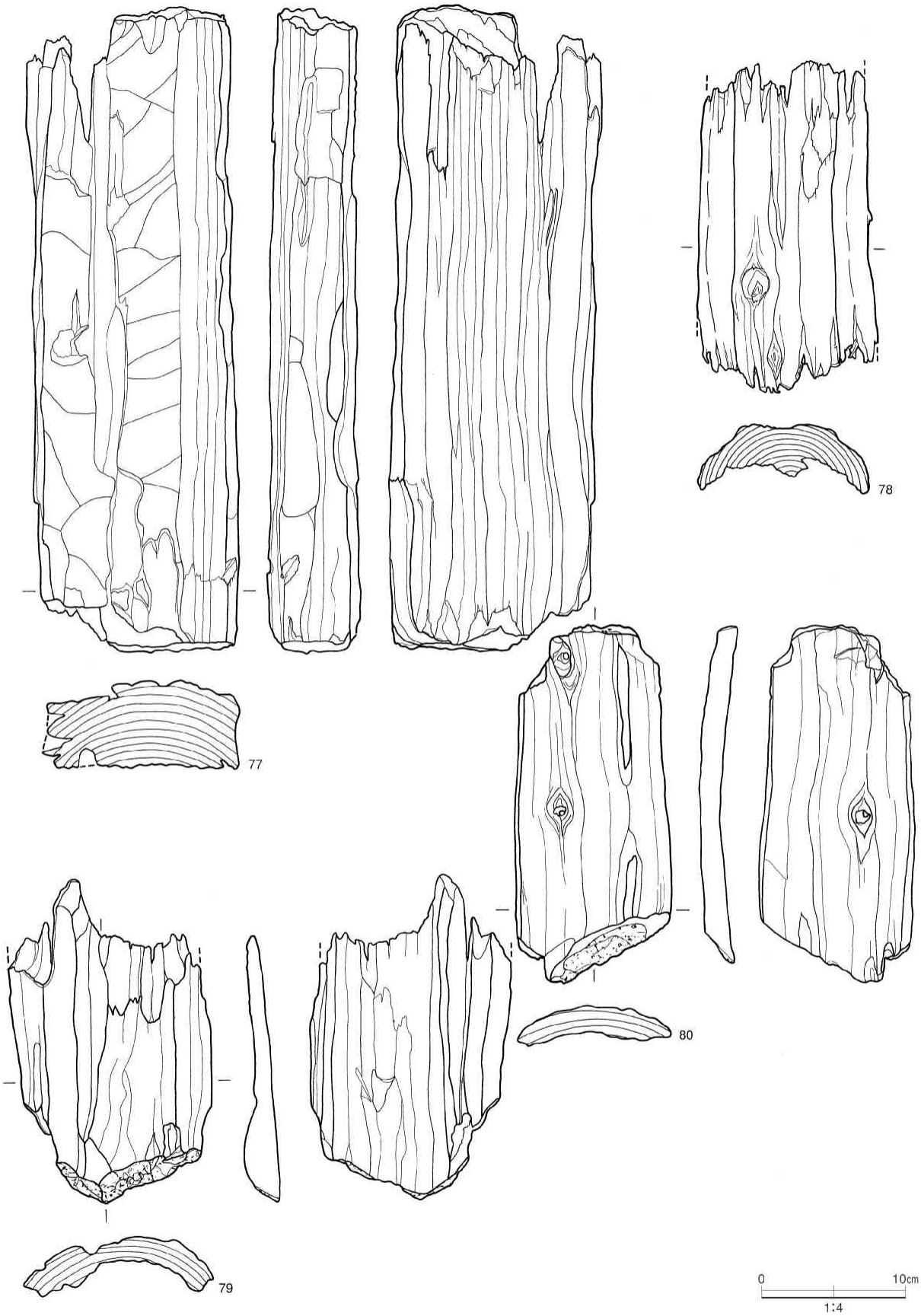
第45図　木製品（礎板：SB20EB25・EB26）



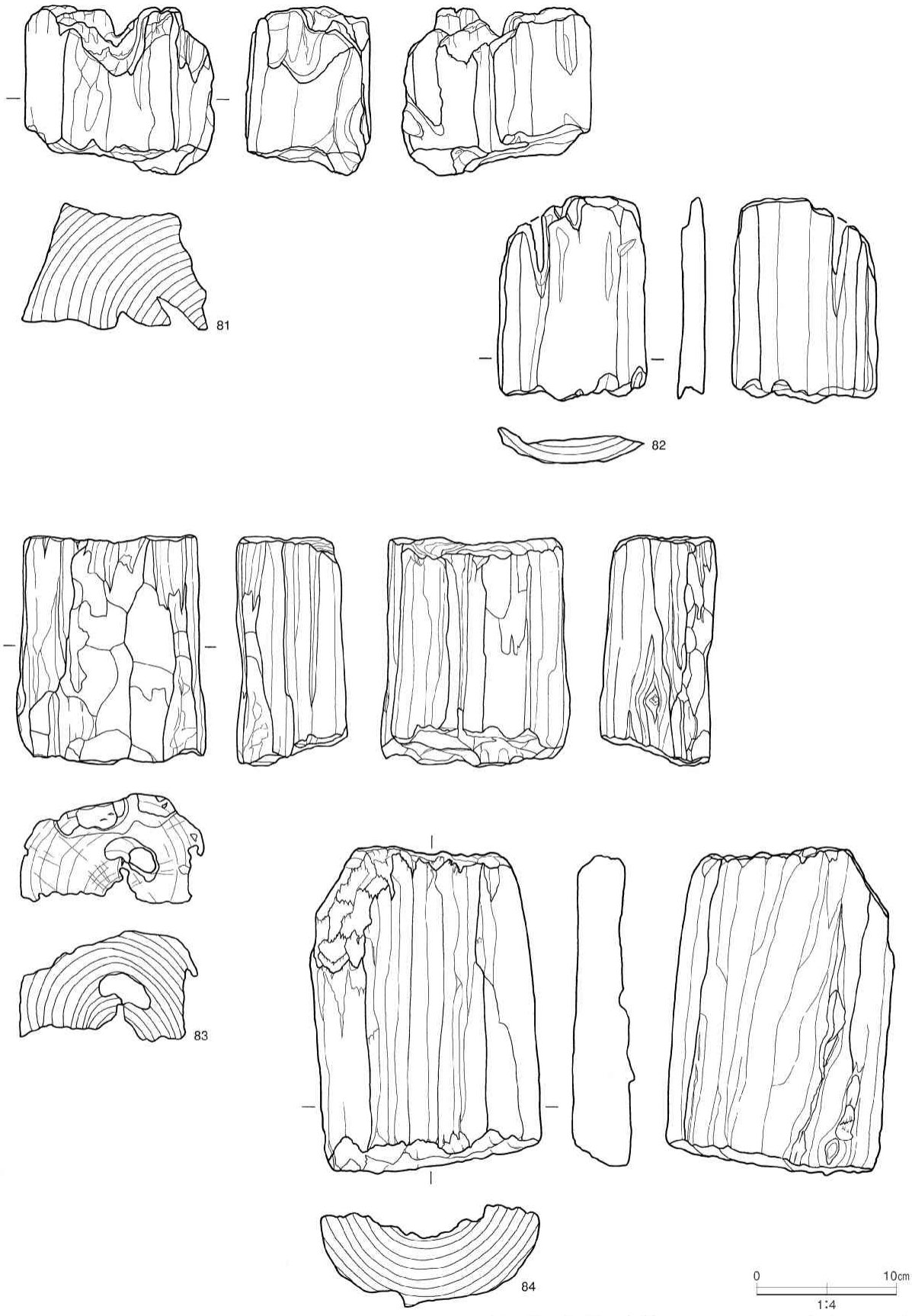
第46図　木製品（礎板：SB20EB39・EB40）



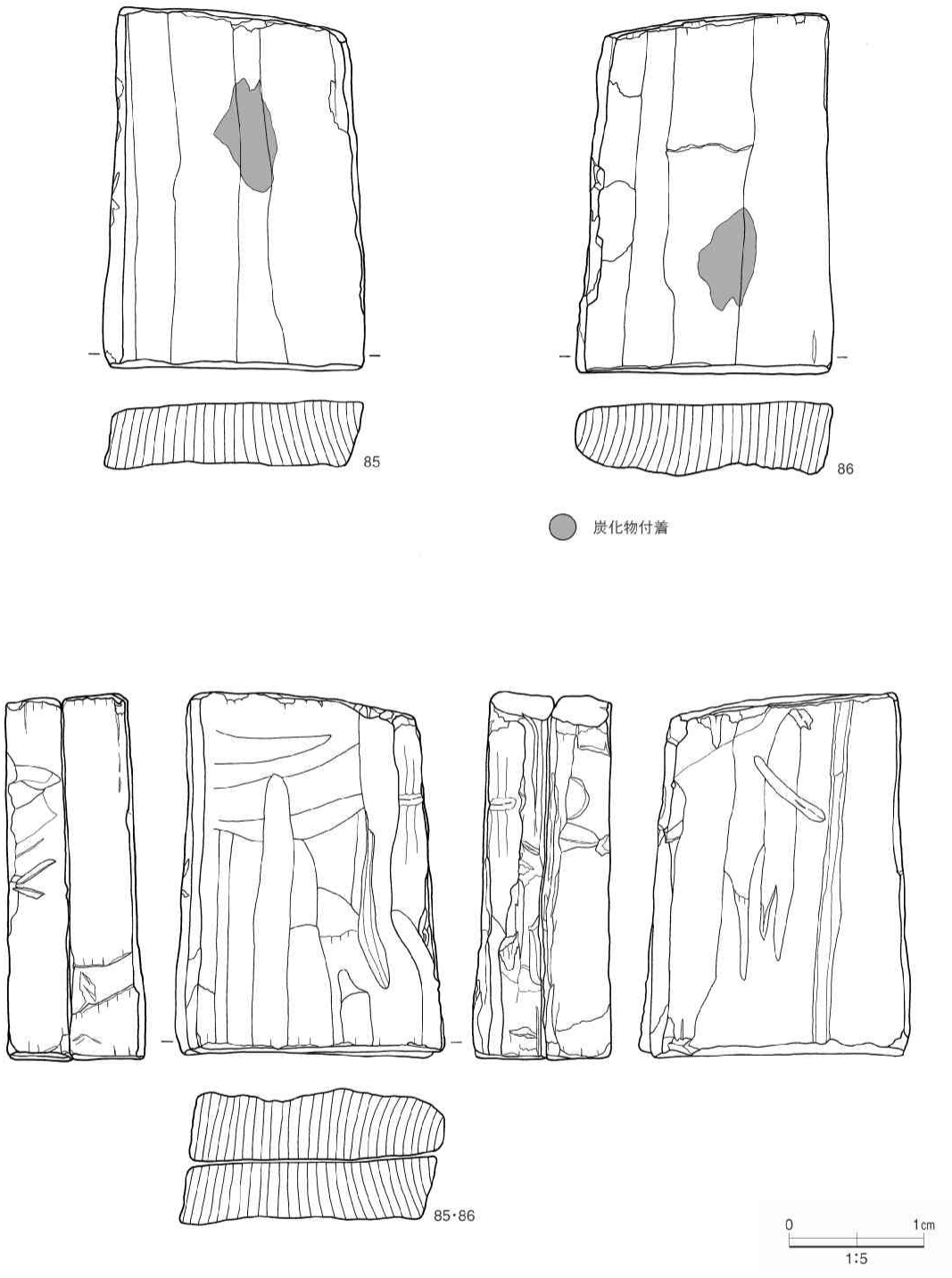
第47図　木製品（礎板：SB50EB51）



第48図　木製品（礎板：SB20EB28・SB50EB53・SP76・87）

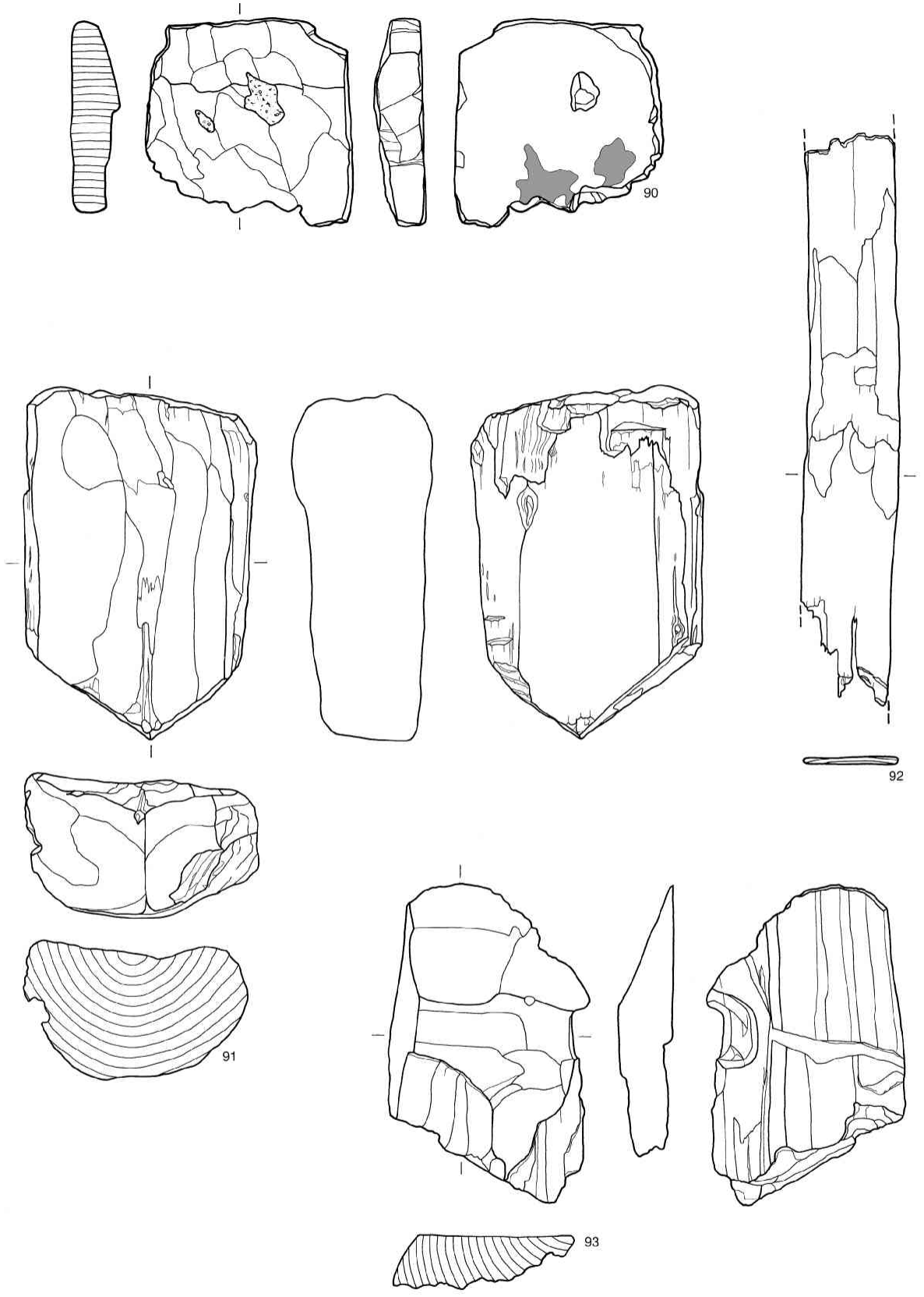


第49図　木製品（礎板：SP82・84・85・板材：SD17）

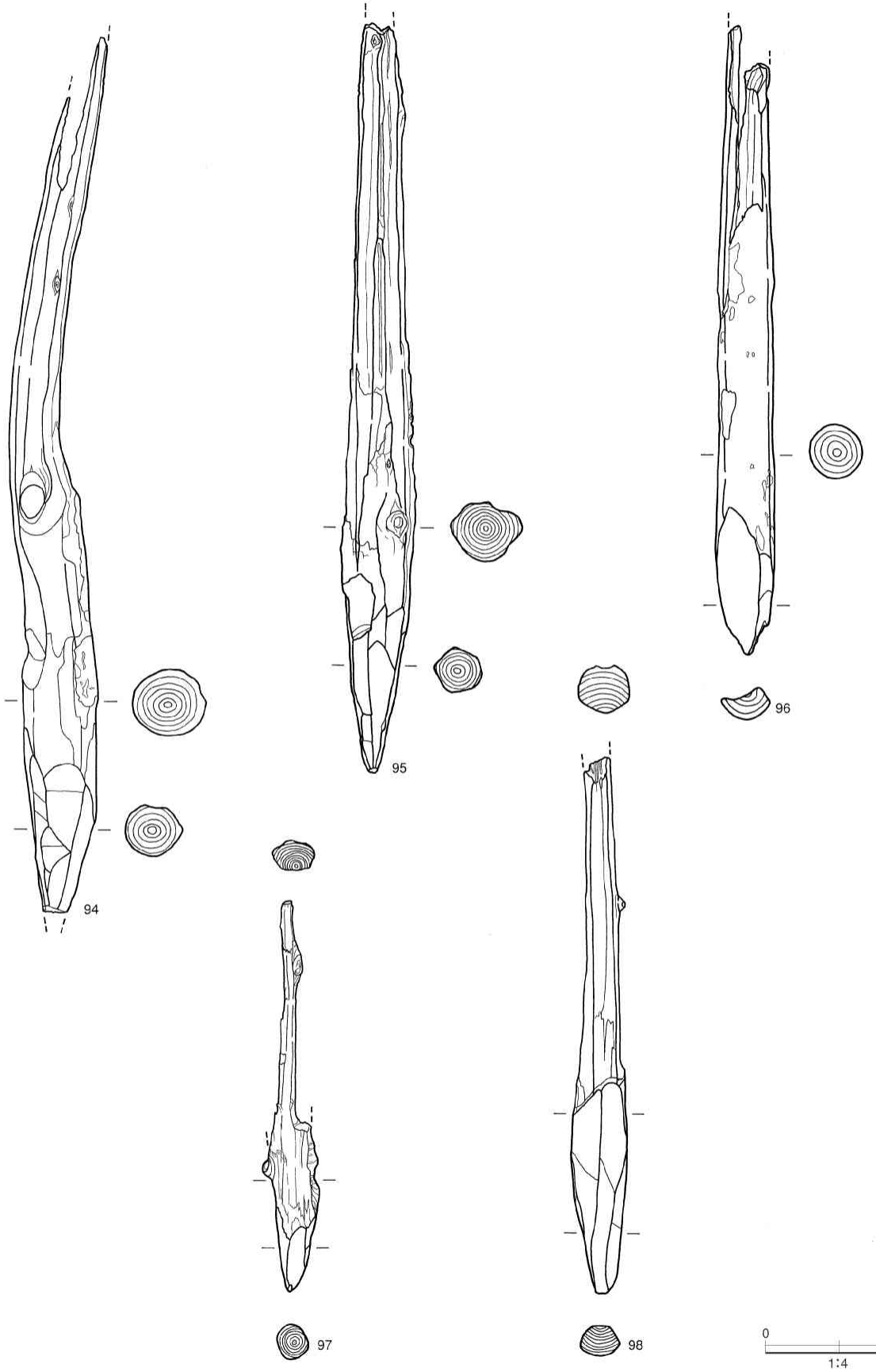


第50図　木製品（礎板：SB50EB284）

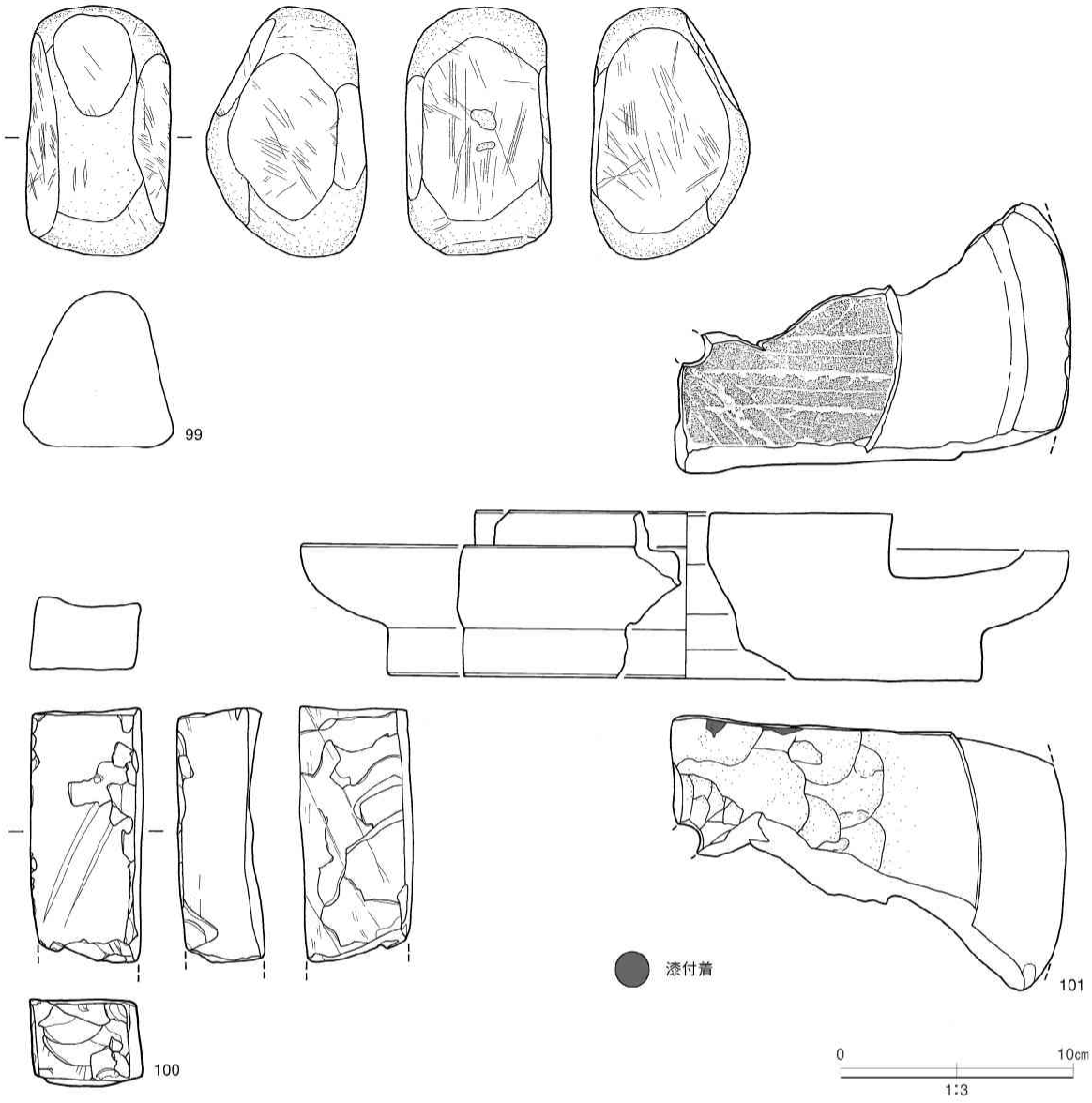
第51図　木製品（礎板：SB50EB284・286・SB328EB276）



第52図　木製品（礎板：SB50EB289・291・SP326・板材：SK303）



第53図　木製品（杭：SD17）



第54図　石製品

表５　陶磁器観察表

番号	図版	写真	種類・器種	生産地	地区	遺構・層位 グリッド	計測値(㎜) 口径	底径	器厚	文様・調整・年代　他
21	39	29	白磁・碗	中国	6区南	D５－S５	(160)		3.5	透明釉　(内外) ロクロ　口禿　RP28　胎土緻密・黒色粒混　焼成良好　白磁Ⅸ類 (13世紀中頃～14世紀初頭)
22	39	29	青磁・碗	中国龍泉窯	4区	J５－S５			3	(内) 草花文 (劃花文)　(内外) ロクロ　RP５　胎土緻密　焼成良好　龍泉窯系青磁碗Ⅰ２a類　12世紀中頃～後半
23	39	29	青磁・碗	中国	2区拡張	SX114			4	(内) 圏線　(内外) ロクロ　胎土に細砂少量混　焼成良好　貫入　中世
24	39	29	白磁・皿	中国	4区		(100)		4.5	透明釉　(内) ロクロ (外) ロクロ・ケズリ　胎土緻密焼成やや軟質　白磁皿B群 (15世紀)
25	39	29	青花・碗	中国漳州窯	1区	表土		50	4	(外) 唐草文 (内) 植物文？　(内外) ロクロ　(底) 高台に籾殻状の付着物　胎土緻密　焼成良好　16世紀末～17世紀初頭
26	39	29	陶器・折縁皿	瀬戸・美濃	4区	表土	(104)		5	(内) 内削　灰釉　(内外) ロクロ　胎土緻密　焼成良好　大窯第４段階前半 (16世紀末)
27	39	29	陶器・皿	瀬戸・美濃	4区	TT２			4.5	(内) 鉄絵　長石釉　(内外) ロクロ　胎土緻密　焼成良好　登窯第１小期 (17世紀初頭)
28	39	29	陶器・壺	信楽	5区	TT６	(180)		11.5	(内外) ロクロ　胎土に砂粒混　焼成良好　16世紀後半以降？
29	39	30	瓷器系陶器・甕		2区	E３ (SD４東隣)			12.5	(内外) ロクロ　胎土に粗砂少量混　焼成良好
30	39	30	瓷器系陶器・甕		1区	SP３			14	(内外) ナデ　粗砂・礫少量混　焼成良好
31	39	30	瓷器系陶器・甕		2区拡張	SX114－F			12	外面に自然釉　RP23胎土に砂粒混　焼成良好
32	39	31	瓷器系陶器・甕		4区	表土			13.5	(内) ナデ・オサエ (外) ナデ　胎土に粗砂少量混　焼成良好
33	39	30	瓷器系陶器・甕		4区	SK240			14	(内外) ナデ・輪積み痕　胎土に粗砂混　焼成良好　5区SD234の破片と接合
34	39	30	瓷器系陶器・甕		5区	表土			11.7	(内) ナデ・オサエ (外) ナデ　胎土に粗砂・白色粒混　焼成良好
35	39	30	瓷器系陶器・甕		2区拡張	SX114			12	(内) ナデ　RP24　胎土に粗砂混　焼成良好
36	39	30	瓷器系陶器・甕		2区	SX65掘り方			12.5	(内外) ナデ　胎土に粗砂混　焼成良好　2区拡張区SX114RP22と接合
37	40	31	瓷器系陶器・鉢		4区	表土	(314)		9	(内外) ロクロ　胎土に砂粒少量混　焼成良好
38	40	31	瓷器系陶器・鉢		4区	SG220－F			11	(内外) ロクロ　胎土に砂粒混　焼成良好
39	40	31	須恵器系陶器・鉢		1区	表土			9.4	(内外) ロクロ　胎土に粗砂少量混　焼成良好　12世紀後半～13世紀？
40	40	31	瓷器系陶器・擂鉢		1区	表土			11	(内) 卸目 (外) ナデ　漆接　胎土に粗砂・白色粒混　焼成良好
41	40	31	瓷器系陶器・甕		4区	TT２			13	(内外) ロクロ　胎土に砂粒・黒色粒混　焼成良好
42	40	31	瓷器系陶器・鉢		2区拡張	SX114－F		(113)	13	(内) 不明 (外・底) ナデ　内面の器面剥落　RP25　粗砂・白色粒混　焼成良好
43	40	31	瓷器系陶器・鉢		6区南	表土		(120)	16	(内) 不明 (外) ロクロ　中世　胎土に粗砂・白色粒混　焼成良好
44	40	29	磁器染付・壺	肥前	4区	TT２			3.5	(外) 一重網目文　(内外) ロクロ　胎土緻密　焼成良好　17世紀後半
45	40	29	磁器染付・湯飲碗	波佐見	3区	SK103			6.5	(外) 植物文？　(内外) ロクロ　胎土緻密　焼成良好　18世紀後半
46	40	29	陶器・碗	不明	4区	３・４H			4	透明釉　(内外) ロクロ　胎土緻密　焼成良好
47	40	29	磁器染付・碗	波佐見	3区	SK103			4.5	(外) 草花文 (内) 網目文　(内外) ロクロ　胎土緻密焼成良好　18世紀
48	40	29	磁器染付・碗	肥前	5区拡張	表土			4	(外) コンニャク印判　(内外) ロクロ　胎土緻密　焼成良好　17世紀末～18世紀前半
49	40	29	磁器染付・湯飲碗	肥前	4区			(40)	5	(内外) 圏線　(内外) ロクロ　胎土緻密　焼成良好　18世紀後半～19世紀
50	40	29	磁器染付・碗	波佐見	3区	SX117		(50)	5	(外) 圏線　(内外) ロクロ　胎土緻密　焼成良好　18世紀
51	40	29	陶器・擂鉢	不明	3区	SK103			8.5	(内外) ロクロ　胎土に砂粒混　焼成良好　17世紀前半
52	40	29	土器・鉢		4区	表土			9.5	(内外) ロクロ　胎土に砂粒混　焼成良好

※（　）内の数値は推定復元値を表わす

表６　木製品観察表

番号	図版	写真	種類	地区	遺構・層位 グリッド	計測値(㎜) 長さ	幅	厚さ・径	形状・加工状況・遺物番号　他
53	40	32	柱材	1区	SP67	〔281〕	166	139	丸太材
54	40	32	柱材	2区	SP59	〔324〕	〔93〕	〔52〕	角材
55	41	32	柱材	2区	SB66EB60	〔318〕	169	161	丸太材
56	41	32	柱材	1区	SP68	〔202〕	145	143	丸太材

番号	図版	写真	種類	地区	遺構・層位 グリッド	計測値(㎜) 長さ	幅	厚さ・径	形状・加工状況・遺物番号　他
57	41	32	柱材	1区	SP71	〔195〕	〔117〕	〔125〕	丸太材
58	41	32	柱材	1区	SP95	〔338〕	128	125	丸太材
59	42	33	柱材	1区	SP86	〔450〕	155	155	丸太材・RW18
60	42	33	柱材	6区南	SP305	〔402〕	183	158	丸太材、側面に加工あり
61	42	33	柱材	4区	SB207EB212	〔350〕	〔92〕	〔82〕	丸太材？
62	42	33	柱材	6区南	SB328EB298	〔480〕	206	190	丸太材
63	42	34	柱材	6区南	SP282	〔353〕	78	71	丸太材
64	43	34	柱材	6区南	SB50EB292	〔525〕	230	165	丸太材
65	43	34	柱材	6区南	SB50EB286	〔161〕	179	160	角材
66	44	35	礎板	1区	SB20EB23	230	155	87	半裁した丸太材　RW７
67	44	34	礎板	1区	SB20EB23	143	148	31	板材　RW６
68	44	35	礎板	1区	SB20EB23	205	136	55	半裁した丸太材　RW８
69	45	35	礎板	1区	SB20EB25	275	231	84	半裁した丸太材
70	45	36	礎板	1区	SB20EB26	190	180	30	板材　RW19・20の２片が接合
71	46	36	礎板	1区	SB20EB39	165	125	35	板材　RW２
72	46	36	礎板	1区	SB20EB39	233	183	74	半裁した丸太材　RW１
73	46	37	礎板	1区	SB20EB40	174	158	86	半裁した丸太材
74	46	38	礎板	1区	SB20EB40	213	110	42	半裁した丸太材　RW12
75	47	37	礎板	1区	SB50EB51下	282	278	103	半裁した丸太材　二段目の礎板　RW10
76	47	38	礎板	1区	SB50EB51上	320	164	61	板材　一段目の礎板　RW９
77	48	38	礎板	1区	SB50EB53	445	138	60	板材　RW11
78	48	38	礎板	1区	SB20EB28	〔230〕	118	〔50〕	半裁した丸太材
79	48	39	礎板	1区	SP76	220	136	27	裁断した丸太材
80	48	39	礎板	1区	SP87	240	106	18	裁断した丸太材
81	49	39	礎板	1区	SP82	113	130	80	裁断した角材
82	49	39	礎板	1区	SP84	139	102	17	裁断した丸太材
83	49	39	礎板	1区	SP85下	156	130	74	半裁した丸太材
84	49	40	加工材	1区	SD17西	220	151	45	半裁した丸太材　RW16
85	50	40	礎板	6区南	SB50EB284	267	190	46	板材　86と接合
86	50	40	礎板	6区南	SB50EB284	267	187	51	板材　85と接合
87	51	41	礎板	6区南	SB50EB276	264	232	51	板材
88	51	41	礎板	6区南	SB50EB286	165	115	45	裁断した角材
89	51	41	礎板	6区南	SB50EB284	288	〔149〕	31	板材
90	52	42	礎板	6区南	SB50EB289	134	140	32	裁断した角材
91	52	42	礎板	6区南	SP326	240	155	95	半裁した丸太材
92	52	42	板材	6区南	SK303	〔388〕	65	6	薄く加工した板材
93	52	42	礎板	6区南	SB50EB291	192	132	37	裁断した丸太材
94	53	43	杭	1区	SD17	〔587〕	50	44	丸太材の先端のみを加工
95	53	43	杭	1区	SD17	〔495〕	48	40	丸太材の先端のみを加工
96	53	43	杭	1区	SD17	〔411〕	39	36	丸太材の先端のみを加工
97	53	43	杭	1区	SD17	〔260〕	33	24	丸太材の先端のみを加工
98	53	43	杭	1区	SD17	〔356〕	37	30	丸太材の先端のみを加工
102		44	柱材	6区南	SB50EB291	〔260〕	170	155	角材
103		44	柱材	1区	SB20EB26	〔110〕	〔110〕	〔90〕	RW15

※〔　〕内の数値は、残存長を表わす

表７　石製品観察表（中近世）

番号	図版	写真	器種	地区	遺構・層位 グリッド	石材	計測値(㎜) 長さ	直径	幅	厚さ・高さ	重量(g)	破損 状況	調整・遺物番号　他
99	54	44	砥石	1区	SP75	流紋岩	105		60	65	594.7	完形	研磨、３面の使用面
100	54	44	砥石	4区	表土	凝灰岩	107		47	30.5	287.0	完形	２面の使用面
101	54	44	石臼	6区	SD264	安山岩		(324)		70	1168.5	1／8以下残存	補修用の漆が付着、底面に敲打痕。

※（　）内の数値は推定復元値を表わす

Ⅶ　自然科学的分析

上野遺跡における理化学分析

株式会社古環境研究所

1　上野遺跡における放射性炭素年代測定

1　はじめに

上野遺跡の発掘調査では、中近世の掘立柱建物跡が検出された。そこでこれら遺構の年代を検討する目的で、放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.,の協力を得た。

2　試料と方法

測定試料は、１区SB20bEB26（第45図70）出土の板材（礎板）、１区SB50EB51（第47図75）出土の板材（礎板）、２区SB66SP60（第41図55）出土の柱材、６区南SB50EB292（第43図64）出土の柱材の４点である。

加速器質量分析（Accelerator Mass Spectrometry；ＡＭＳ）法による放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理（酸－アルカリ－酸処理）を行った。

１）蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄
２）塩酸（HCl）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去
３）再び塩酸（HCl）で洗浄後、アルカリによって中和
４）定温乾燥機内で80℃ で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。

測定試料と方法を表８にまとめた。

表８　試料と方法（放射性炭素年代測定）

試料名	試料採集箇所	図版	種類	前処理・調整	測定法
No.1	１区ＳＢ20ｂＥＢ26	第45図70	板材（礎板）	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ
No.2	１区ＳＢ50ＥＢ51	第47図75	板材（礎板）	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ
No.3	２区ＳＢ66ＥＢ60	第41図55	柱材	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ
No.4	６区南ＳＢ50ＥＢ292	第43図64	柱材	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ

※ＡＭＳ（Accelerator Mass Spectrometry）は、加速器質量分析法。

3　結　　果

年代測定結果を表９に示す。

表９　測定結果

試料名	測定№ （Beta－）	^{14}Ｃ年代 （年ＢＰ）	δ^{13}Ｃ （‰）	補正^{14}Ｃ年代 （年ＢＰ）	暦年代（西暦）
№１	212933	980±40	－25.7	970±40	交点：cal AD1030 １σ：cal AD1020～1050, ：cal AD1100～1140 ２σ：cal AD1000～1170
№２	212934	800±40	－26.3	780±40	交点：cal AD1260 １σ：cal AD1230～1280 ２σ：cal AD1190～1290
№３	212935	490±40	－24.1	500±40	交点：cal AD1420 １σ：cal AD1410～1440 ２σ：cal AD1400～1450
№４	212936	870±40	－26.1	850±40	交点：cal AD1200 １σ：cal AD1170～1240 ２σ：cal AD1050～1100, ：cal AD1140～1270

１）^{14}Ｃ年代測定値

試料の^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比から、単純に現在（ＡＤ1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

２）δ^{13}（デルタ）Ｃ測定値

試料の測定^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ／^{12}Ｃ）。この値は標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}Ｃ年代値

δ^{13}Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}Ｃ／^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの詳細な測定値、およびサンゴのＵ－Ｔｈ年代と^{14}Ｃ年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年ＢＰまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年ＢＰ以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}Ｃ年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（シグマ）（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

4　所　　見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに暦年代較正を行った結果、試料№１では970±40年ＢＰ（２σの暦年代でＡＤ1000～1170年）、試料№２では780±40年ＢＰ（同ＡＤ1190～1290年）、試料№３では500±40年ＢＰ（同ＡＤ1400～1450年）、試料№４では850±40年ＢＰ（同ＡＤ1050～1100年、ＡＤ1140～1270年の年代値が得られた。

2　上野遺跡における木材樹種同定

1　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2　試　　料

試料は、中近世の掘立柱建物跡より出土した、柱材６点と板材（礎板）４点の計10点の木材である。

3　方　　法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4　結　　果

結果を表10に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

表10　木材樹種同定

番号	地区	出土地点	図版	試料	結果（学名／和名）	
1	１区	ＳＢ20ｂＥＢ26	第45図70	板材（礎板）	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.	クリ
2	１区	ＳＢ50Ｅ Ｂ51	第47図75	板材（礎板）	*Fraxinus*	トリネコ属
3	２区	ＳＢ66Ｅ Ｂ60	第41図55	柱材	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.	クリ
4	６区南	ＳＢ50Ｅ Ｂ292	第43図64	柱材	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.	クリ
5	１区	ＳＢ20Ｅ Ｂ23	第44図67	板材（礎板）	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.	クリ
6	６区南	ＳＰ305	第42図60	柱材	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.	クリ
7	６区南	ＳＢ50Ｅ Ｂ286	第43図65	柱材	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.	クリ
8	６区南	ＳＢ328Ｅ Ｂ298	第42図62	柱材	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.	クリ
9	６区南	ＳＢ50Ｅ Ｂ284	第50図85	板材（礎板）	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.	クリ
10	６区南	ＳＢ50Ｅ Ｂ291	写真図版44－102	柱材	*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.	クリ

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版１・２・３

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

トネリコ属　*Fraxinus*　モクセイ科

横 断 面：年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で１～３列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまるい厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に２～３個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、１～３細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

5　所　　見

同定の結果、上野遺跡出土木材のうち、柱材６点はすべてクリであった。板材（礎板）４点は、クリ３点、トネリコ属１点であった。主に、重厚で保存性が良く建築材に適するクリが用いられている。クリは温帯に広く分布する落葉広葉樹であり、暖温帯と冷温帯の中間域では、純林を形成することもあり、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。トネリコ属は温帯の中部から上部に分布し、沢沿いなどの適潤地に生育する。いずれも遺跡の周辺地域に分布し容易にもたらすことのできる樹種であったと考えられる。

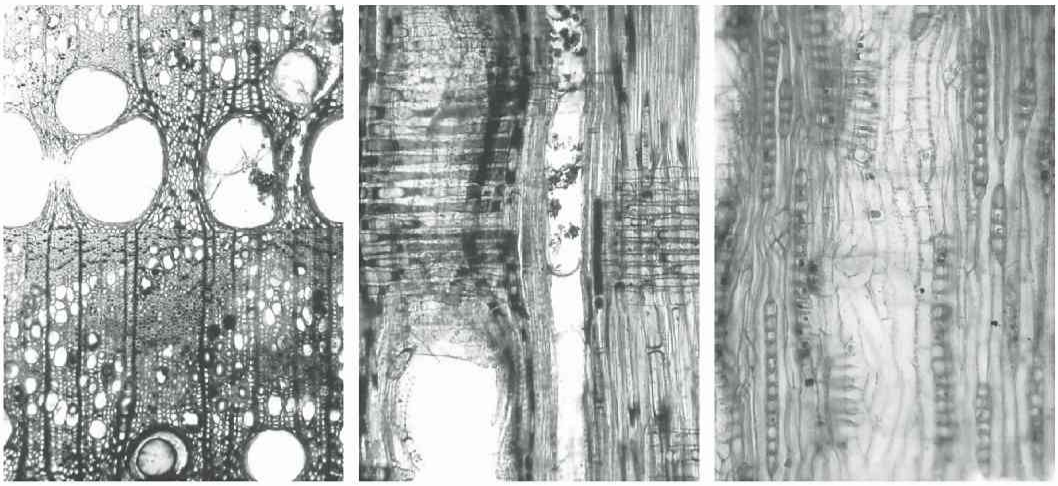
参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，ｐ.20－48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，ｐ.49－100.

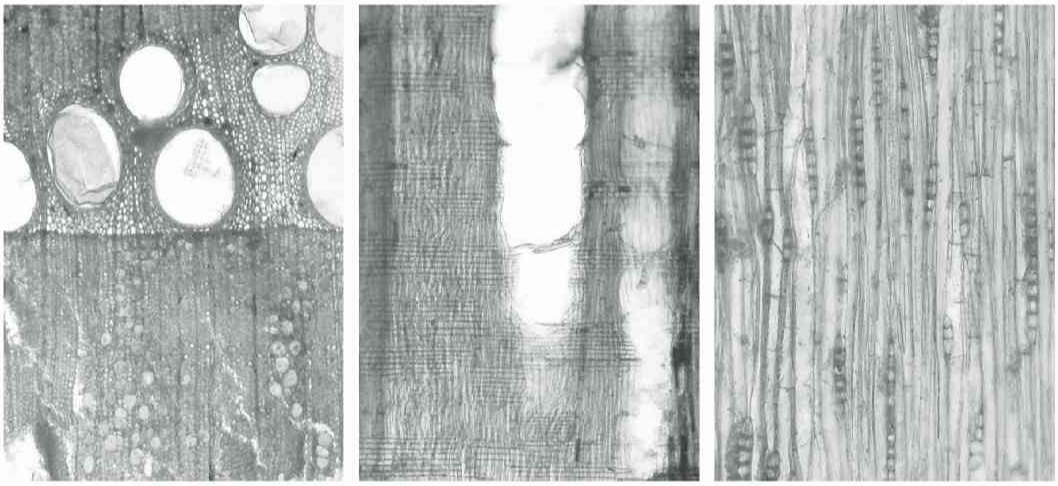
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，ｐ.296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，ｐ.242



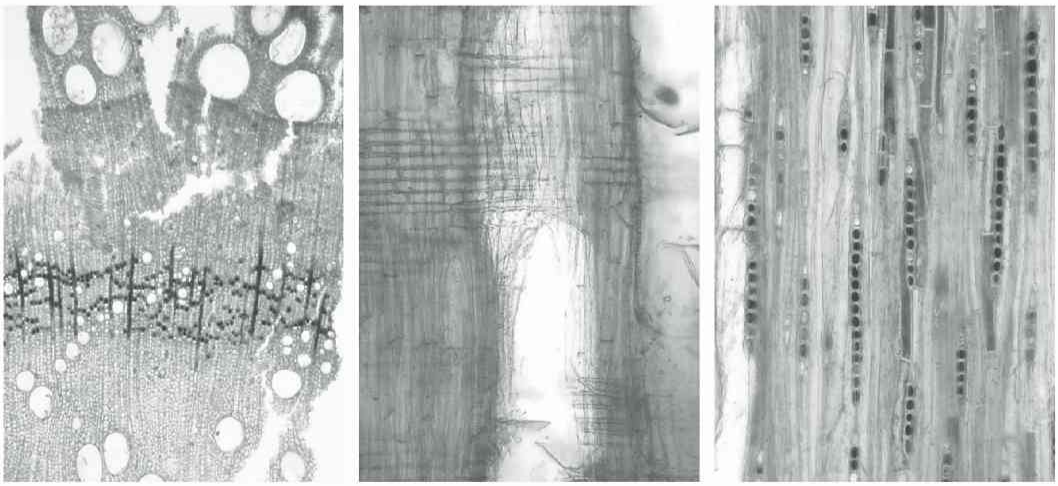
横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.2mm　接線断面 ——— : 0.2mm

1．5　1区　SB20EB23 板材（礎板）　クリ



横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.5mm　接線断面 ——— : 0.2mm

2．6　6区南　SP305　柱材　クリ



横断面 ——— : 0.5mm　放射断面 ——— : 0.2mm　接線断面 ——— : 0.2mm

3．8　6区南　SP298　柱材　クリ

上野遺跡の木材

3　上野遺跡における種実同定

1　はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2　試　　料

試料は、中近世の溝跡（１区・ＳＤ17）より出土した水洗選別済みの試料４点と堆積物１点である。

3　方　　法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

１）試料150㎤に水を加え放置し、泥化を行う。

２）攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25㎜の篩で水洗選別を行う。

３）残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行う。

4　結　　果

同定されたのは、モモ核のみである。以下に学名および特徴を記し、写真を添付する。

モ　　モ　*Prunus persica*　Batsch　核（完形・半形）　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。本遺跡のものは先端が尖り、左右が非対称になる特徴を有する。

モモ核完形が４点（長さ×幅×厚さ：22.25㎜×17.57㎜×13.15㎜、23.46㎜×18.89㎜×13.69㎜、25.55㎜×19.31㎜×13.32㎜、26.68㎜×―㎜×14.72㎜）、半形が２点（同：24.04㎜×18.58㎜×―㎜、25.64㎜×20.07㎜×―㎜）が同定された。なお、堆積物中からは種実は検出されなかった。

5　所　　見

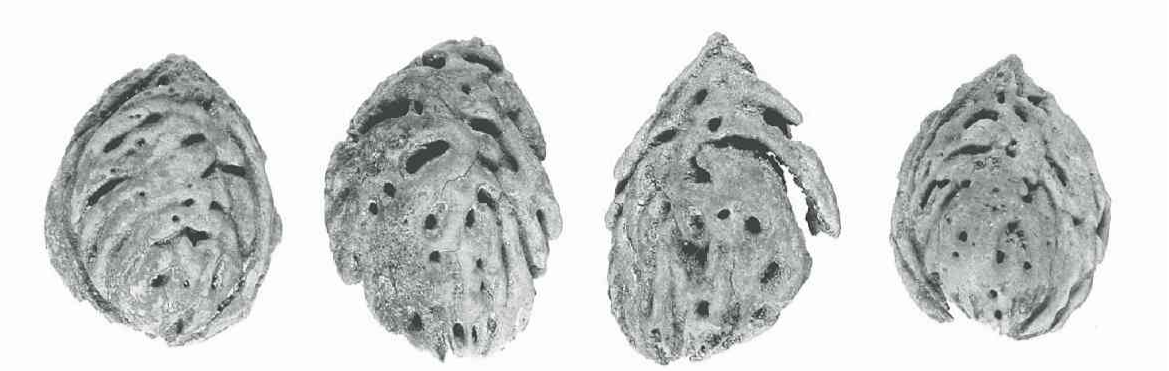
モモは食用となる栽培植物であり、稲作と共に伝来する。西南日本を中心に多くの遺跡から出土し、弥生時代から古墳時代にかけて多くなる。金原（1996）によると、奈良時代までは比較的対象のモモ核が出土し、平安時代以降は先端が尖り左右非対称のモモ核が出土するようになる。

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494ｐ．

金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナルNo．409，ニューサイエンス社，ｐ.15－19.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，ｐ.165－174.



1　モモ核　　2　モモ核　　3　モモ核　　4　モモ核

5.0mm

上野遺跡の種実

4　上野遺跡におけるリン・カルシウム含量分析

1　はじめに

土壌中に含まれるリンやカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがある。また、遺跡の生活面や遺構内には遺体、排泄物、代謝物、食物残渣、燃料灰などに由来するリンやカルシウムが蓄積している。カルシウムは一般に水に溶解しやすいが、リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため、土壌中における保存性が高い（竹追、1993）。このようなリンやカルシウムの性質を利用して、墓状遺構などにおける生物遺体（人骨など）の確認、および生活面や遺構面の確認などが試みられている。

2　試　　料

分析試料は、４区ＳＭ218（土器埋設遺構）から採取された試料12（埋設土器内の土壌）、試料13（掘方覆土１の土壌）、試料14（掘方覆土２の土壌：地山）の３点である。

3　分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析システム（日本電子㈱製，ＪＳＸ3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（ＦＰ法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

１）試料を絶乾（105℃・24時間）

２）試料を粉砕して塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15ｔ/㎠でプレスして錠剤試料を作成

３）測定時間600秒、照射径20㎜、電圧30kV、試料室内真空の条件で測定

4　分析結果

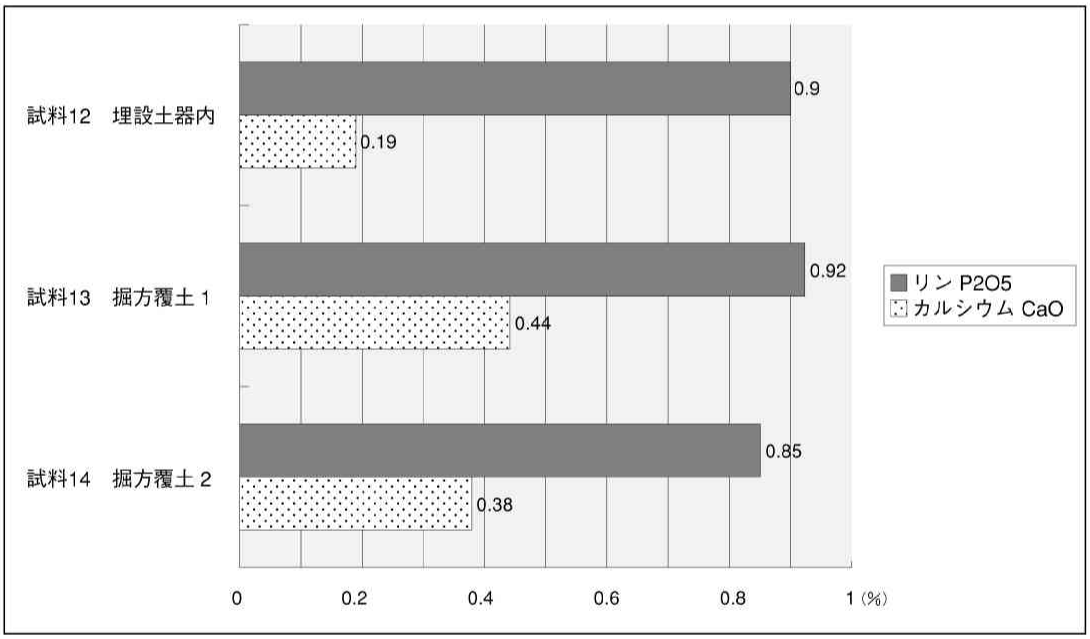
各元素の定量分析結果（wt%）を表11に示し、リン酸（Ｐ２Ｏ５）とカルシウム（CaO）の含量を第55図に示す。

表11　上野遺跡における蛍光Ｘ線分析結果

単位：wt（%）

地点・試料		4区ＥＵ218		
		12	13	14
原子№	化学式	土器内	掘方覆土１	掘方覆土２
11	Na20	2.267	1.078	1.078
12	Mg 0	0.271	0.310	0.338
13	Al203	14.643	16.891	15.766
14	Si02	74.383	73.009	74.758
15	P205	0.900	0.921	0.846
19	K20	5.787	4.106	4.285
20	Ca 0	0.186	0.433	0.376
22	Ti02	0.171	0.404	0.347
25	Mn 0	0.037	0.125	0.122
26	Fe203	1.331	2.690	2.053
37	Rb20	0.022	0.027	0.022
38	Sr 0	0.004	0.007	0.011

第55図　上野遺跡４区ＳＭ218におけるリン・カルシウム含量



5　考　　察

一般に、未耕地の土壌中におけるリン酸含量は0.1～0.5%程度、耕地土壌では1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺物･遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

リン酸含量は、埋設土器内（試料12）では0.90%であり、掘方覆土１（試料13）の0.92%、掘方覆土２（試料14）の0.85%と比較して差異は認められない。カルシウム含量は、埋設土器内（試料12）では0.19%であり、掘方覆土１（試料13）の0.44%、掘方覆土２（試料14）の

0.38%よりも低い値となっている。

以上の結果から、埋設土器内の試料12が採取された部分に、リン酸やカルシウムを多く含む人骨などの生物遺体が存在していた可能性は低いと考えられる。

文　献

竹迫　紘（1993）リン分析法．日本第四紀学会編．四紀試料分析法2，研究対象別分析法．東京大学出版会，p.38－45.

Ⅷ　まとめと考察

1　縄文時代

縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は、土坑が6基検出されただけで、住居跡などの遺構は確認されない。これらの遺構の性格は、廃棄土坑の性格が考えられるものが1基の他、長楕円形を呈し、陥穴と類似した形態を示すものが認められるが、性格不明のものが多い。出土遺物から判断して遺構の時期は、中期中葉から中期後半にかけての時期と考えられる。遺構の分布状況は散漫であり、集落の縁辺部にあたると思われる。集落中心部は調査区外の北東部に存在すると考えられる。

2　平安時代

平安時代の遺構

平安時代の遺構は、ＳＭ218土器埋設遺構と、ＳＫ244が検出された。住居跡などの遺構は検出されない。

ＳＭ２１８土器埋設遺構

ここでは、ＳＭ218土器埋設遺構について、県内の他の検出例を含めて考察したい。

4区Ｊ2グリッドにおいて検出されたＳＭ218（第9図）は、土坑中に2個体の土師器甕が、口縁部を合わせて横位に埋設されていたものである。2個体の甕は、削平の影響で欠損部位が多いが、接合の結果、底部を除くおおよその形状を復元することができた。これら2個体の土師器より、本遺構の構築時期は、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期にかけての時期と考えられる。

今回、ＳＭ218の性格を推定するために、埋設土器内の土壌に残存するリン・カルシウム含量を分析したところ、埋設土器内の土壌が採取された部分に、リン酸やカルシウムを多く含む人骨などの生物遺体が存在していた可能性は低いという結果を得た（第Ⅶ章第4節参照）。これまで本遺構のように特殊な土器埋設遺構の機能・用途等に関しては沼山源喜治氏（沼山1981）が示した、幼児用の甕棺であるという見解が一般的に支持され今日に至っている。しかし、本遺構に関しては、調査区が農耕地として利用されていたため、施肥による影響が大きかったこと、さらに、検出後の降雨等の阻害要因が多かったことも影響していると思われるが、甕棺であることを立証することのできるデータは得られなかったことになる。

参考までに、山形県内における奈良・平安時代の本遺構のような土器埋設遺構を集成したところ、筆者の調査した範囲では11遺跡12基の事例が確認された（表12・第56・57図）。詳細な記録を欠く検出例もあるが、全検出例において合口横位の埋設形式であることで共通している。さらに、1例を除くほとんどの検出例で2個体の赤焼土器または土師器の長胴甕同士を合口にしていることでも共通している（例外の1例は西谷地遺跡（斎藤・飯塚1994）の長胴甕と短胴甕の合口）。埋設方向は、おおよそ長軸が南北方向を向くか、やや東に傾く例が大半を占める。陰陽道における鬼門方位との関連性を認められるかとも考えたが、他県の検出例を含めて検討すると埋設方向は多様であり、今のところ何らかの意味合いや傾向を見出すには至っていない。遺構内における埋設位置については、検出例が少ないため、現時点で明確な区分を行うこ

埋設形式

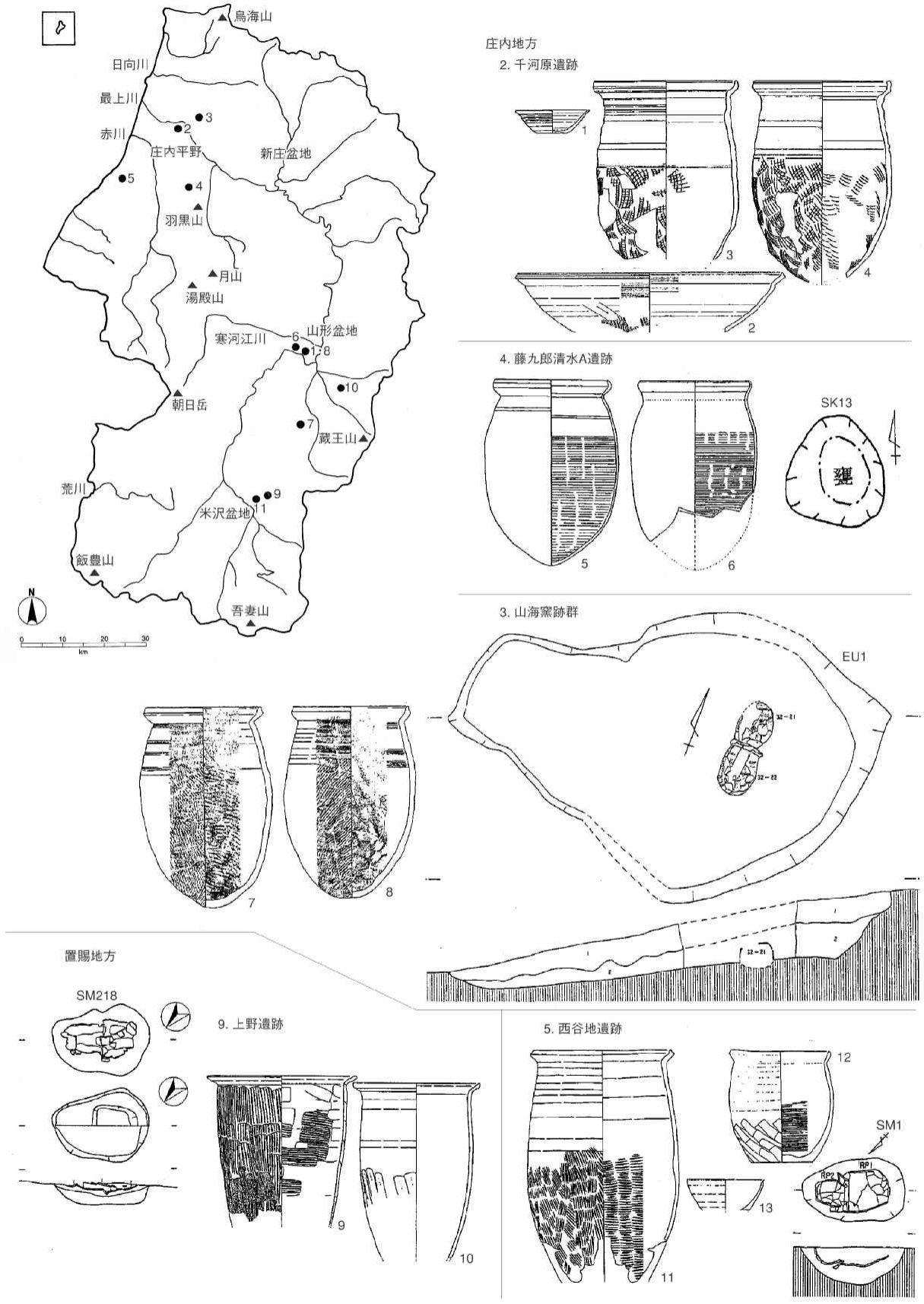
埋設方向

埋設位置

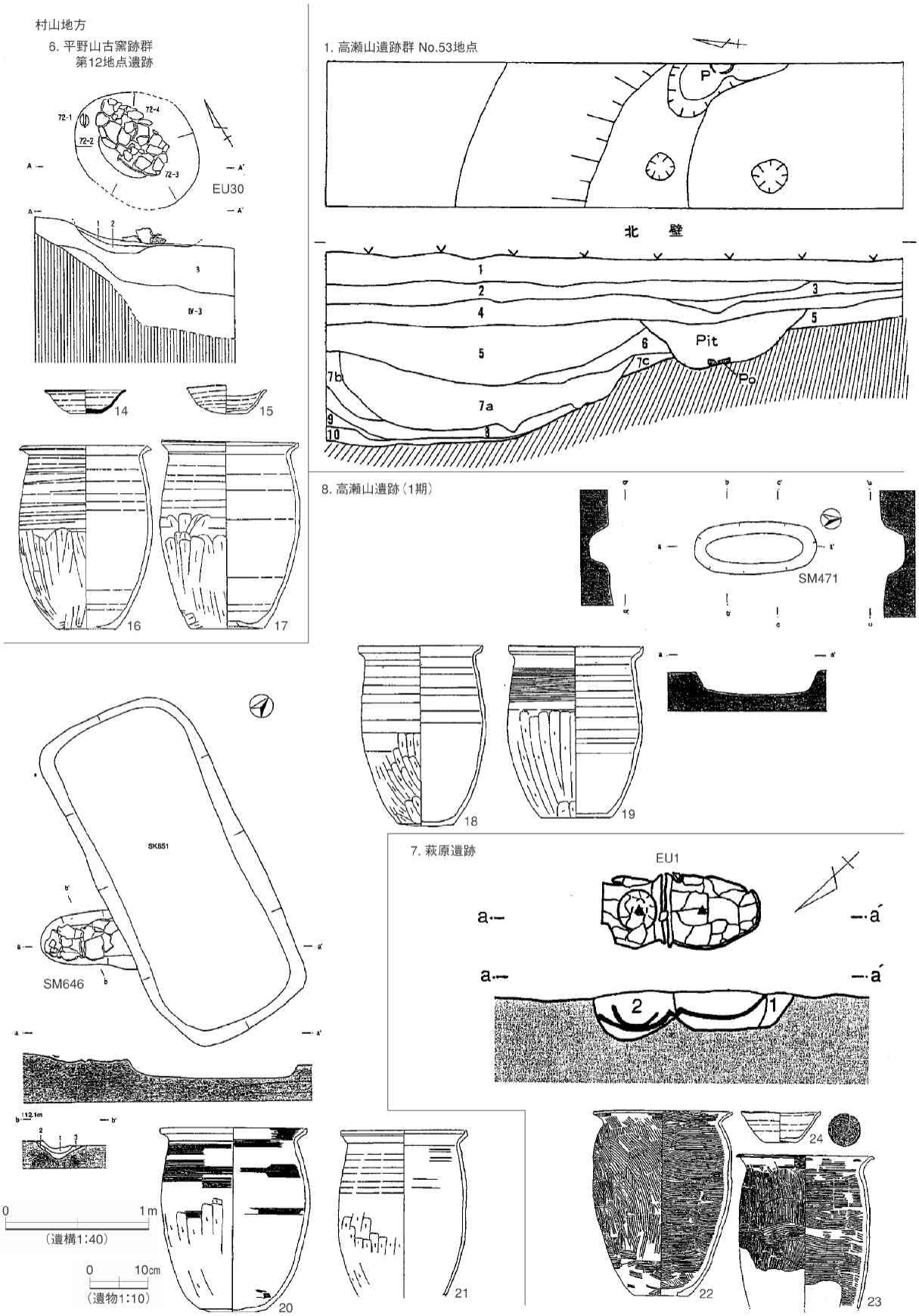
とは困難であるが、おおよそ方形周溝墓等の墓域であった領域に埋設される類型（１類）、窯跡等の丘陵部に立地する生産遺跡周辺に埋設される類型（２類）、集落の境界付近に埋設される類型（３類）の三種類に大別できそうである。１類に属すと思われるのが、高瀬山遺跡群第53地点（阿部1981）と高瀬山遺跡（１期）ＳＭ471（齊藤ほか2004）の２例、２類に属すと思われるのが、山海窯跡群ＥＵ１（名和ほか1991）と平野山古窯跡群第12地点遺跡ＥＵ30（佐藤・須賀井1998）の２例、３類に属すと思われるのが、千河原遺跡土坑墓（野尻1984）、藤九郎清水Ａ遺

表12　山形県における土器埋設遺構（合口甕棺）

No.	遺跡名	所在地	種別（時代）	遺物No.	出土遺構・地点	種別器種	口径 底径	器高 器厚	底部形状	時代
1	高瀬山遺跡群No.53地点	寒河江市大字寒河江字高瀬山乙978－39	集落跡・周溝跡（旧石器・古墳・平安）	－	No.53地点	土師器甕	250 －	300 －	平底	平安前期
				－	No.53地点	土師器甕	250 －	300 －	平底	平安前期
2	千河原遺跡	余目町大字千河原字野中227番地他	集落跡（平安・中世）	1	南精査区より南東100m地点	赤焼土器坏	(134) 54	(42) －	回転糸切	11c前半
				2	南精査区より南東100m地点	赤焼土器堝	(460) －	－ －	－	11c前半
				3	南精査区より南東100m地点	赤焼土器大型甕	245 －	〔320〕 －	丸底	11c前半
				4	南精査区より南東100m地点	赤焼土器大型甕	238 －	355 －	丸底	11c前半
3	山海窯跡群	平田町大字山谷新田字山海	生産遺跡（縄文・平安）	7	B区EU１	赤焼土器甕	200 －	347 9	丸底	平安
				8	B区EU１	赤焼土器甕	200 －	331 9	丸底	平安
4	藤九郎清水Ａ遺跡	藤島町大字東堀越字五輪沢田400番地	集落跡？（平安）	5	SK13	土師器甕	200 －	330 －	Ｕ字鍋底	9－10c
				6	SK13	土師器甕	190 －	〔350〕 －	Ｕ字鍋底	9－10c
5	西谷地遺跡	鶴岡市大字下川字西谷地	集落跡（平安・鎌倉）	11	SM１	赤焼土器甕	240 －	〔460〕 7	丸底？	9後－10前
				12	SM１	赤焼土器甕	170 106	193 7	平底	9後－10前
				13	SM１覆土	赤焼土器坏	132 －	－ 5	－	9後－10前
6	平野山古窯跡群第12地点遺跡	寒河江市大字柴橋字高松他	包蔵地（縄文）生産遺跡（奈良－平安）	14	EU30F１	須恵器坏	142 54	40 4.5	回転糸切	9c4/4
				15	EU30F１	土師器坏	139 63	43 4.5	回転糸切	9c4/4
				16	EU30F１	土師器甕	288 104	320 7	平底	9c4/4
				17	EU30F１	土師器甕	237 126	330 7	平底	9c4/4
7	萩原遺跡	山形市大字長谷堂字萩原	集落跡（古墳・奈良－平安・中世）	22	EU１	土師器甕	246 (92)	322 6	平底？	9c前
				23	EU１	土師器甕	(236) －	－ 6	－	9c前
				24	EU１	土師器坏	136 52	52 4	回転糸切	9c前
8	高瀬山遺跡（１期）	寒河江市大字寒河江字高瀬山他	集落跡（旧石器・縄文・奈良－平安・中世） 墳墓（古墳） 祭祀（中世）	18	SM471	赤焼土器甕	215 98	312 5	平底	奈良－平安
				19	SM471	赤焼土器甕	235 120	299 6.5	平底	奈良－平安
				20	SM646	赤焼土器甕	(256) (114)	324 8	丸底？	奈良－平安
				21	SM646	赤焼土器甕	218 －	〔286〕 6	－	奈良－平安
9	上野遺跡	南陽市大字上野字上野四他	集落跡（縄文・平安・中近世）	9	SM218	土師器甕	(260) －	〔285〕 5	－	8c3/4～9c1/4
				10	SM218	土師器甕	(220) －	〔300〕 6.5	－	8c3/4～9c1/4
10	北向遺跡	山形市大字風間字北向	集落跡（奈良－平安・中世）	－	SH533	土師器甕				平安（9c中頃）
				－	SH533	土師器甕				平安（9c中頃）
11	中落合遺跡	南陽市大字中落合	集落跡（古墳－奈良・平安・中世）	－	EU１	土師器甕				－
				－	EU１	土師器甕				－



第56図　山形県における土器埋設遺構（合口甕棺）集成1



第57図　山形県における土器埋設遺構（合口甕棺）集成 2

跡ＳＫ13（深井・富樫1992）、西谷地遺跡ＳＭ１、萩原遺跡ＥＵ１（山口・吉田2004）、高瀬山遺跡（１期）ＳM646、上野遺跡ＳM218、北向遺跡ＳＨ533（山形埋文2005ａ）、中落合遺跡ＥＵ１（山形埋文2005ｂ）の８例である。このうち、３類とした遺構群については、集落内の建物跡群に近接する場合と建物跡群から距離を置く場合とがある。遺跡調査区が限定されているため、明確に集落の境界部分とは断定できない事例が多いと思われる。本遺構についても、遺構配置を見る限りは集落の境界に位置しているように確認できるが、今後の調査の進捗にしたがって様相が変わる可能性がある。なお、宮城県多賀城周辺の遺跡では、道路の辻付近で土器埋設遺構が多数検出されているが、本県においては明確な道路遺構の検出例も少ないためか、

自然科学的分析

この類型はまだ検出されていないようである。最後に、埋設土器内の土壌について自然科学的分析を行っている検出例は本遺跡を含めて４例あるが、そのうちリン酸含量が高く、遺体埋納を示すと判断された例は、高瀬山遺跡（１期）のＳM471の１例のみである。他に、藤九郎清水遺跡のように埋設土器内部に骨灰のようなものが付着していると報告されている事例もあるが、人骨埋納の痕跡を立証できている検出例は極一部である。

以上、本遺構と山形県における他の土器埋設遺構を合わせて見てきたが、本遺構のように特殊な土器埋設遺構の機能・用途等に関して、総じて幼児用の甕棺であると断定することは困難なようである。山口博之氏（山口1996）が指摘しているように、甕棺と限定して捉えるよりもより広く何らかの祭祀に関連したものとして捉え、様々な角度から分類および再検討していく必要があるように思われる。今回検出されたＳM218についても、機能･性格を早急に導くことは難しい。現時点では、遺構内における埋設位置と自然科学的分析の結果を踏まえ、集落と集落の境界において何らかの祭祀的な意味合いを込めて埋設された遺構である可能性があるとだけ認識しておき、今後の類例の増加を待っていずれ再検討したい。

3　中世・近世

当遺跡で中心となる時期である。検出遺構、出土遺物、自然科学分析を総合して、当期の集落の内容を考察する。

出土遺物から判断される集落の時期区分

上野遺跡では、中世陶磁器として、中国からの輸入陶磁器である、青磁・白磁、国産陶磁器として、須恵器系陶器・瀬戸美濃産陶器・信楽・産地不明の瓷器系陶器、近世では、中国産の青花、国産陶磁器として瀬戸美濃産陶器・肥前磁器などが出土した。

中世陶器について、時期的内容の概要について述べる。

龍泉窯系青磁碗

輸入陶磁器は、12世紀中頃から後半の龍泉窯系青磁碗が出土している。白磁では､13世紀中

白　磁　碗

頃から14世紀初頭に位置づけられる白磁碗が出土している。

瓷器系陶器は、これらの古手の輸入陶磁器類に伴うと考えられ､13～14世紀代と考えられる。

また、時代が下って、15世紀代の白磁皿が出土している。

青　花　碗

近世の初めに、出土遺物のまとまりが認められる。中国漳州窯産の青花碗が出土し、16世紀末から17世紀初頭の年代になる。国産の瀬戸・美濃産陶器は、大窯第４段階前半から登窯第１小期の時期になり、16世紀末から17世紀初頭にかけての年代にあたる。信楽焼は、この時期よりも古い可能性があるが、これらに近い時期であろう。

近世の肥前磁器が出土する時期であるが、17世紀後半、18世紀代、19世紀代にわたる。以上より、中世から近世にかけての集落の時期は、以下のように考えられる。

肥前磁器

Ⅰ期…12世紀中頃から14世紀初頭の時期。これより古い遺物は出土していないが、集落は当期以前から営まれていた可能性が考えられる。

時期区分

Ⅱ期… 15世紀代を中心とする時期。前後する時期に連続して集落が営まれている可能性がある。

Ⅲ期…16世紀から17世紀初頭にかけての時期

Ⅳ期…17世紀中葉以降

遺構の新旧関係から推定する集落の変遷

Ⅵ章において、遺跡内における中世・近世の掘立柱建物跡群には、地点毎に、A（1区・6区南）・B（2区・4区南側・6区北）・C（4区北側）・D（5区北西）の4ヶ所のまとまり（建物群）があることを述べた。各建物群について、変遷と時期について検討してゆく。なお、各建物群の重複関係について、変遷の模式図を第56図に示した。

A建物群と関連する遺構の変遷について述べる。この地点では、SD17・SD49溝跡などが、最も古い時期の遺構になる可能性がある。SD17は、直角に曲がる溝跡で、屋敷地を区画する溝跡になると考えられ、内側にはこの溝に伴う建物跡が想定されるが、遺構の遺存状態が悪く、建物跡の範囲は確定できなかった。次の時期に、SD17を切る、SB20a・bなどの礎板建物跡が建てられる。放射性炭素年代測定により、SB20bの礎板を分析した結果、970±40年BP（2σの歴年代でAD1000～1170年）という年代が明らかになった（第Ⅶ章参照）。また、SB50、SB328も礎板建物跡であり、SB50に伴う礎板の年代測定では、780±40年BP（同AD1190～1290年）という年代が明らかになった。年代測定の結果を考慮すると、SB50はSB20より新しい建物と考えられる。

A建物群

SB20bの年代測定

SB50の年代測定

A建物群で礎板を伴わない建物跡は、SB42・SB80・SB272・SB327がある。このうち、SB80・SB272の柱穴には、根固石や礫による礎盤が認められる。概して柱穴の掘り方の規模は、礎板を伴う建物跡の柱穴より小形である。これらの建物に伴う遺物は出土しておらず、断言はできないが、礎板建物よりも後出する可能性があると考えたい。A建物群の礎板建物についてはⅠ期に含まれ、礎板を伴わない建物については、Ⅱ期に含まれる可能性がある。

B建物群では、L字状に曲がるSD9の内側に位置する建物群（B1群）、これらより東側に位置し、SD9に重複する建物群（B2群）、B1群より後出する建物群（B3群）、西側に位置する建物群（B4群）で構成される。B1群のSB66は、出土した柱材の放射性炭素年代測定により、500±40年BP（2σの歴年代でAD1400～1450年）という年代が明らかになった。B1群より後出すると思われるB3群の建物は、15世紀前半から後半以降になると考えられる。また、B1群・B2群の6棟の建物は、互いに重複したり位置的に近接するため、全て前後する関係にあると言える。B3群の建物を含めると、7段階以上の建物の建て替えが想定される。B4群の2棟については、B1からB3群のいずれかの建物と同時並行であった可能性もある。まとめると、B建物群の時期は、Ⅱ期を中心とし、Ⅲ期も存続していた可能性が考えられる。

B建物群

C建物群は、SB241とSB246の2棟で構成され、SG220を切って構築される。SG220の

覆土からは、瓷器系陶器が出土している。この２棟の建物の柱穴であるが、ＳＢ241には、根石を伴うものが認められ、掘り方は小形である。建物に伴う遺物は出土していない。また、これらの建物群の北側に、建物の長軸にほぼ平行して、ＳＤ233・234・235溝跡がある。これらの溝跡は、Ｃ建物群に伴う屋敷地の区画溝としての可能性が考えられる。Ｃ建物群の時期は、Ⅱ～Ⅲ期となる可能性あると考えておく。

Ｄ　建　物　群　Ｄ建物群は、ＳＢ226・ＳＢ245の２棟の建物で構成されるが、建物群の範囲は調査区外に広がるため、本来、より多くの建物で構成されていると思われる。この２棟の建物の柱穴は、根石等は伴わず、小形の掘り方である。建物に伴う遺物は出土していない。Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられる可能性がある。

集落の変遷をまとめる。Ⅰ期では、Ａ建物群では、礎板を伴う掘立柱建物跡が建てられ、少なくとも３回以上の建物の変遷が想定される。

Ⅱ期では、Ｂ建物群が出現し、Ｂ１群からＢ３群への変遷が想定される。Ｂ建物群では、少なくとも７回以上の建物の変遷が想定される。他の建物群であるが、Ａ建物群はこの時期まで存続している可能性があり、Ｃ建物群、Ｄ建物群は、この時期に出現する可能性がある。

Ⅲ期では、Ｂ建物群がこの時期も存続していると考えられる。Ａ建物群もこの時期にわたって存続している可能性がある。Ｃ・Ｄ建物群も、この時期に並行する可能性がある。

Ⅳ期であるが、当期の遺物は、建物跡や溝跡から出土していない。当期の建物跡が存在する可能性はあるが、江戸時代の建物跡の柱穴の形状は、当遺跡で検出された小形の掘り方をもつ柱穴に該当するとは考えにくい。しかし、礎石建ちの建物が存在していた可能性は否定できない。現時点では、屋敷地ではなく、主に畑地等として調査区内が利用されていた可能性を指摘

表13　出土遺物数量表（破片数）

遺構番号	地区	縄文時代								平安時代		中世（陶磁器）					
		土器	石器							土師器	須恵器	青磁	白磁	青花	瀬戸	信楽	瓷器系陶器
			石錐	掻器	削器	不明	剥片	チップ	敲石	石棒								甕	鉢・擂鉢
SB20 EB22	1																		
SB20 EB23	1																		
SB20 EB25	1																		
SB20 EB26	1																		
SB20 EB28	1																		
SB20 EB33	1																		
SB20 EB39	1																		
SB20 EB40	1																		
SB50 EB51	1																		
SB50 EB52	1																		
SB50 EB53	1																		
SB50 EB284	6南																		
SB50 EB286	6南																		
SB50 EB287	6南						2												
SB50 EB289	6南																		
SB50 EB290	6南																		
SB50 EB291	6南																		
SB50 EB292	6南																		
SB50 EB307	6南																		
SB66 EB60	2																		
SB207 EB212	4																		
SB247 EB267	6北																		
SB328 EB276	6南																		
SB328 EB298	6南																		
SB328 EB308	6南				1														
SB328 EB309	6南																		
SK1	1				1	1		3											
SP3	1																	1	
SD17	1	2																	
SK56	1						1												
SP59	2																		

しておくにとどめたい。

礎板建物跡
沼田遺跡
渋江遺跡

最後に、礎板建物跡について、他遺跡の検出事例をあげておく。古代の事例になるが、八幡町沼田遺跡（現在は酒田市）は、平安時代の掘立柱建物跡を中心とした集落跡であり（佐藤・野尻1984）、当遺跡のＳＢ５掘立柱建物跡は、身舎の桁行10間、梁行４間と大規模で、建物を構成する柱穴のうち、２基に礎板が用いられている。この建物跡の時期は、平安時代11世紀前半頃に位置づけられている。山形市渋江遺跡第４次調査では（押切ほか2002）、中世の礎板を伴う掘立柱建物跡ＳＢ181が１棟が検出されている。この建物跡は、５基の柱穴の内の４基に礎板が検出されている。14世紀～15世紀後半の遺物を出土する溝跡に切られる。礎板の状況は、上野遺跡の場合と類似した状態である。

上野遺跡の礎板建物跡は、１区・６区南に位置するＡ建物群のみに確認される。１区・６区南は地下水位が高く、柱穴の底面は、常時水浸けの状態であったと考えられる。また、この地点の建物は、全て礎板建物ではなく、柱穴内に根石や、礫を据えた礎盤を伴う建物もある。礎板を据える理由については、湧水する軟弱な地盤に対する対応と考えられる事があげられる。また、平安時代末から鎌倉時代にかけての時期的な要因も考えられるが、今後の検出事例をさらに検討する必要がある。あわせて、建物を建てるために好条件とはいえない、地下水位が高いこの地点に継続的に建物を構築する要因も、今後検討すべき課題である。

引用・参考文献

阿部酉喜夫ほか　1981　『高瀬山遺跡群分布調査報告書』（山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第１集）寒河江市教育委員会

小笠原健一郎・本多準一郎　2003　『本町Ⅱ遺跡第二次発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査 報告書第410集）　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

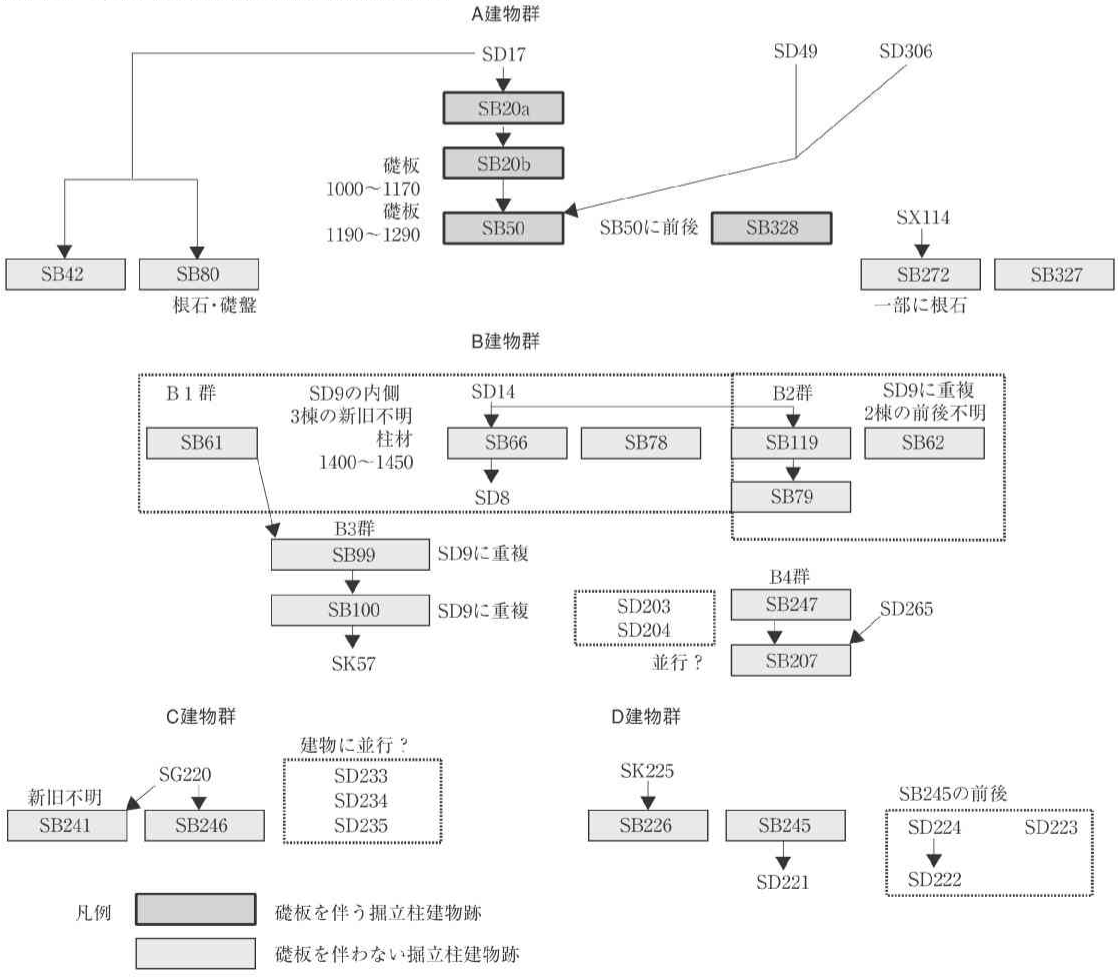
		近世（陶磁器）				近現代陶磁器			木製品・石製品（中近世）					
	須恵器系						柱材							
不明	鉢・擂鉢	肥前	波佐見	陶器不明	土器	磁器	陶器	土器	丸太	角材	不明	礎板	板材	加工材	杭	不明	砥石	石臼	遺物番号・備考
																1			
												3							66・67・68
												1							69
									1			1							70・103
												1							78
												1							
												2							71・72
												2							73・74
												2							75・76
																1			
												1							77
												3							85・86・89
											1	1							65・88
																1			
												1							90
												1							
											1	1							93・102
1				1					1										64
									1										55
									1										61
											1								
												1							87
									1										62
																			11
																1			
																			7・10・12 30
														1	5				84・94～98
																			13
									1										54

遺構番号	地区	縄文時代									平安時代		中世（陶磁器）							
		土器	石器								土師器	須恵器	青磁	白磁	青花	瀬戸	信楽	瓷器系陶器		
			石錐	掻器	削器	不明	剥片	チップ	敲石	石棒								甕	鉢・擂鉢	
SX65掘方	2																	1		
SP66	1																			
SP67	1																			
SP68	1																			
EB69	1																			
SP70	1																			
SP71	1																			
SP72	2								1											
SP75	1																			
SP76	1																			
SP77	1																			
SP81	1																			
SP82	1																			
SP84	1																			
SP85	1																			
SP86	1																			
SP87	1																			
SP88	1																			
SX89	1																			
SP95	1																			
SK103	3																			
SK104	3	4																		
SK105	3	56																		
SX114	2 拡	1											1					3	1	
SX117	3 拡									1										
SK205	4	1																		
SM218	4											2								
SG220	4																		1	
SP231	5	1																		
SD234	5						1											1		
SK240	5																	1		
SD261	6 北																			
SD264	6 北																	1		
SK270	5 拡																			
SP282	6 南																			
SP300	6 南																			
SK303	6 南																			
SP304	6 南																			
SP305	6 南																			
SP314	6 南																			
SP316	6 南							1												
SP318	6 南					1														
SP326	6 南																			
番号なしSP	2	1					1	1												
表土・撹乱	1						1								1					1
表土	4	1		1												1		3		1
表土	5	2					1					1						1		
表土	5 拡											1								
表土・撹乱	6 北																			
表土・撹乱	6 南				1															1
XO	6 南																			
グリッド	2																	2		
グリッド	3											1								
グリッド	4												1							
グリッド	6 南													1						
XO	1																			
XO	3																			
XO	4	1												1						
TT2	4	28														1		1		
TT3	4																	1		
TT4	5																			
TT6	5																1			
TT9	5	1																		
XO		1	1				1													
合計		100	1	3	2	1	11	2	1	1	3	2	2	2	1	2	1	16		5

		近世（陶磁器）				近現代陶磁器			木製品・石製品（中近世）								
	須恵器系	肥前	波佐見	陶器不明	土器	磁器	陶器	土器	柱材			礎板	板材	加工材	杭	不明	砥石	石臼	遺物番号・備考
不明	鉢・擂鉢								丸太	角材	不明								
																			36
												1							
									1							1			53
									1										56
												1							
												1							
									1										57
																			16
																	1		
												1							79
																1			
												1							
												1							81
												1							82
												1	1						83
									1										59
												1							80
																1			
							1												現代撹乱
									1										58
			2		1	3													45・47・51
																			3
																			4
																			23・31・35・42
			1																15・50　撹乱か
																			17・18
																			38
																			33と接合
																			33
																		1	石臼は101と同一個体
																		1	101
						2		1											現代
									1										63
												1							
													4			1			92
												1							
									1										60
																1			
												1							91
	1							1											14・25・39・40
					2												1		8・26・32・37・52・100
		2				1	2												20・34
		1	1	1			1												48
				1		1													
					1	1													9・43
																1			
																			29
																			19
				1															22・46
																			21
				1															
						1													
		2	2			1													1・24・49
		1																	2・27・41・44
				1															瓷器系陶器は31と同一個体
						1													
																			28
																			5
							1									1			6
1	1	6	6	7	3	11	5	2	13	2	1	34	5	1	5	11	2	2	

押切智紀ほか　2002　『渋江遺跡第４次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第106集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
小野貴之　2005　『合子沢松森(2)遺跡調査概報』（青森県埋蔵文化財調査報告書第80集）青森県教育委員会
木村高・佐藤智生　2000　『野尻(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第277集　青森県教育委員会
斎藤俊一・飯塚稔　1994　『西谷地遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第12集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
齊藤主税ほか　2004　『高瀬山遺跡（１期）第１～４次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター報告書第121集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
佐藤庄一・須賀井明子　1998　『平野山古窯跡群第12地点遺跡第２次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
佐藤庄一・野尻侃　1984　『沼田遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第78集）山形県教育委員会
佐藤庄一・野尻侃　1984　『千河原遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財調査報告書第80集）山形県教育委員会
菅原弘樹ほか　1995　『山王遺跡Ⅱ』（宮城県文化財調査報告書第167集）宮城県教育委員会
名和達朗ほか　1991　『山谷新田遺跡・山海窯跡群発掘調査報告書－国営農地開発事業鳥海南麓地区(1)』（山形県埋蔵文化財調査報告書第170集）東北農政局・山形県教育委員会
沼山源喜治　1981　「土師器合口甕棺葬について」『考古学雑誌』第66巻第４号　日本考古学会
深井嘉市・富樫秀司　1992　『藤九郎清水Ａ遺跡詳細分布調査報告書』山形県藤島町教育委員会
(財)山形県埋蔵文化財センター　2005　『北向遺跡調査説明資料』
(財)山形県埋蔵文化財センター　2005　『中落合遺跡調査説明資料』
山口博之　1996　「山形県の古代の人はどんなお墓に入ったのか」『西山形の歴史と文化』Ⅲ
山口博之・吉田江美子　2004　『萩原遺跡第２・３次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第120集）山形県埋蔵文化財センター
吉野武ほか　2003　『市川橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第193集　宮城県教育委員会

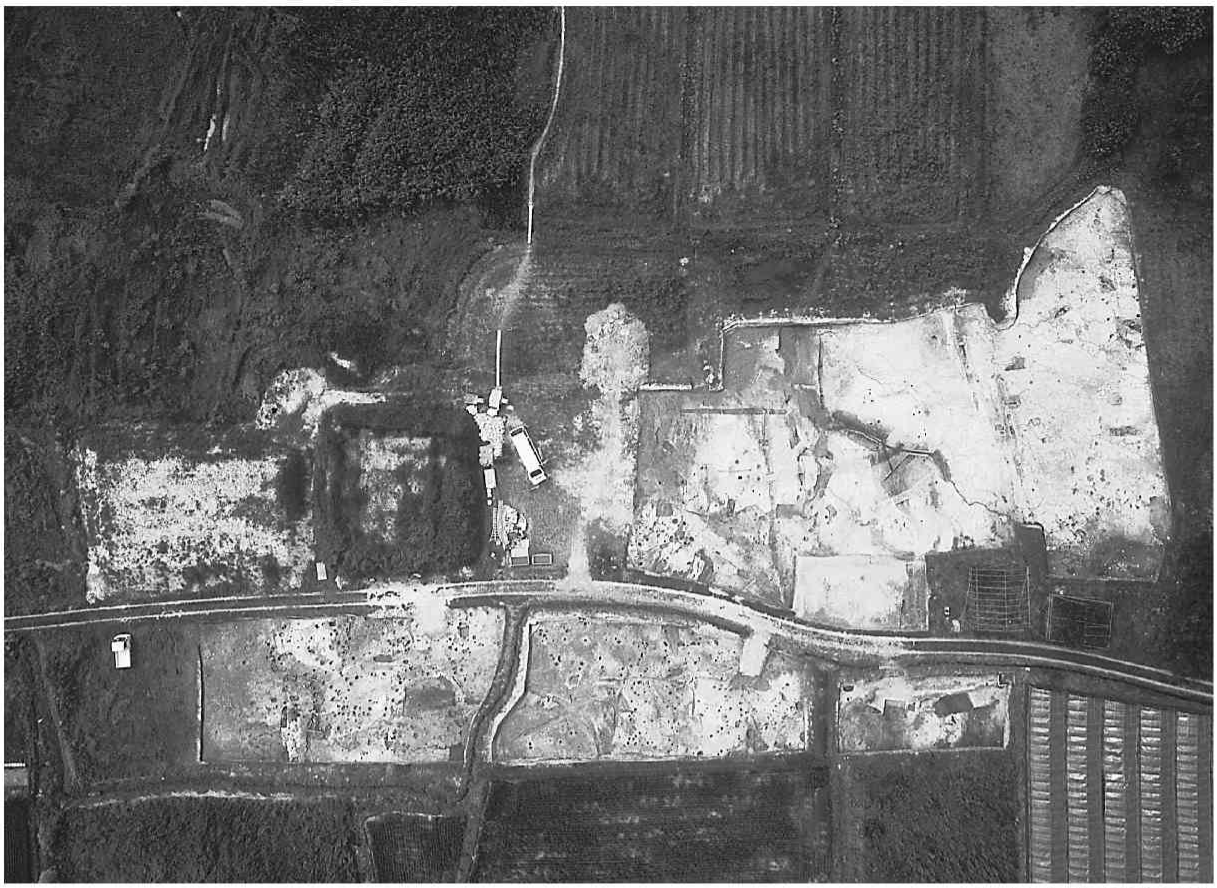
第56図　中世・近世遺構の新旧関係模式図



写真図版

遺跡近景（西から）

調査区全景（南西から）



調査区全景（南東から）

鍬入式

4区面整理作業状況（北東から）

4区記録作業状況（北から）

2区作業状況（北から）

1区全景（北東から）

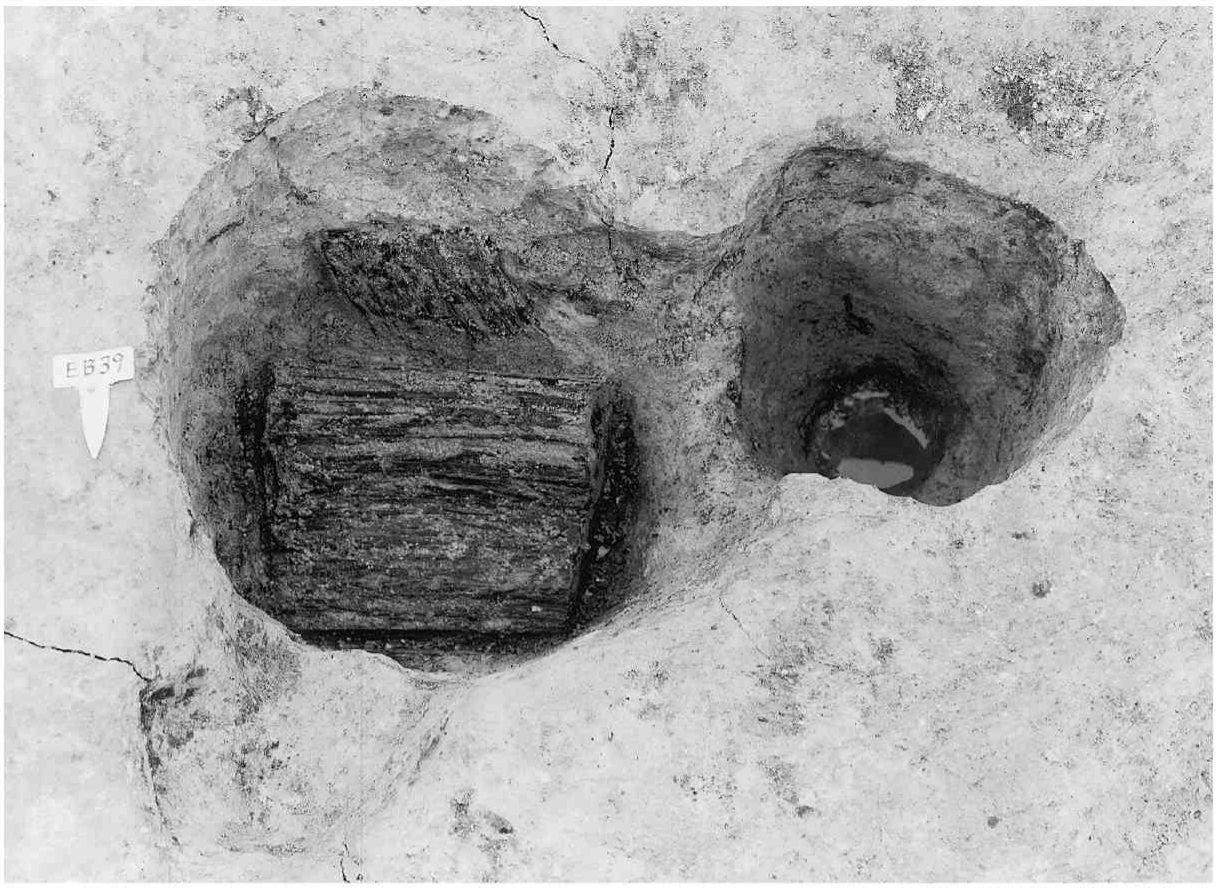
1区SB20完掘状況（東から）

SB20EB23断面（南東から）

SB20EB23完掘状況（南東から）

1区SB20EB33断面（西から）

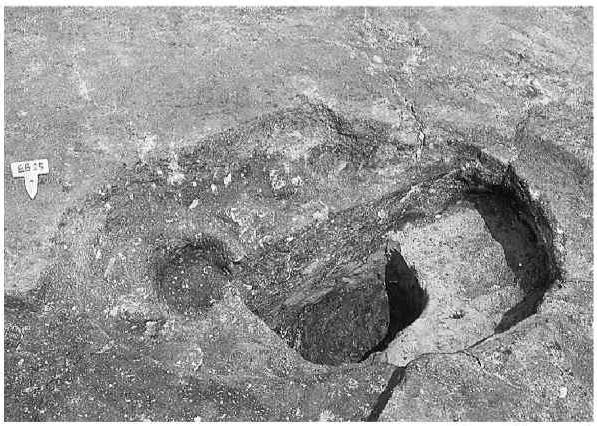
1区SB20EB33完掘状況（北西から）



1区SB20EB39礎板出土状況（東から）

1区SB20EB40断面（東から）

1区SB20EB40完掘状況（西から）

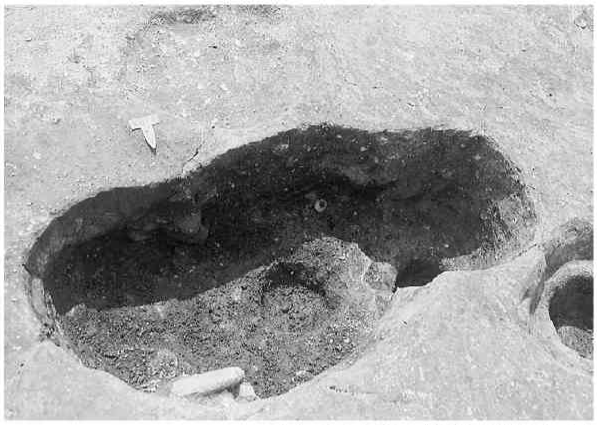


1区SB20EB25断面（東から）

1区SB20EB25完掘状況（北西から）

1区SB20EB24断面（東から）

1区SB20EB27完掘状況（北から）

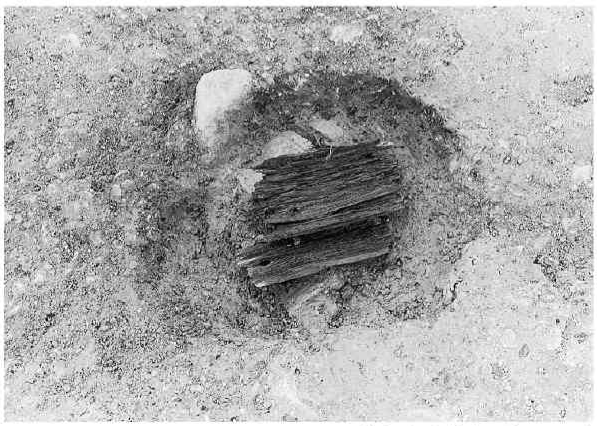


1区SB20EB26柱痕（北西から）

1区SB20EB26礎板出土状況（北から）

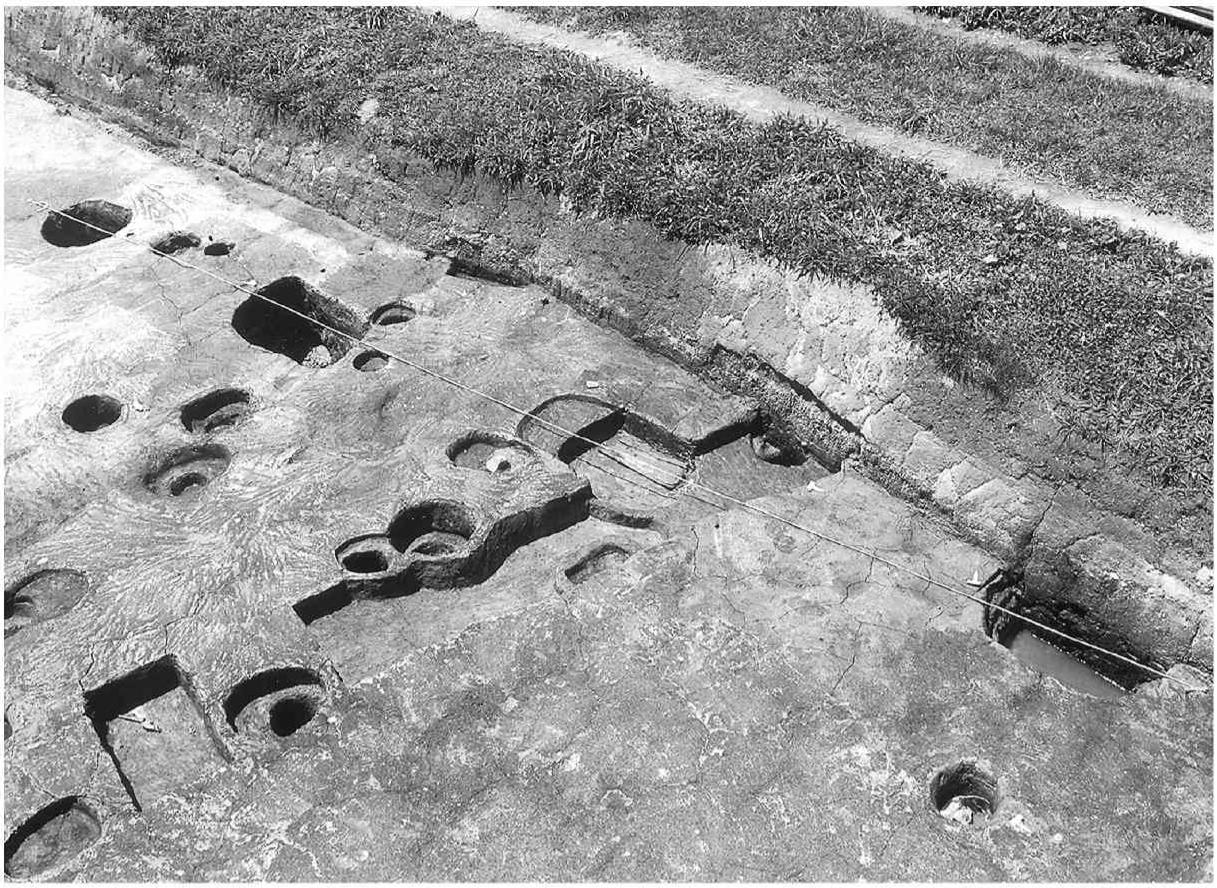
1区SB20EB31断面（東から）

1区SB20EB32断面（南東から）



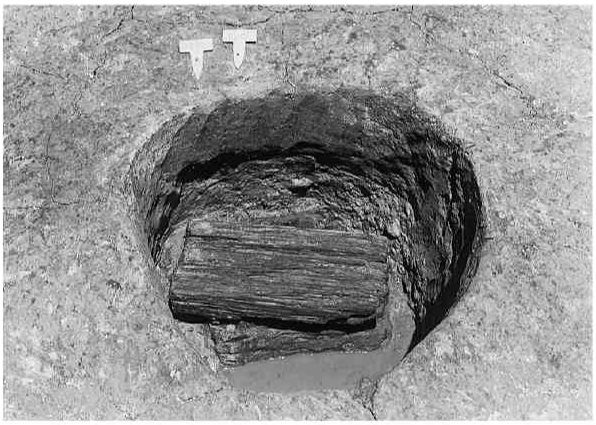
1区SB20EB28礎板出土状況（西から）

1区SB20EB35完掘状況（東から）



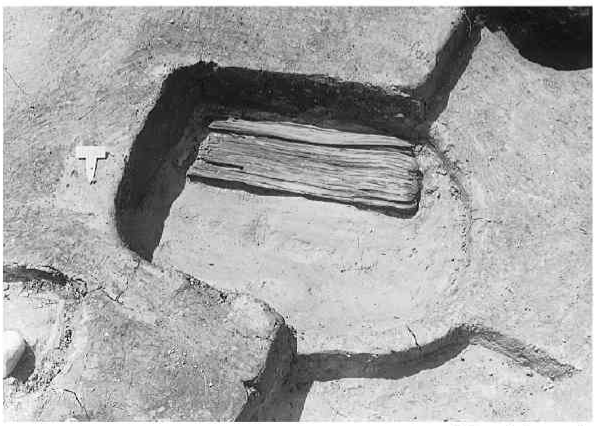
1区SB50完掘状況（東から）

1区SB50EB51断面（南東から）



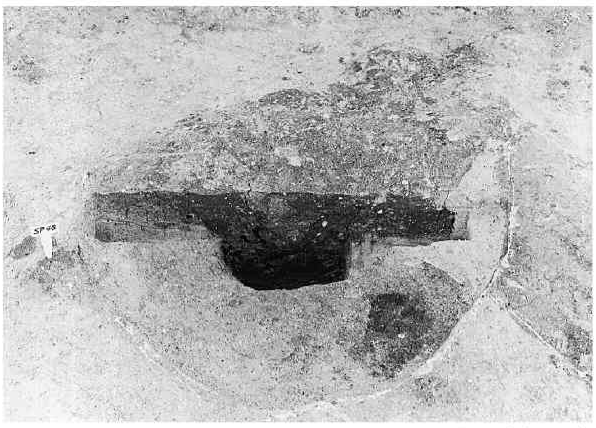
1区SB50EB51礎板（南から）

1区SB50EB52完掘状況（東から）

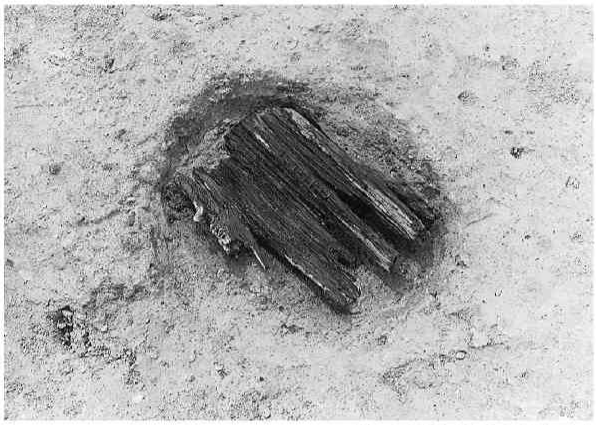


1区SB50EB53礎板（東から）

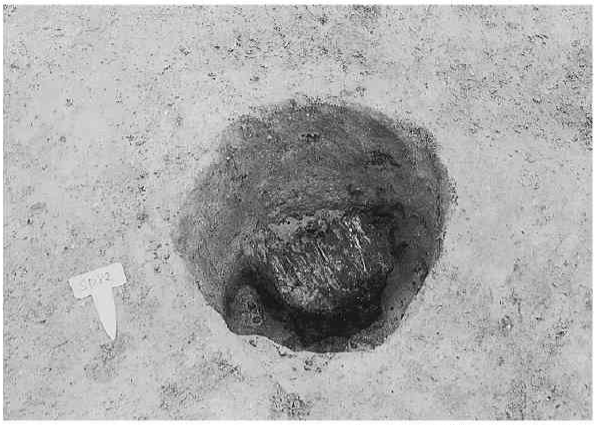
1区SB50EB54断面（南東から）



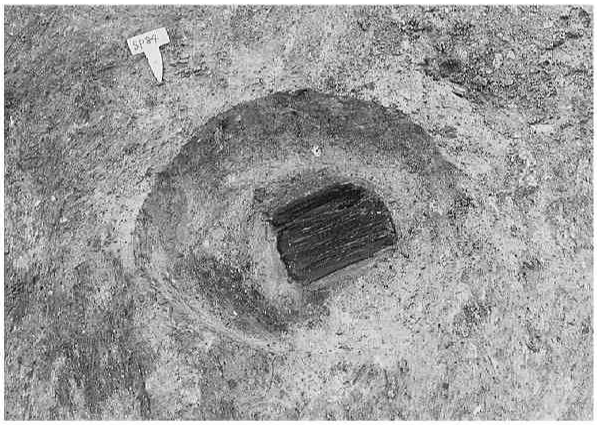
1区SP48断面（東から）



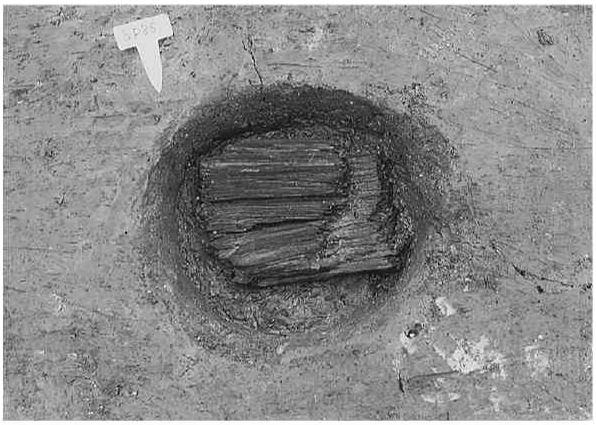
1区SP81礎板（西から）



1区SP82礎板（西から）

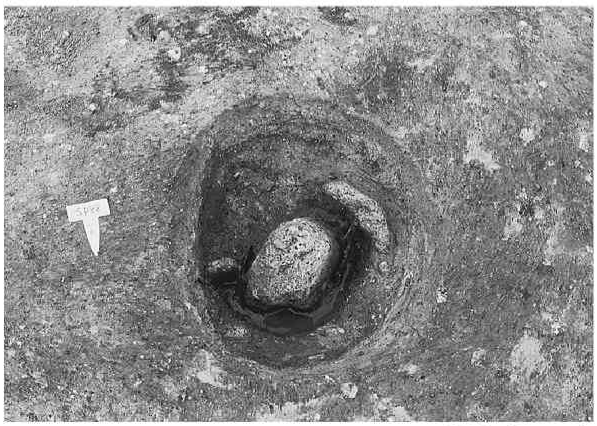


1区SP84礎板（南西から）



1区SP85礎板（南から）

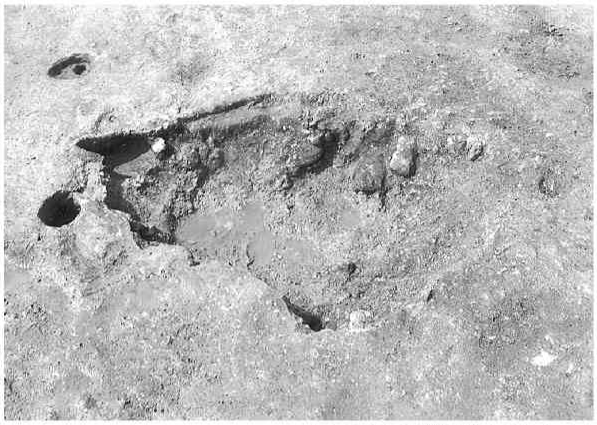
1区SP87礎板（北から）



1区SP88柱材（北から）

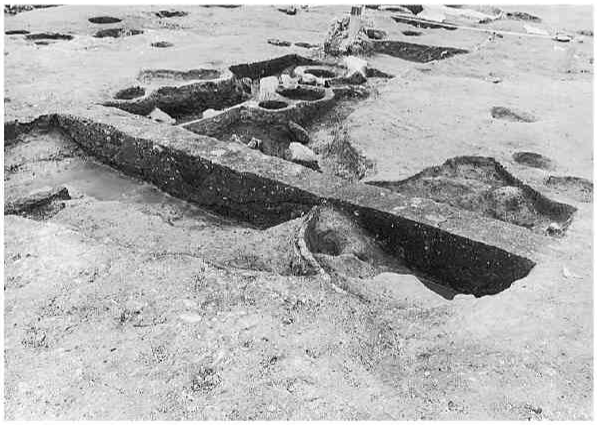
1区SP95柱材出土状況（南から）

1区EB96根固石検出状況（東から）



1区SK1完掘状況（北から）

1区SK56断面（南から）



1区SK2・SD17・SX64断面（北東から）

1区SX41断面（南西から）

1区SD17遺物出土状況（南から）

1区SD17完掘状況（北東から）

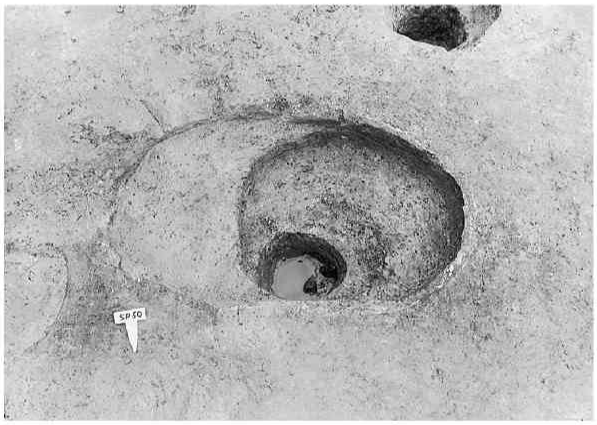
2区全景（南東から）

2区全景（北東から）

2区遺構完掘状況（北から）

2区SB62・119完掘状況（北東から）

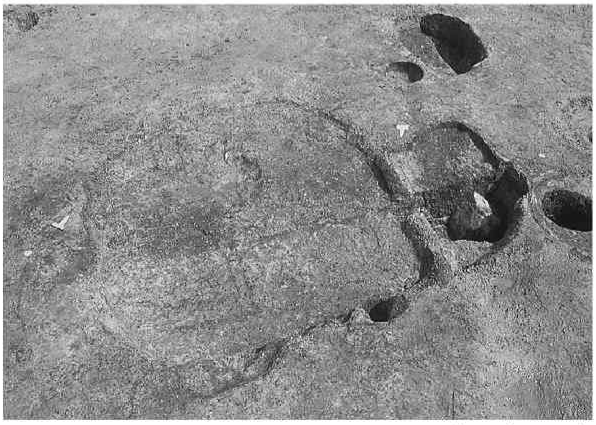
2区SB61・66他完掘状況（南から）



2区SB66EB60柱材出土状況（南から）

2区SP59完掘状況（西から）

2区SK16完掘状況（南から）

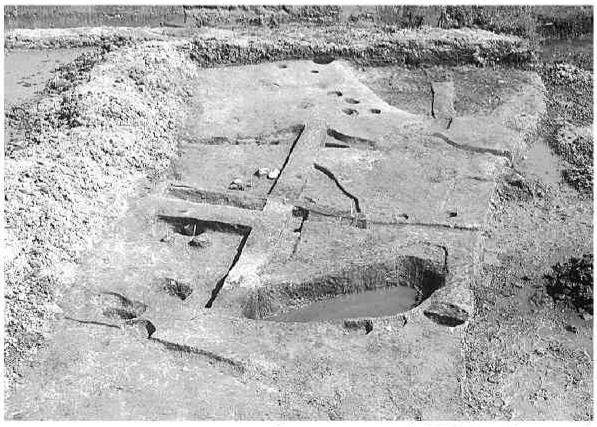


2区SK57・SP58断面（西から）

2区SX65完掘状況（西から）

2区SX65断面（南西から）

2区SD７・８完掘状況（北から）



2区拡張区SX114完掘状況（西から）

2区拡張区陶器（RP23）出土状況（南から）

2区SD４・５完掘状況（北東から）

2区SD６・７断面（西から）

2区SD４・５・６断面（北東から）

2区SD９・10断面（南から）

3区遺構完掘状況（北から）

3区拡張区遺構完掘状況（南から）

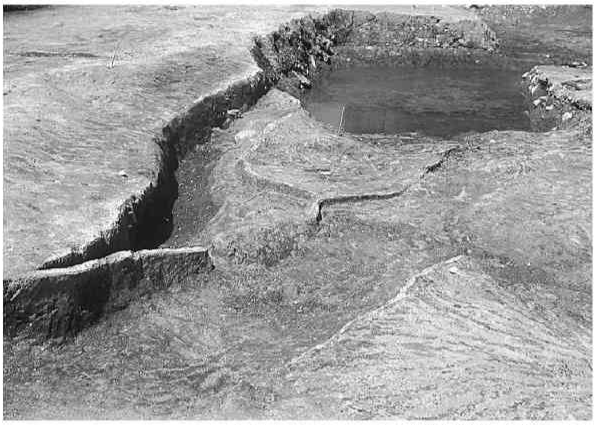
3区SK104完掘状況（北から）

3区SK105完掘状況（東から）

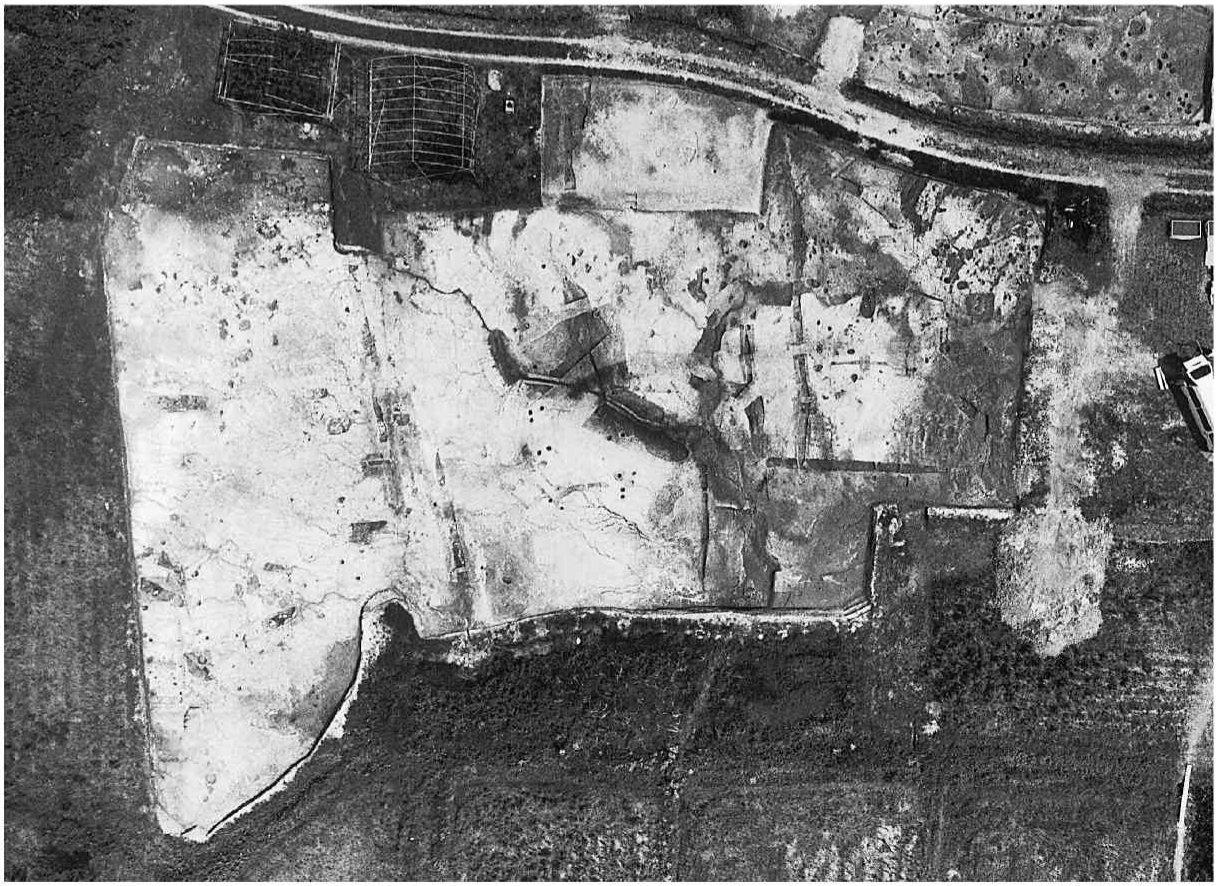
3区拡張区SX109完掘状況（南から）

3区拡張区SX117完掘状況（東から）

3区SD101・102断面（南から）



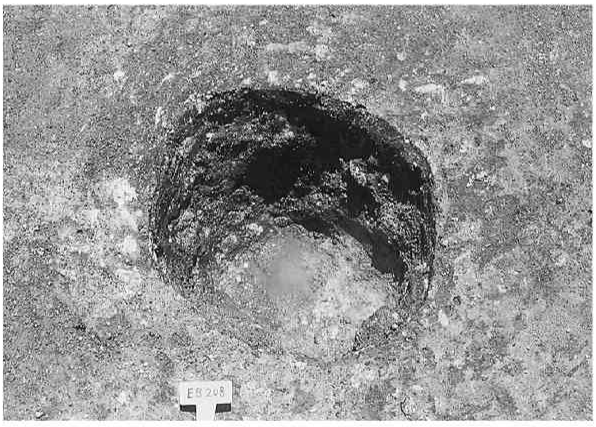
3区SD101・102完掘状況（南から）



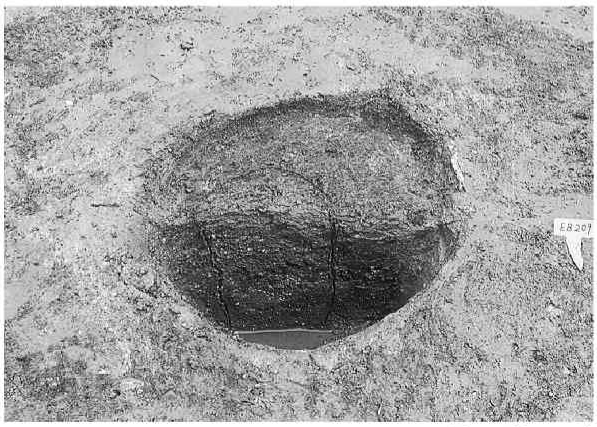
4・5区全景（西から）

4区SB207完掘状況（西から）

4区SB207EB215～217完掘状況（東から）



4区SB207EB208完掘状況（西から）



4区SB207EB209断面（南から）

4区SB207EB209完掘状況（西から）

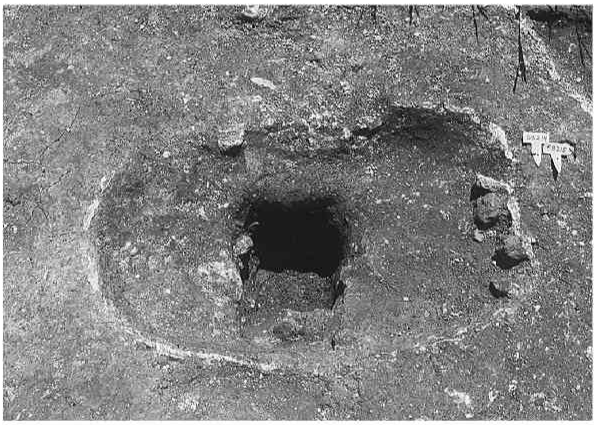
4区SB207EB211完掘状況（西から）

4区SB207EB213完掘状況（東から）

4区SB207EB212断面（南から）

4区SB207EB212完掘状況（西から）

4区SB207EB215断面（北西から）



4区SB207EB215完掘状況（南西から）

4区SB207EB216断面（西から）

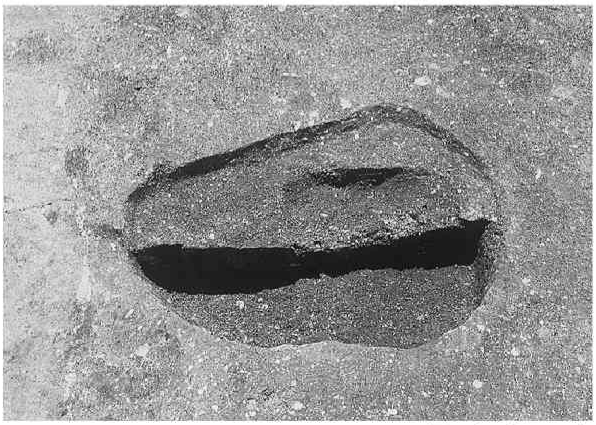
4区SB207EB216完掘状況（西から）

4区SB241・246完掘状況（北東から）

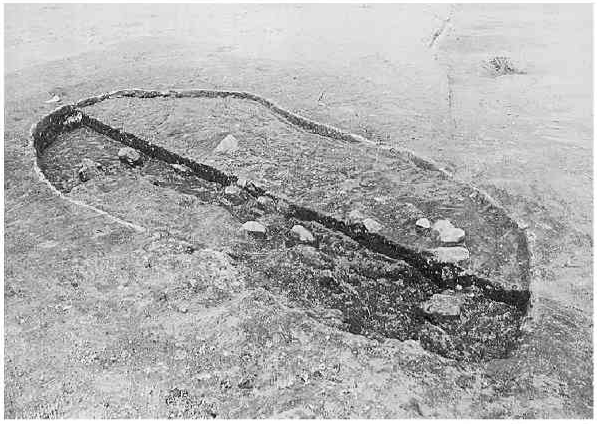
4区SM218検出状況（西から）

4区SM218完掘状況（西から）

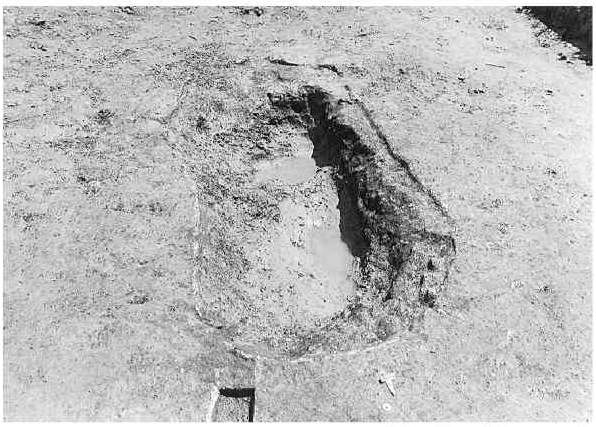
4区SM218断面（西から）



4区SM218掘り方（北から）



4区SK205断面（南から）

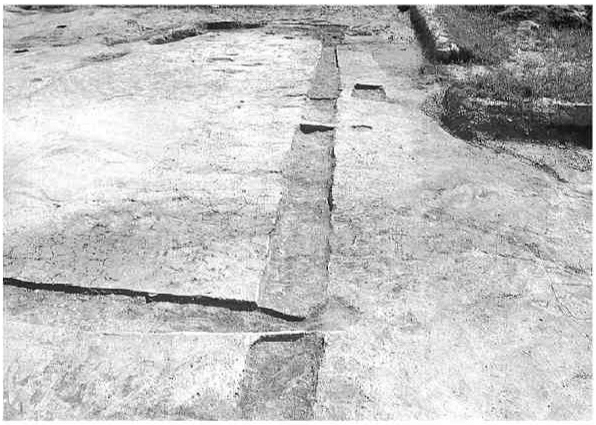


4区SK206完掘状況（南西から）

4区SG220掘り下げ状況（北東から）

4区SD201・202完掘状況（南東から）

4区SD203完掘状況（東から）



4区SD203・204完掘状況（北東から）

4区SD233・234完掘状況（東から）

4区SD235完掘状況（東から）

5区遺構完掘状況（北西から）

5区拡張区遺構完掘状況（東から）

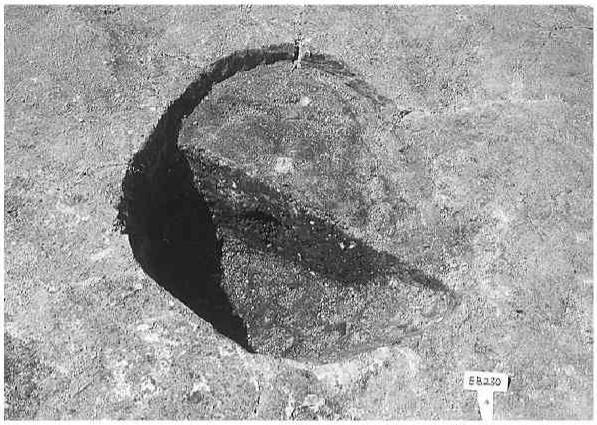
5区東壁断面（西から）

5区SB226完掘状況（西から）

5区SB226完掘状況（東から）

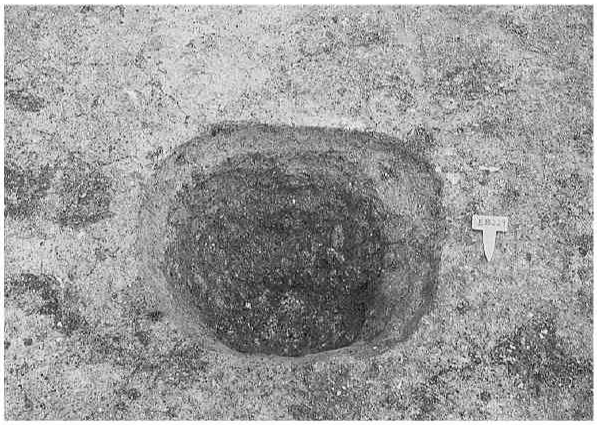
5区SB226EB227完掘状況（南から）

5区SB226EB228完掘状況（南から）



5区SB226EB230断面（南から）

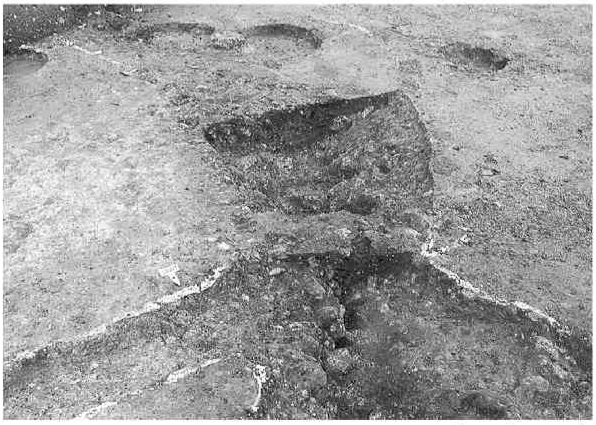
5区SB226EB230完掘状況（南から）



5区SB226EB229完掘状況（南から）

5区SD221断面（北西から）

5区SD222断面（南西から）

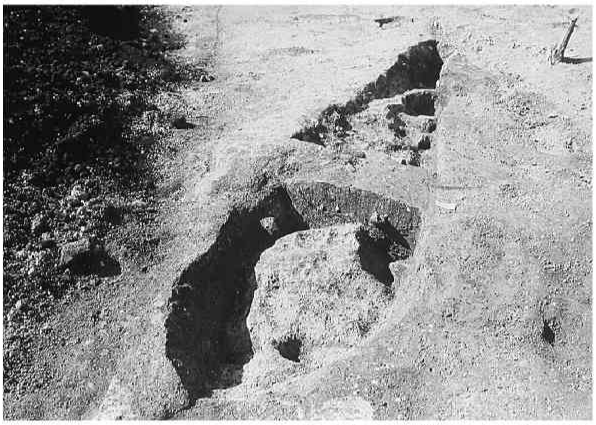


5区SD223断面（西から）

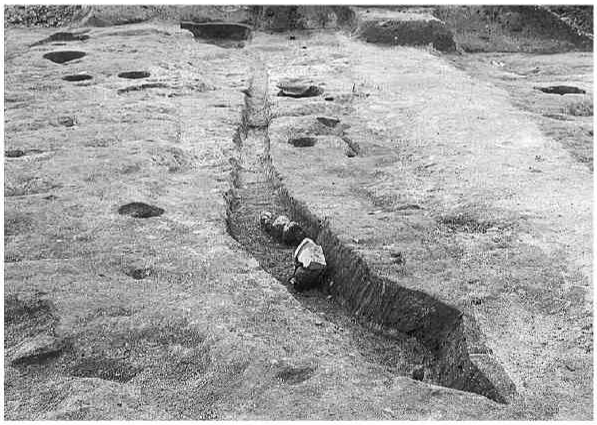
6区北遺構完掘状況（南から）

6区北完掘状況（北東から）

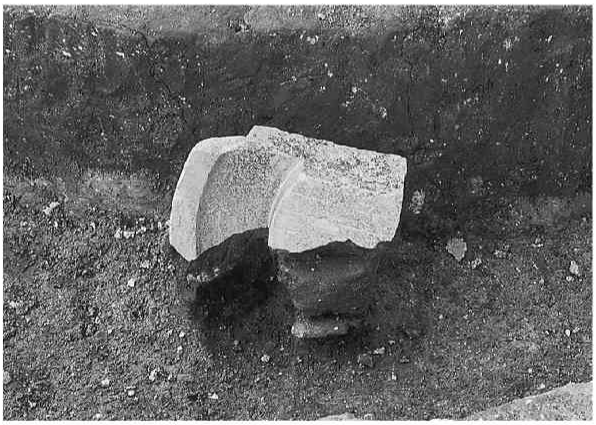
6区北SK266完掘状況（西から）



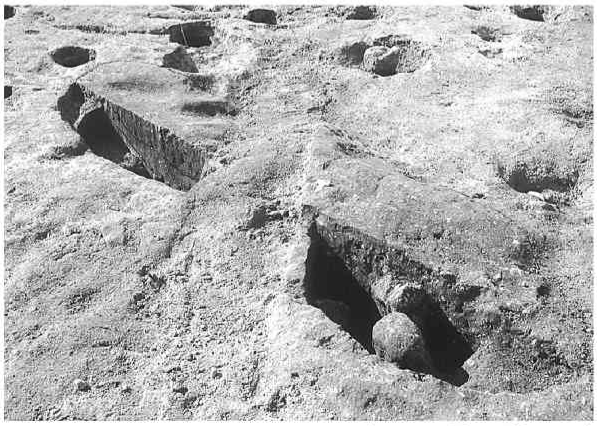
6区北SD263断面（北東から）



6区北SD264完掘状況（北から）



6区北SD264石臼出土状況（東から）



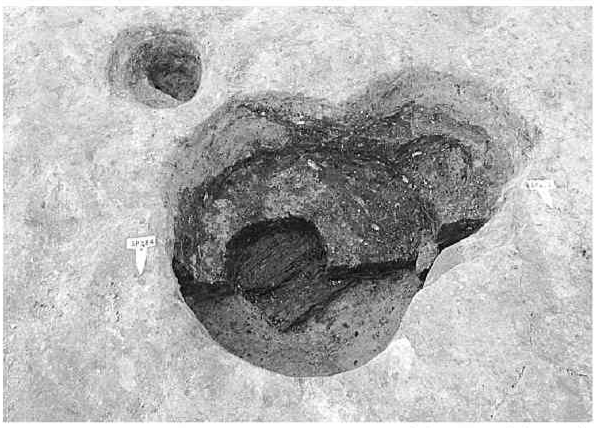
6区南SK299断面（南から）

6区南SK303断面（北から）

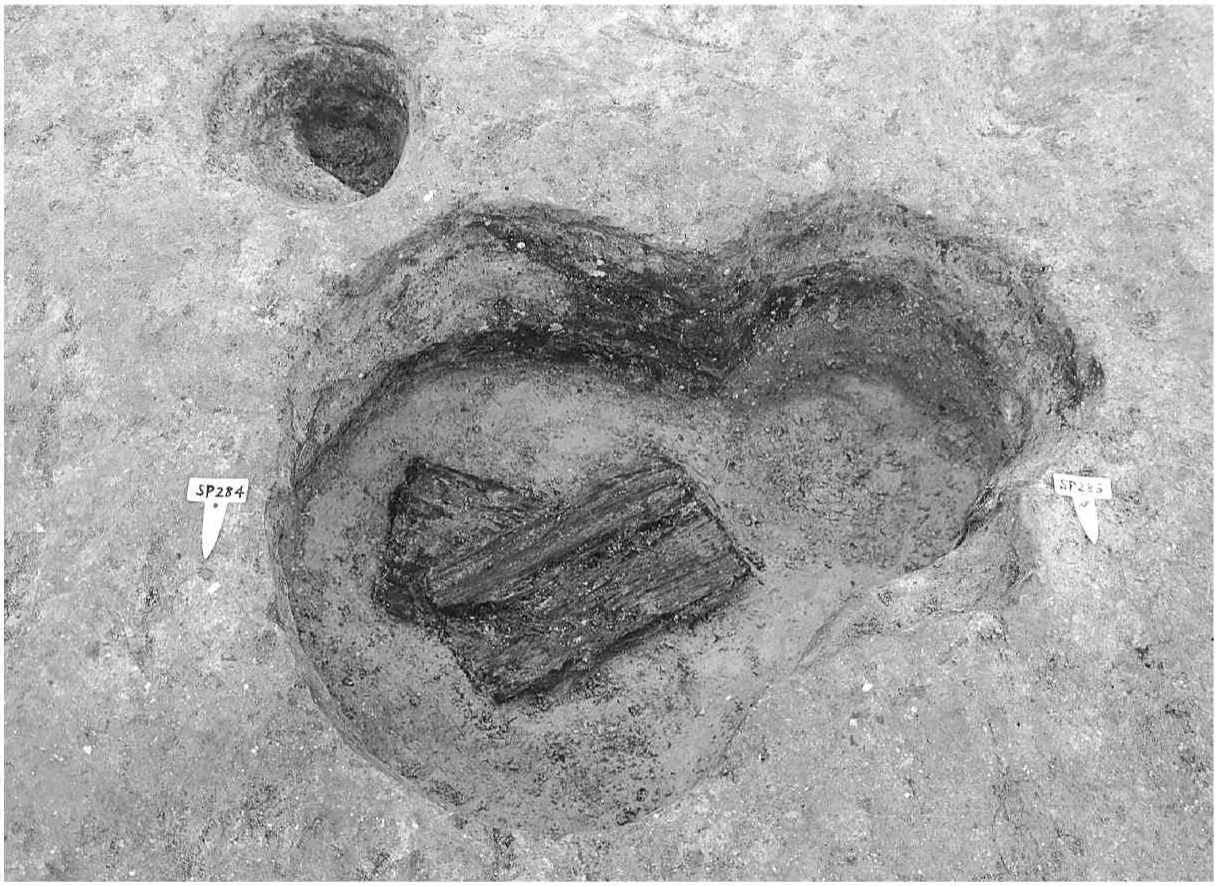
6区南遺構完掘状況（北から）

6区南SB50完掘状況（北から）

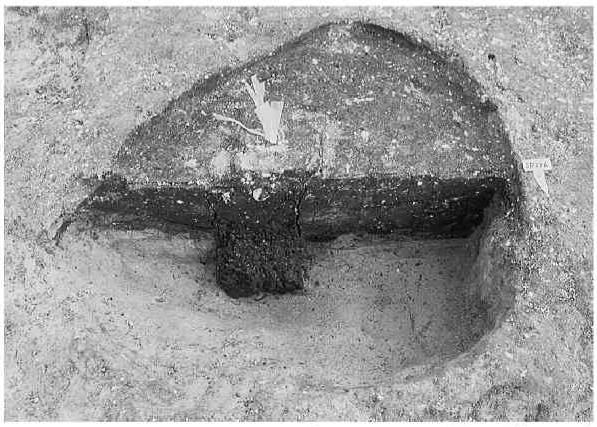
6区南東部柱穴完掘状況（北から）



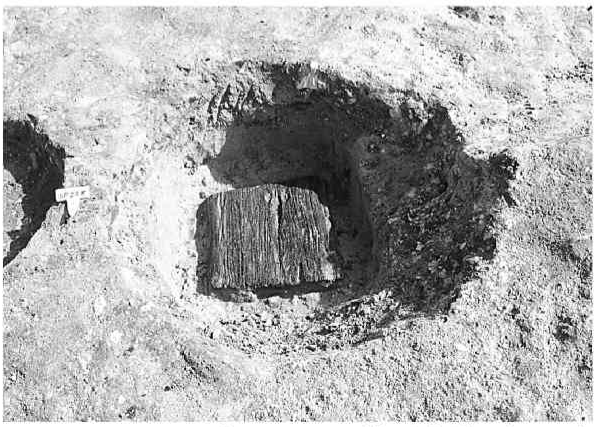
6区南SB50EB284・SP285完掘状況（東から）



6区南SB50EB284・SP285礎板出土状況（東から）

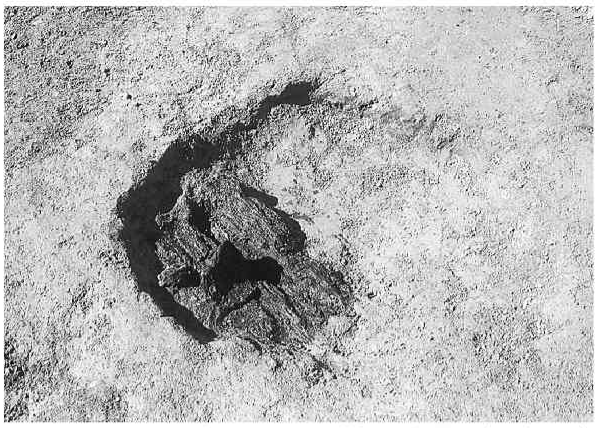


6区南SB50EB286断面（東から）



6区南SB50EB288礎板出土状況（西から）

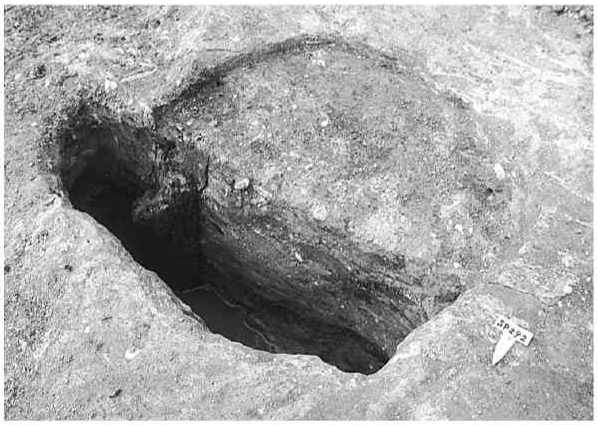
6区南SB50EB289礎板出土状況（北東から）



6区南SB50EB290礎板出土状況（北東から）

6区南SB50EB291断面（東から）

6区南SB50EB291礎板・柱材出土状況（北から）

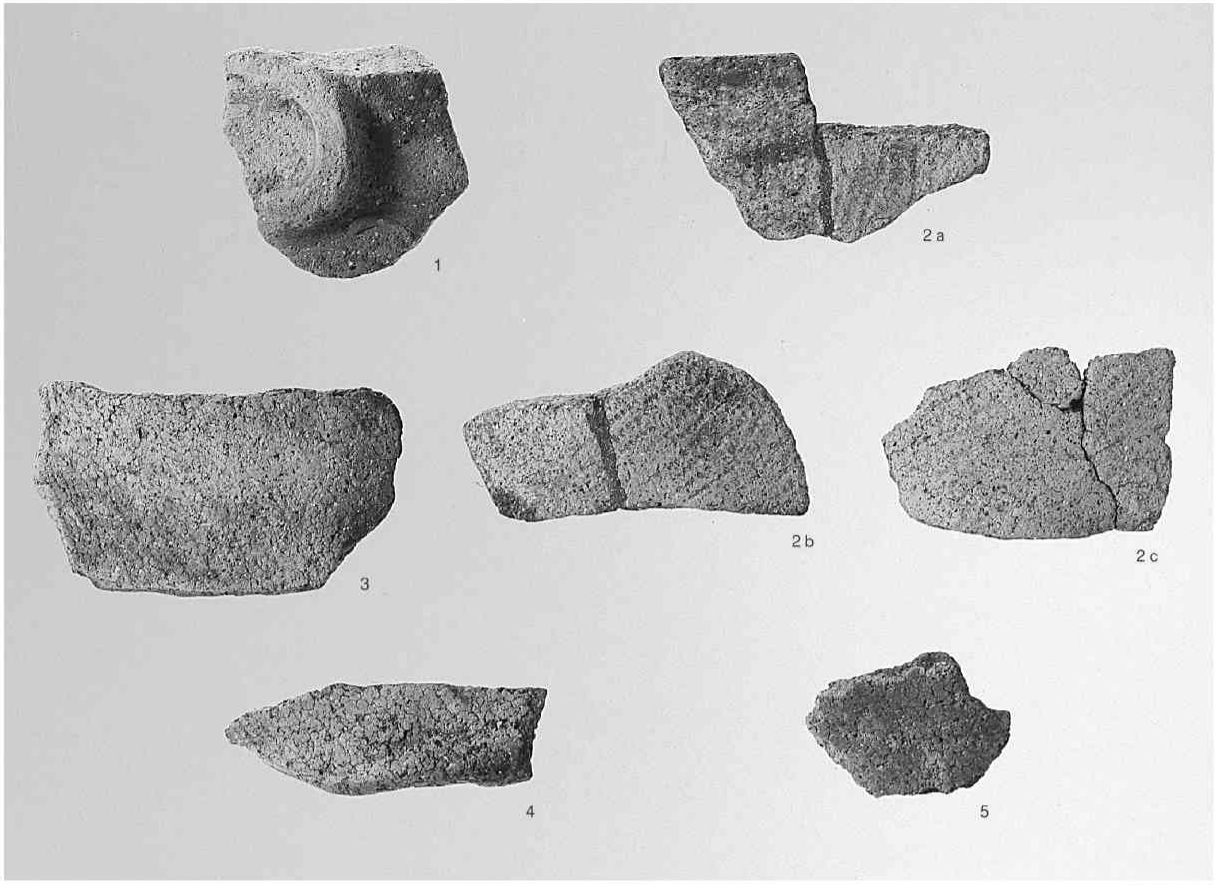


6区南SB50EB292断面（東から）

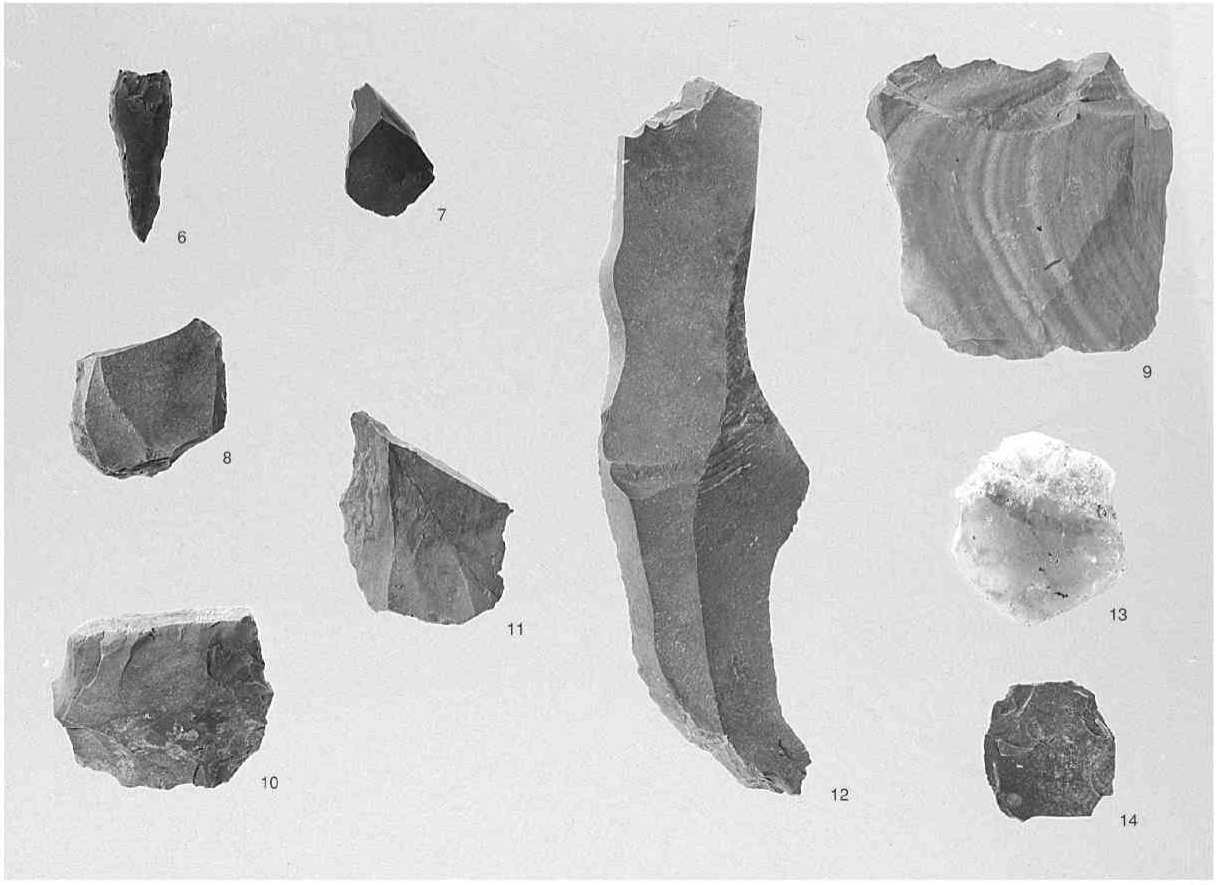
6区南SB50EB292柱材出土状況（北東から）

6区南SP305柱材出土状況（北東から）

6区南SD306完掘状況（東から）



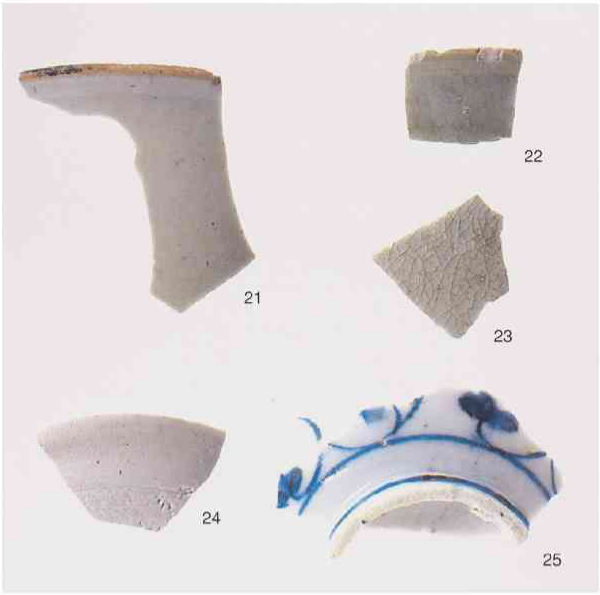
縄文土器

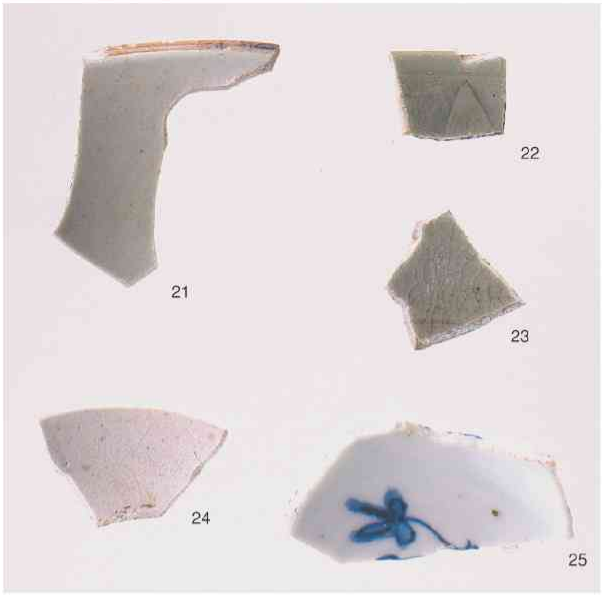


石器

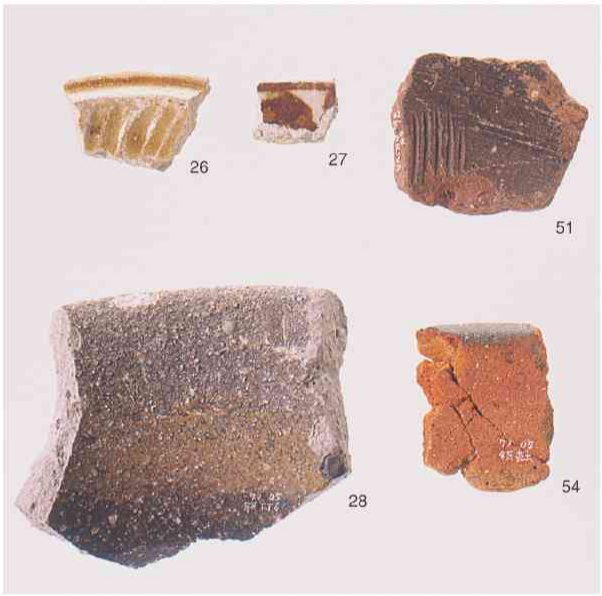
石器・石製品・土師器・須恵器

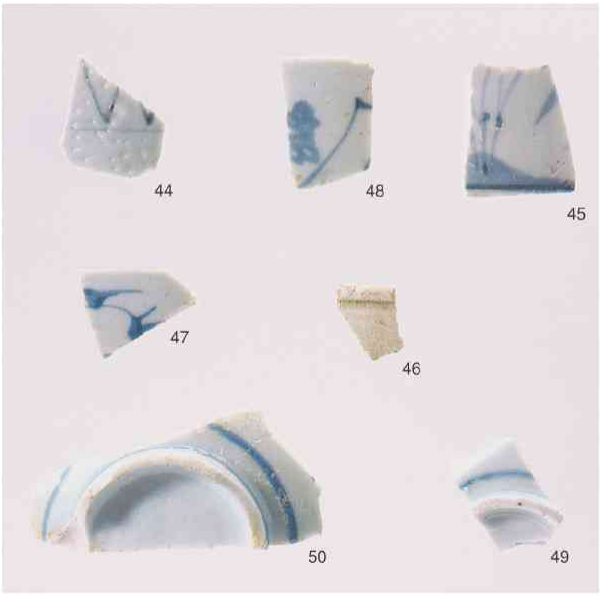
土師器甕

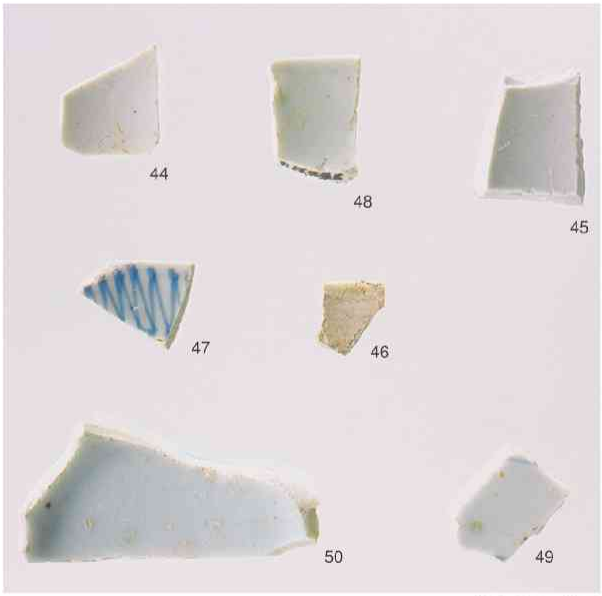

21
22
23
24
25


21
22
23
24
25

26
27
51
28
54

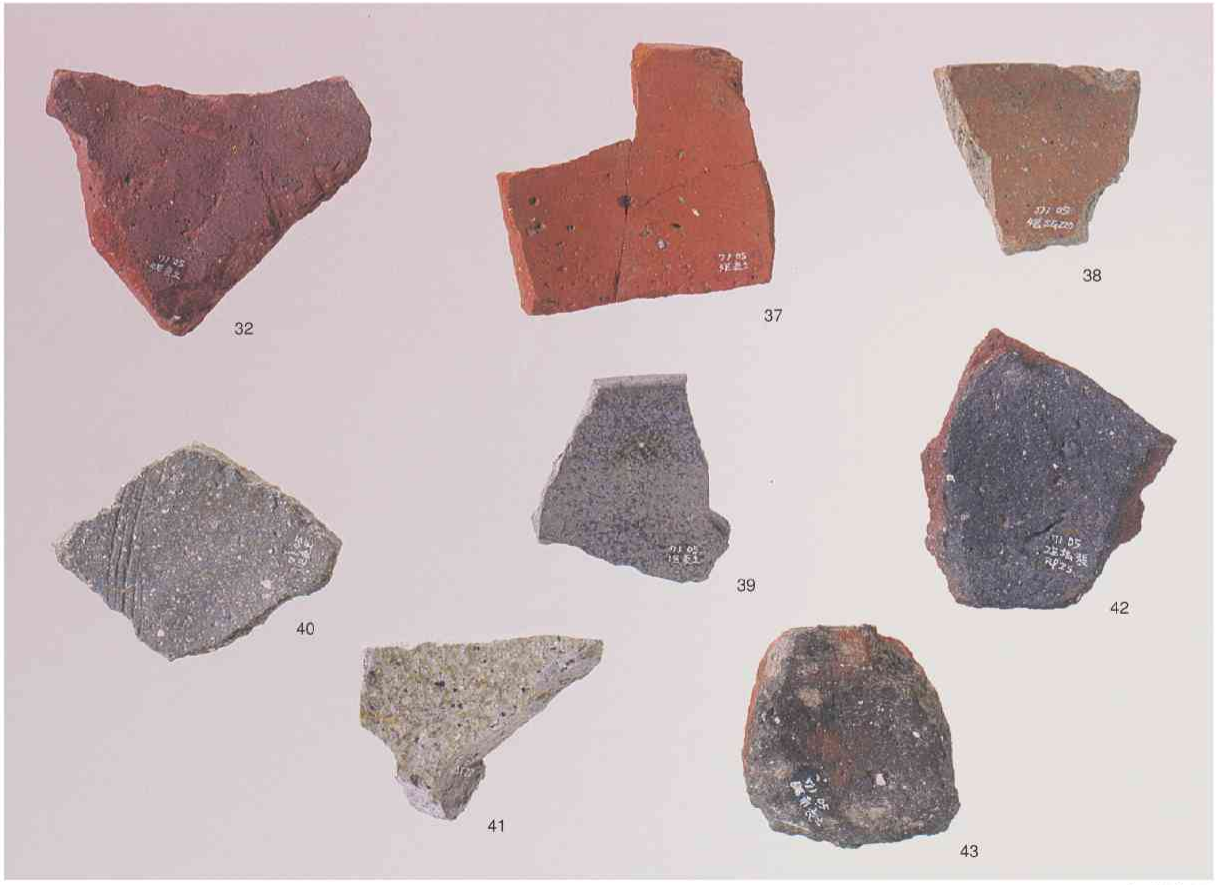

26
27
51
28
54


44
48
45
47
46
50
49

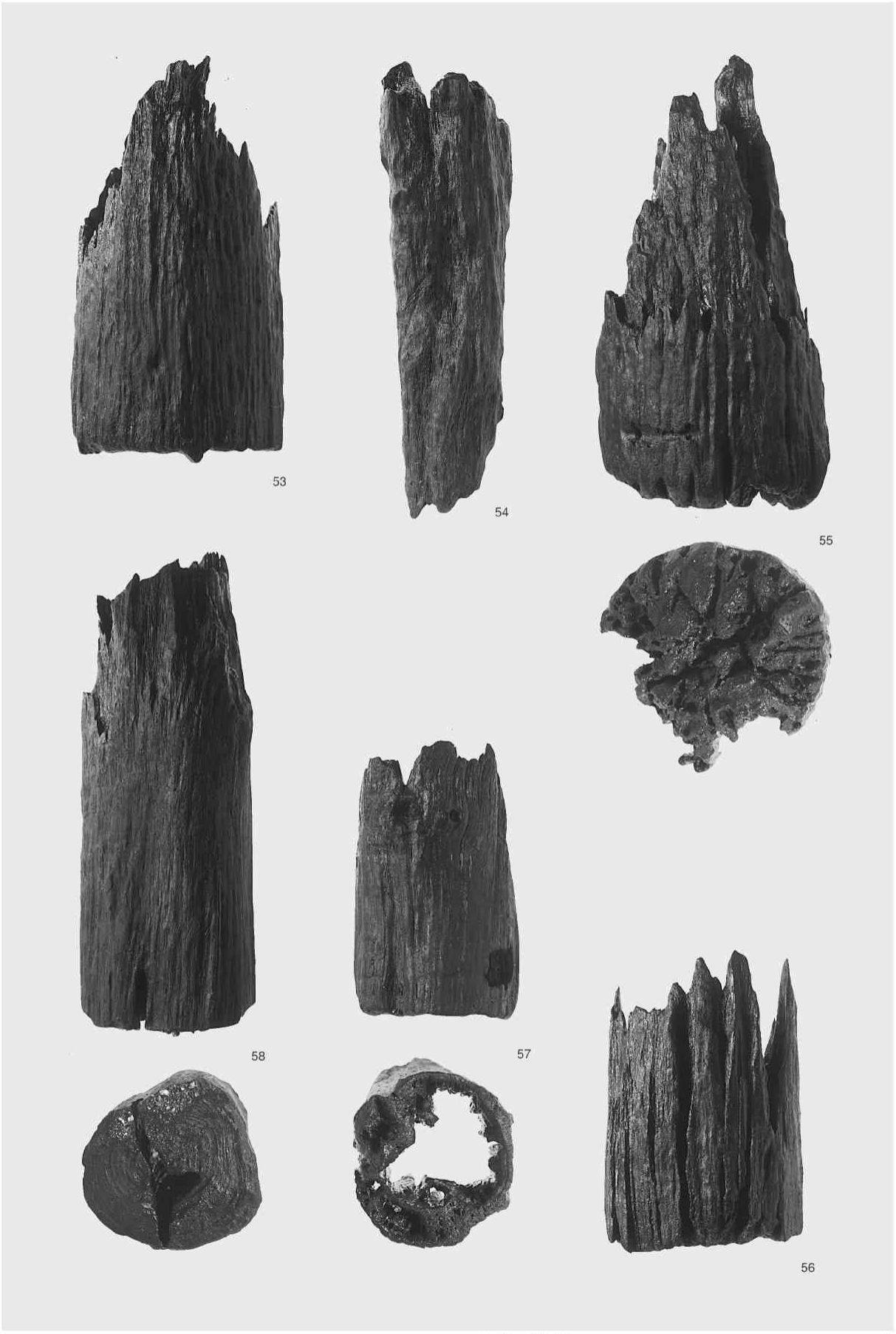

44
48
45
47
46
50
49

中近世陶磁器

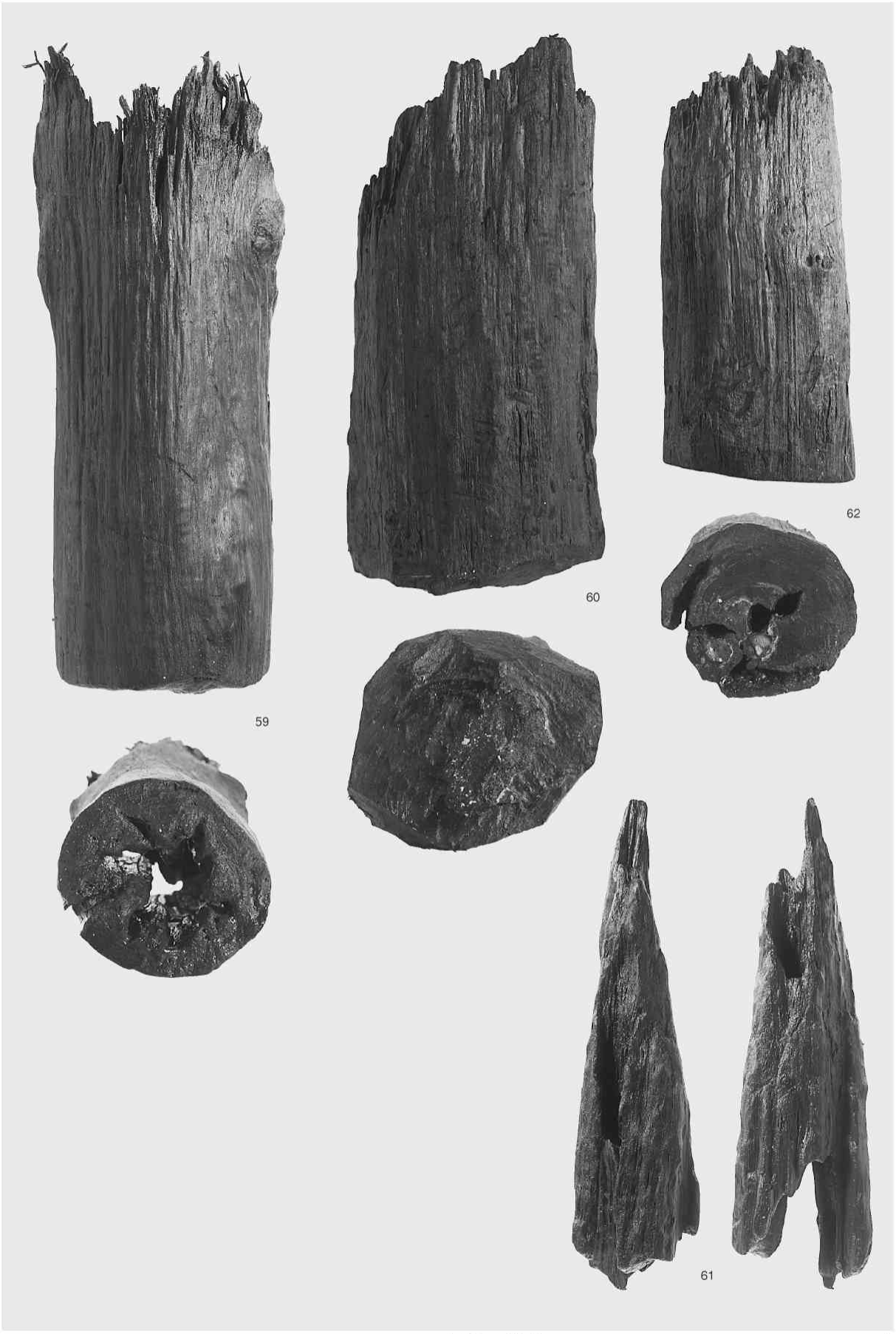
中世陶器



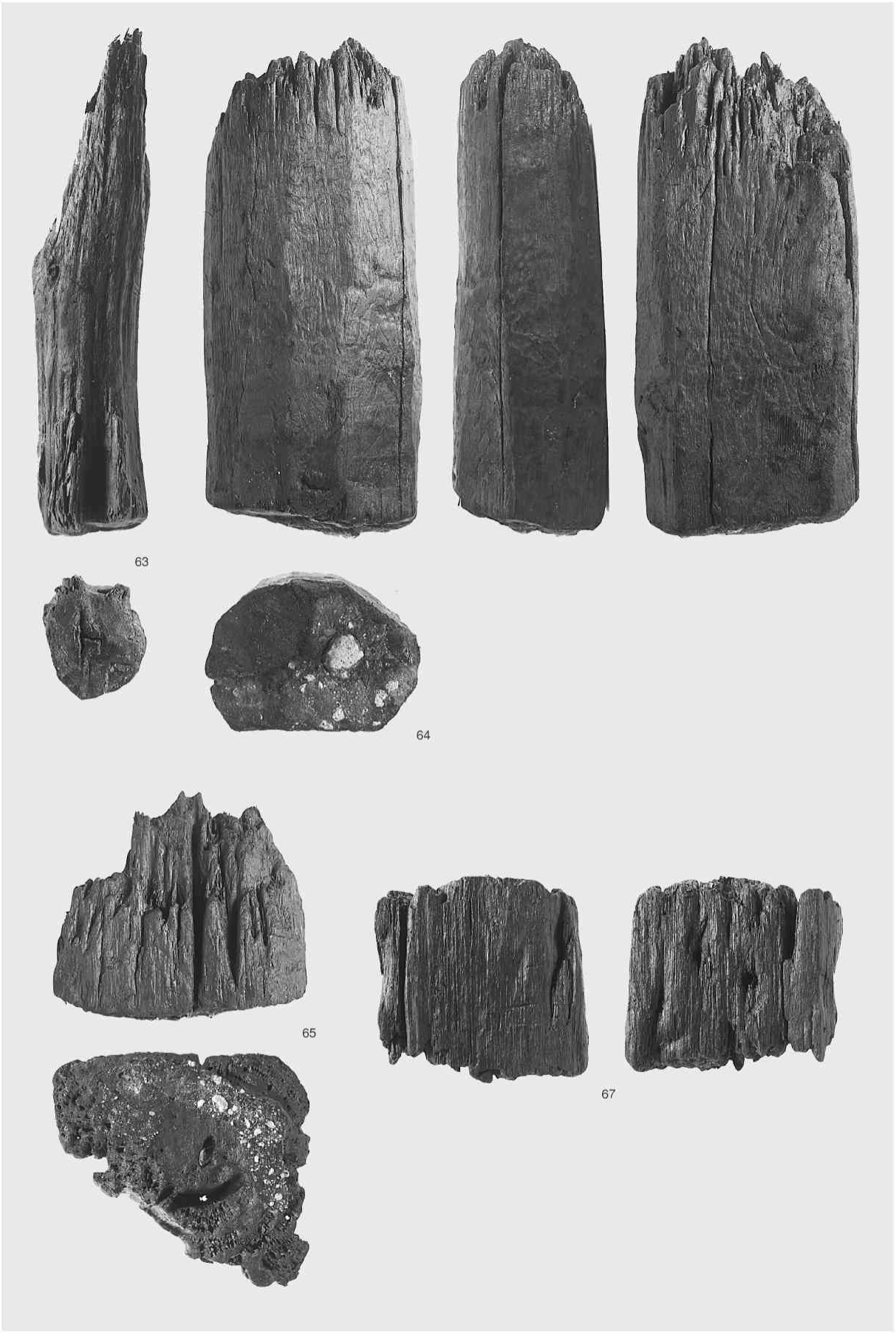
中世陶器



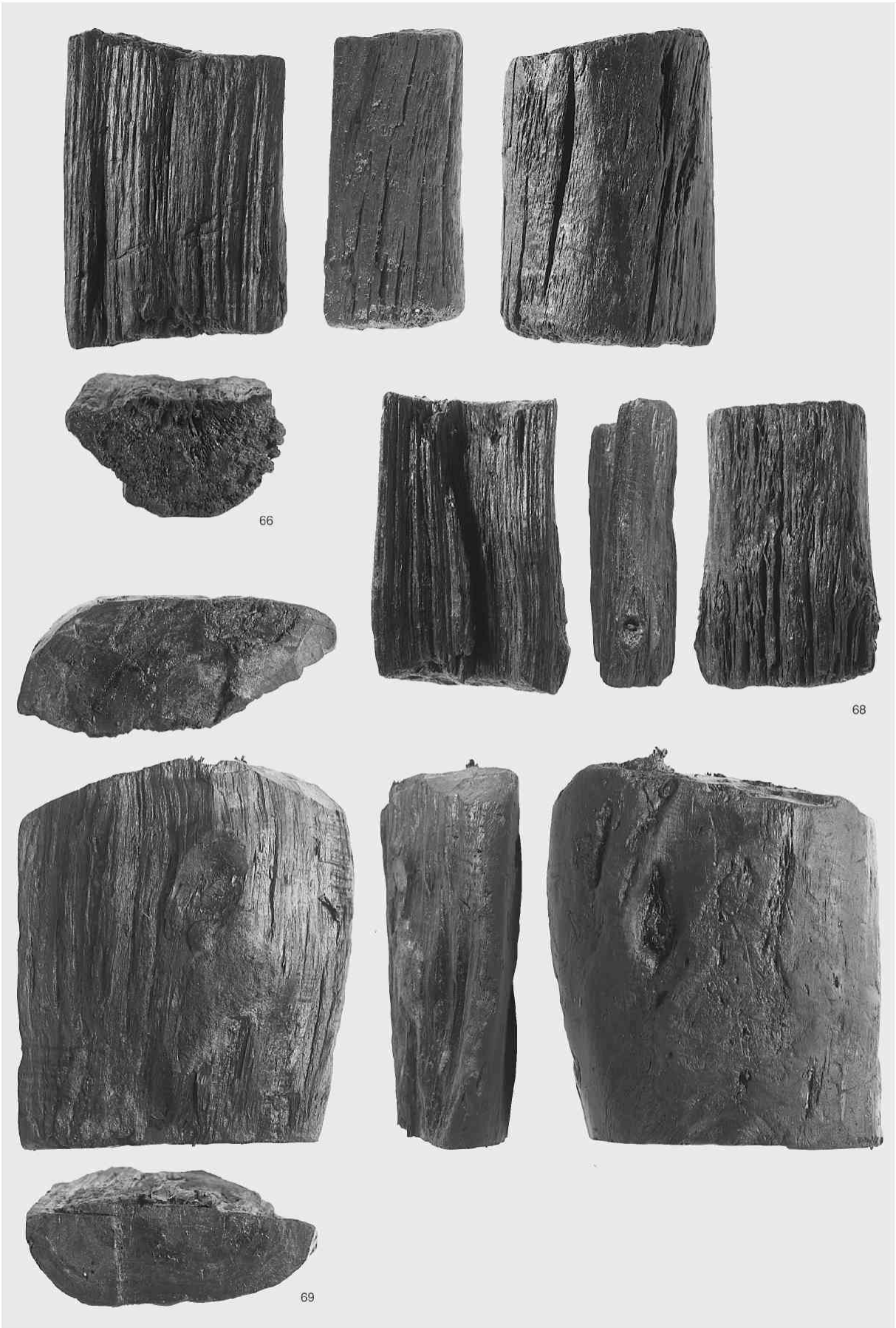
木製品（柱材：SP59・SB66EB60・SP68・71・75・119）



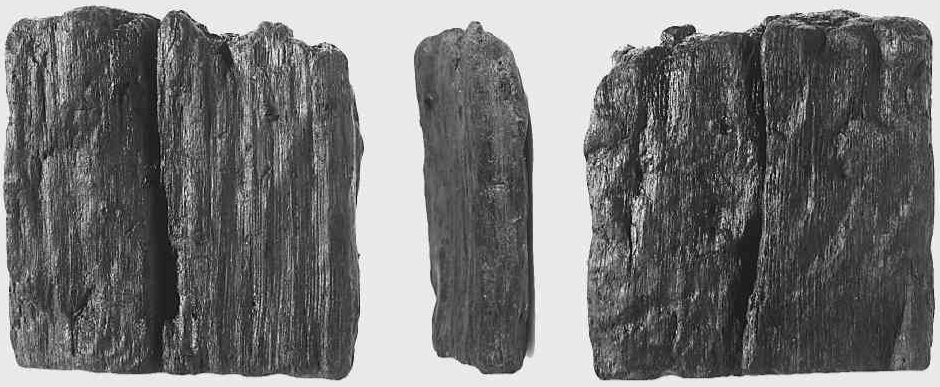
木製品（柱材：SP86・SP305・SB207EB212・SB328EB298）



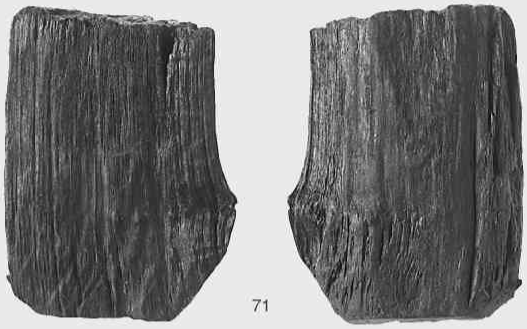
木製品（柱材：SP282・SB50EB292・286・礎板：SB20EB23）



木製品（礎板：SB20EB23・25）



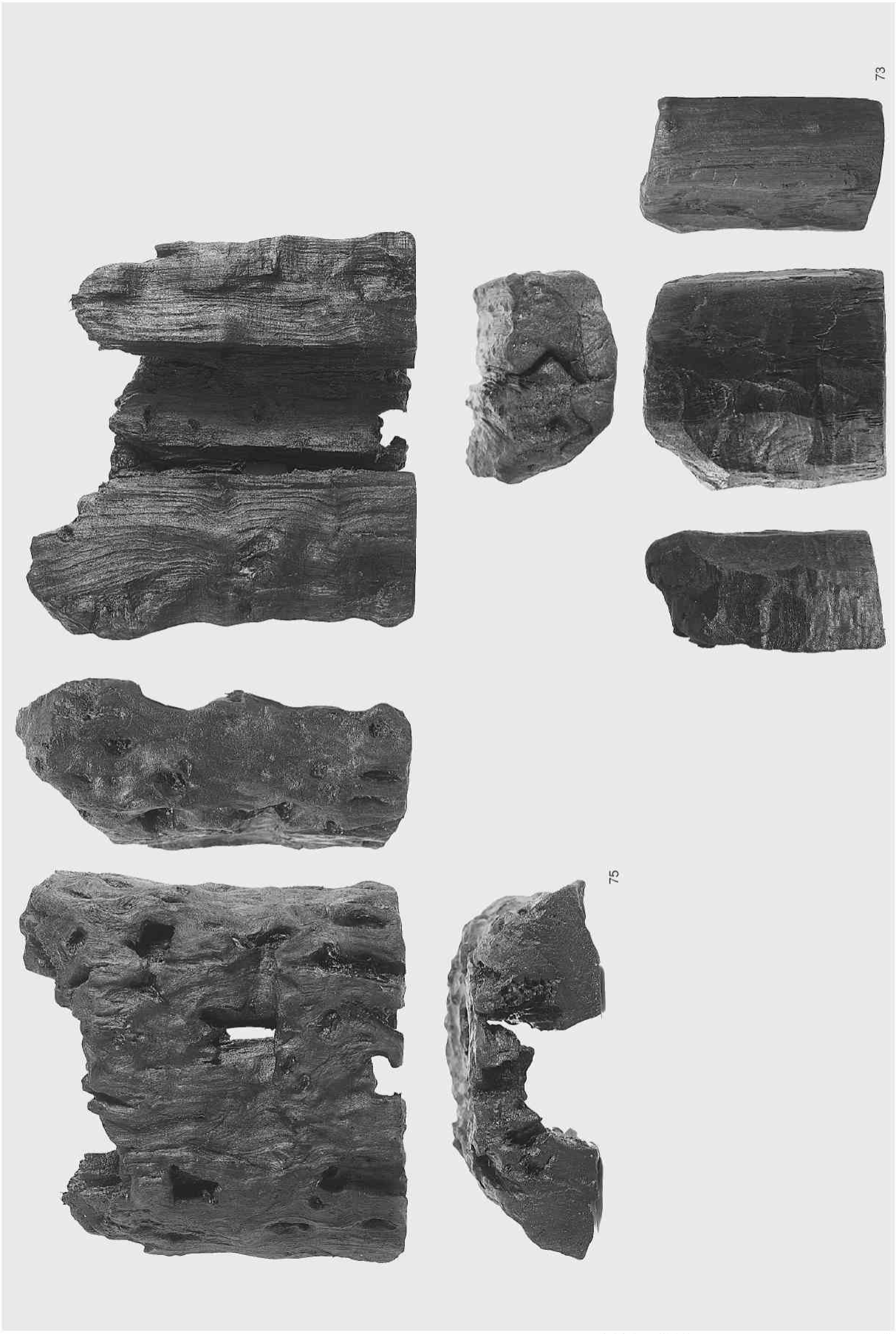
70



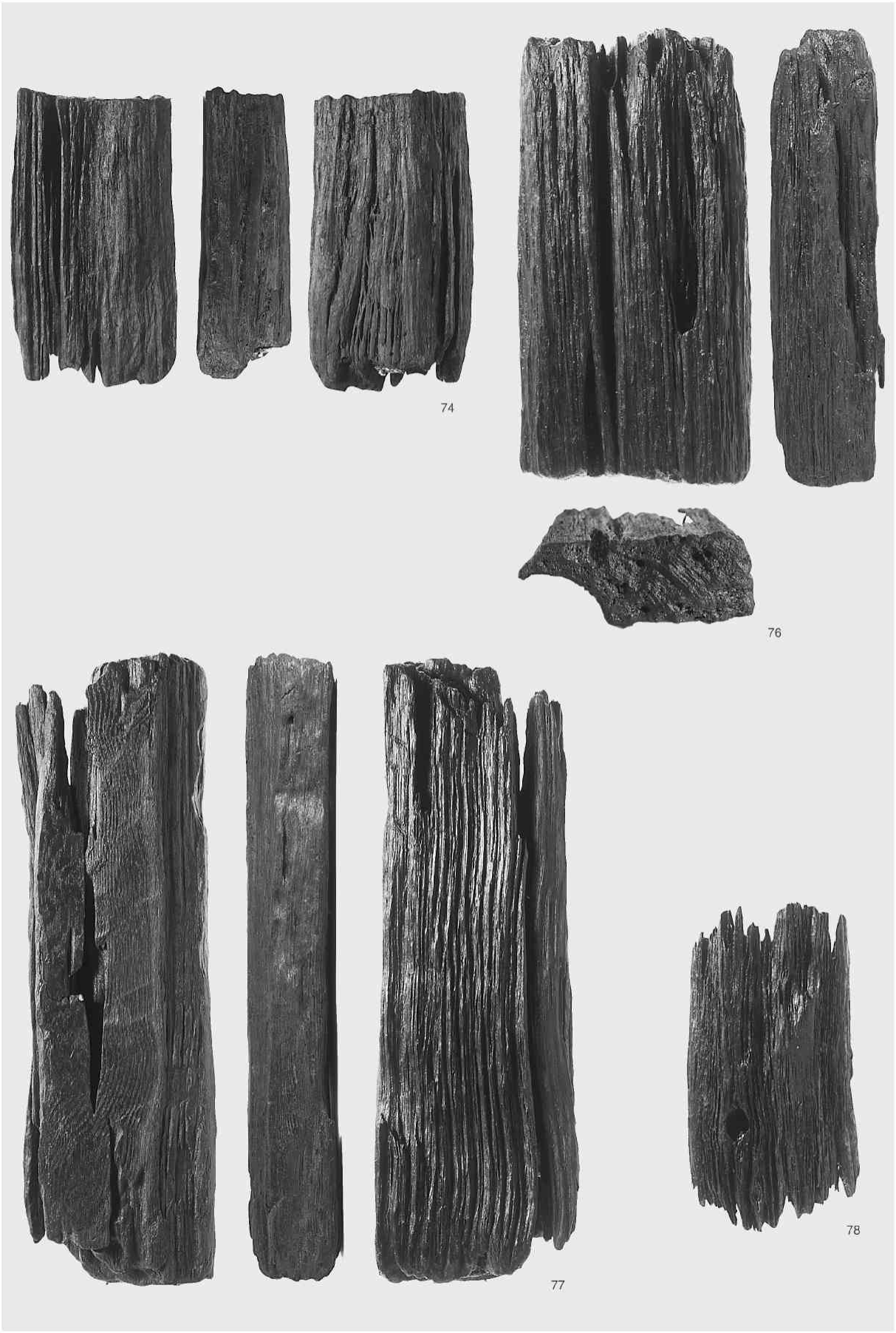
71

72

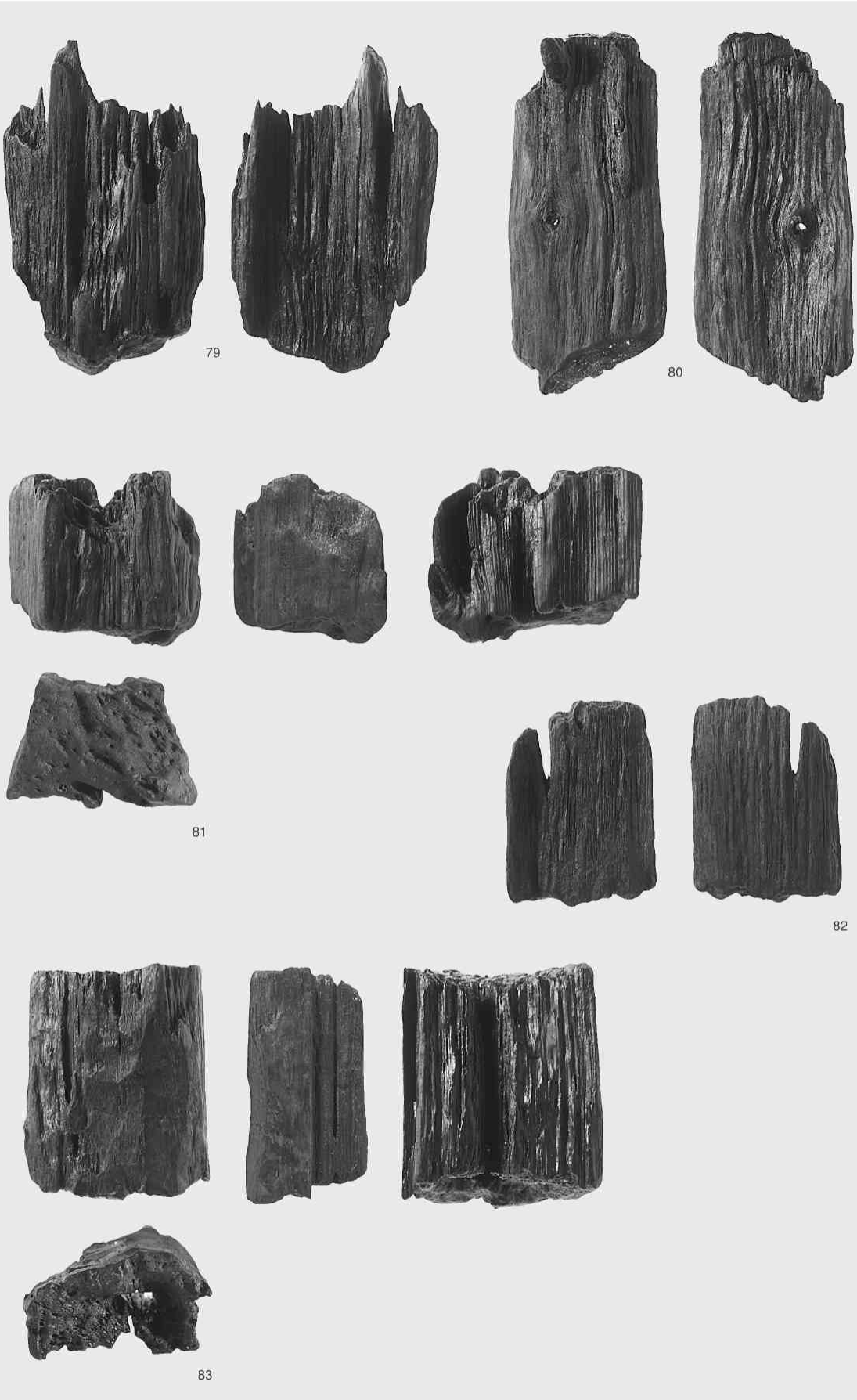
木製品（礎板：SB20EB26・39）



木製品（礎板：SB20EB40・SB50EB51）



木製品（礎板：SB20EB28・40・SB50EB51・53）



木製品（礎板：SP76・82・84・85・87）

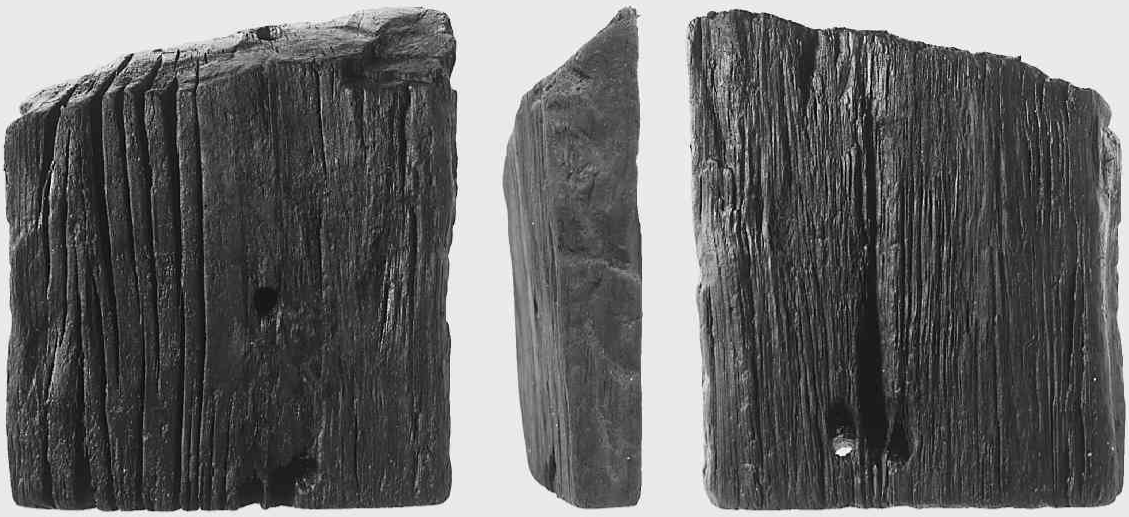
84

85

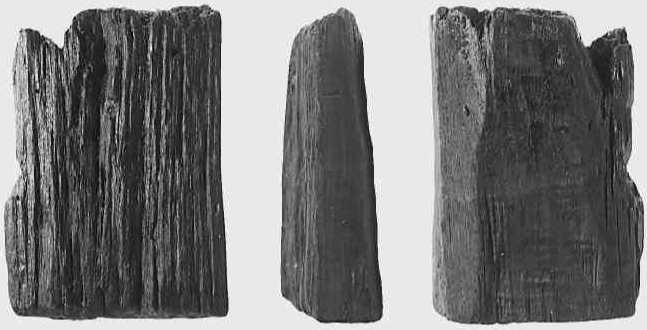
86

85・86

木製品（板材：SD17・礎板：SB50EB284）



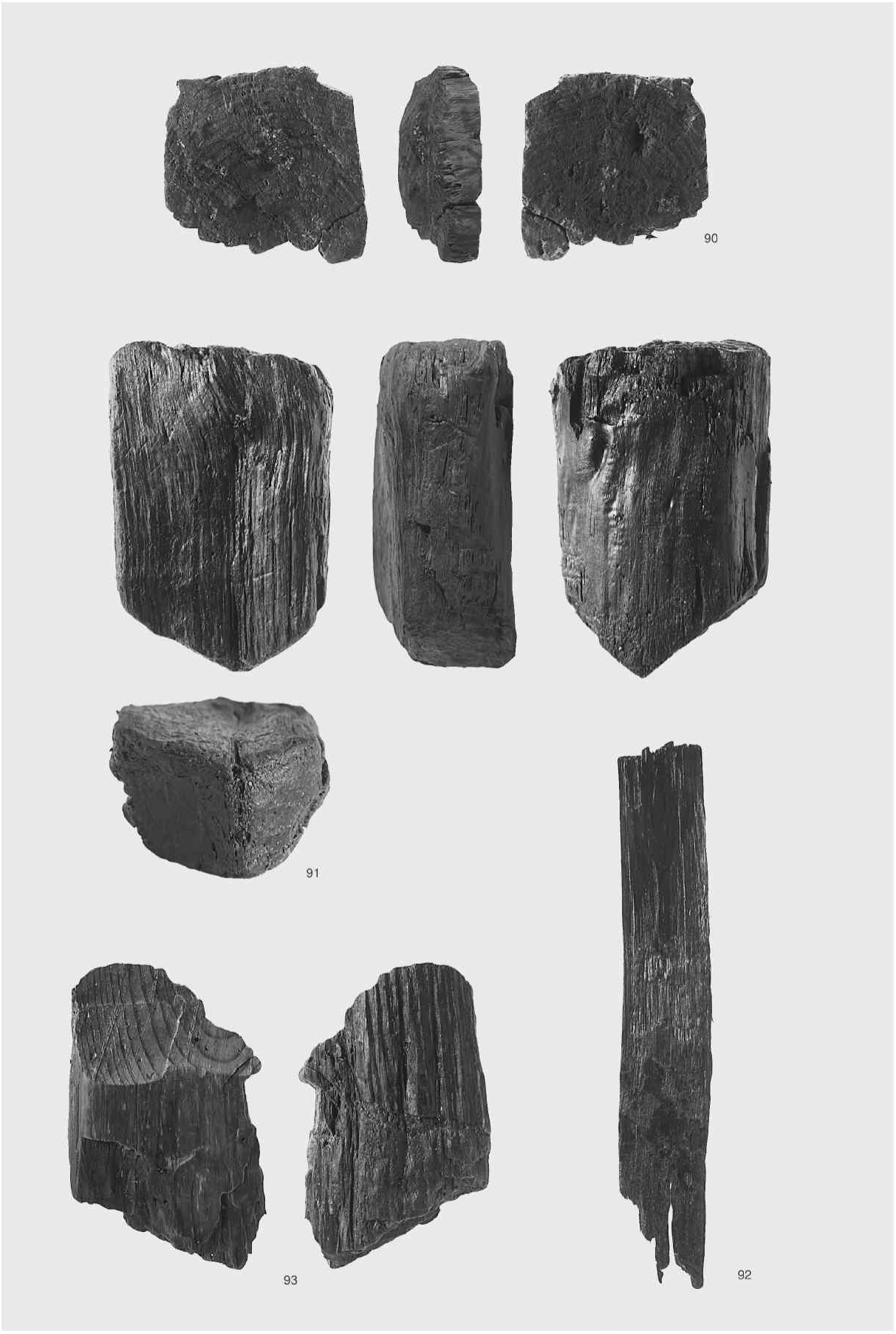
87



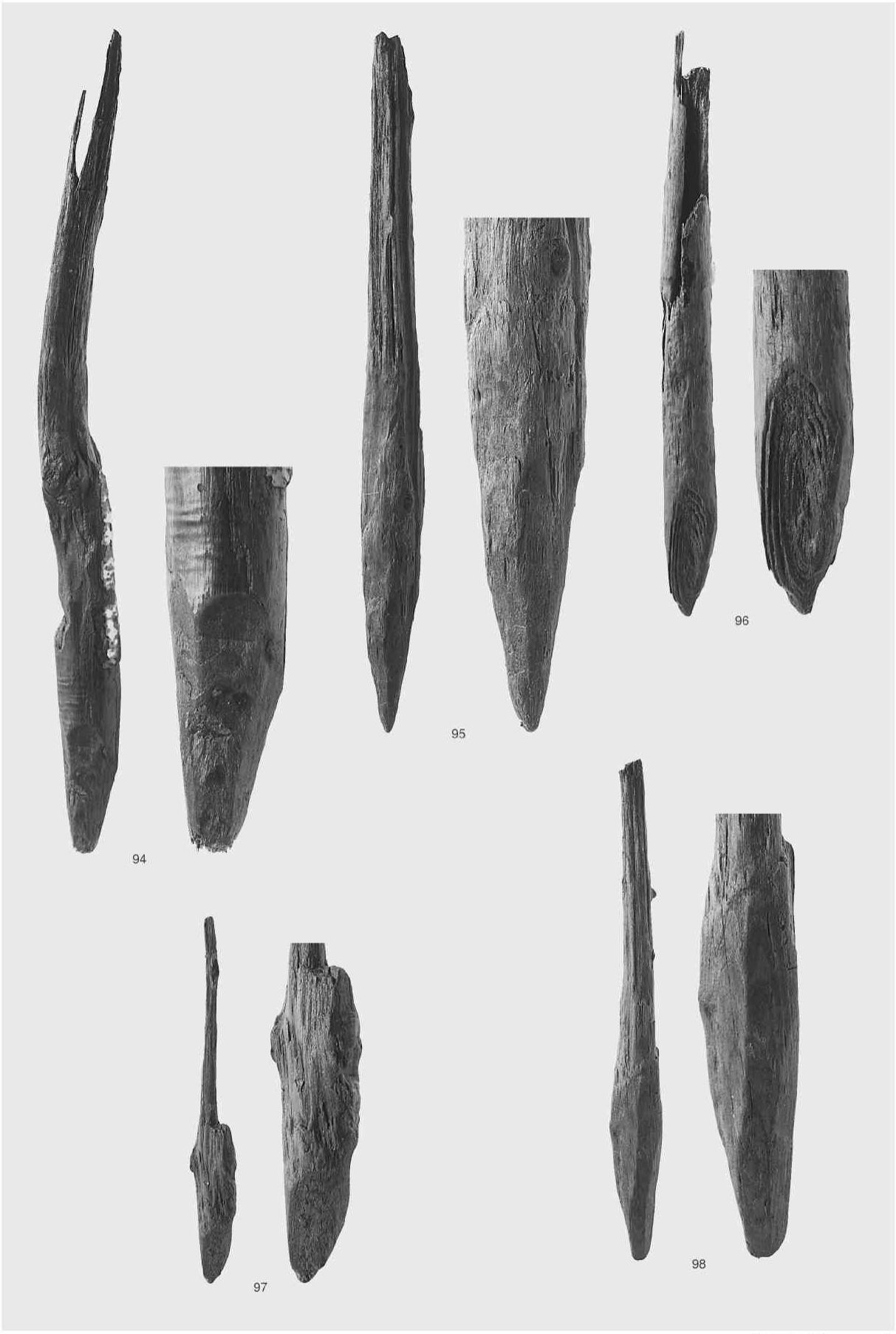
88

89

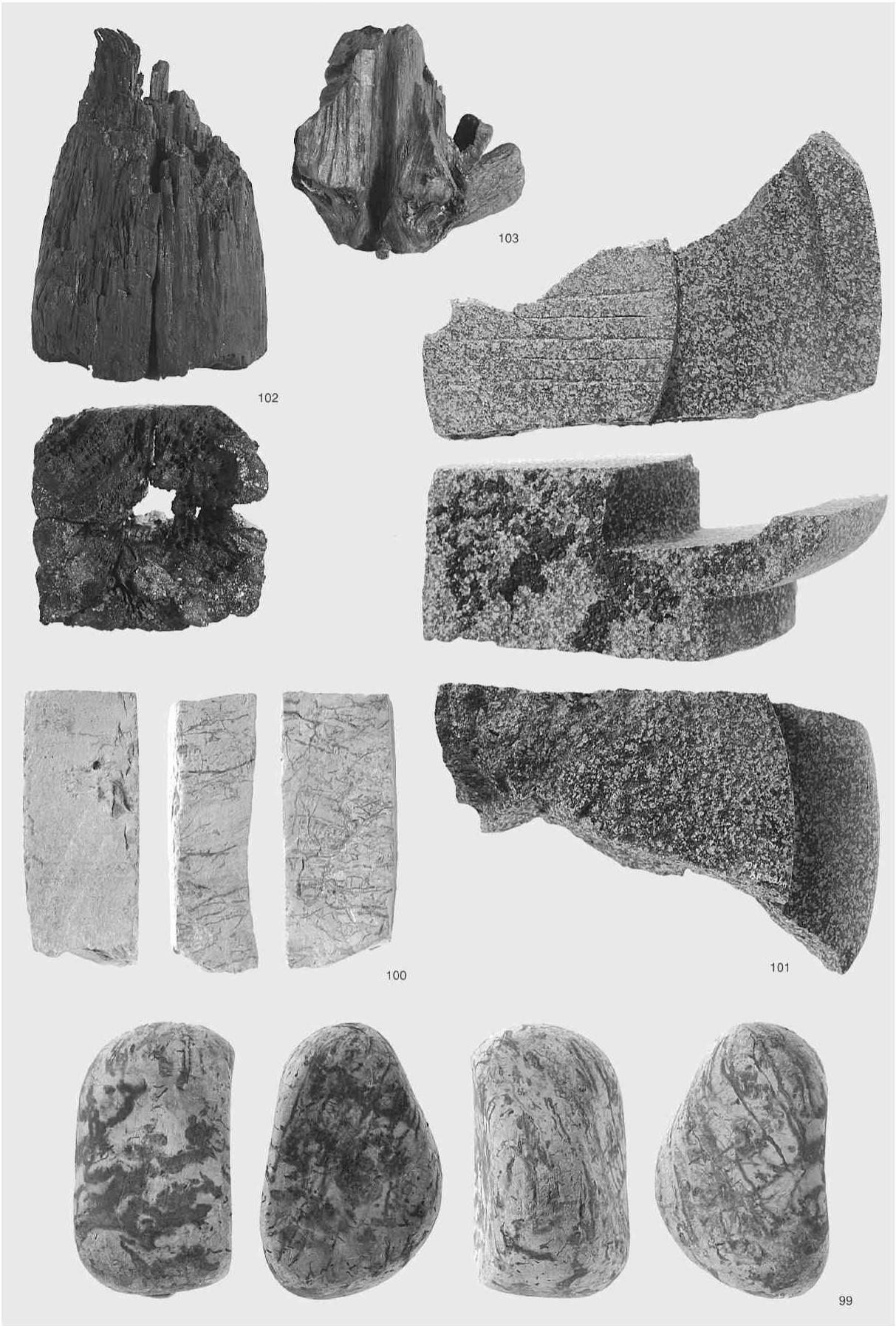
木製品（礎板：SB50EB284・286・SB328EB276）



木製品（礎板：SB50EB289・291・板材：SK303）



木製品（杭：SD17）



木製品（柱材：SB20EB26・SB50EB291）・石製品

報告書抄録

ふりがな	わのいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上野遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第152集
編著者名	菅原哲文　　須藤孝宏
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL 023－672－5301
発行年月日	2006年３月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
わのいせき 上野遺跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 おおあざわの 大字上野 あざわのよんほか 字上野４他	6213	平成16年度 新規登録	38度 03分 37秒	140度 09分 14秒	20050523 ～ 20050805 20050829 ～ 20050901 20051011 ～ 20051028	3,050	農地環境整備事業（上野地区）

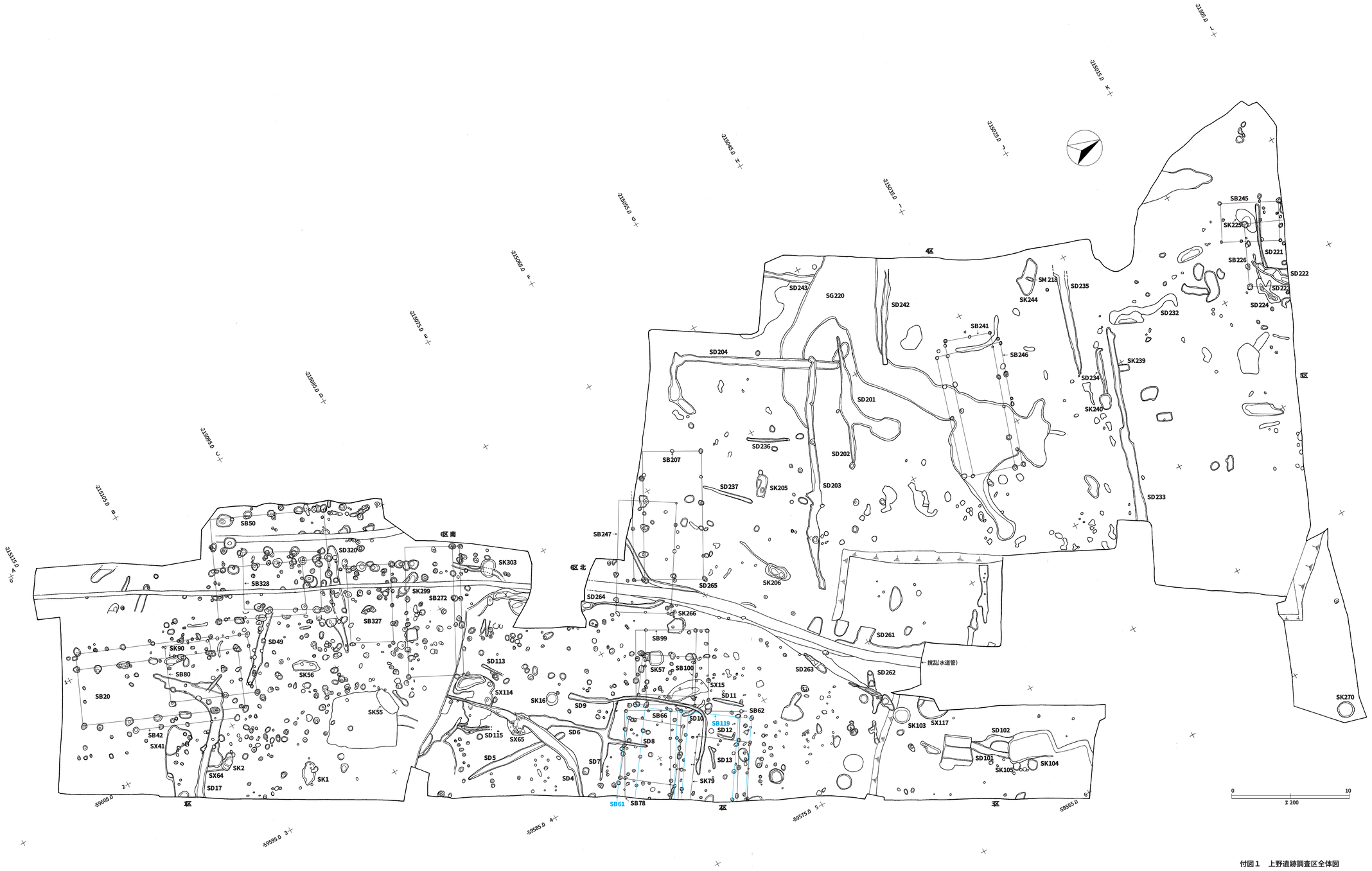
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文時代（中期） 平安時代 中世・近世	土坑 土器埋設遺構 掘立柱建物、河川、溝跡、土坑	縄文土器、石器 土師器、須恵器 陶磁器、木製品、石製品	縄文時代(中期)、平安時代、中世・近世にわたる複合遺跡。平安時代では、合口甕棺が出土。 中世・近世では、礎板を用いた掘立柱建物を中心とする集落跡が検出された。 （文化財認定数：35箱）

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第152集

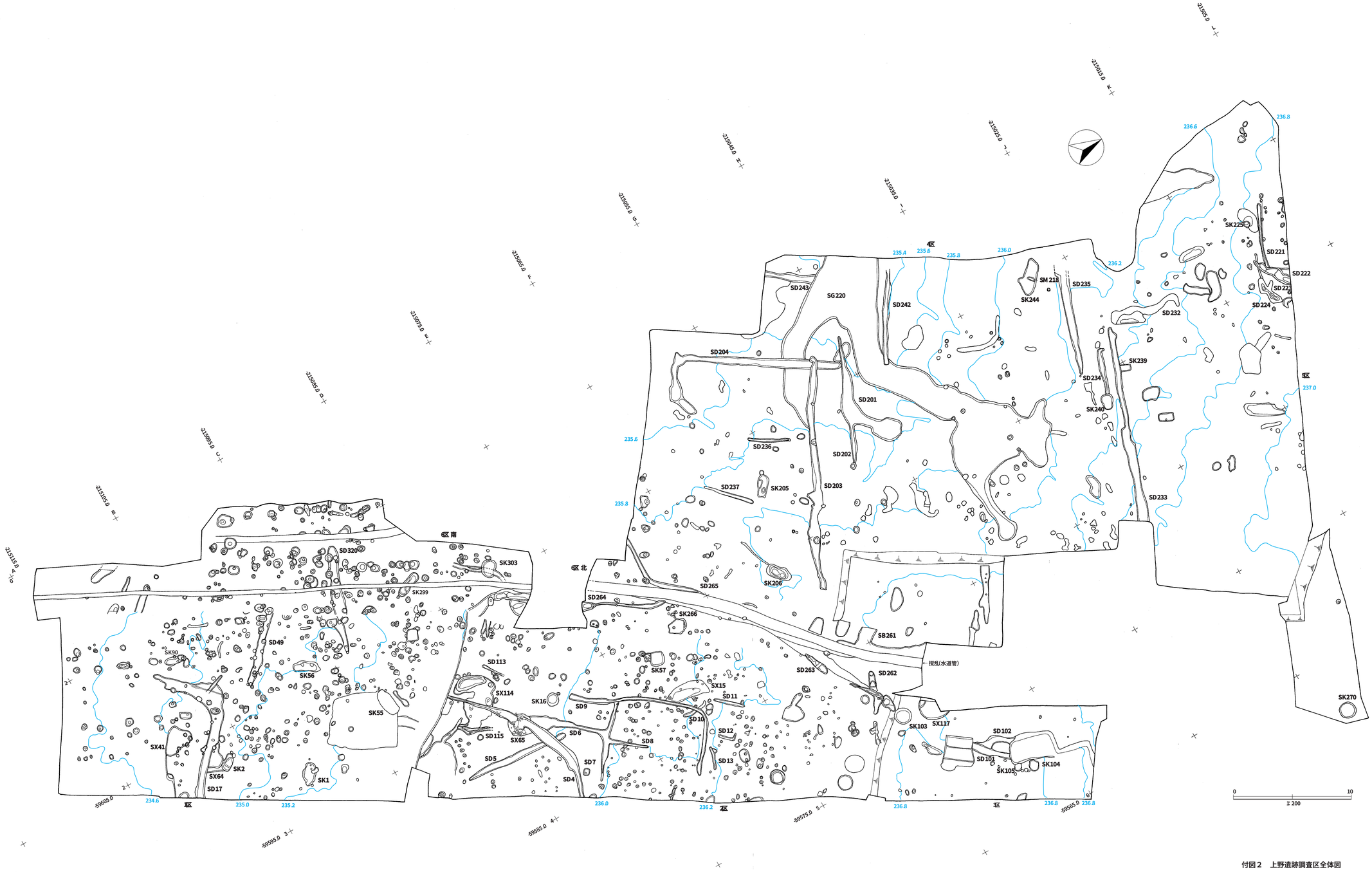
上野遺跡発掘調査報告書

2006年３月28日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023－672－5301
印刷　アベ印刷株式会社
〒990－0894　山形市大字船町82番地
電話　023－681－1951



付図１　上野遺跡調査区全体図



付図２　上野遺跡調査区全体図